

二〇一五年（平成二七年度）博士課程学位請求論文

岡倉天心

——その生涯・美術観・茶道観を

貫く「共感」の思想——

OKAKURA TENSHIN

Thought of “Sympathy” through his whole life
and

through his view of Art and Chado

宝塚大学大学院メディア造形研究科造形・デザイン専攻

伝統芸術研究領域 博士課程（後期）単位取得満期退学

平 美恵子

目次

序論	1
第一部 岡倉覚三（天心）の思想と人間像について	
第一章 父・勘右衛門と息子・岡倉覚三を取り巻く環境	
はじめに	5
第一節 父・勘右衛門の出身地越前国福井藩	6
1 福井藩主・松平慶永（春嶽）	6
2 橋本左内	7
3 父・勘右衛門	8
第二節 横浜の日本人居住区と居留地	11
1 覚三の家族環境	11
2 横浜居住区での息子・覚三への教育	12
まとめ	14
第二章 岡倉天心の功績を伝播した人々	
はじめに	19
第一節 息子・岡倉一雄	19
1 『父天心』の刊行	19
2 星崎初子との係わりを公開	20
第二節 孫・岡倉古志郎	22
1 復刻版を刊行	22
2 プリヤンバダ夫人と天心との書簡を公開	23
3 天心の息子・三郎との書簡を公開	24
第三節 弟・由三郎	25
1 プリヤンバダ夫人の書簡を保管	25
2 国内外での広報活動	25
3 日本語訳『茶の本』の作成に協力	26

第四節	曾孫・岡倉登志氏	26
第五節	日本美術院の人たち	27
1	再興日本美術院の設立	27
2	東京美術学校内の天心像	27
3	『天心全集』（和綴三巻）の刊行	29
まとめ		29
第三章	日本美術院の創設	33
はじめに		33
第一節	日本美術院創設までの天心	33
1	日本美術院創設前の約一年間	33
2	怪文書	34
3	寡婦と孤児	35
4	洋画の台頭	35
第二節	日本美術院	38
1	天心の決意	38
2	東京美術学校離職者たち	40
3	日本美術院創設の趣旨	42
4	日本美術院研究会員規程	43
5	古美術保存	44
まとめ		45
第四章	岡倉覚三（天心）の思想	51
はじめに		51
第一節	小山正太郎の「書ハ美術ニナラス」への反論	51
1	天心の反論	51
2	毛室画採用または鉛筆画採用	52
第二節	『美術真説』	54
1	アーネスト・フェノロサ (Ernest F.Fenollosa) の演説	54
2	佐野常民宛の意見書	56
第三節	鑑画会での演説	57

1	自然発達論を推奨	57
第四節	『国華』「発刊の辞」	58
1	国の精華	58
2	天心が伝えたこと	60
3	『国華論攷精選』	62
第五節	『国華』創刊号「円山応挙」	62
1	応挙の流派	62
2	応挙に勝る絵師はなし	64
第六節	第三回内国勸業博覧会での審査報告	65
1	明治期を三期に分類	65
第七節	「日本美術史」の講義	67
1	三つの提言	67
第八節	近代の「日本画」の確立	69
1	近代の日本画を具現化した学生たち	69
2	日本画と西洋画の混乱期	72
第九節	「カタログ」「美術院」——または日本美術の新しい古派——	73
1	藝術は国民のものであり、画家の個性の表現である。	73
第一〇節	「絵画における近代の問題」の講演	73
1	絵画と社会それ自体との関係	73
第一一節	ボストン美術館中国日本部の仕事に協力する婦人たちへの談話	76
1	「美術品を皆様の共感で包んで頂きたい」	76
2	「婦人たちへの談話」と「藝術鑑賞」の共通点	78
第一二節	天心名の使用について	80
1	生前は「覚三」名を使用	80
2	「天心」名の定着	81
第一三節	天心と服装	83
1	東京美術学校の制服	83
2	海外での服装	84
まとめ		86

第五章	シカゴ万国博覧会と第五回パリ万国博覧会	95
はじめに		95

第一節 博覧会

- 1 明治の美術と美術史
- 2 万国博覧会について
- 3 天心の美術史観
- 4 美術品の性質

第二節 シカゴ万国博覧会と第五回パリ万国博覧会の比較

- 1 シカゴ万国博覧会（閣（コロロン）龍（ブス）世界大博覧会）
- 2 第五回パリ万国博覧会
- 3 帝国博物館から帝室博物館へ

まとめ

95 95 96 98 101 102 102 105 106 107

第六章 天心にとっての東洋と西洋

はじめに

- 第一節 洋画に対する書評
- 第二節 「東アジア美術における宗教」
- 第三節 「東アジアの絵画における自然」
- 第四節 『東洋と西洋』

まとめ

111 112 113 115 117 119

第七章 弟子たちの絵画より

はじめに

- 第一節 横山大観
- 1 《屈現》（中国）
- 2 《流燈》（インド）
- 3 《遊刃有余地》（中国）

第二節 下村観山

- 1 《闍維》（インド）
 - 2 《ダイオゼニス》（ギリシヤ）
- 第三節 菱田春草

- 1 《羅浮仙》（中国）
- 2 《弁財天》（インド）

まとめ

121 121 122 123 124 124 125 126 126 127 127 127

第八章 書間から見る天心の人間像

はじめに――

第一節 プリヤンバダ・デーヴィー・バネルジー夫人――

第二節 イザベラ・S・ガードナー夫人――

第三節 息子・和田三郎――

第四節 その他の書簡――

まとめ――

131 131 140 144 147 150

第二部 茶道を中心にして

第九章 茶道界の動向

はじめに――

第一節 学校教育での茶道

1 跡見学園――

2 東京美術学校――

3 京都での学校教育――

4 神戸での学校教育――

第二節 茶人たちの活動

1 近代の茶会の始まり――

2 益田孝(鈍翁)――

3 原富太郎(三溪)――

4 正木直彦(十三松堂)――

5 今泉雄作(常真)――

第三節 茶道誌の刊行と茶道人口

まとめ――

153 154 156 156 156 156 157 158 159 159 160 162

第十章 戦後の『茶の本』と茶道

はじめに――

第一節 戦後の海外活動――

第二節 海外の支部と協会の設立(裏千家)――

第三節 茶道の国際化――

1 一椀からピースフルネスを――

2 点茶盤(立礼の式)――

167 168 170 171 171 172

3	外国籍の弟子たち	172
4	裏千家インターナショナルアソシエーションの設立	173
5	茶道の人口の増加	173
6	宗偏流	174
7	小堀遠州流	174
8	表千家	175
9	武者小路	176
第四節	道・学・実の提唱	176
まとめ		178

第十一章 『茶の本』と茶道の相乗効果

はじめに	183
第一節 茶道史における『茶の本』の位置	183
第二節 岡倉天心の茶道観	186
第三節 和敬清寂	187
まとめ	188
結論	191
謝辞	195

* * * *

資料編

資料一	岡倉覚三(岡倉天心) 略年譜	197
資料二	(第一章)	202
資料三	第一章 火災の図	203
資料四	(第二章) 『天心全集』 日本美術院 大正二年	204
資料五	(第四章) 岡倉覚三(天心)の思想の第十一節 天心と服装	205
資料六	(第四章)	206
資料七	第五章 シカゴ万国博覧会	208
資料八	第五回パリ万国博覧会	210
資料九	第十一章	211
参考資料		212

序論

拙論の動機は、以下の二点である。

一点目は、現代も、『茶の本』の研究本や訳本が数多く出版されている。現代人から見て魅力のある本であり、解明不可能な部分も多い。また、それが、魅力である。

岡倉覚三(天心)は官僚であり、教育者であり、美術史家であり、古美術保存者であった。しかし、そこから派生していく新たな問題と携わる仕事から、思想家としての地位を獲得する。天心の思想の一面が、茶道との拘りへと繋がるのではないかという理由が一つの動機である。二点目は、多方面に活躍した天心を、多面的に明らかにすることは重要であり、真実の天心を理解してこそ、天心が辿り付いた思想を解明することができる。

研究の目的は、天心の思想と茶道との共通点を探ることである。第一部では、思想と人間像に焦点を合わせる。また、三冊目に刊行された『茶の本』は、茶道と相乗効果をもたらしたことを明らかにする。

結論は、天心の思想の一面「共感」が茶道の「和敬」と重なること、また、『茶の本』と茶道には相乗効果があることを論じる。

主に使用した資料は、一九八〇年に刊行された『岡倉天心全集』一卷〜八巻(平凡社)である。それ以前の先行研究資料は、息子である一雄が書いた『父天心』、孫の古志郎の復刻版として加筆した『父岡倉天心』(中央公論社 昭和四六年)を使用した。家族が接して知り得た天心像は貴重である。また、天心と共に過した時間が長い横山大観の『大観画談』(講談社 一九五一年)も資料としたが、可能な限り、平凡社発行の『岡倉天心全集』以降の先行資料に重きを置いた。その理由は、天心研究を最初に始めたのは日本美術院である。皆、思い入れがあり、その後の天心研究者もその思想から、抜け出られなかった。

天心と関係がある、斎藤隆三の『岡倉天心』、清見陸郎の『岡倉天心』の作品に引きずられてしまった。最近の新しい研究資料により、天心の行動範囲と思想が新たな角度から、見えてきた。このような理由で、あえて新しい資料を使用した。

また、天心研究が様々な領域から進められてきた中、拙論は独自の解釈を提示している。

拙論は二部構成である。第一部は、岡倉天心の思想、二部が岡倉天心の茶道である。

第一章では、父・勘右衛門(一八二〇〜一八九六)の故郷の福井藩とどのような藩であり、どのような思想の土壌があるのかを検証し、父・勘右衛門の人間像を捉え、岡倉覚三(天心)(一八六三〜一九一三)への影響がどのような形として表れたかを確認する。

また、岡倉覚三(天心)が過した幼少期の横浜の日本人居住地での生活が、岡倉の人間形成にどのような影響があったのかを検証する。

第二章では、岡倉天心の功績を伝播した人々と題して、今日まで顕彰され続けた理由を取り上げた。

第三章では、官僚の地位を追われ、民間人として、日本美術院を設立する。組織作りは、官僚時代に発揮した才能でもあり、わずか三ヶ月あまりで、構想を練り、組織を作ってしまう。絵画のほかに、彫刻（木彫りなど）にも力を入れ、古美術の研究と保存には、特に、力を注いでいる。

第四章では、岡倉天心の生涯を通しての思想並びに行動をさぐる。多面的に活動した岡倉天心を明らかにした。

第七節では、東京美術学校校長時代に、「日本美術史」を講義していた。日本にない概論を大系的に構築し、膨大な情報を緻密に分析して、作り上げている。その後も中国・インドに行き、試行錯誤の調査と研究を行なっている。その中で天心の思想が固まっていく。第一〇節と第一一節は、天心の思想が固まった講演と言われる「絵画における近代の問題」と「ボストン美術館中国日本部の仕事に協力する婦人たちへの談話」ある。

第五章は、天心が関わったシカゴ万国博覧会と第五回パリ万国博覧会との比較である。第五回パリ万国博覧会に関しては、東京美術学校非職と帝国博物館の理事兼美術部長を依頼退職し、関係を絶つことになり、それまでに準備していた内容とは別の結論をだす結果になる。それは、日本美術史における日本の方向が決定化することになる。

第六章と第七章は、天心の東洋と西洋についての考えを考察するものである。第八章は、『岡倉天心全集』に納められている書簡を通して、天心の人間像を捉えていく。拙論では、第一部として、岡倉天心の思想と人物像を検証する。

第二部では、「茶道」の章を設けて、明治以降、大正、昭和、平成の時代までを追い、「茶道」が、どのように一般国民に浸透し、天心が書いた『茶の本』と、直接、間接的にどのような係わり方をしたかを検証する。

明治から昭和初期まで豊富な資金がある数奇者の茶会が行なわれ、また、行儀作法としての高等女学校での茶道が盛んになる。そこから、急速的に茶道の人口が増えていく。

大正期には、高橋義雄・箒庵（一八六一〜）は茶会記（『東都茶会記』・『大正茶道記』）などを出版している。名物茶道具集として『大正名器鑑』も編纂している。そのことは、書物の出版と書物への関心への始まりである。

昭和になると、天心に関する研究本と『茶の本』（村岡博訳 岩波書店）の日本語訳も刊行されると、その本を読む茶人も増え、茶道の本が多く出版されるようになる。それは、村岡博訳の『茶の本』が出版された昭和四年以降であろう。

村岡博訳の『茶の本』は、今日まで、読み継がれ、他の出版社からも出版されている。

千利休（一五二二〜一五九一）没後、はたして、特に昭和・平成の時代のように、多くの人が読むことができる茶道の本が出版された時代があったであろうか。

しかも、茶道の歴史の本も多く出版されると、近代の茶道史の項目には岡倉天心著の『茶の本』が茶道の近代の歴史に、その坐を得た。

茶道人口の増加と積極的な茶道の海外普及活動があったことにより、海外でも茶道を学ぶ外国人が増えた。それは、英文の『茶の本』の影響が大きい。

国内でも、日本語訳の『茶の本』は、茶道と影響し合ってきたことを、近代・現代の時代を追って検証する。

「美術」・「美術史」の定義を以下に示す。

岡倉覚三(天心)を語る上で、「美術」・「美術史」という言葉の意味を説明する必要がある。この二つの言葉は明治になって作られた翻訳語である。

【美術】

(FINE ART)の訳語) 本来は芸術一般を指すが、現在では絵画・彫刻・書・

建築・工藝など造形藝術を意味する。アート。クンスト。

【美術史】美術の変遷・展開を調査・研究する学問分野

『広辞苑』第六版 岩波書店 二〇〇八年

拙論は、これを踏まえて「美術」は、造形芸術と捉える。「美術史」は、その造形藝術の歴史と定義する。

参考資料

『茶の本』岡倉天心著 村岡博訳 岩波書店 一九八四年(新版)

『茶の本』岡倉天心著 千宗室「序と跋」 浅野晃「訳」 講談社インターナショナル

一九九八年・二〇〇八年

「茶の本」『岡倉天心全集』一巻 岡倉天心著 桶谷秀昭訳 一九八〇年

平凡社(二六一〜三二二頁)

第一部 岡倉覚三（天心）の思想と人間像について

第一章 父・勘右衛門と岡倉覚三（天心）を取り巻く環境

はじめに

岡倉覚三（天心^①一八六三〜一九一三）に影響を与えた父の出身地福井藩^②に注目する。

息子覚三（天心）への父勘右衛門^③（一八二〇〜九六）の影響は大きい。勘右衛門の教育方針が、海外に目を向けさせ、息子の将来のために、覚三を英語教室に通わせたことが、『父岡倉天心』に綴られていて、父の息子への期待が窺える。

岡倉覚三（天心）の思想がどのような環境で、どのように人間形成されたであろうかを確認することが目的である。

福井藩にどんな問題があり、藩主慶永（一八二八〜一八九〇）が、どのように藩を運営したかを確認することは、重要な要素である。

第一節では、父勘右衛門の越前国福井藩が、どんな藩で、どのように、勘右衛門に影響を与えたかを検証する。

第二節では、横浜の日本人居住区と居留地での父勘右衛門の息子覚三への教育について、検証する。

『父岡倉天心』によれば、父・勘右衛門は越前福井藩の藩士で、お納戸役^⑤を務め、經理出納に衝いている。

覚三（天心）は、横浜の地で生まれ、兄・港一郎、弟・由三郎、妹・てふ子がいる。実母^④このは、てふ子を産み、産褥時に急逝している。また、覚三（天心）には、福井藩出身の乳母のつねがいる。「彼女（つね）の本家にあたる橋本家の嫡々は、維新の志士の間には嶄然頭角を抜いた橋本左内その人であった。」^⑥（「つね」加筆である。）^⑦

つねは橋本左内（一八三四〜一八五九）の親戚ということから、物心ついた時から左内の逸事逸話を、子守唄のように覚三は聞かされていた。覚三（天心）の人間形成に、つねの影響は大きな要素となっている。

橋本左内の行動と思想は、つねの言動を通して、岡倉覚三の内面に、有形無形に拘らず、継承され、また、石川屋という環境は、隣接する外国人居留地を、肌で外国人を感じることででき、店には、直接、外国人が買い付けにきている。その画が残っている。幼少の覚三への影響は大きいものであったろう。

第一節 父勘右衛門の出身地越前国福井藩

1 福井藩主松平慶永よしなが（春嶽、文政十一年〜明治二三年）

岡倉勘右衛門が福井藩に属していた時の福井藩主は、一七代松平慶永よしなが（一八二八〜九〇）である。隠居後の号が春嶽である。

慶永とはどんな人物で、福井藩をどのようにしようとしていたのかを探り、藩の気質と藩風をさぐる。

また、どんな理由で、福井藩の藩主になったのであろうか。

一六代藩主斉善なりさわは一六歳で襲封しゅうほうしたが、一九歳の若さで病没した。慶永は養子になり、福井藩の後継者になる。

慶永は文政十一年（一八二八）九月二日、徳川三卿の一家である田安斉匡なりまさの八男として、江戸城内の田安邸で誕生した。田安斉匡なりまさは同じ三卿の一橋家の出身で、十一代將軍の実弟であった。このため、慶永にとっては十一代將軍家斉は伯父、十二代將軍家慶は従兄弟にあたる。⁸⁾

一七代藩主となった慶永（春嶽）が、天保十四年（一八四三）に福井藩に初入国が許された時は、十六歳である。福井藩では、名君に育てる側近たち、特に側向頭取そばむきとうどりの浅井正昭が教育にあたった。

福井藩に襲報するまでは、江戸城内の田安家で育った。厳格で厳しい日課で教育され、朝は一菜、昼夜は一汁一菜である。⁹⁾ 田安家は、学問の家柄であり、子供たちにもきびしい躰ていをしている。慶永は、そんな環境で教育を受けているので、側近の話をよく聴く青年藩主になったのであろう。

慶永（春嶽）の生き方、考え方が福井藩の側近方にも浸透して、藩政改革が始まる。

当時の福井藩は、深刻な問題を抱え、危機的な状況であった。藩財政が破綻寸前で年々二万六〇〇〇両の赤字を生み出し、返済の目処もつかない借財が九〇万両にも達し、加えて急場凌ぎの藩札の濫発により藩の経済は混迷の極みに達していたのである。¹⁰⁾

また、日本近海には、異国船が出没していた。しかし、すでに、文政八年（一八二五）には、異国船打ち払い令が發布されている。

一七代当主松平慶永は、西洋の驚異を感じ、幕府に対しては、海防対策として、沿岸警備の必要性を、また福井藩では、藩内改革を進言していた。

福井藩に入国三年後、危機感を感じた慶永は、以下の藩命を通達している。

福井藩は嘉永二年（一八四九）五月、国許にあつた御小姓三寺三作おこしょうみつでらさんざくに、遊歴かたがた上方筋を中心かみがたすじに朱子学に立脚した「純粹の儒者」を探し出し、報告するように藩命を下した。⁽¹⁾

嘉永六年（一八五三）には、ペリー艦隊が浦賀沖に来航する。

慶永は海防対策と藩内改革を推し進める理論派であり、身分、年齢を問わず、意見を聞く君主である。福井藩は多額の累積赤字を抱えているが、富国の必要性があると考え、人材の育成をする。

文武に優れた人材育成の為、「朱子学純粹の儒者」探すように提言して、熊本藩の儒学者横井小楠よこいしやうなん（文化六年一八〇九く明治二年一八六九）⁽¹²⁾にたどり着く。

福井藩に請われて、安政四年（一八五七）、横井小楠が到着し、客分として厚遇される。朱子学の真髓と政治改革が受け入れられ、藩中枢部に徹底されていく。

小楠は「学政一致」を唱え、その助言で、藩校「明道館」を再建する。場所は城内三の丸に創設する。慶永の意気込みが感じられる。

この時点では慶永は、尊王攘夷派であつた。

2 橋本左内（一八三四く一八五九）

藩校設立には、功労者の鈴木主税もんどが居たが、体調が戻らず、安政三年（一八五六）に重病の床で、橋本左内（天保五年一八三四く安政五年一八五九）が後継者として起用される。

橋本左内は緒方洪庵こうあんの滴々塾出身の蘭学者であり、蘭方医術を修めている。翌年には実質上の藩校運営の責任者となる。また、左内は藩主慶永に請われ、側締そばしまりやく役となり、国事に専念することになる。藩主を補佐し、条約勅許問題と將軍継嗣運動などで奔走する。朝廷には、徳川慶喜擁立の説明工作を行なつた。しかし、安政五年（一八五八）七月に、松平慶永に隠居・急度きつとつしみ慎しんを命じられた。左内にもきびしい災難が降りかかる。

一〇月二十二日夜、幕吏が江戸常盤橋の藩邸内にあつた橋本左内宅の捜査を行い、左内の身柄は邸内の滝勘蔵方へ預けられた。その後、評定所や町奉行所で取調べを受け、翌六年一〇月二日には小伝馬町こでんまの牢獄に投獄され、五日後に処刑された。わずか二十六年の生涯であつた。左内の罪状は「不憚こつぎをはばからざる 公儀いたし方、右始末不届ふとしまき 二付」『橋本景岳全集』とあり、国政にかかわることの許されない陪臣、しかも長輩でありながら、將軍継嗣として慶喜を擁立せんという重大事に関与し、藩主の命令を諫めいさることもせずそのまま承授し、朝廷や公爵へ働きかけたことは、不届きであるというものであつた。⁽¹⁴⁾

橋本左内の活躍は二年足らずであった。望むと望まないとに係らず、幕末の混乱の影響を大きく受けた藩であった。国の行く末を憂慮しての藩主慶永の行動であり、藩主から抜擢された橋本左内の行動であった。左内は世界情勢を分析している。

目下の日本は「力足らず、とても西洋諸国の兵に敵対して比年（年々）連戦はおぼつか覚束無い」。そこでロシアや米国から「諸芸術（學術技芸）之師範役五十人計り借受」け、「物産の道を手広に始め」るなどの富国をはかり、ロシアと同盟して積極的に海外へ進出すべきである。そのためには「日本国中を一家と見」て、英明な將軍を中心に国家の総力を結集し、外様・諸藩士の別なく有用な人材を登用し、内政の改革も進めべきである」と主張している。¹⁵⁾

左内の開国貿易論は少なからず、慶永の考えの転換になったのではないかと言われている。それまでは、尊王攘夷の立場をとっていた。その転換の理由が以下である。

第一に藩政の改革を通して西洋の技術や學術の先進性を深く理解したことが挙げられる。洋式兵術の導入や藩校明道館内に洋書習字所を設立したり、蘭方医である笠原白翁の牛痘種痘の実施に理解を示すなど、西洋の技術や學術を積極的に摂取している。第二に慶永に近習する橋本左内らの開国貿易論や、すでに貿易を実施している鹿児島藩などの影響を受けたこと、第三には、米・英・露との間で和親条約が締結され、それを朝廷も認める状況のなかで、わが国を取り巻く国際情勢を認識していたことが考えられる。¹⁶⁾

藩主慶永にも影響を与えた二四歳の左内の才能は、十分に發揮する機会も無く、処刑された。しかし、福井藩が進めた事業は、左内が唱えた幾つかの中の一つである「物産の道を手広に始め」を実行していった。

左内（漢方医）がお預けとなり、謹慎している時に書いた母宛の書状（*資料二、二一九頁参照）は、処刑される約一カ月前のものである。母思いの息子からの手紙である。友人や患者のことを心配している。人情味のある左内の姿が浮かぶ。また国元にコレラが流行っているようなので、気をつけるように、また亡くなった方へは、気の毒だったとか、日常のできごとや、送ってくれた品物へのお礼などが、決め細やかに書かれ、左内の性格が表われている。

3 父・勘右衛門（一八二〇～九六）

慶永が襲封して、領内を視察し、藩改革を行なう中で、橋本左内の考えである、「貿易論」の考えに積極的なる。その流れの中で、勘右衛門は石川屋の経営を任されることになる。

勘右衛門が武士から商人になるきっかけは、まさに橋本左内が提唱した殖産興業のため
の一つである。

「物産の道を手広に始め」の海外に積極的に、藩の産物を売り込むことである。そのため
に、藩の流通システムを整えて、「大問屋を設置したことである。⁽¹⁷⁾産物さんぶつ会所かいしょのことで、領
内全体の産物生産と流通・販売をここで行なうようにした。」
万延元年（一八六〇）に、長崎にも出店しているが、横浜での交易は安政六年（一八五
九）に始まっている。

安政六年の開港当初、横浜はまだ一漁村にすぎなかったが、福井藩は早くもその年
に同村の名主石川徳右衛門で土地を確保し、六月に与助という人物を雇って越前産
物を販売を目的とする商館「石川屋」を開業する。ほぼ同じころ、同地には福井屋
弥兵衛の店や越前産物を販売する店も出現した（横浜開港資料館蔵「横浜商人録」他）。
なお、同年十二月には江戸詰であった岡倉勘右衛門が制産方下代に任命され、かれに
横浜交易の監督と経営が委ねられた。⁽¹⁸⁾

同村の名主石川徳右衛門から土地を確保できる幸運に恵まれる。松平越前守は安政五年
六月から神奈川横浜の警護を命ぜられていたその時に、五丁目の立地のよい場所を、借
り受けている。勘右衛門はその地に建てられた石川屋を任せられる。采配する才能を認め
られたからであろう。

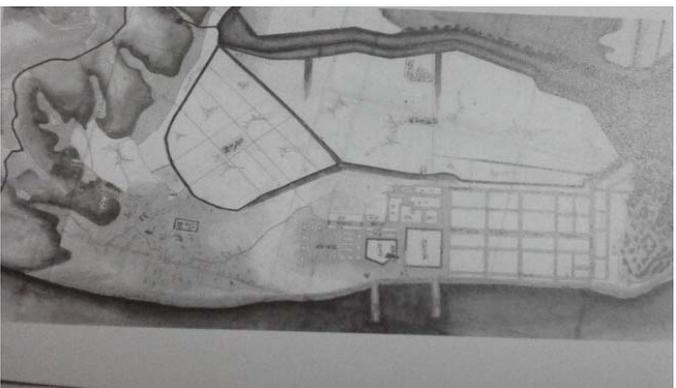
天心の息子一雄が以下のように書いているが、勘右衛門は、実直な信頼できる人物のよ
うである。

三十余歳の勘右衛門は、藩主春嶽の密命を受け、商人たらんとして藩籍を離脱し、
いったん浪々の身となったが、なお旧藩の重臣と協議するために、ひとまず江戸の
藩邸に上がって来た。当時、彼の逸事として伝えられることは、両刀を棄てて一貫
の布子に打ち震えながら、夜旅をかけての江戸入りの前夜、鈴ヶ森の刑場を過ぎる
と、たまたま晒された獄門の首級が、おりからの薄月夜に彼を睨めつつあるがごと
く思われて、思わず念仏を唱えたという、老後の彼の述懐であった。こんなところ
から見ると、彼はよほどの臆病武士であったにちがいない。⁽¹⁹⁾

両刀を棄てたということは丸腰になったわけで、心許無いことや、服装も木綿の綿入れ
だと相像ができる。理由は慶永は儉約令をだしている。基本的には武士は、絹織物から綿
織物を着る様に藩命がでている。一雄は臆病武士と言っているが、単純には言えない勘右
衛門の心情もあるであろう。

資料を検証すると、石川屋は、福井藩の出先機関である。「長崎にも豪商小曾根乾堂の
弟清三郎を「長崎表御用達に任じている。」⁽²⁰⁾」

『神奈川県郷土資料集成』(第三部 黒船渡来と沿岸警備)によると、嘉永六年(一八五三)には、(福井藩主慶永)松平 越前守様後人数は御殿山・東海寺・州先が担当警備とある。安政五年(一八五八)には、神奈川横浜辺の警備に替っている。その場所が居留地と日本人居住区である。



「御持場海岸分見画(2)図」(部分) 福井県立図書館保管

松平文庫 松平宗紀氏蔵(福井県立図書館保管)『横浜外国人居留地』転載18頁

開港場の警備を担当した福井藩が、一八五九年、秋ごろに作成したもので、真ん中の二本の突堤の上が、運上役所(税関)である。一八六二年以降、合法的に、運上所の右側が日本人居住区と左側が外国人商館地(居留地)となる。

福井藩が横浜周辺を警備担当をしている時に、福井藩と名主の石川徳右衛門と信頼関係ができ、石川徳右衛門の土地を借りて、開店している。
以下のように書いてある。

一 御土蔵老ヶ所 弐間に五間

但し開港翌年申二月より取り掛り五月中出来に相成酉十月御店類焼之節」相残

聊御取締ひ迄に而相済候

一 地所坪数之儀者本町通表間六間 横通り奥行老五 九拾坪内 表坪 但し老坪に

付 銀壹匁九分 裏九分五厘

メ 壹ヶ月

地代 百六拾匁五厘⁽²⁾⁽³⁾

石川屋は、順調に外国人客で賑い、「越前の羽二重や生糸などで、資金も藩から給せられた数万両を常に動かしていたようである。⁽²⁾⁽³⁾」と息子一雄は語っている。また、勘右衛門は、家族を福井に残している、いわゆる単身赴任である。生糸以外の茶・木綿・紙などの商品を取り扱う。

故郷福井に残した妻女との間にもうけた四人の娘は、それぞれ嫁ぐべき年配となり、末の仙女を除いた三人はすでに配偶者が定められていた。長女の仲には幹治という⁽⁴⁾婿を迎えて、岡倉家を継がせ、次女のはやし子は八杉氏に、三女のひやく子は坪田氏に、嫁いでいた。(中略) 妻女は四女仙子をもうけるや、ひさしからず病をえて、長逝してしまった。⁽²⁾⁽⁴⁾

また、さらに、勘右衛門は福井藩と年契約をしていて、年に三〇両を受け取れる契約をしている。以下である。

猶又以来御店相続筋之儀に附而者御改正被仰出質素実着之御意を以左之通被仰渡候
依之手代共より一札取之奥書印形仕差上候 御店締役

金三十両也

金 右 衛 門

但是迄通り壹ヶ年如此盆暮両度に御渡し被成下候事⁽²⁾⁽⁵⁾

形の上では、商人になっているが、福井藩と繋がっている関係である。藩の出先機関を任されたわけである。勘右衛門の別名として、金右衛門の名もある。

第二節 横浜の日本人居住区と居留地

1 覚三(天心)の家族環境

覚三(天心)の家族環境と、覚三(天心)の人間形成時期を検証する。
勘右衛門は今でいう横浜の地での単身赴任である。

福井の地は妻みせと娘のなか、よし、ひやく、せんが居た。妻のみせが病で長逝

してしまい、勘右衛門が新たに横浜の地で妻を迎えた。農畑氏のこののである。覚三(天心)は、勘右衛門とこのとの間の二番目の息子である。その後、弟の由三郎と妹のてふが生まれ、母このは店を切盛りして、多忙なため、郷里の福井から、抱き守りのつねを迎える。つねがほこりとする左内の話を覚三(天心)にし、左内の影響を大きく受けた。母のこのは、店の切り盛りの他に、長男浩一郎(病症の身)の世話もあった。⁽²⁶⁾

明治元年に由三郎を、同三年にてふ子を生んだが、産褥熱を与え、その結果、ついに急逝する悲運を招来させている。

母のこのが亡くなったのは明治三年で、享年三七歳であった。

天心にとつては、実母を失い、淋しい幼少時代であると推察できる。勘右衛門は、三度目の妻しずを迎え、しずは、店の切り盛りをすることになる。

「石川生糸店之図」 本町五丁目 地所・名義は横浜村名主「石川徳右衛門」



『横浜開港見聞誌』

天心は、「知人の大谷家へその後は、長延寺に預けられ、住職玄導和尚に漢籍を学び、一方伊勢山下にある高島学校に通ったという。⁽²⁷⁾」ことである。

2 横浜居住区での息子・覚三への教育

最初にプロテスタント宣教師・ヘボン⁽²⁸⁾夫妻が神奈川に着いたのが、安政六年(一八五九)年である。

「米国領事館の本覚寺の近くの成仏寺を住宅兼宣教師の館として、あてがわれた。⁽²⁹⁾」

そこに、その後に来日したバラ夫妻が迎えられる。

「江戸幕府は開国したもののキリシタン禁制は固くこれを守り、日本人へのキリスト教の伝播を嚴重にとりしめていた。成仏寺にも間諜（スパイ）を放ってジェームズたちの行動を逐一監視するとともに、門前には尊攘志士から外国人を守るといふ名目で、幕府の役人が見張りとして交代で駐在していた。」³⁰

生麦事件が起きた一八六二年（文久二）に幕府は外国人保護の名目で、横浜村の一区画を合法的に外国人居留地とした。居留地に移って、基督教普及活動をするに際して、教会を建設し、日曜礼拝を行ったり、集まってくる日本人の若者のために英語塾を開いていた。

父の勘右衛門は、幼い覚三（天心）に日本語を学ばせる前に、英語を学ばせるという画期的な試みをしている。明治という時代に入り明治二年が、覚三（天心）の習い始めであろう。現在の年齢の数え方で、六歳であろう。覚三は文久二年一月二十六日に生まれで、ほぼ文久三年に近いことからの理由である。

居留地では英語塾が開校されたが、勘右衛門が選んだ英語塾がジェームズ・バラの英語教室である。おそらく、語学の勉強に専念できる理由ではないだろうか。

ジェームズ・バラの英語塾は、一六七番地で、運上所にも近く、石川屋からの距離から、近所という感覚もあろう。勘右衛門は世の中の情報をよく収集していたのではなからうか。これからの日本の行く方向を見据えて、英語学校を選んでいる。福井藩の藩主

松平春嶽が行った殖産のための行動を見ても、外国との貿易を主に考えていることがわかる。そのための石川屋でもあり、息子の天心には期待している様子が見受けられる。

安政五年（二八五八）、石川屋が開店してから閉鎖する明治六年（一八七三）まで、勘右衛門は約一五年間、横浜の地で、店を取り締まってきたことになる。息子の天心が、過した幼少期である。

この略年譜から、覚三は明治二年から明治六年までの三年から四年間、英語を習っていたのだろう。

西本願寺の末寺の長延寺に預けられてからも新校舎の高島学校に通い、ジョン・バラに英語を習う。その時点で、八歳前後であろう。明治六年までの間に覚三は、十二分な英語の基礎知識を身につけたことが窺われる。

外国人宣教師の目的は、布教活動であるが、当時は、徳川幕府時代であるので、公には布教活動ができない。宣教師のジェームズ・ヘボン日本語を習って、旧・新約聖書の翻訳にとりかかっている。また、宣教医師でもあり、施療所と医学塾を開き、夫人のクララは英語塾を開いていた。ジェームズ・バラたちもヘボンの協力もあり、運上所の役人たちに、英語を教えたり、居留地一六七番地の自宅（ジェームズ・バラ夫妻の自宅）でも英語塾を開いていた。覚三が通った塾である。

明治時代になっても、すぐにキリスト教が解禁されたわけではないが、教材の一つは聖書であったであろう。覚三は、クリスチャンにはならなかった。

父親の勘右衛門が、学校を選んだのではなからうか。晩年の『茶の本』には、「不幸なことに、西洋側の態度は東洋の理解ということに好適ではない。キリスト教の宣教師は与えるために行く、だが受けようとはしない。」と語っている。このことは、幼い時から、父勘右衛門から言い聞かされていたことと、玄導和尚に漢籍を習ったことも影響しているのではないか。生涯に渡って、漢詩を書いているところから判断すると、玄導和尚の影響が大きいのであろう。

まとめ

幕末の福井藩の藩主慶永春嶽の行動は、常に聴く耳があり、身分の低い者も才能があれば取立てたり、藩士の教育を重視している姿がある。その例が「明道館」である。

「政教一致」で、他の藩からも横井小楠を客分として、藩士の教育と相談役としている。その姿は、まさに開国論者になる素質があった。藩風もやはり、主君の影響を受ける。

また、若い橋本左内も藩主に積極的に提言し、学んだ西洋の知識を慶永（春嶽）に伝えている。春嶽は、話をよく聞き、時代の流れを理解できる人物であるのだらう。

累積赤字がある福井藩にとってみれば、儉約を強いるだけでは、財政を立て直すには無理であると判断して、殖産に力をいれ、藩が、今という総合商社の役を果たし、他の藩の動きからも、情報を収集していた。その藩風が、藩士の中にも徹底していく。その中で、最前線が石川屋であった。抜擢された勘右衛門はその能力を買われたということである。

勘右衛門にとって、春嶽から学ぶことが多かったと推察する。殖産の手段として、まだ鎖国であるにも係らず、海外に目を向け、利益をだすという方法を春嶽が取ったのである。そこから、勘右衛門はこれからの時代は、外国との交易が必要になり、そのためには語学を学ぶことにあると考えたのであろう。新たな時代へ向けて、希望を持ったのではないだらうか。

勘右衛門の天心に対する教育は、大胆である。日本語より先に英語を習わせたのである。将来を見据えての父親の考えであらう。文政三年生まれの勘右衛門にとって、一大決心であり、息子の覚三（天心）に期待を持っていた証である。

天心は、父の期待に答えられる十分な能力を持っていた。大いに期待したのであろう。日本人居住区は、外国と接す最前線である。幼い天心は、その中で十分な英語教育を受け、漢学を習い、その後の人生の基礎を身につけたと言える。ただ、母を早く失った心の空白は、埋めにくかったであらう。

覚三は、三年から四年も宣教師から英語を習ったが、クリスチャンにならなかったことは、父の英語学校の選択と、助言があったからであらう。

『日本の覚醒』の第一〇章「日本と平和」では、「病院と水雷、キリスト教宣教師と帝国

主義、膨大な軍備があるための平和の保障、等は何を意味しているのだろうか？」と天心は、述べている。当時の西洋人の目的を理解していたことがわかる。⁽³⁴⁾

注

(1) 岡倉角蔵(覚三) 生まれたのが角の蔵で生まれたということ、角蔵と名づけられたが、そのをきらい、東京大学以前(一八才〜一九才)ころに覚三を使用し始めている。『岡倉天心をめぐる人々』 岡倉一著中央公論美術出版 平成一〇年 二〇六頁) 岡倉天心生前中は、「覚三」で通している。「天心」名は、漢詩、書間に用いている。場合があるが、染井の墓地に「釈天心」と刻まれている。法名である。

『父岡倉天心』岡倉一雄著 中央公論社 昭和四六年二六一頁から抜粋)

(2) 福井藩

幕末の福井藩は、三二万石で、明治維新に至っている。

藩主松平慶永は、橋本左内らを登用、また肥後国熊本藩から横井小楠を招いて藩政改革を行なった。幕政でも一橋派として大老井伊直弼と対立、安政の大獄で隠居させられたが、謹慎解除後は公武合体派の重鎮として活躍した。一八七一年(明四)の廃藩置県により、福井県、足羽県、敦賀県、石川県を経て、一八八一年(明一四)に再置の福井県に編入された。

『国史大辞典』(国史大辞典編集委員会 吉川弘文館平成四年から抜粋)

(3) 父勘右衛門(一八二〇〜九六) 福井藩の下級武士。安政六年二月、江戸詰であった岡倉覚右衛門が制産方下代に任命され、横浜交易の監督と経営が委ねられた。

『福井市史 通史編2 近世』 平成二〇年 九一九頁)

『岡倉天心全集』(別巻 岡倉天心著 平凡社一八九〇年)の年譜によれば、覚右衛門は、金右衛門、潜右衛門、前衛門などを名のり、晩年は勘右衛門で通した。連句を嗜み、俳号を月夜庵鸚由(げつや あんゆう)と称した。

(4) 松平慶永(春嶽 一八二八〜九〇)

越前国福井藩主 隠居後に春岳の号を通称に用いる 文政十一年(一八三八)九月、將軍徳川家慶の命で、越前福井藩主松平斉善のあとを継ぎ、第一七代藩主となり、慶永と称した。誠実・謹直で、名君として家臣の信望を集め、また中根をはじめ、鈴木主税・村田氏寿・橋本左内らの賢人と熊本藩の儒者横井小楠(しょうなん)らを用いる。『国史大辞典』国史大辞典編集委員会 吉川弘文館 平成四年

(5) お納戸役 『岡倉天心をめぐる人々』の注では、お納戸役について、記録によれば、岡倉勘衛門は福井藩の命により横浜商館の手代をおおせつかっていた。かれの地位は足軽であり、藩主に謁見できる立場にはなく、お納戸役につくことはない。前掲注で指摘している。

『岡倉天心をめぐる人々』岡倉一雄著 中央公論美術出版 平成一〇年 二〇五頁)

(6) 橋本左内(はしもとさない 一八三四〜五九)

幕末の開明派志士。

福井藩奥外科医で二十五石五人扶持の橋本彦屋長綱の長男として出生。

十六歳にて大坂遊学、緒方洪庵の滴々齋塾において蘭学・蘭方医学を修めた。

種痘法に出精して藩主松平慶永より慰労される。安政二年―三年ごろの聞書『西洋事情書』では西洋国王の手軽な生活ぶり、軽い租税、公議政体、官吏任用法教育研究制度、殖産興業などについての深い知識を示している。諸藩の有用人物を適所に配置した幕府の規模における統一国家の樹立をめざしたのである。

安政の大獄により、將軍跡継ぎ問題に介入したことを不届とされ、死刑。

〔国史大辞典〕 国史大辞典編集委員会 吉川弘文館 平成四年)

(7) 『父岡倉天心』岡倉一雄著 中央公論社 九頁

(8) 『福井市史 通史編2 近世』 平成二〇年 八二五頁

(9) 前掲書 八二六頁

(10) 前掲書 八二七頁

(11) 『横井小南と松平春嶽』 高木不二著 吉川弘文館 二〇〇五年 六頁

(12) 横井小楠(一八〇九〜六九)

幕末の儒学者・政治思想家。文化六年(一八〇九)八月十三日、熊本城下内坪井町(熊本市)に生まれる。号小楠。嘉永年間(一八四八〜五四)に越前福井藩との接触が生じ、ペリー来航の直前には越前の同学に『文武一途之説』を贈った。安政五年その思想に信服した福井藩士松平慶永(春嶽)から賓客として招かれて越前藩政を指導した。増産させた絹・生糸を藩が長崎で売却して農民に還元するという富国策で大きな利益を挙げ、その成果を著述『国是三論』にまとめる。

〔国史大辞典〕 国史大辞典編集委員会 吉川弘文館 平成四年)

(13) 緒方洪庵(一八一〇〜一八六三) 江戸後期の蘭医。長崎に遊学、大坂に塾を設けた。種痘を施行。のち幕府に招かれ、奥医師兼西洋医学所頭取。橋本左内・福沢諭吉らを輩出。

(14) 『福井市史 通史編2 近世』 平成二〇年 八六八頁

(15) 前掲書 八五九頁

(16) 前掲書 八五五頁

(17) 『福井市史 通史編2 近世』九二二頁 平成二〇年 一〇頁

(18) 前掲書 九一九頁

(19) 『父岡倉天心』岡倉一雄著 中央公論社 昭和四六年 五頁

(20) 『福井市史 通史編2 近世』 平成二〇年 九二三頁

(21) 『横浜外国人居留地』横浜開港資料館 有麟堂 平成一〇年 転載 一八頁

- (22) 『横浜市史』第二卷「横浜商店時情書」神奈川県図書館 昭和三十三年一二七頁
- (23) 『父岡倉天心』岡倉一雄著 中央公論社 昭和四六年 六頁
- (24) 前掲書 六頁
- (25) 『横浜市史』第二卷「横浜商店時情書」神奈川県図書館 昭和三十三年
一二六頁～一二七頁
- (26) 『父岡倉天心』岡倉一雄著 中央公論社 昭和四六年 一〇頁
- (27) 『岡倉天心全集』別巻 三七八頁抜粋
- (28) J・C・ヘボン (James Curtis Hepburn 1815～1911) アメリカ長老派教会
宣教師・医師。一八五九年(安政六)来日、医療・伝道のかたわら、最初の和英・
英和辞典(和英語林集成)を完成、ヘボン式ローマ字を創始。明治学院を創立。
九二年帰国。『横浜開港と宣教師たちー伝道とミッションスクール』
横浜プロテスタント史研究会編 有隣堂 平成二二年二〇頁
- (29) 『横浜開港と宣教師たちー伝道とミッション・スクール』
横浜プロテスタント史研究会編 有隣堂 平成二二年二〇頁
- (30) 前掲書 七二頁～七三頁
- (31) ジェームズ バラ (J・H・Ballash 1832～1920) 妻マーガレット (1840～1909)
と共に一八六二年来日し、横浜英学書や藍樹堂で英語を教え、伝道活動もおこな
った。弟のジョン・バラも本国から呼び寄せた。
- (32) 高島学校 一九七二年一月、高島嘉右衛門が設立した学校。
牧師のバラ兄弟らが英語を教えた。正式名は藍樹堂(らんじやどう)。
『横浜外国人居留地』横浜開港資料館 平成一〇年 転載一〇頁
- (33) 『茶の本』岡倉天心著 浅野晃訳 講談社 一九九八年 四二頁
- (34) 『岡倉天心全集』岡倉天心 平凡社 一九八〇年 二五六頁

第二章 岡倉覚三（天心）の功績を伝播した人々

はじめに

岡倉天心の息子一雄^①（一八八一―一九四三）が書いた『父天心』（聖文閣一九三九年）と『父天心を繞る人々』（文川堂一九四三年）の本を後世の人たちに残した功績は大きい。これらの本は、人間「岡倉天心」が描かれている。家族でなければ書き得ない事や、また、エピソードなどが詳細に描かれている。息子一雄が未刊のまま倒れた後に、孫古志郎（一九二〇―一九二〇）^②がその本を出版に漕ぎ着けている。また、孫古志郎（一九二〇―一九二〇）^③の研究を曾孫登志（一九四五）^④氏が、引き続き、天心研究会「鵬」を立ち上げている。天心研究を引き継いだ理由と天心の弟由三郎（一八六八―一九三六）、加えて、美術院の人たちについて検証する。特に、絵画では横山大観（一八六八―一九五八）、彫刻では平櫛田中^⑤（一八七二―一九七九）^⑥について検証する。

第一節 息子・岡倉一雄

1 『父天心』の刊行

岡倉天心研究の原点というべき資料は、日本美術院の『天心全集』^⑦と父一雄著の『父天心』であり、天心の生涯を記録した『父天心』は、いわゆる伝記であると言って過言ではない。孫の古志郎は復刻版でこの本のことを以下のごとく述べている。

「備忘録」、ないし「家伝」として「多くの私事も網羅した」ところに、そして、これらの「多くの私事」がじつは客観的に天心の人間像を浮き彫りにする効果を生んでいるところに、本書のユニークな持ち味があると思う。

（『父岡倉天心』岡倉一雄 中央公論社 昭和四六年 二八七頁）

息子の一雄が天心の日常の姿を人間天心として描写している。ここまで、細かく書く目的は、神格化される天心だけでは、不十分であると考えたためであろう。

横山大観は、家族の思いとは別に、天心零社が建立している。以下のように語っている。

大正三年（一九一四）、一周忌（九月二日）を期して、下村観山、横山大観ら旧同人を中心に日本美術院が再興される。同時に天心零社を建て、旧日本美術院故人の合祀社とする。^⑧

「天心零社」が建立されたということは、ここから、天心は神格化されたということである。横山大観は『大観画談』の中で、以下のように語っている。

研究所の構内に岡倉先生の御霊を祭りました。天心零社というのがこれです。下村君や私をはじめ、みんなの意見で、どうしても先生の御霊を構内に祭りたいということだったので、あの研究所を作ると同時にあの社ができたのです。(中略) 岡倉先生の霊を祭ると同時に日本美術院に關係の深かった狩野芳崖先生、橋本雅邦先生、ならびに菱田春草君の霊をも合祀し、壮重厳肅な祭典を行いました。¹⁰⁾

昭和四年(一九二九)には、村岡博¹⁰⁾(一九五〇〜一九四六)訳の『茶の本』が刊行される。昭和九年(一九三四)には、清見睦郎¹¹⁾(一九六〇〜)の『岡倉天心』(平凡社)、昭和十三年(一九三八)には、浅野晃(一九〇一〜一九九〇)は『東洋の理想』訳を刊行する。聖文閣からは、『天心全集』三巻が昭和十四年(一九三九)によって刊行される。

『茶の本』の刊行をきっかけに天心關係の本が、書店に並ぶことになる。息子の一雄は、こういう状況の中で、人間天心の側面を世の人々に理解してほしいと願い、昭和十四年(一九三九)に、一雄は『父天心』を執筆する。神格化された天心のイメージとは別の側面を書き、人間味のある天心像を書き綴っている。

天心が活き活きと描かれており、交友關係がいかに広がったことや、家族内での出来事なども語られている。酒の量のすごさと金銭感覚がないところなどは、妻の元子のやりくりの苦労もわかる本である。回想録として、『父天心を繞る人々』(昭和十八年)も刊行して、より身近な天心像が感じられる。

2 星崎初子¹²⁾(一八六〇〜一九三一)との係わりを公開

復刻版の『父岡倉天心』の「谷中時代 明治三〇年冬より明治三八年春」の項で、「美校騒動の前奏曲」として、星崎初子との係わりと共に語られている。一雄は初子と天心との係わりを書くことにより、天心像が明らかになると語り、家族としては書きにくいことでもあるが、あえて隠さず語っている。以下が内容である。

天心に愛着を感じてしまった初子は、諦めを仏教に求め、普段に読経や写経に精進していたが、その甲斐なくし、ついに越すべからざる垣を越えてしまった。

(中略) 天心の義母静子(〜一八八九)のごときは、一見して初子の巧まぬ態度に魅了され、心から天心の新生活に賛意を表わしていたようであった。¹³⁾

勘右衛門が、明治二十九年(一八九六)七月九日に享年七七歳で死去した時に、フェノロサ¹⁴⁾(Ernest F. Fenolosa 一八五三〜一九〇八)とメアリー夫人が、弔問を兼ねて中根岸の岡倉家を訪ねた。その時の印象をメアリーが日記に書きとめている。

私たちは勘右衛門未亡人、岡倉夫人、長男、弟にあった。天心の弟は英語を話し、それもすばらしく上手であった。天心は散歩に出て留守。皆大変丁重で私たちの来訪を喜んでいる様子だった。しかし、何か得体の知れぬ悲哀感、抑圧感がみなぎっていた。岡倉夫人は全く消沈し絶望的表情であった。決して幸福な人々には思われない。⁽¹⁵⁾

メアリー夫人の鋭い感受性で、岡倉家の様子を捉えている。当時は、天心と星崎初子との問題が妻元子との間に不協和音が漂っていた時期であったと考えられる。

ようするに、天心にとっては、仕事としては、充実している時期であるが、葛藤の時期である。

明治二十九年四月二〇日に、古社寺保存会が設置され、五月七日には保存会の委員に任命される(内閣⁽¹⁶⁾)。

しかし、東京美術学校には、黒田清輝(一八六六〜一九二四)により、西洋画科の授業が始まる。天心が美術学校を追われる一年一〇ヶ月前である。

「終焉の年・大正二年」の項目で、葬儀と分骨に関する話の中で、一雄が母元子とともに五浦の土饅頭の墓を訪れている。母の元子は、天心とかかわりを持った星崎初子について、以下のように語ったと、一雄は伝えている。

小さな骨壺を元子は土饅頭に納め終わると懐ろから角ばった紙包みを取り出して、「この人も不運な人でした。ここに葬ってあげることが、本当に所をえたものでしょう」

真面目な態度で、天心の枯骨とともに、それを土饅頭の下に埋めた。⁽¹⁷⁾

一雄も、星崎初子を母以外に心を許した唯一の父・天心の女性として、最後には、認めていたのである。

一雄は私的な出来事と、家庭内での様子などを語り、人間天心を表現しようとしている。現在の天心研究においても重要な位置にある本である。

【参考】

【星崎初子】(一八六〇〜一九三二)

本姓杉山、兵庫県生。いったん星崎家にの養女となったのち九鬼隆一と結婚、その後、離婚して星崎姓にもどる。哲学者九鬼周三の母。明治二十年ころから三十二年にかけて天心と、恋愛関係におちいり、天心が東京美術学校長の座を追われた明治三十一年(一八九八)の美校(東京美術学校)騒動において、それがスキャンダルとして利用された。

『岡倉天心をめぐる人びと』岡倉一雄著 平凡社 平成一〇年 二〇四頁

一九〇二（明治三五）年に九鬼家の側からそこ（東京府立松沢病院）へ入院させられ、一九三一（昭和六）年、七十二歳でそこを退院した直後に病死している。

『岡倉天心全集』一卷「わが岡倉天心」木下順二著 平凡社 一九八〇年 四六一頁
（ ）内は加筆。

第二節 孫・岡倉古志郎

1 復刻版を刊行

『父天心』の復刻版の『父岡倉天心』（昭和四六年）の最後の項に孫の岡倉古志郎（一九二〇〜二〇〇一）が「祖父天心と一雄のこども」という題で執筆している。

他に古志郎著の『祖父岡倉天心』（一九九八）と、復刻版として『岡倉天心をめぐる人びと』（岡倉一雄著）を古志郎の解説付きで平成一〇年に刊行している。この本は『父天心を繞る人々』の刊行から五五年後になる。平成の時代に入り、古志郎の並々ならぬ決意と努力の賜物にほかならない。

戦前の軍部が発信力のある天心を利用して「アジアは一つ」のこぼを使い、戦後も国粹主義者としてのレッテルを貼られたままで、天心像が解明されることはなかった。

孫の古志郎は天心像を明らかにするために改めて復刻版を刊行したのではないだろうか。

古志郎が2才の時に祖父天心が没しているので、記憶がないことを先に述べながら、父・一雄の意思を継ぎ、初版である、『父天心』（昭和一四年 聖文閣）の復刻版の刊行に漕ぎ着けている。三四年間、絶版になっていたこの本が再び目の目を見た理由は、日本の名著に『岡倉天心』三九巻（中央公論社 昭和四五年）の刊行がきっかけになったことを語り、古志郎はその責任編集者である色川大吉（一九二五〜）と前掲書のための対談をしている。それが、『祖父岡倉天心』の第四部「人間天心の肖像」である。

色川大吉は天心のことを「矛盾のかたまり」と表現しているが、孫の古志郎は本質をいつていると評価している。

三冊の英文書（『東洋の理想』・『日本の覚醒』・『茶の本』）を刊行しているが、「東洋の覚醒」のノートを発見したのは古志郎である。その結果、原本と訳本の刊行にこぎつけている。それも『岡倉天心全集』一卷（一五四頁〜一七〇頁）に収められている。

息子一雄は、戦前の昭和一八年（一九四三）に没しているので、プリヤンバダ・デーヴイー・バネルジー夫人（二八七〜一九三五）との手紙のやり取りを知ることにはなかった。一雄は九鬼隆一（一八五二〜一九三一）の妻と天心との道ならぬ恋を書き残したが、古志郎は、バネルジー夫人との手紙をすべて公開している。

2 プリヤンバダ夫人（一八七〜一九三五）と天心との書簡を公開

古志郎は昭和三二年（一九五七）にインド旅行をしている。その時に知ることになったことは、タゴール国際学園（ベンガル州シャンティニケタン所在の国立ヴィシュヴァ・バラティー大学）の季刊誌に、一九五五年秋季号に掲載された一九通の天心の書簡の概要が紹介されていたことである。古志郎が、

タゴール記念館（翁の書斎や天心からの贈り物も保存）や、大学、図書館を見学した際にキュレーターK・ロイ氏から渡されたのが、「インドの友へ」の掲載された「ヴィシュヴァ・バラティー・クオターリー」誌であった。（中略）その夜、ベッドで一気にこれを読んだ私の感慨たるや、古風な表現だが、筆舌に尽くしがたいものであった。⁽²⁾

天心の書間を受け取ったのはプリヤンバダ・デーヴィー・バネルジー夫人（一八七一～一九三五）である。古志郎は、「天心の最晩年の苦悩と憂愁に満ちた心境と、そこからの脱出と安らぎを求道者のようにこのプラトニック・ラヴの相手に求める赤裸々な姿に看取できる貴重な生資料」⁽³⁾であり、その手紙は、伯母にあたるインディラ・デーヴィー・チョウドラニー夫人が保管していた。「一九五五年、西ベンガル州ジャンチュケタンのヴィシュバラーター大学の季刊誌（"Vista Baharati Quarterly" Vol. No.2, 1955）に「ある友への手紙」と題して差出人の岡倉天心の名を伏せたまま、はじめて公表していた。⁽⁴⁾」
インド旅行中にその季刊紙を差し出されたのである。この手紙は古志郎により、その書簡は日本で公開された。

「赤裸々な天心告白」として発表して、古志郎が「ラブレター」と書いている。

この手紙を始めて読んだ日本人は西ベンガル州ジャンチュケタンのヴィシュバラーティー大学の客員教授の春日井慎也師（愛知女子短大教授、当時）である。⁽⁵⁾
以上を古志郎が述べている。

*
その二〇年後、昭和五二年（一九七七）、平凡社版『岡倉天心全集』の出版準備中に、天心の実弟由三郎が保管していた天心の遺品（没後長男の士郎に、さらにその死後は同じく孫の俊彦が保管）が発見され、さらにその中から何とプリヤンバダから天心宛の書簡一三通が発見されるにいたった⁽⁶⁾。

プリヤンバダ夫人からの書簡も公開されることなり、『岡倉天心全集』に大岡信⁽⁷⁾（一九三二）編訳で載り、天心研究がかなり立体化された。

一九一二年一月一二日から一九一三年八月二二日までの約一〇ヶ月間のできごとである⁽⁸⁾。

天心の逝去が一九一三年九月二日であるので、天心の最晩年の心の中が明らかにされて

いる。一九一三年八月十一日にプリヤムバダ・デーヴィー・バネルジー夫人に書いた手紙は天心が亡くなる約二〇日前である。その内容は、まさに心を許した大切な女性であり、気遣いがある手紙である。最後の天心の書簡は遺品の目録であり、荷物の税金まで送っている、細やかな天心像が浮かび上がる。

絶筆となった手紙を含めた一九通は天心の死後、六〇余年が経ち、古志郎によりインドから持ち帰られ、昭和四四年（一九七三）に公開された。

プリヤンバダ夫人からの書簡は昭和五二年（一九七七）に発見され、当のバネルジー夫人の死後二二年が経っていた。天心死後六四年が経つことになる。

息子一雄が亡くなってから、バネルジー夫人との書簡が発見されたので、一雄はこの書簡の存在を知ることではなく、『父天心』を執筆して、特に星崎初子（九鬼隆一の妻）をクロージアップさせているが、孫の古志郎が父・一雄の本の解説として「祖父天心と父一雄のこども」として文章を補っている。

この書簡が公開されたことにより、天心の詩的文章（手紙）と詩が、天心の素直な感情が浮き彫りになった。古志郎の努力と決断の結果である。

3 天心の息子・三郎（一八九五〜一九三七）との書簡を公開

天心の次男の和田三郎の存在を世に明らかにしたことは、人間天心を研究する上で、重要である。『岡倉天心全集』の別巻に、三郎の写真も掲載している。

天心には、妻・元子（一八六五〜一九二二）との間に長男一雄、妹蝶子（一八七〇〜一九四三）がいるが、天心の異母姪（八杉貞一八六九〜一九一五）との間に三郎という息子がいる。天心の陰の部分であるが、三郎の人生の責任を天心なりに果たしている。古志郎は天心と三郎両者の書簡を公開している。

八月十七日 和田三郎あての封書で、「渡米のため、一カ年不在であること」⁽²²⁾ 「心身撰取」とあり、よく食べ、勉学に励むように、また、宿泊は例のごとく「Museum of Fine arts Boston, Mass. U.S.A.」⁽²³⁾ ひめを伝えている。

これは、天心が、手紙を求めているのだろう。この手紙は、一九二二年（大正一）八月十七日であるので、三郎は十七歳である。

由三郎宛に託した遺言状がある。一九二二年（明治四十五）六月一日に Will として遺言状を同封している。三郎のことが書かれており、その中身は以下である。

（中封筒）【表】遺産処分に付

【裏】明治四五年六月一日 五浦にて 岡倉覚三（封印） 上部は「固」の上に封

蠟跡、中部は赤封蠟のみ、下部は「緘」の上に封蠟跡、中部の封蠟には、

「覚三」の押印があり、上部・下部も同様だったと思われる。

⑨
遺産処分方法

余の遺産ハ土地建物及所蔵藝術品の外数千円の金員ニ過キス

(中略)

- 一 第五百銀行定期預金五千円の内参千円ハ和田三郎ニ交付スヘシ(尤モ同人名義ニ時機ヲ見計ヒ余の在生中書換ル積ナリ) 秩父地面モ同人ニ交付スヘシ
 - 一 和田三郎へ交付の金員ヲ控除シタル残額現金ハ総テモト子ニ付与ス
- (中略)

此決定ニ付遺産の間ニ紛議アルヘカラス

五浦にて

明治四十五年六月一日

岡倉寛三⁽²³⁾ 印

書簡の公開によって、天心研究の解明度が高くなった。

第三節 弟・由三郎(一八六八〜一九三六)

1 プリヤンバダ夫人からの書簡を保管

由三郎はNHKラジオで初めて英語講座を担当した人である。『新英和大辞典』を編集している。

プリヤムバダ・デーヴィー・バネルジー夫人からの手紙二三通を保管していたのも由三郎である。このことから、天心と由三郎の兄弟は、非常に強い絆で結ばれている。天心の秘密を守秘し、生涯、天心の力になっている。プリヤンバダの天心宛の書簡は、由三郎に預けられたまま、「(中略)孫に当たる俊彦氏の所蔵する遺品の中から、天心の遺言状その他と共に天心宛のプリヤンバダの書簡が発見されるというぎょうこう僥倖ごうていがあった。」⁽³⁰⁾と古志郎は書いている。

2 国内外での広報活動

由三郎は英文学者であるので、天心の英文著作を早いうちに見るだけでなく、米国では、新聞投稿、寄稿をしている。国内では、『日本の目覚め』は、抄訳を著し、『日本美術誌』に論説を寄稿している。また、その理由を述べている。以下は、岡本佳子氏の論文である。

由三郎がこの文集を寄稿した動機は、次のようなものであった。すなわち、日露戦争当時、欧米世論を日本に有利な導引するための官費によって英米に派遣され

た金子堅太郎（一八五三〜一九四二）と末松讓澄（一八五五〜一九二〇）の活躍ぶりが、「今や、末松、金子の両氏英米の二邦にありて、陰に陽に祖国の爲めに尽瘁せらると聞く」ほど本国でもよく知られていたなかで、天心のような「無名の士」が「西洋文明中心地にありて堂々呼として自国を吹聴し、賛美し、感嘆」したことを訴えんがためであった。⁽³¹⁾

弟・由三郎は、兄・覺三（天心）を十二分に支援し、いち早く、日本に『日本の目覚め』の抄訳を紹介している。

3 日本語訳『茶の本』作成に協力

『茶の本』（昭和四年）を日本の社会に初めて紹介したのが、岡倉由三郎の高弟・村岡博（一八九四〜一九八一 英文学者）である。『THE BOOK OF TEA』を米国で出版してから二三年後である。

大正十一年には日本美術院から『天心全集』（甲之一、甲之二、乙）を非買品として出版している。

由三郎は東京師範学校教授として教鞭をとりながら、弟子五〜六人で洋々塾という同人会を作っている。村岡博は洋々塾の会員であり、「塾の雑誌『亡羊』に、昭和二年（一九二七）四月の創刊号から前後十号にわたって掲載し、「『茶の本』村岡博訳 九頁 岩波書店・一九八四年）それを『茶の本』として出版した。

日本語訳の『茶の本』が完成したことは、由三郎の側面からの援助によるものであろう。

第四節 曾孫・岡倉登志^{たかし}（一九四五〜）氏

1 岡倉天心研究会「鵬」の会を創立

父古志郎の意志をついで、天心研究を行なっている。古志郎の願いは、天心研究会を発足させることであった。平成十三年（二〇〇一）の四月に病没している。その三カ月後、

岡倉登志氏は、天心忌に「岡倉天心妙高原町顕彰会」で講演を行い、滞在中に英文学者の池田久代氏らとの話し合いの中で、研究会を発足する。

岡倉登志氏は、会の活動するにあたり、父・古志郎の考えに添うように、以下の二点に賛同する方を会員にして、活動している。

- 一、国内・国際的に活動した天心の人物像をトータルにとらえること。美術・宗教・歴史・音楽・建築などの領域、インド・アメリカ・ヨーロッパ・中国・朝鮮などの地域の研究者。

二、天心を「矛盾の塊」とみなす視点は大切であるが、国際人としての天心理解や天心の平和感・宗教観を正確に把握するためには、大東亜共栄圏、「アジアの開放者日本」という狭い国粋主義的アジア観につながる「アジアは一つなり」を持ち出す立場」と一線を画する。すなわち、タゴール、ロマン・ロラン、ヘルマン・ヘッセらの平和思想や、「東西文化の融合」でのポストンやニューヨークの文化人との関係などを、より鮮明に実証化する立場に共鳴する。⁽³³⁾

『鵬』創刊号 岡倉天心研究会「鵬の会」ヌーベル社 二〇〇四年 五頁

これは、登志氏の父・古志郎の意志を継いでいるものである。現在、『鵬』^{おわとり}は六号まで刊行している。岡倉登志氏『曾孫岡倉天心の実像』（宮帯出版社二〇一三年）を出版し、その中で、『茶の本』の訳注や解説本でも、出典研究が不十分であり、共同研究による『茶の本事典』のようなものが刊行されていないことは残念である。⁽³⁴⁾（前掲書三五六頁）と述べている。

第五節 日本美術院の人たち

1 再興日本美術院の設立

大正三年（一九一四）、九月二日、岡倉天心の一周忌に再興日本美術院を立ち上げる。二〇一五年には一〇〇年目を迎えた。再興日本美術院の会員は、横山大観、下村観山、木村武山、今村紫紅、安田幸彦、平櫛田中などの旧同人の他に、画家以外に斉藤隆三らがいる。日本画以外にも洋画部、彫刻部も加えている。同時に、天心零社を建て、旧日本日美術院故人も合祀する。横山大観の並々ならぬ努力であろう。大正一一年九月二日には、日本美術院創立二五周年記念展を開催している。

2 東京美術学校内の天心像

昭和六年（一九三一）には、東京美術学校の校庭に《岡倉天心像》（平櫛田中制作）が建てられました。

『大観画談』によれば以下のごとく、日本美術院の会員の思いを形にしている。

昭和六年十二月には、東京美術学校の校庭に、岡倉先生の銅像が立てられました。（中略）あの銅像について当時美術学校校長であった正木直彦さんが、あそこに建てたいというお考えらしかったので私に相談されました。私も大賛成でしたからすべてのことを率先してやりました。院の平櫛田中さんが、岡倉先生の像はぜひ自分にくらせてもらいたいという希望だったのでやってみましたが、あれには「Asia is One」がほってあります。まずい字ですが、私が書いたものです。

先生の像の雨ざらしになるのはどうも感服できません、それで、屋根のある堂へ入られてもらいたいというのが私の主張でした。⁽³⁵⁾

現在の東京芸術大学の中庭に建てられた六角堂の中の天心像は、威風堂々として、天心がその場にいるように感じる作品である。まさに天心が、彼らに指導した作者（画家または彫刻家）と鑑賞者との一体感を感じる天心像である。

横山大観（日本画家）も平櫛田中（木彫家）も長寿であった為、天心の功績が長く伝えられ、天心の名と業績が、世の中に広く伝わったことも一因している。

横山大観は、「親にもまさるほどの愛育を受けた岡倉先生」『大観画談』一〇六頁）というほどの子弟関係が深いことが、天心の業績を後世に伝え続けてきている。



二〇一五年九月六日撮影

東京美術学校校庭（現東京藝術大学）

横浜美術館での「横山大観展」（二〇一三年）でも、天心ブロンズ像が置かれていた。小平市平櫛彫刻^{でんちゅう}田中 美術館での平櫛田中作の天心のブロンズ像は、存在感があり、後世に長く引き継がれる所以にもなるのだろう。田中の天心像の作品は多い。

明治一〇〇年記念講演で、「岡倉天心を語る」という演題で平櫛田中が次のように語っている。

岡倉先生いわく、「諸君らは売れるようなものをお造りになるから売れない。売れないものをお造りなさい。必ず売れます。」とおっしゃった。これは私の耳にタコで忘れることができません。「えらいことをいう先生だな。」それがはじめてです。（中略）まず「活人箭」だ。「あれは弓矢を持たしている、なんで弓矢を持たしたか」とおっしゃいました。これが最初の問題でした。「弓矢はいらぬ。弓矢を持たしたつて、弓矢はいつまでもあるもんじゃないだ、これだけでよろしい！」⁽³⁶⁾

二年後にその二度目の作品を見て、「平櫛さん、よくできましたよ」

(前掲書一七八頁)と言われ、涙がでたと話しております。平櫛は天心の直接の弟子ではなかったが、生涯、師と仰ぎ、《五浦釣り人》、《鶴^{かくし}筆》などを制作している。大観が中心となつて東京美術学校にある《岡倉天心先生像》は象徴的である。

天心は、平櫛にとつても生涯の師である。

天心像は天心を印象つける役割を果たしているのも事実であろう。

3 『天心全集』(和綴全三巻)の刊行

日本美術院二五周年記念として、大正一二年に初めて『天心全集』が刊行されたことは、非売品と云えども、その後の天心研究のきっかけになった。その責任者が斉藤隆三(一八七五―一九六一)である。文学博士であり、再興日本美術院の同人である。

昭和三五年には、『岡倉天心』(吉川弘文館)も刊行している。はしがきに、天心を語るのは「群盲象を撫^ぶす」という言葉で、天心を説いている。

門下生と門外生とを問わず各方面に亘^{わた}つての多数で、それら接近したほとんどの人々は何れもそれぞれに天心の偉大さを説くが、言うところは銘々に異なつたものであつて同一ではない。何れはその分に応じて、得たところ、儲けたところを語るものであつて、天心の全体ないし真容は知り得なかつたのである。(中略)横山大観は天心に対し群を抜いて傾倒尊敬の限りを尽くし、絶対的の崇拜をさえ捧げたものであつたことは自他ともに允^{ゆる}したところで、その克^こ己を成しえたのも、一に天心から請けたものに寄るともしている⁽³⁷⁾。

それぞれの日本美術院の同人は天心への尊敬の念があるのだろう。

『天心全集』の英文集は弟の由三郎が担当して、洋々塾(由三郎主幹)の福原麟太郎が抄訳している。

この年の十一月五日に東京美術学校で、盛大な追悼会が行なわれたことや、ポストン市でもガードナー夫人主催で儀式の哀悼会が行なわれたも綴られている。天心と親しく、親身になつて相談に応じていた浜尾新(一八四九―一九二五)の追悼文も掲載されている。全集としては、完璧でないかもしれないが、天心を偲ぶ本にふさわしい。

この『天心全集』がきっかけになり、昭和初期には、岡倉天心に関する本が刊行されている。この『天心全集』を基礎にして、次の「全集」刊行への道筋をつけた。岡倉天心研究の貴重な全集本である。

まとめ

息子・一雄と孫・古志郎が天心の日常生活での姿を、丁寧に調べ挙げたその資料が、現在の天心研究の基礎になっていることは確実である。その理由は、家庭での第三者が知り得ない天心に起こった出来事、日常の様子などを綴っているからである。そのことは、天心の人物像を浮き彫りにしている。普段の天心の行いから、何を考え、どのような性格であるかが、確認できる。

一雄の間違いや、記憶違いもあるが、大きな意味では問題はない。

一雄も古志郎も天心の偉大さを理解し、尊敬の念を持っているからこそ、本として、纏め上げることができたのだろう。天心が道半ばにして五〇歳という若さで没したことに、家族としては無念さを感じていただろう。

結論として、息子、孫が書いた本の意義と功績は大きい。

また、弟・由三郎の兄（天心）への献身的な協力は、控えめであるが、だれよりも弟（由三郎）を頼りにしていたと、書簡から伝わってくるものがある。仕事上の援助や私的な手助けをしている。なおかつ、天心の業績を広く世間に伝えている。由三郎の兄・覚三（天心）への協力がなければ、『茶の本』（村岡博訳）の日本語訳もいつになったか、わからなかったであろう。それを自らが、「洋々塾」という勉強会を立ち上げ、そこから村岡博訳の『茶の本』が完成している。

また、横山大観と同様、天心を尊敬し、天心から受けた助言を一生守り続けた一人が平櫛田中（でんちゅう）であろう。

今年（二〇一七）は、再興日本美術院の「第一〇〇回院展」が開かれた。その絵画は、変化に富み、現在もさまざまな人が拘つての結果であろうと考察する。

天心の家族、横山大観、平櫛田中、由三郎たちは、世間の人々の評価が、まだ不足であると思っていたのであろう。それぞれの立場で、天心を後世に伝えようとしていることが確認できた。

注

- (1) 岡倉一雄（二八八―一九四三）元朝日新聞記者 印度貿易商会経営
- (2) 岡倉古志郎（一九二二―二〇〇一）同志社大、大阪外語大、中央大、大東文化大各教授を歴任『非同盟研究序説』『新植民地主義』『死の商人』
- (3) 岡倉登志（一九四五―）大東文化大学名誉教授 『二つの黒人帝国』『曾孫岡倉天心』『世界史の中の日本 岡倉天心とその時代』（明石書店 二〇〇六）、また、共著の研究本『岡倉天心 思想と行動』は大東文化大学東洋研究所・岡倉天心研究室のメンバーが編集している。『エチオピアの歴史』『岡倉天心 思想と行動』著書『明治精神史』他多数
- (4) 岡倉由三郎（二八六―一九三六）

天心の弟。東京高等師範学校教授。英語教育の先達者として知られる。

(5) 横山大観(一八六八〜一九五八)

明治元年九月十八日〜昭和三十三年二月二十六日

茨城生まれ。画家。明治二十二年(一八八九年)東京美術学校に入学、二十六年卒業。二十九年同校助教授。三十一年学内の対立により、岡倉天心と共に職を辞し、日本美術院の設立に参画。三十六年〜三十八年にインド、アメリカ、ヨーロッパを歴訪。大正三年下村寒山等と日本美術院を再興し、以降中心的存在として活躍した。昭和六年帝室技芸員、十年帝国美術院会員、十二年文化勲章を受章。代表作に「屈原」「生々流転」「海山十題」等がある。

(6) 平櫛 田中(一八七二〜一九七九) 五浦釣人、岡倉天心胸像、鶴肇(かくしゅう)

などの天心像の作品がある。

(7) 『岡倉天心全集』大正十一年、日本美術より刊行する。(非売品)

(8) 『大観画談』横山大観 東出版一九九九(一一六頁)

(9) 『大観画談』横山大観 東出版一九九九(一二四〜一二五頁)

(10) 村岡博(一八九五〜一九四六) 倉由三郎主催の洋々塾の会員。

『茶の本』の最初の訳者。洋々塾で、『茶の本』の訳を一〇回の講座で発表し、その後、昭和四年に『茶の本』として岩波書店より、刊行する。

(11) 清見睦郎(一八九六年〜一九九〇) 東京美術学校中退。『岡倉天心』平凡社一九三四年を刊行する。

『先覚者岡倉天心』アトリエ社一九四二年、『天心岡倉覚三』筑摩書房一九四五年等、最初の天心伝を書く。

(12) 星崎初子(一八六〇〜一九三一) 九鬼隆一と結婚。 哲学者九鬼周三の母。

『九鬼周三全集』『粹の構造』がある。

(13) 『父岡倉天心』岡倉一雄著 中央公論社 昭和四六年 一二七頁

(14) フェノロサ (Ernest F. Fenolosa 1853-1908) 明治十一年に(一八七六)、東京

大学の哲学・政治学の講師として招かれ、来日する。東京美術学校の創設に貢献する。明治二十九年(一八九六)に新しい妻メアリーを連れ、ヨーロッパ経由で日本に到着(長崎)。七月一〇日には帝国ホテルに宿泊(住居探し、観劇、旧友との再会に過す。

(15) 『フェノロサ下』山口静一著 三省堂 一九八一 九四頁

(16) 『岡倉天心全集』別巻 年譜の四〇一頁

(17) 『父岡倉天心』二六二頁

(18) 色川大吉(一九二五〜) 千葉県佐原生まれ。東京大学文学部国史学科卒業。東京経済大学名誉教授、日本の名著『岡倉天心』三九(中央公論社 一九四五年)の編集責任者、『明治精神史』『近代国家の出発』『日本の歴史』第二二巻)

(19) 『岡倉天心全集』一巻 岡倉天心著 平凡社 一九八〇年 一五四頁〜一七〇頁

- (20) プリヤンバダ・デーヴィー・バネルジー夫人(一八七二〜一九三五) ラビンドラ ナースー・タゴールの縁戚関係にある夫人。詩人。
- (21) 九鬼隆一(二八五二〜一九三二) 男爵 丹波綾部藩家老の養子。慶応義塾で福沢諭吉に学ぶ。文部省に入省し、米国全権特命行使。帝国博物館の創設につくし、二二二年に初代総長となる。古社寺保存会会長。明治の美術行政に貢献した。
- (22) 『祖父岡倉天心』岡倉古志郎著 中央公論美術出版社 平成一一年 八四〜八五頁抜粋
- (23) 前掲書 八四頁
- (24) 『父岡倉天心』岡倉一雄著 中央公論社 昭和四六年 二六八頁
- (25) 『祖父岡倉天心』岡倉古志郎著 中央公論美術出版社 平成一一年 一五頁
- (26) 前掲書 八五頁
- (27) 大岡信(一九三一〜)『岡倉天心全集』の書簡(プリヤンバダ・デーヴィー・バネルジー夫人の書簡などを日本語に訳す)。
- (28) 『岡倉天心全集』七巻 岡倉天心著 平凡社 一九八〇年 一七六頁
- (29) 『岡倉天心全集』七巻 岡倉天心著 平凡社 一九八〇年 一四九頁〜一五〇頁
- (30) 『祖父岡倉天心』岡倉古志郎著 中央公論美術出版社 平成一一年 五七頁
- (31) 岡本佳子氏『国際大学基督大学 学報3-A』「日露戦争期英米ジャーナリズムに見る岡倉覚三一行——日本美術院欧米展新聞」紀事切抜帖について——」国際基督教大学アジア文化研究所 二〇〇五年 三一頁
- (32) 『茶の本』村岡博訳 九頁 岩波書店・一九八四年
- (33) 『鵬』創刊号 岡倉天心研究会「鵬の会」ヌーベル社 二〇〇四年 五頁
- (34) 『鵬』創刊号 岡倉天心研究会「鵬の会」ヌーベル社 二〇〇四年 三五六頁
- (35) 『大観画壇』日本図書センター 一九九九年 一一六頁
- (36) 『岡倉天心と日本彫刻会』平櫛田中美術館 二〇一〇年一七八頁
- (37) 『岡倉天心』齊藤隆三著 はしがき(一頁〜二頁)

第三章 日本美術院の創設

はじめに

天心が明治三十一年に、日本美術院を立ち上げた理由、並びに、日本美術院の目的と意義を検証する。

第一節 日本美術院創設までの天心

1 日本美術院を創設する前の約一年間
以下の年譜を参照すると、順調な天心の仕事ぶりが垣間見られる。但し、私生活においては、予断を許さぬ事態に陥っている。
以下、明治三〇年から三十一年までの『岡倉天心全集別巻 平凡社 一九八〇年』¹（平凡社 一九八〇年）の年譜から天心の行動を検証する。

明治三〇年（一八九七）

二月五日

中尊寺金色堂などの修繕のために、新納忠之介²（一八六五～一九五四）、六角紫水³（一八六七～一九五〇）、木村武山（一八七六～一九四二）らを担当させ、派遣させている。

三月十六日

第5回パリ万国博覧会（明治三十三年～一九〇〇年）における出品に関する事項の調査を依頼される。

三月二十七日

京都・奈良へ出張を命じられる。（宮内省）

四月五日

「第二回絵画共進会」⁴の褒章授与式に出席し、審査結果を報告するなど、あらたに京都にて、「第一回全国絵画共進会」を開催し、審査委員 長も務め、審査規則も定めている。

六月五日

二級俸を下賜される。（文部省）

六月一〇日

古社寺保存法が公布される。

六月二十八日

勲六等に叙せられ、瑞宝章を賜る。

八月一日

「美術教育の施設について」『反省雑誌』（第七号 八号）に掲載する。

一〇月二五日

日本絵画協会第三回絵画共進会を開催（上野公園竹の台、一二月七日まで）

明治三二（一八九八）年

一月一日 「明治三〇年の美術界」を『太陽』第四卷第一号に掲載する。

二月二日 帝国博物館監査委員に命ぜられる（宮内省）

三月一六日 九鬼隆一⁽⁵⁾（一八五二〜一九三二）、帝国博物館総長を更迭される。

三月一八日 日本絵画協会第四回絵画共進会を開催（上野公園竹の台、五月一日まで）

『岡倉天心全集』別巻 平凡社一九八一年 四〇三〜四〇七頁
明治三一（一八九八）年三月、人生の絶頂期に明暗を分けることになる。

この年は天心の公の地位が揺るがされ、大きな渦となり、関わった多くの人の人生が左右されている。文部大臣が、短期間で変わった時期である。

明治三〇年（一八九七）の一月六日から翌年一月二日まで、文部大臣が浜尾新⁽⁶⁾（一八四九〜一九二五）であり、天心には理解があったが、明治三二年（一八九八）一月二日から四月三〇日まで、西園寺公望⁽⁷⁾（一八四九〜一九四〇）に替った。西園寺は、フランスのソルボンヌ大学留学し、親欧米派である。このことは、天心が推進してきた日本画中心の東京美術学校（以下美校と表記する）では、文部大臣の同意が得られない状況になったのであろう。

山口静一氏⁽⁸⁾は、「匿名の怪文書を問題として政府が岡倉非職の処分に踏み切ったことは美術行政を専門家指導型から事務官僚統制型に切り替えて行こうとする第三次伊藤内閣―文相西園寺公望―の方針であったということが出来る」『フェノロサ』下二三〇頁と述べている。二つ目は、明治三〇年代の時代背景もある。世論に欧米主義の勢いがでてきている。

洋画の勢力も強くなり、すでに、西洋画の黒田清輝⁽⁹⁾（一八六六〜一九二四）が東京美術学校で、力をつけてきていた。この潮流にのり、天心排斥論がでたのであろう。

2 怪文書

三月二十一日、「築地警醒会」の名で天心を中傷した怪文書が斯界の人々に郵送される。以下は怪文書の抜粋である。

謹ンデ啓ス。近時美術上ノ傾向頗ル憂ウベキモノ尠ナカラズ（中略）

其校長タル岡倉覚三ナルモノハ一種奇怪ナル精神遺傳病ヲ有シ常ニハ快活ナル態度ヲ以テ人ニ接シ又巧ミニ虚飾ヲ飾ルモ時アリテ精神ノ異状ノ来スニ及ビテハ非常ナル残忍ノ性ヲ顯シ又強烈ナル獸欲ヲ発シ苛虐ヲ親属知友に及ボシ人ノ妻女ヲ強姦シ甚ダシキハ其の継母ニ通ジテ己レガ實父ヲ疎外シ怨恨不瞑ノ死ヲ致サシムルニ至ル（中略）此ノ如キ不良ノ人物ヲ美術教育ノ要任ニ当タラシメ幾萬の国財ヲ費シテ有為ノ青年ヲシテ盡ク魔道ニ陥ラシム苟モ斯道を志シ國家ヲ思フ者ノ袖手傍觀スベキ事柄ニアラザルナリ況ヤ當路ノ人はレガ改善ノ策ヲ講ゼズ之レガ処分怠ル於テオヤ有志ノ士幸ニ余等ト憂て共ニシ其矯正ヲ冀圖セラレンコトヲ某々等懇願

明治三十一年三月

『岡倉天心全集』別巻 平凡社 一九八一年 一六六〜一六七頁

怪文書の当人と言われている「築地警醒会」と名のる人物は福地復一（一八六二〜一九〇九）と言われ、東京美術学校（以下美校と表記する）図案科の教授で、天心は普段から信用していて、私的な生活も天心との垣根がなかった。

以前には、菱田春草（一八七四〜一九一一）の卒業制作作品「寡婦と孤児」（明治二七）に関しても、橋本雅邦（一八八五〜一九〇八）教頭は絶賛し、福地副一は酷評し、確執もあった。

天心が中国視察中に、福地副一が横暴過ぎ、帰国後に転任させようとした人事を恨んで、怪文書作製へと行動をおこしたのであろう。

3 寡婦と孤児

「寡婦と孤児」とは、明治二十七年（一八九四）の菱田春草画 卒業作品である。夫を失った武士の妻が子供を抱いている絵であるが日清戦争（一八九四〜一八九五）の直後で夫を亡くした遺族の悲しみを描いたものである。

天心も絶賛していて、この画は、血を流す戦争は人を路頭に惑わせると戦争反対を暗に示していて、橋本雅邦と共に同意見であったのであろう。

元図案科主任教授であった福地復一が、突然に怪文書を関係者（新聞社・文部省・美校学生の父兄など）に送りつけたことが、決定的な原因となり、天心が博物館を依願免官したり、美校を非職させられている。天心が当時置かれていた立場や女性問題（星崎初子一八六〇〜一九三一）が絡み合って、天心の立場は追い詰められていた。

また、天心は星崎初子との恋愛や家庭内事情などの悩み、すさんだ生活を送る。妻の元子（一八六五〜一九二二）は長男の一雄を連れて、本郷に別居していたこともあった。

福地副一は、怪文書の当人と言われ、星崎初子の件も熟知して、天心排斥論を展開して、策略を世に広く知らしめた。福地副一は、明治二九年に辞職しているが、辞職後は『美術評論』や『読売新聞』紙上などで天心と美校の批判を繰り返していた。

二一日即ち読売新聞のその記事ありし当日『築地警星会』の名を持って印刷したる
岡倉氏攻撃文を其界の人々へ郵送せられたり

『父岡倉天心』岡倉一雄著 中央公論社 昭和四六年 一三五頁

福地復一の怪文書は決定的に天心には不利になったが、それ以前に九鬼隆一と宮内大臣田中光頭との確執と、星崎初子の問題が、九鬼隆一（一八五二〜一九三一）の行動に影響したのであろう。

4 洋画の台頭

九鬼隆一（以下九鬼と表記）とは、保身の為、福地腹一に同調もしていたが、明治三十一年（一八九八）三月十六日に、帝国国立博物館総長九鬼が更迭されている。それは九鬼隆一が、宮内大臣に就任した田中光顕（一八四三〜一九三九）とそりが合わず、第5回パリ万国博覧会の臨時博覧会副総裁の椅子も危うくなっていたのを恐れ、天心を突き放したことが大きな原因であった。

頃日新聞は報じて曰く九鬼臨時博物館副総裁は其職を辞し曾禰司法大臣代りてこれを兼ね而して氏はまた尋で博物館をも辞せんとすと又報じて曰く九鬼氏と因縁最も浅からざる岡倉美術学校長も亦辞職の意ありと果して真相を伝へしものや否やは吾人の得て知る所にあらずといへども九鬼氏の博覧会副総裁の辞職は遂に事実となり来りり自余のことは未だ確実報せずといへども傳ら世の趨勢を察するに或はまた事実となりて現れんとするが如し

『父岡倉天心』岡倉一雄著 中央公論社 昭和四六年 一二九頁

今までの九鬼と天心の関係が伝統を重んじ、同じ方向を目指して一心同体のように仕事をしてきたが、一転して、ここから九鬼は保身へと向かうことになる。福地復一は九鬼非難をするのではなく、天心非難を起こしている。

二人目に大村 西崖⁽¹⁴⁾（一八六八〜一九二七）がいる。美校の彫刻科を明治二六年に卒業し、その後、教授となり、東洋美術史を講じていた。いわゆる天心の直弟子である。二九年九月に美校を辞職している。

宴席で雅邦に論難を試みた大村を天心が殴ったことにある。（中略）美校への教授法等に対する芸術理論上の批判もくすぶっていた。辞職後は美術評論や読売新聞紙上などで岡倉及び美校批判を続けた。⁽¹⁵⁾

意気が合わなかった。

三人目は関 如来⁽¹⁶⁾（一八六六〜一九三八）である。美校騒動の動静を克明に報道した。彼は読売新聞の記者であり、帝国博物館の嘱託でもあった。内容は詳細であったであろう。新聞報道が美校にとっても、帝国博物館にとっても、それらを管轄する特に文部省にとっても決定的な理由になったのではなからうか。

「明治三十一年の三月、そのころ、もっと藝術に関心を有していた『読売新聞』が美術教育に就いての私見という一文を掲載して、時ならぬ止水に波紋を巻き起こしす一石を投じた。」

『父岡倉天心』岡倉一雄著 中央公論社 昭和四六年 一二九頁

読売新聞がさらに「美術界波瀾の真相」と題してつぎのごとき暴露記事を掲げた。

九鬼博物館の留任運動 九鬼氏が博覧会副総裁の椅子を離れたる始末は茲に言わず、されど此事ありしより放逐し去らんとするの結構あり、しかるに九鬼氏に於ては之に反して仮令博覧会副総裁の椅子は離るゝも博物館総長の位置のみは飽まで保たんと望なりければ其初め九鬼氏攻撃の運動の起るに当り安村⁽¹⁷⁾喜当氏をして福復一氏の応援を頼みやりたる処福地氏には別の心期ありてか未だ俄に承諾を与へず陽には安村氏を介して之に应ずるの風を装ひ陰には九鬼氏の反対派を煽して巧みに側面攻撃の姿勢を取り以て其目的を達せんと力めたり即ち氏はその発起にかゝる美術談会の発会式を挙ぐるに当り右両派の面々を併せ招きたるが反対派なる今泉雄作⁽¹⁸⁾、久保田米僊⁽¹⁹⁾、松岡⁽²⁰⁾寿、林忠正⁽²¹⁾の諸氏に向つては九鬼放逐に関する協議を遂げたしとの書面を發し、九鬼派を集合したるものなり而して美術界目下の氣運に乗じ巧に大勢の帰する処を探り愈々時機の乗ずべきを悟りて、終に明治美術界其他の洋画派を後援とたのみ、九鬼氏に向つて其留任運動に尽すの報酬として岡倉覚三氏より博物館美術部長の椅子を奪ひ自家をして其後任に当たらしむるの契約を整へたり

『父岡倉天心』岡倉一雄著 中央公論社 昭和四六年一二九頁から一三〇頁

天心は包囲され、守つてくれるべき人は保身に廻り、窮地に立たされている。

なぜ九鬼が天心を犠牲にした理由は、語つてはいないが、保身並びに私的な星崎初子との問題が底流に流れているのだろう。天心は弁解することなく、博物館理事と美術部長と美校校長職を失うが、九鬼は残留する。しばらくして、九鬼も博物館総長を追われることになる。その後の総長に股野⁽²²⁾琢が任ぜられ、美術部長への復任従通しているが謝絶している。九鬼はその地位に拘り、天心は地位に拘る運動の氣配がない。そこには二人の生き方の相違がある。しかし、伝統を重んじる姿勢は天心と一致し、行動を共にしてきた。その後活動を共にすることはなかった。

美校ではカリスマ的存在であり、血氣溢れる青年たちの動きも止められない一つの原因であろう。職にもどることは、天心を崇拜している彼らに対して、顔向けがならないことはもちろんであるが、新しい道に進むべきことを念頭においていたのである。

二点目は洋画家たちの台頭、「明治美術会」の追い上げと恨みが、そのままの職に就いているのが難しいと判断した為であろう。現に「明治美術会」の行動は天心攻撃そのものであった。

明治三十一年三月二十二日、帝国博物館理事兼美術部長を依願免官となる（宮内庁）。

明治三十一年三月二十五日、東京美術学校校長職の辞表を提出する。

明治三十一年三月二十九日、東京美術学校校長非職を命ぜられる（文部省）。

『岡倉天心全集』別巻 平凡社 一九八〇年 四〇六〜四〇七の抜粋）

後任には、友人でもあった女子師範学校長の高峰秀夫⁽²³⁾（一八五四〜一九一〇）が兼任となる。

第二節 日本美術院

1 天心の決意

明治三十一年四月十四日、美校の職員橋本雅邦以下三十四名の連名による辞職声明書が公表される。

明治三十一年七月一日、東京美術学校を辞職した画家・彫刻家・工藝家たちと、本郷湯島天神町に日本美術院創立事務所を設け、規則を作成し、設立趣意書を発表する。

主幹に橋本雅邦、評議長に岡倉覚三、幹事に剣持忠四郎⁽²⁴⁾（一八四八〜一八九九）を選出する。

日本美術院正会員に橋本雅邦、横山大観、下村観山（一八七三〜一九三〇）、

菱田春草⁽²⁵⁾（一八七四〜一九一一）、六角紫水ら⁽²⁶⁾二十六名とす。

名誉賛助会員には二条基弘⁽²⁶⁾（一八五九〜一九二八）、川上操六⁽²⁷⁾（一八四八〜一八

九九）、フェノロサ(Ernest F.Fenollosa 1853-1908)、谷干城⁽²⁸⁾（一八三七〜

一九一一）、特別賛助員には、ビゲロウ(W.S.Bigelow, 1850-1926)、尾崎紅葉⁽³⁰⁾

（一八六七〜一九〇三）、幸田露伴⁽³¹⁾（一八四二〜一九一三）、坪内逍遙⁽³²⁾など、多く

の著名の士が名をつらねる。

『岡倉天心全集』別巻 平凡社 一九八一年 四〇六頁）

当時、天心は交友関係も広く、天心に賛同する人間も多く、天心の理念を理解している人々が行動に移したという事実であろう。

政府が岡倉非職の処分に踏み切り、美術行政を専門家指導型から事務官僚統制型に切り替えて行こうとする第三次伊藤内閣（文相西園寺公望）の方針を、もつとも理解していたのが、天心であり、東京美術学校時代からの美術学校の大学院の構想を一人でやるうとしている中の賛同者の支持は、大きな力であったであろう。

明治三〇年に「美術教育付意見」として、明治二七年の意見と明治三〇年の意見がある。その意見は、「官公使節全般ノ系統ヲ表示スレハ即チ左ノ如シ」として、天心自身の中では、すでに美術院構想が具体化されている。

『岡倉天心全集』三巻 平凡社 一九八〇年 四三九頁）

この八ヶ月間の出来事は、天心にとつてはよきできない出来事で、公の人生の道から私の道へと舞進した姿が垣間見られる。また多くの仲間の人生をも変えた一大事である。しかし岡倉自身も思わぬ人生への方向転換である。

弟子が彼の部屋を掃除していた時に、「見ては悪いと思いつつも何心なくそれを開いて見ると、生涯の予定表と題してつた。(中略)長くもない全文を読了してみると、「四十歳にして、九鬼内閣の文部大臣となる」という(中略)「五十歳にして貨殖に志す。」さらに「五十五にして寂す。」とあり、思い描いていた人生より、5年早く没している。

2 東京美術学校離職者たち

天心は東京美術学校非職後三ヶ月足らずで、美術院を立ち上げている。猛烈な勢いである。しかし、心中穏やかでなく、歌を酔いに任せて作っている。それを後に大観が院歌として残している。現在、日本美術院が所蔵しているのは、横山大観が書いた院歌であるが、歌の最後に「録天心先生作日本美術院之歌」と記している。

「院歌」

谷中ウグイス初音ノ血ニ紅梅花 堂々男子ハ死ンデモヨイ

奇骨侠骨開落榮枯は何ノソノ 堂々男子ハ死ンデモヨイ

錦小路ニニシキハナイヨ 錦ノ綴モキレクレニ

タトヒキレテモ錦ハ錦 ヨラレヨラレテアヤソ織ル

(日本美術院のホームページから <http://nihonbijutsuin.or.jp/index.html>)

初音は院が研究所を建設した谷中初音町と鶯の鳴き声をかけたもので血にそむは、決意のほどを示し、決死の状況である。錦小路は、東京美術学校前の通りの名で、仲間がばらばらになってしまったことを嘆いている。その錦もよられよられて綾を織るのだと院創設の意気込みを見せている。

明治三十一年三月は多くの人が巻き込まれるいる。人生の岐路に立たされることになる。天心への反感を持つ者、方針に反発する者、洋画家派、守派日本画家など、四面楚歌になる。

「築地警醒会」の文書に、美術学校の「教授助教教授ハ各自ノ教場ニ私ノ仕事ヲ携^{たず}へ来リ地金顔料等悉ク学校ノ材料ヲ使用シテ終日授業ヲ放却シテ⁽³³⁾」と非難しているが、「これなどは天心にいわせれば、これこそ東京美術学校の教育方針なのである。」と捉えている。⁽³⁴⁾教育方針を逆手に取られたわけであるから、天心にとっては苦笑に近いものではなかったろうか。

横山大観は美校時代を振り返り、授業風景を「橋本先生は部屋の隅におられ始終まわつて来られて、私どもを教えたり、宿題を出されたりしたものです。(中略)五年の卒業期に

は材料秘訣というのを、美術学校の規則で教えることになっていました。橋本先生は狩野派の絵の具の溶き方、杉戸の描き方を、虚勢(35)小石(35)（二八四三〜一九一九）などという人は土佐派の群青、緑青の使い方など、また川端(36)玉章(36)（二八七三〜一九五七）は四条派の絵の具の溶き方などというふうには、材料の秘訣について時々巨細にわたって、みなにお話になるというふうでした。」

『大観画談』横山大観 株式会社図書センター 一九九九年 二四頁〜二五頁）
細やかに指導している状況が浮かぶ。怪文書がいかにも貶めるためと理解できる。

天心の辞職を教員たちが察知して、連袂辞職の誓約をつくっている。しかし、それをすぐに容認したのではなく、「天心は教員諸氏を集め自分は去るが君たちは残れと演説したとある。
（『岡倉天心』木下長宏著 一八二頁）

しかし血気盛んな若者や天心を尊敬している者にとっては、文部省に対する怒りでもあったろう。辞職容認も引きとめることができるのも文部省であるのは確かなことであろう。

当初三四名が辞表を提出しているが、撤回説得工作もあり、二十二名になり、最終的には十七名になった。
以下十七名

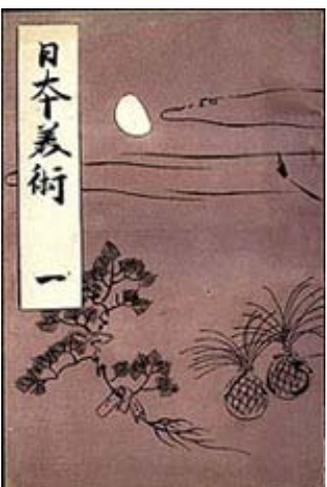
予備の課程	西郷湖月	助教授
	新納忠之介	助教授
	菱田春草	講師
日本画家	橋本雅邦	教授
	下村観山	助教授
	寺崎広業	助教授
	小堀桂三郎	助教授
	山田敬中	助教授
図案科	川崎千虎	教授
	横山大観	助教授
	岡部覚弥	助教授
	桜井正次	助教授
美術工芸科	桜岡三四郎	教授
	六角紫水	教授
	関保之助	助教授
	後藤貞行	教授
	剣持忠四郎	教務

『岡倉天心』齊藤隆三著（一八七五～一九六一）吉川弘文館 昭和三五年 九二～九三頁⁽³⁷⁾

こうして辞職騒動は収束するが、十七名の同志には苦難の前途が待ち受けている。天心はすぐに日本美術院を立ち上げる行動を起こす。藝術の道の厳しさも理解していたであろうが、天心と同じく、彼らが今後の厳しさを理解しているとは、疑われるが、彼には大きな責任があったことも事実であろう。

3 日本美術院創設の趣旨

当時、日本美術院は、『日本美術』を創刊して、第一号（明治三十一年十月二十一日）に「日本美術院創設の趣旨」、「日本美術院規則」、「日本美術院研究会員規程」が掲載されている。



日本美術院機関誌『日本美術』創刊号

明治三十一年一〇月号

「日本美術院創設の趣旨」の中で、天心は明治初期に「美術」の置かれた地位と今の美術の評価、今後が穏やかな時期がきて定まらるであろうと楽観している。

本邦美術の体勢は、明治の風雲に際会して一旦破壊的変動を受けたりと雖も、其氣運漸く熱するに及んでや、尋で保存的方向に復帰し、纒かに幕末以来の命脈を維持するを得たり。然りと雖も宿昔潜勢力の鬱積、遂に進歩発達の時機を催進し来たりて、今や多少の波瀾を認むるに到れり。若し夫れ彼岸の着点如何に至っては、他年風波静穏なるの時、是非はじめて定まらんのみ。

『岡倉天心全集』三 平凡社 一九八〇年 四四一頁

また日本の美術は前途多難であると述べ、大成するのは遠い道のである。美術は縛ることなく、さらに進んで同志で会合研究していく美術院を創設する已むべくところではない。と次のように書いている。

惟ふに本邦の美術は頗る高古に淵源せりと雖も、其前途尚ほ甚だ遼遠なり。今日以往一進一歩以て大成の域に到達するは、豈容易の業ならんや。夫れ美術の方針は固より偏倚すべからず。苟も偏倚すれば、即ち其大成の域に遠からんことを恐る。又美術の研究は固より羈束す可らず。苟も偏倚すれば、即ち其發達進歩に礙礙あらんことを恐る。

是れ今日既に業に、美術諸工藝に関する所の協会学校工場等の都鄙各地に存在するに拘らず、更に進んで同志を会合し、茲に日本美術院を創設するの已むべからざる所なり。『岡倉天心全集』三卷 岡倉天心著 平凡社 一八九〇年 四四一頁

美術を後世に残していくには、容易なことではないが、留まらず、偏らず、進んでいかなければならないし、そのためにも日本美術院を創設しなければならぬと固い決意が示されている。日本美術院は、美術の大学院の役割を果たそうとしていた。

4 日本美術院研究会員規程

女子への道も開いている。これは天心の先の世を見据えた活氣的なことである。

明治三二年には、「高等女学校令」が公布されているので、女子の就学が世の中で話題になっていく時期で、先取りしているのであろう。天心の柔軟な姿勢が窺い知ることができ。しかし、あくまでも制度であり、現実には、女子の在籍はなかった。

第一款

研究会員は満十六年以上の男子にして美術上の技能を有する者に限る。
但し本院に於て別に女子部を設けることあるべし。

第二款

本院において研究すべき科目は絵画、彫刻、図案、建築、装飾、鍍金、漆工、彫金、鍛金、刺繍、彫版、写真等の諸科目にして、其研究年限を五カ年とす。

第三款

研究会員は専ら実習に依り各自専門の技藝を研究するの外、
志望に依り左の諸科目を講習するを得。

- ◎美学
- ◎美術史
- ◎歴史及考古学
- ◎美術解剖学
- ◎遠近画法
- ◎応用科学
- ◎外国語

『岡倉天心全集』三卷 岡倉天心著 平凡社 一八九〇年 四四五頁

第二款、第三款から、科目の豊富さと充実した内容が伺われる。また技術だけでなく、歴史、外国語などの教養も含まれていて、研究機関であることを強調しているのである。

日本美術院の趣旨が研究機関として立ち上げ、生活に困窮しながらも、ただ売れる画を描いたのではなく、大衆に媚びたのでもなく、心の琴線にふれる画を求め、多くの国民のために各地（福岡・広島・大阪・神戸・前橋・岡山・三重・北海道）で展覧会を開催して、研究機関としての使命を果たしていく。又国民の意識向上も目指している。

創設の規則の中の本院の事業として七条に九項目を挙げている。その初めに「美術及び美術工藝の研究制作に従事すること」と書かれ、研究の重要性を掲げている。

日本で、はじめての美術の大学院の役目を果たす機関が登場することになった。しかし、その後、寄付や会費と展示会の売り上げの一部だけでは賄いきれず、困窮することになる。

明治三〇年に「美術教育施設二付意見」「岡倉天心全集」別巻（中省略）四三二頁」を書き残している。これは、明治二七年六月に起草された「美術教育施設二付き意見」「岡倉天心全集」三卷（中省略）三八三頁」の後半を書き直したもので、美術院構想は明治二十七年には出来上がっていた。

日本美術院が創設してから、二年ほどは、順調に推移しているが、新画法を取り入れた没線主彩の新画法（もうろう体）が批判され、衰退している。

「明治三九年（一九〇六）に天心は橋本雅邦に代わり、主幹となり、日本美術院規定を改正する。第一部は五浦（絵画）に、第二部（国宝修理）を奈良に置く。第二部の監督は新納忠之介である。」（『岡倉天心全集』別巻 岡倉天心著 平凡社 一九八一年四九〇頁抜粋）

5 古美術保存

天心は国宝修理と古社寺保存に努力を惜しまなかった。明治三二年「三月一七日、帝国博物館理事兼美術部長の辞職願を提出」（『岡倉天心全集』別巻 岡倉天心著 平凡社 一九八〇年四〇六頁）しているが、古社寺保存会には出席し、活動をしている。年譜では、日本美術院が創設して翌年の「二月八日、古社寺保存会のように大宰府、箱崎などを視察する。」（『岡倉天心全集』別巻 四九頁）と書いてある。その後、「二月二十四、（中略）六角紫水らと合流し、金剛寺、観心寺を巡り、さらに高野山、熊野神社と、国宝修理のために視察してまわる。」（『岡倉天心全集』別巻 岡倉天心著 平凡社 一九八一年 四一一頁）

（明治四三年）三月二十二日、古社寺保存会出席、国宝選定（絵画）の特別委員となる。」（前掲書 四三二頁）

大正二年八月七日、「病をおして古社寺保存会に出席し、法隆寺金堂壁画保存について提案し、建議案を作成する。」このように、古社寺保存と国宝選定には、大いに力を入れている。翌月の九月二日（大正二年）には、病没する。

ボストン美術館での仕事も、日本・中国の古美術の選定、分類、保存の仕事をし、古美術に関しては、生涯の仕事として考えていたのである。

『岡倉天心全集』別巻 岡倉天心著 平凡社 一九八〇年一五四～一五五頁)の雑録には、「国宝出品の決定」として、明治四四年八月三〇日に日英博覧会事務局において、日英博覧会に出品する国宝物について、協議している。

参加者の一人が「紛失、難破、火災等の災厄あるものを以て国宝の出品は絶対に反対なり」と主張し、「岡倉氏も国宝は海外に搬出すべきものにあらず、国内と雖も危険なり、現に先年英国の或一部に於いて博覧会開設の際、参考として印度にある国宝を持ち出すや、途中之を搭載させる汽車大火災を起して焼失せり、故に外国にては国宝の遠方輸送を禁ぜり、云々。」(『岡倉天心全集』別巻二五五頁)とあり、最終的には、目録問題もあり、「今後国宝は絶対に海外搬出を厳禁する事とし、今回限り国宝中にて数種ある内より三十七点を左の三十三点に減じて出品の事に暫く決定せりといふ。」(『絵画叢書誌』第二七〇号(明治四十二年十月十五日)に掲載。)『岡倉天心全集』別巻 岡倉天心著 平凡社 一九八〇年 一五五頁)

このように、天心は国宝作品を守ることに固執し、守ることを前提として、言及している。

『岡倉天心全集』二巻(三三三～四八四頁)に「国宝帳」として収録されているが、ロンドンで開催される日英博覧会(一九一〇年五月十四から一〇月二九日まで)のために、英文で書かれた解説書である。

本書の編術は古社寺保存会委員工学博士伊東忠太、同関野貞、及び岡倉覚三、中川忠順、平子尚の五氏に之を依属せり。

『岡倉天心全集』二巻 岡倉天心著 平凡社 一九八〇年 五一七頁)

邦文版では天心の英文を表せないで、すべて翻訳(「図版解説」)して収録した。

『岡倉天心全集』二巻 岡倉天心著 平凡社 一九八〇年 五一七頁)

天心の迫力ある英文で膨大な資料を翻訳することは骨が折れることであつたようだ。それほど、国宝を重要視していたのであろう。

まとめ

日本美術院の創立は思いもかけない理由であり、天心の脇の甘さが露呈している。西洋化に向う日本にブレーキをかけ、本邦の価値ある美術を育て、研究しようとしたが、文部省が、混乱の機会に、美術行政を専門家指導型から事務官僚統制型に切り換えたり、台頭する西洋派の人たちの力が大きくなったことを物語っている。天心が具体化しようとした行動と理念は明治という西洋化の時代には理解されなかった。

日本美術院を立ち上げ、理念は変わることなく、愛弟子たちとの再出発であったが、前途多難であった。

美術院がどのような組織であったかをこの章で紹介したが、東京美術学校時代から構想を抱いていた教育の目的・目標、教育課程、教職員、財政などについて、制度化したものであった。すでに、明治三〇年に「美術教育施設二付意見」として、作成していたものを具体化したのである。

「東京美術学校校長非職（明治三二年三月二十九日）を命ぜられるが、四ヶ月後には、本郷湯島に仮事務主兼研究所を設け、七月七日には開設披露宴を開催した。」

『岡倉天心全集』別巻岡倉天心著 平凡社 一九八〇年 四〇七頁を抜粋

その後の天心の活動は勢力的である。仙台・盛岡・秋田・大曲・横手での展覧会の開催し、続いて福岡・広島と活動を広げる。好評を得て、天心が講演をすることもあり、国民のための絵画の持論を展開し、一般の人たちにも絵画を觀賞してほしと願ひ、国民の意識の底上げに努めた。常に一貫した姿が垣間見られる。

明治三四年九月二十日には美術院は衰退していたが、正木直彦（一八六二〜一九四〇）第五代 東京美術学校校長との話合いで東京美術学校と日本美術院との和解が成立して、下村観山、寺崎広業（一八六六〜一九一九）、六角紫水を正会員のままで、美校教授として送り込み、高村光雲（一八五二〜一九三四）、竹内久一（一八五七〜一九一六）、石川光明（一八五二〜一九一三）ら美校（東京美術学校）教授を正会員として向かえている。

日本美術院は、かつて流派としての共同作業をしてきた時代から、画家、彫刻家などの個性ある専門家を育成することを目的にした。二つ目は、美術（藝術）は国民の為のものであるという思想に基づいて、全国で展覧会を開催していくことを、重要な位置に置いている。

古美術保存に関しては、並々なるぬ努力をしている。死を直前に控えても、古美術保存会に出席し、意見を述べ、提案をする態度からは、特に国宝を守る姿勢が見られる。

天心の理念は一貫した姿勢で、日本美術院を立ち上げた。美への追求は天心の生き方そのものであり、日本の伝統を視野に入れて「美術の真理」を追究していく天心の姿がある。

注

- (1) 新納忠之介^{（いろいろちゅうのすけ）}（一八六五〜一九五四）
東京美術学校卒業後、二八年に同学校彫刻の助教授となる。神仏像の修復に従事。薩摩出身

- (2) 六角紫水（一八六七〜一九五〇）

明治・昭和時代の漆芸家

慶応三年三月二十日生まれ。天心らと渡米し、ボストン美術館などにつとめる。大正五年母校東京美術学校(現東京芸大)の教授。実作のほか朝鮮の楽浪(らくろ)漆器、彩漆の製法を研究した。昭和十六年芸術院会員。昭和二十五年四月十五日死去。八十三歳。安芸(あき)(広島県)出身。旧姓は藤岡。名は注多良。著作に

(3) 木村武山(一八七六〜一九四二)

茨城県生。東京美術学校卒業後、天心に従って日本絵画協会の創立に参加、その後日本美術院正会員として五浦に移住。するなど終始、彼の元にあった。

(4) 絵画共進会 明治維新後、衰退した日本美術を振興するために創設された官催の日本画展

(5) 九鬼隆一(一八五二〜一九三一)

明治時代の美術行政家。

嘉永(かえい)五年八月七日生まれ。九鬼周造の父。丹波綾部(あやべ)藩(京都府)家老九鬼家の養子。慶応義塾で福沢諭吉にまなぶ。文部省にはいり、明治十一年パリ万国博に出張して各国の美術事情を視察。帝国博物館の創設につくして二十二年初代総長となり、古美術の保護につとめた。昭和六年八月十八日死去。八十歳。撰津三田(兵庫県)出身。本姓は星崎。デジタル版 日本人名大辞典

(6) 浜尾新(一八四九〜一九二五)

教育行政家。但馬(たじま)豊岡藩士の子。貴族院議員・東大総長・文相・枢密院議長。子爵。

(7) 西園寺公望(一八四九〜一九四〇)

政治家。公爵。フランス留学。明治法律学校を(明治大学前身)設立。文相、外相、枢密院議長。明治三九年、首相となる。

(8) 『フェノロサ』下二三〇頁 山口静一 三省堂 一九八二

(9) 黒田清輝(一八六六〜一九二四)

洋画家。鹿児島の人。一八八四年、法学研究のため渡仏、絵画に転じてコランに学び、九三年帰朝。九六年、白馬会を創立。東京美術学校に西洋画科が設置されると、主任教授となる。

(10) 福地復一(一八六二〜一九〇九)

三重県生。東京帝国博物館美術部雇から東京美術学校図案科の教授となる。明治三十一年(一八九八年)の美校騒動の画作者といわれる。のち帝国図案社をおこした。

(11) 菱田春草(一八七四〜一九一一)

明治時代の日本画家。明治七年九月二十一日生まれ。結城(ゆうき)正明、岡倉天心、橋本雅邦(がほう)らに学ぶ。のち天心らの日本美術院創立に参加。また横山大観

らと朦朧(もうろう)体といわれる没線(もつせん)主彩描法をこころみるなど、日本画の革新に勉めた。長野県出身。東京美術学校(現東京芸大)卒業。

代表作に「落葉」「黒き猫」(ともに重文)など。

(12) 橋本雅邦(一八八五〜一九〇八)

明治時代の日本画家。天保(てんぽう)六年七月二七日生まれ。狩野雅信(かのうただのぶ)に入門。フェノロサと岡倉天心らの鑑画会に参加し、狩野芳崖(ほうがい)らと新画風を開拓。明治二三年東京美術学校(現東京芸大)初の日本画教授となる。三十一年辞職して天心とともに日本美術院を創立した。明治四十一年一月十三日江戸出身。作品に「白雲紅樹図」「竜虎図屏風(びょうぶ)」など。

(13) 田中光頭(一八四三〜一九三九)

幕末・明治時代の武士政治家。

天保(てんぽう)四年閏(うるう)九月二十五日生まれ。土佐高知藩士。武市瑞山(たけちずいざん)に師事し、土佐勤王党にくわわる。維新後は警視總監、宮中顧問官学習院長などを歴任。明治三一年以来十一年間宮内相をつとめた。昭和一四年三月二八日死去。九七歳。本姓は浜田。通称は辰弥頭助。号は青山。

デジタル版 日本人名大辞典

(14) 大村西崖(一八六八〜一九二七)

東洋美術史家。静岡県に生まれる。一八九三年東京美術学校彫刻科を卒業。「一九〇二年母校の教授となり、東洋美術史を講ずる。一九〇六年審美書院の設立に加わり、『東洋美術大観』十五冊、『真美大観』『東瀛(とうえい)珠光』『支那美術史彫塑編』など、中国美術史の図録、研究書を刊行・執筆して、中国美術史研究に大きな足跡を残した。後年の『密教發達志』は帝国学士院賞を受賞。また、晩年、フェノロサ、岡倉天心が排撃した文人画の復興を主張して、白井雨山らと又玄社を結成した。

デジタル版 日本人名大辞典

(15) 『岡倉天心アルバム』 監修茨城大学五浦美術文化研究所 平成二五年九二頁

(16) 関如來(一八六六〜一九三八)

明治・大正時代の新聞記者・美術評論家。

慶応二年十一月十六日生まれ。関鑑子(あきこ)の父。読売新聞記者のち美術評論家として活躍。大正三年日本美術院再興の際には横山大観とともに画壇革新に尽力した。大和(奈良県)出身。著作に「明治大正美術側面史」。

デジタル版 日本人名大辞典

(17) 安村喜当 文化財などの調査、研究の写真師

(18) 今泉雄作(一八五〇〜一九三二)

明治・大正時代の美術史家。

嘉永(かえい)三年六月一九日生まれ。明治十年パリに留学、ギメ美術館で東洋美術

を研究。帰国後、岡倉天心らと東京美術学校(現東京芸大)の創立にくわわる。のち京都市立美術工芸学校校長、帝室博物館美術部長、大倉集古館長などを歴任。

江戸出身。著作に「君台観 左右帳 記考証」など。

デジタル版 日本人名大辞典

(19) 久保田 米僊くぼた べいせん (一八五二～一九〇六)

明治期の日本画家。京都生まれ。

維新後、京都画壇の興隆をめざして明治十一(一八七八)年画学校の設立を建議した。師風を継ぐ雄渾な画風で知られ、内国絵画共進会、内国勸業博覧会で受賞を重ねる。また二十二年、パリ万博で金賞を受賞し、渡仏して『京都日報』に寄

稿。二十四年には上京して『国民新聞』に入社し、二十六年のシカゴ万博二十七年日清戦争従軍の記事を報じた。『米僊漫遊画譜』『米僊画談』などの著書がある。が三十三年に失明。以後は俳句や評論活動を行った。(佐藤道信)

『朝日日本歴史人物事典』

(20) 松岡寿 (一八六二～一九四四) 洋画家。工部美術学校において、アントニオ・フォンタネージュに師事。明治美術会員。

(21) 林 忠 正 (一八五三～一九〇六)

明治期の美術商。長崎言定の次男として越中(富山県)高岡に生まれる。明治三(一八七二)年富山藩士林太仲の養嗣子となり上京大学南校に学ぶ。十一年起立工商会社員として渡仏、パリ万博の仕事に携わる。十七年パリに美術商を開業、浮世絵など日本・東洋美術品を扱う。パリを中心にゴッフルや印象派の画家たちと広く交友、当時盛行したジャポニスムに、日本美術紹介者として重要な役割を果たした。一九〇〇年パリ万博参加に際しては、臨時博覧会事務官長となる。

(三輪英夫) 朝日日本歴史人物事典

(22) 股野琢またのたく (一八三八～一九二二)

幕末・大正時代の儒者官僚。股野達軒(たっけん)の子。播磨(はりま)(兵庫県)竜野(たつの)藩につかえ、維新後は 帝室博物館総長。宮中顧問官などを歴任。

デジタル版 日本人名大辞典

(23) 高峰秀夫 (一八五四～一九一〇)

福島県生。明治期の教育家。高等師範学校校長。東京美術学校校長・音楽学校校長を兼任した。

『岡倉天心をめぐる人びと』岡倉一雄著 平成一〇年

『日本百科事典』

(24) 剣持忠四郎 (一八四八年～一八九九年)

東京美術学校の体育を教授する。日本美術院の評議員。公私にわたり、腹心の役割を果たす。『岡倉天心をめぐる人びと』岡倉一雄著

- (25) 菱田春草(一八七四年～一九一一年)
長野県出身。東京美術学校。代表作「黒猫」「落葉」
- (26) 二条基弘(一八五九年～一九二八年)
五撰家の一つ二条家に生まれる。天心は二条を日本絵画協会の会頭にかついだ。明治の華族。貴族院議員。『岡倉天心をめぐる人びと』岡倉一雄著 中央公論美術出版 平成一〇年
- (27) 川上操六(一八四八年～一八九九年)
陸軍大将。橋本雅邦をひいきにし、日本美術の振興にも関心を持っていた。『岡倉天心をめぐる人びと』岡倉一雄著 中央公論美術出版 平成一〇年
- (28) 谷干城(たにたてき 一八三七～一九一一)
土佐藩士。政治家。陸軍中将。第一次伊藤内閣の農商務相。東京学士会会員。
- (29) ウイリアム・S・ビッグelow (W.S. Bigelow 1850-1926)
特別賛助員。アメリカの医師で大いたり、富豪。一八八二年(明治十五年)に来日、ある意味ではフェノロサ以上に天心と関係は深く、日本美術院の創立に拠金したりまた天心は彼のために、「修習止観座禅法要」を英訳したりしている。日本美術のコレクターでもあった。
- (30) 尾崎紅葉(二八六七～一九〇三)
『岡倉天心をめぐる人びと』岡倉一雄著 中央公論美術出版平成一〇年
小説家。江戸芝生。日本美術院の特別賛助員。
作『金色夜叉』『多情多恨』など。
- (31) 幸田露伴(一八六七～一九四七)
小説家。根岸派文人のひとりで、天心の年少の仲間だった。聖文閣版『岡倉天心全集』(全三巻、昭和十年)の推薦文を書いている。小説『五重塔』『頼朝』など。
- (32) 坪内逍遙(一八五九～一九三五)
小説家。劇作家。評論家。英文学者。岐阜県生まれ。『小説真髓』、「早稲田文学」を創刊。
- (33) 『父岡倉天心』岡倉一雄著 中央公論社 昭和四六年 一一六頁
- (34) 『岡倉天心』木下長宏 ミネルバ書房 二〇〇五年 一八三頁
- (35) 虚勢小石(一八四三～一九一九)京都生。平安時代以来の虚勢派をつぐ日本画家。
- (36) 川合玉堂(一八七三～一九五七)
愛知県生。上京して橋本雅邦に学ぶ。美術院創設に際しては雅邦に従って参加する、文展創設以後は官展を中心に活躍する。
- (37) 斉藤隆三(一八七五～一九六一) 大正一年に日本美術院から刊行した日本美術院監修の『岡倉天心全集』の責任者である。また再興日本美術院の同人である。

* 出典無記名は『広辞苑』第六版（岩波書店 二〇〇八・二〇一一）である。

第四章 岡倉覚三（天心）の思想

はじめに

岡倉天心の生涯を通しての思想ならびに行動をさぐり、東京美術学校校長時代に始まった「日本美術史」の大系化に、注目する。かつて日本にない概論を構築し、情報を分析して、美術史を作り上げている。また、中国、インドに行き、試行錯誤をして、調査し、研究を続けている。かつて、「矛盾のかたまり」と評価されたが、天心の思想は一環していることを考察する。

また、「絵画における近代の問題」の講演は、天心の思想の完成に近い。以後の思想家としての行動を検証する。

第一節 小山正太郎⁽¹⁾の「書ハ美術ナラス」への反論

1 天心の反論

明治十五年に小山正太郎（一八五七～一九一六）が、『東洋学藝雑誌』の第八十号に「書ハ美術ナラス」の論を載せると、天心は同雑誌の十一・十二・一五号に「書ハ美術ナラスノ論ヲ読ム」を載せ、手厳しく反論した。

ここでは「美術」に関しての概念規定が問われる問題がクローズアップされる。

書ハ美術ナラスノ論ヲ読ム

我東洋学藝雑誌ヲ閱スルニ、小山正太郎氏ハ書ハ美術ナラスノ論ヲ載ス。

抑モ美術ノ真理ヲ考究スル者、古来欧州ニ於テモ甚タ稀ナリトス。（中略）

美術ハ理ヲ以テ推ス可カラスト想像シ、惟慣習又ハ憶測ヲ以テ之ヲ是非スルノ弊ナキニ非ズ。今小山氏独リ慣習ヲ破リ憶測ヲ離レ書ハ美術ナラスト断言シ、大イニ世上ノ妄想ヲ打破セリト雖（イエ）ドモ、惜（オシ）ヒ夫^{かな}其論拠（キヨ）トスル所鞏固（キョウコ）ナラス。此レヲ以テ書ノ美術ニ非サル所以^{ゆえん}ヲ証明スル能（アタ）ハサルナリ。是余ノ最モ慨歎（カイタン）ニ堪ヘスシテ、聊^{いさか}茲ニ論弁スルコトアル所以ナリ。

小山氏ノ論、第八第九第十ノ三号ニ跨（マタグル）ト雖トモ、今其論ヲ約言セハ左ノ四点に帰セン。

書ハ美術トナスヘキ部分ヲ有セス。

（一）世上書ヲ美術トスルノ諸説ハ信スヘカラス。

- (二) 書ハ美術トナスヘキ部分ヲ有セス。
- (三) 書ハ美術ノ作用ヲナス。
- (四) 書ハ美術トシテ勸奨スベカラス。⁽³⁾

これに対して天心は次のように異論を唱えている。

嗚呼西洋開化ハ利慾ノ開化ナリ。利慾ノ開化ハ道德ノ心ヲ損シ、風雅ノ情ヲ破リ人身ヲシテ唯タ一箇ノ射利器械タラシム。貧者ハ益々貧ク富人ハ益々富ミ、一般ノ幸福ヲ増加スル能ハサルナリ。此時ニ当リ計ヲナスニ、美術思想ヲ流布シ卑賤高尚ノ別ナク天地万物ノ美質ヲ玩味シ、日用ノ小品ニ至ルマテ思想ヲ歎悟セシムルニ若クハナシ。美術ヲ論スルニ金錢ノ特質ヲ以テセハ大ニ其方向ヲ誤リ、品位ヲ卑クシ美術ノ美術タル所以ヲ失ハシムル者ナリ。豈(アニ)戒メサルヘケンヤ。⁽³⁾

明治になって初めて美術の概念規定が問われた出来事である。小山は、絵画論に終止し、天心は、すでに藝術論を持っていた。当時は藝術を美術と訳しているが、小山は、絵画のみを対象に論を進めている。それに対して、天心は藝術として、論破したのではないだろうか。

天心の小山に対する反論は、整然としている。

2 毛筆画採用か鉛筆画採用

「十七年十一月十五日、文部省に図画教育調査会が置かれ、(中略)毛筆採用論の岡倉らと鉛筆画採用論の小山らの意見とが対立するが、最終的には天心らの主張が通る。⁽⁴⁾」
アーネスト・フェノロサ⁽⁵⁾(Ernest F.Fenollosa 一八五三〜一九〇八)への天心の綿密な根回しの書簡がある。

明治十七年(二八八四)二月五日付けで、フェノロサが二月三日に図画教育調査委員に任命されたその後である。委員会はすでに六回の会議が終わっている。フェノロサは途中から委員に選ばれている。調査委員のメンバー構成、討議の順序、討議の方法、特に、反対する小山の意見、その意見に対処する方法などをその書簡に詳細に書いてある。

フェノロサ先生

先生が正式に図画教室に調査委員にご参加されましたので、私から同調査会の現状を御報告申し上げる方がよろしいかと存じます。それは下記九名の委員で構成されています。

専門学務局(局長浜尾氏)⁽⁶⁾

上原氏

今泉氏⁽⁷⁾

多賀氏（東京職工学校図書教師）

狩野友信⁽⁸⁾

狩野芳崖⁽⁹⁾

私自身

普通学務局から、

河村氏

山路氏

小山氏（東京師範学校図画教師）⁽¹⁰⁾

書簡の内容を抜粋すると、日本画法を学校に導入することの利、不利を決することに關して、天心は日本画法は、あらゆる芸術的、実用的対象を描く能力を持つ、と主張した。

小山は（一）日本画法は外国の陰影法を用いずして、ある種の対象を描き得ない、（二）日本の方法を採用するならば、線によってのみ物を見るよう人々を狭く限定してしまうことになるのに対し、外国の方法は物の両方からの見方を含んでいと主張している。

それに対して天心はまた、（一）陰影は外国人のみならず、日本人にも共通にあるもの。（二）陰影によってのみ表現される必要のある対象はほとんどない。（三）外国の方法は物を陰影を持つて見るように人々を限定し、また、日本の筆のように美しい線を表現することができない。と説明をしたことを加えて述べ、問題点を挙げている。

反対者はまだ満足せぬと主張している。（中略）西欧人が生活藝術であると主張している工業美術における日本人の優秀性を大いに強調いたしました。また外国画法の導入によって、わが民族的藝術活力を殺しつつあること、外国画法は諸外国では可能である程度にまでは、いかに奨励しても及び得ないこと、などを強調しました。小山氏は、児童に日本の対象を描かせるように外国の方法は修正されるならば同じ結果が得られるだろうと、再びこれに反論しました。⁽¹²⁾

さらに、天心はたたみ掛けるようにかたっている。

大多数を形成している私の局は、私の意見に傾いております。（中略）はなはだご迷惑なことでありましようが、明日は第七回目の会合が開かれ、上述の問題を引き続き討論することになっておりますので、事態を十分にお心置きいただくことが先生にとつても、私にとつても都合よきことと考えた上のことでありませ。⁽¹³⁾

小山の局以外は、天心と同じ意見であることを、会議前に、根回しをしている。そのメンバーは、狩野友信、狩野芳崖、今泉雄作、岡倉、他の三人も説得できたということとは、日本画出身または関係者の人であろう。ようするに、洋画出身は小山と普通学務局のメンバーであると考えられる。

若き官僚の天心は、意思を通す好調なスタートをしている。

小山との論争（書ハ美術ナラス）で、天心は藝術論で論争し、美術の真理を問うている。その後の天心の行動に弾みがつき、自信がつき、このような行動（根回し）にでていいるのではないだろうか。

結論は、日本画法「毛筆」の採用になり、外国画法「鉛筆」の採用が却下されたことになる。

小山が所属していた工部美術学校⁽¹⁴⁾（洋画）は、明治一六年に、閉鎖されているが、明治三十三年（一九〇〇）には、パリ万博の出品監査委員となり、文部省より図画教育取調の命を受け、渡欧する。天心が東京美術学校を非職させられた後のことである。

明治時代は、美術会の世界で主張の違いが炸裂する。南画、浮世絵を中心とする古い日本画、欧化政策のためにできた洋画中心の工部美術学校出身の人たち、新しい日本画を作りだす東京美術学校出身者、そして、黒田清輝⁽¹⁵⁾たちの洋画の台頭がある。変化と価値が定まらない時期であった。

日本美術院が美術院内にて、日本美術院第一回展を第五回絵画共進会と合わせて開催する（明治三十一年一〇月一五日〜十一月一五日）。丁度そのころ、上野と近辺では、他の三つの展覧会が行われている。龍池⁽¹⁷⁾会の後身の日本画旧派の日本美術協会⁽¹⁸⁾展、洋画旧派の明治美術⁽¹⁹⁾会展、洋画進歩派（黒田清輝など）の白馬⁽²⁰⁾会展があった。美術界もそれぞれの主張が入り乱れている時代である。

第二節 『美術真説』

1 アーネスト・フェノロサ(Ernest F.Fenollosa 一八五三〜一九〇八)の演説

明治維新後、脱亜入欧思想や行動が勢いも落ち着く明治十年代には新たな動き、日本の価値あるものの再認識する時代に入る。美術界も同様で、明治一五年（一八八二）に国民に開かれた「農商務省主催の「第一回内国絵画共進会」（上野公園 十月一日から十一月二〇日まで）が「日本画」中心の展覧会として開催された⁽²¹⁾。」

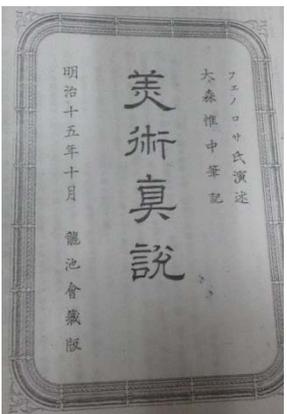
アーネスト・フェノロサが龍池会での演説「美術真説」を行った時は、明治一五年である。

「五月一四日に、演説が行われ、十一月にはフェノロサ演説、大森惟中⁽²²⁾（一八四四〜一九〇八）筆記、『美術真説―完』として出版された。六〇頁の小雑誌にまとめられ、龍池

会蔵として定価金十五銭で、全国に頒布された。講演草稿も聴講者の回想も残っていない。⁽²³⁾」と著者の山口静一（一九三一〜）氏は述べている。

木下長宏（一九三九〜）氏は『岡倉天心』の中で「原文の講演草稿は現存しない。しかし、ハーバート大学のホートン・ライブラリには、大量のフェノロサのノートやメモが所蔵されていて、その中には『美術真説』^{（びじゅつしんせつ）}の内容を体言している草稿がいくつかある。その草稿には日付があって、「二八八一年四月一〇日、東京の美術家を前にした美術に関する講演」とある⁽²⁴⁾」と述べている。

フェノロサは、同じような講演を明治一五年前後から行なっていたのだろう。五月四日の龍池会での演説は、山口静一氏によると「龍池会は西洋崇拜の風潮の中で衰微していた日本美術の振興を図る目的で組織され、日本美術研究者、鑑識家として有名になり始めた西洋人を起用してその主張をまず政府部内に滲透させようとしたのだ⁽²⁵⁾」と述べている。



日本近代思想体系（二七）岩波書店 一九八八年 三四頁

明治一三年から一七年までの年譜を『岡倉天心全集』別巻⁽²⁶⁾より、抜粋で表わしてみる。

明治一三年七月

東京大学文学部を卒業する。卒論は「美術論」である。

同年 一〇月

文部省に就職して音楽取調掛に勤務する。

明治十四年一月

専門学務局勤務となり、音楽取調掛の兼務を命ぜられる。

明治一五年四月

音楽取調掛の兼務を解かれる。

同年 五月

フェノロサが龍池会の席上で美術に関する講演を行う。

同年 六月

内記課兼務（文部省）になる。

同年 八月二五日

小山正太郎の「書ハ美術ナラス」〔『東洋学芸雑誌』八、

九、一〇号）に反論して、同誌に「書ハ美術ナラスノ論ヲ読ム」（十一、十二、十五号）を掲載する。

同年 九月〜十一月

文部少輔九鬼隆一と学事巡視に随行し、新潟

佐渡、出雲崎、京畿地方の古社寺を訪れる。

同年 十月一日 農商務省主催の第一回内国絵画共進会

(上野公園、十一月二〇日まで) 開催

明治十七年一月二〇日 龍池会に入会 録事となる。

同年 二月 フェノロサ、狩野友信らが、監画会を組織し、天心も参加する。

同年 三月九日 鑑画会第一回例会を開き、以後八回の例会を持つ。

同年 四月十一日 農商務省主催の第二回内国絵画共進会(上野公園、五月三十日

まで)開催、橋本雅邦、狩野芳崖らが出品

同年 九月十四日 九鬼隆一、特命全権公使として渡米する。

同年 十一月十五日 文部省に図画教育調査が置かれる。

同年 十二月三日 フェノロサが図画教育調査委員に任命される。

この年譜を見ると、小山正太郎の「書ハ美術ナラス」に対する天心の反論は、フェノロサ演説(五月)の後のことで、天心なりの論の組み立てと立証に自信を持って対処したのではないだろうか。

この時期に出会った人たちから影響を受け、将来の進む道が、天心自身の中で固まる時期であり、フェノロサからの影響や、小山正太郎に反論したことにより、天心の美術論(藝術論)を世に知らしめたことになり、天心の考えが自ら確立していくことになる。九鬼隆一との龍池会での出会いは重要になり、その後の天心の人生に大きな影響力を与える。また、明治一五年には、九鬼と供に古社寺の巡視のための随行したことが、弟子たちを通して、文化財の保存、修復の仕事につながるであろう。

2 佐野常民宛の意見書⁽²⁷⁾

佐野常民(一八二二〜一九〇二)宛の明治十七年十月二一日の書簡がある。佐野は龍池会の会頭である。天心との年齢差は、四〇歳である。まだ、若い官僚天心は、臆しないで見解を述べ、美術の真理の重要性を訴えている。

拝啓 昨日ハ例ノ宗旨合戦ニテ頗ル暴言激論ヲ吐露シ段万謝ノ至ニ御座候 察スルニ現今美術ノ情況ハ維新改革前ノ時勢ニ同シク攘夷家モ有之佐幕党モ有之此間ニ於テ文明開達ノ真理ヲ主張スルハ実ニ困難ニシテ要地ヲ占ムル先見者ノ之ヲ幫助スルニ非サルヨリハ到底進化ノ事業ヲ挙クル能ハサル儀ト存候 故ニ小生ノ今日閣下ニ向テ切望スル所ハ真正ノ主義ヲ幫助涵養シテ断然其目的ヲ達スルノ方法ヲ計画セラル、ニ在リ 旧規ニ拘泥シ古法ヲ妄信スルノ徒ハ退テ共ニ守ルヘキモ進テ共ニ取ルヘカラス 苟クモ是等ノ人ノ我美術社会ヲ左右スルノ間ハ 皇国美術ノ振興ハ夢ニタモ見能ハサル儀ト存候 今ヤ内外交通ノ運ニ

乗シ我美術品ヲ外国市場ニ輸出シ以テ富国ノ一端図ルヘキ論ヲ俟タス 然レ
トモ美術ノ真理ニ抛ラ「ス」シテ外国市場ノ嗜好ニ適セント欲スルモ得ヘケンヤ
(中略) 甚不敬ノ廉モ有之申兼候処ニ候ヘ共敢テ心血ヲ吐露シ閣下ノ明裁ヲ乞フ⁽²⁸⁾

龍池会は、佐野常民伯が主催する美術団体で、美術行政に多大な影響を与えていた。また、美術工芸の輸出も目的の一つとしている。天心は、当時、音楽取調掛を免ぜられ、内記課兼務となり、美術学校設置の気運があつた時期である。天心は明治十七年一月二〇日に龍池会に入会して、同会の録事となる。佐野常民伯への意見書にもあるように、「我美術品ヲ外国市場ニ輸出シ以テ富国ノ一端図ルヘキ論ヲ俟タス 然レトモ美術ノ真理ニ抛ラスシテ外国市場ノ嗜好ニ適セント欲スルモ得ヘケンヤ」と、天心自身が龍池会の体質も理解しての意見ではなからうか。「美術の真理」の重要性に力点を置いているということは、ここから天心思想が成長していく過程であるのではないだろうか。

美術に対する考え「美術の真理」は、小山正太郎への反論の中でも、「美術の真理」を力説している。

第三節 鑑画会での演説

1 自然発達論を推奨

鑑画会はフェノロサが中心的に拘っている。『フェノロサ』上の「鑑画会の成立」の項では、モース⁽²⁹⁾ (Edward Syvester Morse 一八三八〜一九二五)にあてた書簡を載せている。

私達が最近結成した新しいクラブ鑑画会のことを、あるいはすでにお聞き及びか
もしれません。現代の狩野派、土佐派の両袖を含む三人の画家と私とで、四人が
鑑定委員になっています。毎回、会合を開いて古画を展示し、私が美術に関する
講義を行い、持ちこまれた古画はすべて四人が鑑定を引き受け、希望者には鑑定
書を与えるのです。先日の会には三〇〇人以上の人々が集まりました。同封しま
した新聞記事をご覧ください。⁽³¹⁾

天心も鑑画会の会員である。明治十八年には、九鬼隆一(一八五二〜一九三二)が
名誉会長、河瀬秀治⁽³²⁾ (一八三〇〜一九〇七)が会長になる。

明治二十年に欧州視察から帰国した後に「鑑画会」での演説が『大日本美術新報』第五
十号(一二月三一日)に掲載された。「鑑画会に於いて文学士岡倉覚三氏演説十一月六日⁽³³⁾
」本講演は欧州視察の基調報告で、鑑画会主催、木挽町の貿易公会堂で開かれた。」

将来の日本美術の新興にあたって東西両洋のどちらの美術を採るべきかというそのころ最大の関心が集まった問題に対して、彼は正面から答えた。

天心は美術の論を四種に分類して話を進めている。

東西両洋の美術は二流の源を同せる泉の如し。余は之に就きて尚少しく述べんと欲する所あれば、しばらく諸君の清聴を煩さんと欲す。

美術のこと漸く世人の注意を惹起すの今日となりたれば、第一に世人の論議に關はる所は東西両洋の美術何れを取るべきかの問題はなり。(中略) 此度余が外邦の美術を暦覽したるの末、本会の主義を定むるは最も必要なりと思ふ。故に余は四種の論題に就き聊か論弁を試みんとす。本題の論者凡四種あり。

第一 純粹の西洋論者

第二 純粹の日本論者

第三 東西並設論者即ち折衷論者

第四 自然發達論者⁽³⁴⁾

天心は第四の自然發達論を推奨している。

自然發達とは東西の区別を論ぜず美術の大道の基き、理のある所は之を取り美のある所は之を究め、過去の沿革に拠り現在の情勢に伴ふて開達するものなり。

(中略)

日本の美術家諸君よ、美術は天地の共有なり、豈東西洋の区別あるべけんや。

宗派は弊の家宅なり。胸懷洞然、以って精神を發表せば美術の妙に至らん。

自ら信じて亦疑うこと勿れ。美術事業、上は皇国の光榮に關し下は貿易の消長に

係れり。諸君の責任重し。世間の諸君、尽くすべき義務も他日其重きを加ふべし。

勉めて其精神を在養し他日の大成を期せられんことを乞ふ。自ら信じ疑うこと

勿れ⁽³⁵⁾

ここからも天心は古い日本には拘ることなく、個人の個性に任せまた磨き、将来に繋ぐよう訴えている。ここから見えてくるのは、西洋の影響も受け、東洋の影響も受け、過去からも受け、その中で未来に向かうそれぞれが個性を持って、いい作品を作るとは責務であると重ねて述べている。

第四節 『国華』「発刊の辞」

1 国の精華

『国華』(明治三十二年一〇月二八日)の中「発刊ノ辞」で述べた「國民ト共ニ邦國ノ精華

ヲ發揮セント欲スルナリ」⁽³⁶⁾

と発刊の理想と同じく、美術院の創立に関しても明治三四年（一九〇四）に、「『美術院』または日本美術の新しい古派」の中で、以下のように述べている。

新しい日本とは単なる復古でもなければまた変貌でもないということと、そしてこの国の国民意識を築きつつある諸力は、西欧の方法とエネルギーの吸収同化であると同じくらい、また古い遣り方の復活でもあるということを指摘しておけば足りる。⁽³⁷⁾

かつて纏められていない、確立されていない「日本美術史」について、まとめようとしている天心の意志の強さが見えてくる。以下のごとく、三つのことを投げかけている。



『岡倉天心全集』岡倉天心著 三卷 平凡社 一九七九年

二〇一五年九月現在で、『国華』は一四三九号を迎える。岡倉天心と高橋健三⁽³⁸⁾（一八五五〜一八九八）が創刊してから二五年目になる。

ここまで『国華』が発刊し続けたことは、文献的に意義があり、創刊の理念が明快なために、多くの人がその意義に賛同し、それを継承することに努力する人がいたからであろう。

天心は、明治二十一年（一八八八）の九月には宮内省に設置された全国臨時宝物取調掛に九鬼隆一により抜擢され、順調なスタートを切っている。

また、東京美術学校校長時代である明治二十三年（一八九〇）から、非職される明治三十一年（一八九八年）までは、絶大な権限を持ち、才能を發揮し、個性的に行動した時である。持論を貫き、無防備な性格により、反感を持たれることもあったであろう。

下記の三点が、天心の美術論（藝術論）が、確立する基礎になるのではないだろうか。

① 日本人が西洋に劣等感を持ち、日本文化に背を向け、西洋の価値観を身につけようという世間の流れの中で、日本の美術を守ろうとし、西洋流に論じることができ、それを実践するエネルギーを持ち合わせていた為に、濱尾新（一八四九〜一九二五）、九鬼隆一（一

八五二〜一九三二）等に才能を認められている。

② 天心の父が、福井藩の武士の魂を持ち、忠誠心と広い視野を持つ人物であり、教育熱心であったことは彼に大きな影響を与えている。幼少のころに横浜の日本人居住区で育ち、身近で外国人に接したこと、英語を習ったこと、玄導和尚に漢籍を習ったことは、彼を東洋と西洋との比較ができる見識と能力が備わった人物に育てられたことが一つの要因であろう。

③ 欧州視察（明治二十年）が、決定的な確信を持たせたのではないだろうか。西洋人の持つジャポニズムには、表層的で危機感も感じたことであろう。それと同時に、西洋と東洋または西洋と日本との違いを身を持って確信したのではないだろうか。そのことによつて、日本美術史を体系付けるといふ使命感が急速に高まったことであろう。

明治二十二年の大日本帝国憲法公布にいたるまでの間の、「天皇大権強化」の時代背景は、彼にとつては文化遺産研究並びに日本美術史を作成するには好機であり、文献・作品を自由に調査し研究し、分類ができたであろう。

2 天心が伝えたこと

無記名で書かれた『国華』発刊の辞（明治二十二年十月二十八日）の中に、発刊の意義が確認できる。天心は、論理的に美術を語る必要を切実に感じて、高橋健三と「国華社」を創設して、美術雑誌『国華』を創刊するに至った。

「文体、内容から推して天心の文章と判断される。「国華社」でも天心の執筆とされてきている。⁽⁹³⁾」

公の立場であつたので、天心は無記名で執筆したのである。水尾比呂志氏の『国華の軌跡』の「創刊事情」には、高橋健三の合作ではないかという記述がある。しかし、ここでは天心の文として論を進める。

夫レ美術ハ国の精華ナリ。国民ノ尊敬、欽慕、愛重、企望スル所ノ意象觀念、渾化シテ形相ヲ成シタルモノナリ。⁽⁴⁰⁾

美術にたして高い理想が語られている。美術は、国にとって、もっとも重要であることを述べている。

其特色特質ヲ保持開發シテ光輝ヲ無窮ニ垂レ責育^{ほんいく}ヲ四垠^{しこん}ニ伝フルハ、洵^{まこと}ニ現在ノ急務重任ニ非スヤ。

茲^{こゝ}ニ国華ヲ發行シ聊^{いさ}カ美術ニ関スル奨励、保存、監督、教育等ニ就イテ意見ヲ吐露

シ、絵画、彫刻、建築及諸般ノ美術工藝ニ就イテ保持開達ノ方針ヲ指示シ、国民ト共ニ邦国ノ精華ヲ發揮セント欲スルナリ。⁽⁴¹⁾

ここに『国華』を発行して美術に関する奨励、保存、監督、教育などについて意見を率直に述べて、絵画、彫刻、建築、美術工芸について保持し発達させる方針を指示して国民と共に日本のもつともすぐれているものを發揮しようと望むものであると美術雑誌の必要性を説き、国民皆に開かれた美術を訴えている。

その後には、「試二問ハン」として、「美術行政ノ法」「美術奨励ノ道」「美術保存ノ方法」などについて述べ、まだまだ問題点があることを言う。

「次ニ美術ノ実相ニ就テ」述べ、彫刻、建築、美術工芸について、率直に述べている。また、美術の全体像、未完成の東洋美術を明らかにしてほしいと真摯に語りかけている。

かつて纏められていない、確立されていない「日本美術史」について、まとめようとしている天心の意志の強さが見えてくる。以下のごとく、二つのことを投げかけている。

美術的学業ノ景勝ヲ觀察セヨ、東洋美術史ハ猶未タ精確ナラス。

誰力能ク史筆ヲ執テ本邦ノ上古韓漢及中亞細亞諸邦ト交通往来シテ得タル所ノ

美術的性質ノ包含ヲ分析シ、其来歴沿革ヲ詳叙スルモノゾ。

誰力能ク目ヲ刮シテ呉道子、夏珪、馬遠等伝来ノ墨宝ハ之ヲ支那歴代ノ重宝ニ参照シテ、果タシテ唐宋名賢ノ妙蹟ナリヤ否ヤヲ審判スルモノゾ。

而シテ誰力能ク精緻縝密ノ出版ヲ以ツテ、本邦美術ノ粹ヲ抜き精ヲ萃メテ衆庶ノ鑑賞ニ供シ外邦ノ展覽ニ資スルモノゾ。⁽⁴²⁾

ここに二つの提言をしている。これによって、天心の心の中にある膨大な研究内容が垣間見られる。

一つ目は、現今の美術の学術的研究の様子を観察せよ。東洋美術史はまだ、精しく確かなものになっていない。だれか、美術史を書いてわが国が上古から朝鮮や中国および中央アジアとの往来して得た美術的性質を包含してきた沿革を詳述してくれ。

二つ目は、だれか目を見開き、⁽⁴³⁾ 呉道子、⁽⁴⁴⁾ 夏珪、⁽⁴⁵⁾ 馬遠などの伝来の墨宝は、支那歴代の重要な宝を参照して果たして唐・宋のすぐれた墨宝かどうか審判してくれ。

三つ目は、だれか、綿密に調べあげた出版物で、わが国の今までの美術の優れたものを抜きだし人々の鑑賞に供し、外国での展覧会に役に立たせてくれ。

ここにも未来の人々に期待している天心の姿がある。天心は、現地で調べ上げ、学生の前では講義し、後輩の教育にも熱心であり、なお、将来への期待をするための啓蒙も行い、最後には、美術の意義を唱えている。

美術ハ秀麗ノ美玉ナリ、玉磨カサレハ光ナシ。美術ハ文化ノ芳花ナリ

このように天心は、国民の美術であることを高々に訴えている。

3 『国華論攷精選』⁽⁴⁵⁾

『国華』創刊から百年後に創刊百年の記念として、投稿した諸家の論文を『国華論攷精選』(上・下巻 一九八九年)にまとめている。

① 諸家の論文を二巻に集成すること。

② 展覧会の開催。

③ 未掲載の名品を選び、解説もしくは論文を添え『国華』特別号を刊行する。

4 「国華賞」の創設

②の展覧会のテーマは、「室町時代の屏風絵」である。水墨畫系と大和繪系とを対比照合し、それぞれの様式の流れ、和漢融合の問題について作品を前にして考えてみたいと企画している。

「国華賞」の創設は、岡倉天心・高橋健三(一八五五〜一八九八)の提唱した『国華』創刊の主旨とした日本・東洋美術に関する研究論文の優秀作品を顕彰し、その学を促している。天心の理想はここでも生きている。

現在まで続いている『国華』(一八八九年創刊)は、わが国最古の学術的美術雑誌である。一八五九年発刊の『ガゼット・デ・ボザール』(『Gazette des Beaux-Arts』フランス)に次いで的美術雑誌であるが、『ガゼット・デ・ボザール』は二〇〇二年に休刊となっているので、現在まで継続する雑誌としては最も古い美術誌である。

創設者である岡倉天心は、国民向けに、多くの人にへの啓蒙と日本の美術は西洋に劣らないこと、しかし、日本の美術史はわからない部分が多い。研究する人がでたら調べて明らかにしてほしいと、将来の人に呼びかけている。その事は、天心自身も、模索の最中であることを物語っている。

第五節 『国華』創刊号「圓山應舉」⁽⁴⁷⁾

*本文では「圓山應舉」を「応挙」で統一する。

1 応挙(一七三三〜九五)の流派

『国華』の創刊号に「圓山応挙」を天心が選んだ理由はなんだろうか。文頭に「應舉ノ起ル豈夫レ偶然ナランヤ探幽ノ反動此ニ出テサルヲ得サレハナリ」と応挙が生きた時代背景と徳川の太平の時代に沸き起こる国民(民衆)の新しい文化の渴望が、応挙を生み、

当時の人々に新鮮さを与えたのは応挙の絵画である。天心は本稿で、その時代を徳川体制の中での応挙について細やかに説明しているが、絵師になるまでの応挙の履歴、転々と職業を変えつつも勤め先では習得するものを得て、独自の手法を研究して確立する姿も書いている。

幕府奥絵師狩野 典信⁽⁴⁹⁾（一七三〇〜一七九〇）と住吉 広行⁽⁵⁰⁾（一七五五〜一八一二）、および宮廷絵師土佐 光芳⁽⁵¹⁾（〜一七七二没）と光貞⁽⁵²⁾（一七三八〜一八〇六）の四家が指導的役割を務めた時代であったが、天明八（一七七八）年に京都に大火が起こり、広く焼き尽くされ、応挙も多くを失うことになったが、その後、御所の造営にあたり、一門と共に障壁画制作に参加し、力を発揮することになる。

天心は応挙の画歴から以下のごとく四期に分けている。

第一期ハ⁽⁵³⁾石田氏ニ從フテ狩野ノ骨法ヲ學ヒ號シテ仙嶺、懷雲、雪亭、一嘯ト稱シタル時はナリ。

第二期ハ舜舉、仇英等ノ古蹟ヲ臨摸シ、^{モツ}主ハラ明人ノ清艶肅疎タル所ヲ愛シ、初テ^{アザナ}応舉ト稱シ仲選ト^字シタル時はナリ。

第三期ハ花鳥山水^{モツバ}專ラ意ヲ寫生ニ致シ初テ圓山派ヲ起シタル時はナリ

第四ハ晩年ニ属シ圓山派成テ既ニ幾分ノ規矩ヲ生シ、多少自家ノ骨法ニ檢束セラ⁽⁵⁴⁾ル、ノ時はナリ。

第一期は師匠の石田氏に習い狩野派の基本となる規矩を学んで、号を仙嶺、懷雲、雪亭、一嘯と言った時のことである。

第二期は中国の舜舉、仇英等の画を模して清らかで艶やかで侘びしい様子を愛し、初めて応挙と称した時期で、応挙の名は、宋末元初の画家錢舜舉の舉に応じるという意味でつけられた。

第三期は花鳥山水を写生し、圓山派を起した時

第四期は晩年に属し、圓山派の規矩が生じた時

天心はこの四期に注目して以下のごとく嘆いている。

此第四期ニ至リテハ筆熟シ意至リ瀟洒飄逸ノ趣アリト雖モ、圓山派ノ亡ブル前兆既ニ顯レタルモノト謂フヘシ。悲哉、美術ハ變幻不識ノ靈妙ヲ備ヘ常ニ活動シテ止マサルモノナレハ、一タヒ静止スルヤ忽チ其皮相ノミヲ存シテ精神ヲ失フモノナリ。⁽⁵⁵⁾

この第四期にいたっては筆が熟して意のままに表現でき、艶やかで飄々とした趣があつて

も圓山派の亡ぶる兆しがある。悲しいことである。美術は常に研ぎ澄まされた心を備え、常に活動することであり、止まればたちまち、表面だけで精神は空っぽになってしまう。

2 応挙に勝る絵師はなし

その後には、日本の美術の流れを見て、やはり、応挙のみであるとまで言い切っている。

本邦美術ノ潮勢ヲ觀レハ寧楽^{ナラ}ノ雄麗、平安ノ秀雅、鎌倉ノ快活、東山ノ清爽、桃山ノ豪華固ヨリ波瀾ノ大小起伏ナキニ非サレトモ、探幽^ト以後ニ倒瀾ヲ挽回シタル者ハ応舉ニ非スシテ誰^ニソ。

日本の美術の勢いを見れば、奈良時代のうるわしくきわだつていて、平安時代のすぐれた優雅さ、鎌倉時代の快活さ、東山時代の清らかさ、桃山時代の豪華さは、大小いろんなことが起きてはいるが、徳川時代初めの探幽（一六〇二〜一六七四）以後、過去の時代を挽回できるのは、応挙のほかに居ようか。

天心は何を言っても、誰の名を出しても応挙に優る絵師はいないと言い切っている。

写生ノ新法ヲ發揚シ古來ノ弊習ヲ一洗シタルハ實ニ先生ノ賜ニシテ、百世ノ後歎嗟措ク能ハサルモノ亦此點外ナラス。其事業ハミレ^レ、コロ^ー等カ佛國畫院ニ反動シテ一種清淡ノ寫生流ヲ開キタルト同様ナレトモ、其成績大ニ之ニ超過スルモノ、如^シシ。

新しい写生の方法を輝きあらわし、今までの悪い風習を洗い流すことは、応挙のお陰で、代々の後、放って置くことができないうことで、此のことはフランスのミレー、コロ^ーも清淡を開いたけれども、それよりも大いにすぐれたものである。

弊習とは流派ができると規則（^{きく}規矩）ができ、その規則が芸術に必要な自由な考えがなくなり、個性がなく、人々が感動する作品ができなくなることを言っている。形はまねても精神がそこにはなくなり、技術だけになることを訴えている。

先生ノ畫品ハ山水ヲ以テ最上トス。翎毛、花卉、鱗甲之ニ次ク。人物、道釋又之ニ次ク。山水ハ専ラ平安近傍ノ煙嵐ヲ收攬シ、明媚秀麗ニシテ且温淳ナリ。古土佐以外ニ大和山水ノ新面目ヲ畫キタルハ獨リ先生ニ於テ之ヲ見ルノミ。人物ニ至リテハ意ニ明人ノ氣臭ヲ脱セス。動モスレハ蕪村流ノ惡癖ニ陥ラントス。応舉一代ノ制作ノ趣致ヲ挙ケテ之ヲ評スレハ、寫生ノ長所アリテ又其短所アルモノ、如シ。七難七福ノ畫卷ヲ開キタルモノハ必ス其長短ノアルトコロヲ認ムヘシ。而シテ美術上ノ形相ヨリ之ヲ見ルトキハ応舉ノ畫風小品ニ適スルモノニシテ大作ヲ為スニ適セス。蓋シ雄大ノ畫面ニ充満シ之ヲ數歩ノ外ニ掛ケ遠ク隔テ人ヲ感動セシメントスレハ、

一層豪健ノ筆ヲ下シ深潤ノ濃淡ヲ施シ重厚ノ著色ヲ為サ、ルヘカラス。然レトモ応舉ノ小品タル所以ハ、其探幽ノ反動タル原因ニ由来セルモノナランカ。円山四条ノ子弟、単ニ師家ノ齋疎ヲ守リテ、別ニ發達セサリシハ惜ム可キナリ。然レトモ固ヨリ應舉ハ應舉ヲ以テ見ルルヘキモノニシテ、清艶爽麗ナル特色ハ飽クマテモ稱賛シテ後世ニ傳フヘキナリ。花ヲ以テ之ヲ比セハ、応舉ハ其レ紫藤花ナラン歟。⁽⁵⁸⁾

ここは最後の部分であるが、応挙は応挙を以って見るべきで清艶爽麗の特色はあくまで賞賛して後世に伝うべきで花を以ってくらべれば、応挙は紫の藤の花であろう。画かかれて「藤花図屏風」がある。複雑に絡み合う樹木に蔓が絡み合い、自由な流れのなかにあり、しだれてはいる藤花も伸びやかに自由である。空間が気持ちのいいほど広がりがあふ。天心は応挙の画に、新鮮さや挑戦する姿を感じ取り、型に嵌らず、死ぬまで絵師として、美を追求している姿に感動している。当時（明治）の人々にも期待をこめて、創刊号に「圓山応挙」を載せたのである。また人々を啓蒙するための創刊号にふさわしい人物である理由からであろう。

【参考】

* 『国華』 美術雑誌 明治三二年（一八八九）天心、高橋健三らと創刊した豪華美術雑誌 のちに出版権を朝日新聞社に譲渡して、今日まで続いている。

第六節 第三回内国勸業博覧会での審査報告

1 明治期を三期に分類

明治三三年に日本画において、天心は明治期を三期に分け、日本画を中心に東京美術学校を運営していくことになる。以下のごとく、『審査報告』に、執筆している。（明治二四年二月二五日）

第三回内国勸業博覧会（明治三三年四月一日〜七月三十一日）での審査報告である。以下抜粋する。

破壊の時期

第一ハ明治初年ヨリ明治八九年ニ至ル、即チ称シテ破壊的ノ時期ト云ハン。当時本邦画ニ従事スルモノハ屯難困頓、殆ンド糊口ノ道ヲ得ズ。是ニ於イテ尽ク其業ヲ廃スルニアラザレバ、即チ転ジテ西洋画ノ糟粕ヲ嘗メ、或イハ去テ文人画ヲ模倣シ、空シク模倣シ空シク奇怪ヲ事トシ、徒ラニ蕪雜ニ陥ル。其狀況専ラ古物ヲ破壊スルヲ力メ、千古ノ宝器タル蒔絵類ヲ碎キテ其粉金ヲ剥採スルノミナラズ、時トシテハ名画ノ裱装ヲ焼キ金欄ノ集余ヲ拾フニ至ル。況ンヤ其画家ヲ遇スルニ於テ⁽⁵⁹⁾フヤ。

破壊の時期がいかにかに人としての節度もなく、西洋画家になったり、文人画を真似ている

ことを憂い、ただ生活を維持することを目的として、貴重な作品を壊したり、金粉を集めたりしていることを怒りを持って、空しくて、けしからぬと時期であると語気を強めている。

保存の時期

明治一〇年頃ニ至リテ、日本画ハ其第二期、保存ノ時期ニ進ムヲ得タリ。当時専ラ頽敗ノ後ヲ受ケ、銳意古法ノ修養ニ従事ス。即チ明治十四年、第二回博覧会及ビ其後ノ絵画共進会ノ如キハ此時期ノ結果ニシテ、其審査ノ如キモ主トシテ流派ノ純正ヲ保タントシタルモノ、如シ。然レドモ保存ノ念勝チテ進取ノ途ヲ塞ギ、而シテ模倣ノ風一変シテ開達ノ心ヲ起スハ自然ノ勢ナリ。⁶⁰

保存の時期は古きものに専心して学び、優れた人を形成しようとする。明治十四年、第二回博覧会とその後の絵画共進会などは、このような時期で、その審査も主として流派の純正（混じりけがなく純粹）を保とうとしたものである。保存の念が勝ち、模倣から知性・知識を広く行き渡らせる心を起こしたのは、自然の勢であると評している。

開発の時期

古人ハ我ヨリ古ヲ成ス。吾人ガ画家ニ望ム所ハ更ニ進テ、新画世界ヲ発見スルニ在ルノミ。然レドモ前者ノ巧妙ヲ棄テ、突然大家タルノ地位ニ至ルモノ、未ダ嘗テ之アラザルナリ。今日ノ要ハ飽クマデ古法ニ依テ保存シ、而シテ更ニ開達ヲ試ムルニアリ。則チ左ニ将来注意ノ要点ヲ述ベンニ、

- 第一、最モ必要ナルハ自主ノ心是ナリ。
- 第二、最モ注意スベキハ古法ヲ失ハザルコト是ナリ。
- 第三、必要トスル所ハ精神是ナリ。
- 第四、最モ必要スベキモノハ技術是ナリ。
- 第五、今日ノ画体上殊ニ欠点トスル所ノモノハ品位是ナリ。
- 第六、将来ニ発達スベキモノ極メテ多シト雖モ、先ツ其重要ナルモノハ歴史画及ビ浮世画是レナリ。⁶¹

天心は、画家に望むことはさらに進んで、新しい画の世界を発見するのみであるが、しかし、古人のすばらしいものを棄てて、突然その道にすぐれた地位にいたることは未だもつてあることはないものであるから、今日必要なことは古いやり方は保ち、さらに発達するように試みることにある。すなわち六個の注意の要点であると述べている。

第一は自主性、第二は古きは失わないこと、第三は精神が重要、第四は技術である。第五は品位が重要である。第六は将来に発展させるものは歴史画と浮世画であると述べて

いる。

日本画の画家としての心構えを語っており、自主性、品位を重要視して、先達の築き上げた古いきまりも重要視し、それを学び、なおかつ画家自身の個性と技術を高めることであると述べ、将来に発達するものは多くあっても、歴史画と浮世絵であると、天心の日本画にたいしての重要性を語っている。日本の新しい美術を育てようとしていることが推察できる。

【参考】

内国勸業博覧会とは、明治期に殖産興業政策の一環として開催された博覧会である。明治一〇年（一八七七）に内務省が創設、明治一四年（一八八一）以降は農商務省が所管、一九〇三年まで開催している。

第七節 「日本美術史」の講義

1 三つの提言

明治二二年に高橋健三と国華社を創設して、美術雑誌『国華』を創刊して「発刊の辞」を述べているが、その中で、かつて纏められていない、確立されていない「日本美術史」について、まとめようとしている天心の意志の強さが見えてくる。以下のごとく、三つのことを投げかけている。

- ① 誰力能ク史筆ヲ執テ本邦ノ上古韓漢及中亜細亞諸邦ト交通往来シテ得タル所ノ美術的性質の包含ヲ分析シ、其来歴沿革ヲ詳叙スルモノソ。
 - ② 誰力能ク目ヲ刮シテ吳道子、夏珪、馬遠等伝来ノ墨宝ハ之ヲ支那歴代ノ重宝ニ参照シテ、果タシテ唐宋名賢ノ妙蹟ナリヤ否ヤヲ審判スルモノソ
 - ③ 而シテ誰力能ク精緻縝密ノ出版ヲ以ッテ、本邦美術ノ粹ヲ抜き精ヲ萃メテ衆庶ノ鑑賞ニ供シ外邦ノ展覧ニ資スルモノソ。⁽⁶²⁾
- (本稿では便宜上、①②③と番号を付した。)

意識をすると、次のようになる。

1、(現今の美術の学術的研究の様子を観察せよ。東洋美術史はまだ、精しく確かなものになっていない。) だれか、美術史を書いてわが国の上古から朝鮮や中国および中央アジアとの往来して得た美術的性質を包含してきた沿革を分析して、日本へ来た歴史・沿革を詳述してくれ。

2、だれか目を見開き、呉道子、夏珪、馬遠などの伝来の墨宝を、支那歴代の重要な宝と

参照して、果たして唐・宋のすぐれた墨宝かどうか審判してくれ。

3、だれか、綿密に調べあげた出版物で、わが国の今までの美術の優れたものを抜きだし、人々の鑑賞に供し、外国での展覧に役に立たせてくれ。

この三つの提言は天心の考える膨大な研究内容が垣間見られる。未来の人々に期待している天心の姿がある。ここからわかることは、その後の「日本美術史」の講義『東洋の理想・『日本の目覚め』の創刊、「泰東工藝史」の講義に繋がっていったことである。明治時代という国作りが始まるその時こそ、「日本美術史」も早急に作り上げなければならぬ時期であったと天心は考えていたであろう。「日本美術史」を作成することにより、大系的に形が整い、その後の日本日美術史の研究に影響を与えた。

「日本美術史」について、の解題・解説に木下長宏の説明では、

「東京美術学校一覽」によると「美術史」と「美学及美術史」と記されており、日こんにち「日本美術史」として伝わっている講義はこの科目名のもとに行われたと考えられる。(現在、遺っている学生の筆記録にも「日本美術史」と題されているものが多い)。

天心はまたこの講義を明治二十三年から二十四年、二十五年と三年間にわたっておこなったことが確認できる。⁽⁶³⁾

美術史というものがないので、以下のように東京帝国大学の学生たちにも講義ノートは、貴重であったようである。

東京帝国大学にも日本美術史を講義する学者がいなかったので天心の講義ノートは学生のあいだで、珍重され、(中略)その筆記を借覧した。⁽⁶⁴⁾

日本で始めて試みられた大系的な、古代から近代へとわたる美術史である。当時の多くの学生がこの講義を受けたと思われる。

東京美術学校での講義の「日本美術史」は、天心の美術史の概念を構築できた活気的な「日本美術史」である。この美術史ができたことで、「稿本日本美術史」も再構築できたものと考えられる。晩年には、東京帝国大学で講義した「泰東工藝史」もこの「日本美術史」を基礎として、工藝を含めた話を構築して完成させている。東京大学からは「東洋美術史」の講義名での依頼であったが、天心はあえて「泰東工藝史」と題して、講義している。

天心の考えは、あくまでも「東洋」全体として、考えていたのだろう。

第八節 近代の「日本画」の確立

1 近代の日本画を具現化した学生たち

天心は近代の「日本画」を確立させて、過去の流派の画ではない、近代の日本画を形作った。しかも画家たちには自由に創作方法、発想、色合いなど、本人の個性を重要視して、過去の一つの流派に縛られることなく、西洋の画からも学び、日本の歴史も深く学ぶことを教授して、独自の発想と創作は本人に任せた教育者でもある。しかも日本画に必要な「美術史」を自ら試行錯誤して、組み立て、美術史の授業をしている。天心の方針は、画家の個性を重要視して作品作りに専念させることにあつた。筆者は美術の専門家ではないが、画を觀賞する感性を通して、三人の絵画を評する。以下、横山大観・下村観山・菱田春草の東京美術学校卒業制作画、美術院を創設後の画、天心が物故した直後の画を考察し、天心は過去の画を学びながら、日本という枠に捉われない画を学生たちに示唆したのだろう。

①横山大観（一八五二〜一九三一）

《村童觀猿翁》

明治三一年ごろになると日本画もまた成長して、連袂辞職をした横山大観は、「創造の世界 画はひとなり」の中では「——作家がその考えを持たず、いつまでも日本というだけの頭でいては駄目です。芸術も世界を包含したものでなければなりません。筆を持って画を習うことはそう大騒ぎをしなくてもよいのです。それよりも人物を作ることが大事で、それを土台にしないことはいくらやつても駄目なことです。⁽⁶⁶⁾」と伝えております。

大観の東京美術学校の卒業制作画も自由に伸び伸びし、西洋画の遠近法も用いて描いている。



《村童觀猿翁》（明治二六年）

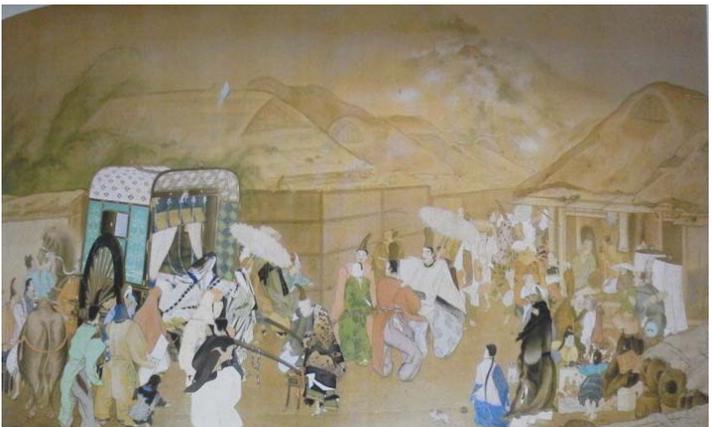
二〇〇六年 九頁転載

この画は教授である橋本雅邦が猿回しの翁、村童たちは同期(6)の十一人で、それぞれが幼かったころを想像しながら描いたと大観は語っている。生き生きとしたこの画は、画学生が橋本雅邦に猿まわしの猿のように厳しく指導されたようにも思われ、こっけいさがある。また大観の幼い時の心の中を覗いたような一枚の画である。洋画の手法も取り入れているような写実的である。また天心の言う「将来注意ノ要点」の第一の「最モ必要ナルハ自主ノ心是ナリ」(8)を実践していることが推測できる。この画は八六点という最高点であった。

② 下村観山（明治六―昭和五（一八七三―一九三〇））

《熊野観花》

下村観山は天心を尊敬し、研究熱心であった。洋画の模写にも挑戦して、新しい日本画を模索した。《熊野観花》は卒業制作画である。大和絵の絵巻ものを大画面に表現している。西洋画の奥行きもある。



《熊野観花》明治二七年

東京芸術大学蔵『下村観山展』横浜美術館 二〇一三年 三〇頁

東京美術学校卒業制作 美校授業成績物展覧会に出品

「本主題は平宗盛の愛妾であった熊野御前を主人公とした物語。熊野は病に倒れた老婆に会うため、暇を願ったが許されず、清水の花見に赴く。その宴で一さし舞い、——いか

んとせん都の春も惜しけれど、なれし東の花や散るらむ――

と読んで宗盛に差し出すと、さすがの宗盛も心動かされて暇をあたえた。

本図は熊野が気の進まない花見に向かう途中、重い足どりで牛車を降りる場面は平家物語から主題を取り上げている。⁶⁹⁾――

画に引き込まれ、物語が心の中で想像でき、次の場面を描くことができる。共感が得られる画である。

③ 菱田春草（一八七四～一九二二）

《寡婦と孤児》

夫と死別した未亡人とその子どもを描き、手前の甲冑と左上のぼろぼろの簾が悲しく映り、見ている者までこの女性と子どものいく末を心配してしまう画である。当時、日清戦争（明治二十七年七月二五日～明治二十八年四月一七日）の時で、非常に論議があり、美術学校内でも、橋本雅邦と天心は賛成、福地福一等は反対の立場で、論争があつたが、卒業合格となつた作品である。歴史画であるが、洋画の手法も感じられ、新鮮で美しい画である。奥行きのある空間を感じる。卒業制作画としては、飛び抜けた個性ある作品である。他の二人（横山大観・下村観山）の画には、多くの人間をいろんな角度から書いているが、この画母子の二人であり、画の物語を思い起こさせ、観賞者の想像が働く画である。

『菱田春草』 明治神宮 平成二十一年 二七頁 転載



東京芸術大学蔵

東京美術学校卒業制作画 明治二十八年（一八九五）

菱田春草解題では、「背景描写には西洋画的要素を見てとることができる。和洋折衷印象を与えるで、この時代の潮流を示す作品である。⁷⁰⁾」と評している。当時、かなりの論争があつたということは、春草の世間にも媚びない強さと今後の美術界の進む道、自由で個人的な画を暗示する。

2 日本画と西洋画の混乱期

三人の画家の画を紹介したが、それぞれが、それぞれの過去の画風を研究して、天心がいう「最モ必要ナルハ自主ノ心是ナリ。」(第六節八九頁)をよく解釈して、古きも学び、しかも新しい洋画の手法も取り入れていることがわかる。

天心はいつも現在が突然あるのではなく、過去(歴史)があつて今があることを常に述べていて、その裏づけが日本美術史を作ることであり、東京美術学校でも校長でありながら自ら教壇に立ち、学生たちに熱心に日本美術史の授業をしている。

「日本美術史」の総叙の最後に「余は諸君に勸むるに、左の數言をもつてせんと欲す。いたずらに古人に模倣すれば必ず亡ぶ。系統を守りて進み、従来のもを研究して、一步を進めんことを勉むべし。西洋画、よろしく参考すべし。しかれども、自ら主となり進歩せんことを。」

この「日本美術史」は東京美術学校の校長になつた明治二三年の講義である。この内容を横山大観、下村観山、菱田春草等、多くの学生が理解していたであろう。かれらは新聞、雑誌などの批評などもそれほど気にはしていなかったのではないかと岡倉天心研究をしている中で確信する。彼らは自信を持つて画家の考えを主題、構図、色彩と自由に描いたのである。その点では過去の流派の画家でないことも確かである、これこそ、天心の訴える近代の日本画であろう。

近代の「日本画」の確立よつて日本画を後世に継承し、特に歴史画・自然を個性を持つて表現したことにより、日本人の感性を視覚的に、聴覚的に表現することを指導して、歴史画薦め、一般の人が享受できる絵画が誕生したことになる。

明治四〇年代になると益々日本画家、洋画家ともに影響しあうようになる。その七月、天皇が上野公園での東京勸業博覧会をご覧になり、東京美術学校校長の正木直彦(一八六二〜一九四〇)にたいして、「出品された日本画の中で、我が国の伝統的な手法によつて描かれたものは何枚あるか。また、すべて西洋画の手法を用い毛筆によつて日本画に擬したもの、さらに日本画の手法と西洋画の手法を折衷したものは何点あるか」とお尋ねになり、正木(第五代東京美術学校校長)は即答できなかつたとある。

絵画が、当時の人々に大きく影響してきたと思われる。

一般庶民も混乱に陥りはじめたころと考えられるが、天心にとつては自然の成り行きと考へたのではないだろうか。

「日本画も洋画も区別する必要がなく日本人の描く絵画を「ひとつ」にするべきあるという議論もあつた。岡倉天心、黒田清輝、菱田春草らは表現の違いこそあれ、そうした考へを示した人々たちである。」

明治四〇年(一九〇七)六月五日に、「文部大臣牧野伸顕のもとで美術審査委員会管制が公布され、第一部(日本画)、第二部(西洋画)、第三部(彫刻)の三部が設置される。

天心は旧友である牧野に意見を具申した。⁷⁴」

日本画と洋画の規定が、あいまいになった時に、文展では、三部に分け、部門を定着させた。天心にとっては、納得がいかなかったであろう。

第九節 カタログ「美術院——または日本美術の新しい古派」

1 藝術は国民のものであり、画家の個性の表現である。

明治三十七年（一九〇四）四月にニューヨークのセンチュリー・アンシエーションで開かれた横山大観・菱田春草展のカタログに掲載された。また、その中で、天心は以下のよう述べている。

「美術院は、——これら二つの動き——擬古典主義と擬ヨーロッパ主義——に対する抗議の運動である。われわれは、藝術とは国民的なものでなければならず、伝統から切り離されてしまえばわれわれは亡びるのである」と主張するが、しかし同時にまた、個性こそが活力の本質であるとも考える。われわれは古人になりきろうともしないし、近代的に見せかけようとも試みない。自己に忠実であること、自己の感ずるものを表現すること、これがわれわれの基準である。したがって、われわれの仲間の様式はきわめて多様である。ただ、全体として見れば、おおむね、徳川の初期の頃に守景や光琳が残した糸を拾い上げたと言える。

「美術院または日本美術の新しい古派」⁷⁵

ここでは、天心の理念をわかりやすく説明している。本文は英文でかかれた西洋の人々への訴えであるが、多くの新聞記事の評価は好評で成功裡で締めくくっている。日本語でもまったく同じ内容の演説文がある。そのことは天心の理念そのものであり、同じ事を大衆に訴えているものであろう。

この作品展は三週間も開催されている。

カタログには「The byitsuin or The New Old School of Art」 「美術院——または日本美術の新しい古派」と書いてあり、ニューヨークの人々に好意的に受け入れられたようである。また天心の考えは美術院創設時の六年前と変わっていない。

芸術は国民のものでなければならぬこと、伝統を重んじ、画家自身の個性を表現するものでなければならぬと語りかけている。

第一〇節 「絵画における近代の問題」の講演

1 絵画と社会それ自体との関係

天心は一九〇四年（明治三十七年）年九月にセントルイスで開かれた万国博覧会における

講演会（絵画における近代の問題 高階秀爾訳）で以下のように述べている。

この講演は慎み深く丁寧な文であるが、二つのことを詳細に説明し訴えている。

一つは個々の画家に関する問題と、二つ目は社会に関する問題とを区別して講演を進めている。一つ目の個々の画家に関する問題で、

絵画の発展はそれぞれの国でそれぞれに異なった自然の捉え方を生み出して来ましたが、自然に対する根本的な関係は決して断ち切られたことはありません。なぜなら、身体が魂の一部であるように、自然は芸術の一部だからです。——私が言いたいのは、画家の問題は個人的、主観的であり、自己の個性を表現する手段は完全に画家個人のものであって、何ら外部からの干渉を許されないということです。⁷⁶

絵画に対して写実的であることか理想主義であるべきだとか、色彩の配合とか光の調子がどのくらいとかは画家の問題であると言い切る。

二つ目は、

社会が適切に議論することの出来る絵画の近代的問題とはなんでしょうか。それは絵画と社会それ自体との関係だ、というのが私の答えです。

社会は藝術が生み出されるための条件を規制します。社会は藝術家を要求することは出来なくても、人間を要求することは出来ます。技法を押し付けることはできなくとも、主題を、そしてある程度までは理想を提供することができます。製作者と観衆との間の暗黙の理解のなかにこそ、双方の喜びがあります。——呼びかけが人間的であればあるほど、それだけ応答は普遍的な深いものとなります。しかしながら、社会的条件は藝術の自由な発達につねに好意的であつたわけではなく、逆にしばしば藝術をおしつぶそうとし、時にはそれに成功してきました。——多くの人々が社会の圧力に苦しみ、屈服してしました。今日でも、多くの人々はその運命に苦しみ屈服しかけています。⁷⁷

近代的問題は絵画と社会それ自体との関係であると天心は述べ、人間的であればあるほど、普遍的な深いものになるとも付け加えている。

日本画と西洋画を問わずに、画家は藝術との葛藤と世間との葛藤であるとさらにふれ、「藝術との戦いは喜びになり慰めになるが、世間との戦いは永遠の苦るしみ」⁷⁸であると結んでいる。

わたしは、我々がなぜ絵画においてまで、他のあらゆることにおけるのと同様、あなたの方の真似をするよう努めなければならぬのかという不審の声をしばしば聞きました。しかしながら、われわれがあなたの方の生活方法と文化を前面的に取り入れ

たのは、単に選択の問題ではなく必要の結果でした。「近代化」という言葉は、世界の西欧化を意味します。——アジアの地図は工業主義、商業主義、帝国主義、その他何にせよ、近代精神がなげかけた魔力の下に屈服した多くの古い文明の悲しい運命をよく物語っています。⁷⁹⁾

保守派の日本画に対して、個性を破壊するような模倣する態度に抗議すると述べ、新派の日本画を維持することは容易なことではなく、また西洋文明の富を拒否することは望まないが、西洋の方式を取り入れ、普遍的な絵画になることに努力していると述べている。国内でも古い勢力と戦い、西洋の影響もいかに自然に取り入れていくことも述べている。

近代の問題として、「近代化」は必要の結果であるが藝術に関しては個性が藝術家に求められ、時には社会が藝術家を押しつぶしてしまうと嘆いている。「近代化」は日本にとって必要であったと認めながらも他のアジアの国々も古い文明として追従してしまうことを嘆いている。日本を含めてのアジアは自然と共に生きてきたことを訴え、齒がゆい気持ちでいることも伝えているのではないだろうか。

物質主義として押し寄せてくる西欧化、絵画にも西洋文化を前面的に受け入れるのが良いと信じ、それが「近代化」であると日本国民の多数の意見になってきている。しかし、それは自国の文化を顧みることなく、東洋人の暮らし方、生き方を捨て去り、ひたすら西洋の後を追う東洋・日本であってはならぬとの思いと問題点を伝えている。また日露戦争の最中であり、言葉を選んで話を進めている。

以下は観衆と芸術家の関係で茶の湯に置き換えている。

共感の藝術を完成する真剣な試みとして茶の湯が広く行われていた時代のもので、皆様も当然お気づきのことと思いますが、茶の湯は儀式ではないからこそ儀式と呼ばれるものです。それはこの俗世のさまざまな事実を、調和を保ちながら味わって行くための重要な方法です。客と主人とはいっしょになって部屋の統一と会話のリズムを創り出して行かなければならないのです。⁸⁰⁾

「絵画における近代の問題」の講演の問題点の一つは、画家自身の問題、二つ目が社会と画家の問題、社会の鑑賞者との「共感」が必要で、その「共感」が人間的であれば、より深くなることを、繰り返して述べている。この講演が、天心の思想が決定したと云われている。

【参考】

*セントルイス万国博覧会（四月三十日～十一月二九日）での講演（「絵画における近代の問題」） 明治三十七年（一九〇四年）九月二四日に 本講演は翌々年の一九〇六年にボストンとニューヨークから発行された「Congress of Art and Science, Universal

Exposition, ST. Louis, 1904, vol. 111ⁿに収録されている。

『岡倉天心全集』別巻 岡倉天心著 平凡社一九八一年 四二二頁

第二一節 ポストン美術館中国日本部の仕事に協力する婦人たちへの談話

1 「美術品を皆様の共感で喜んで頂きたい」

明治三八年（一九〇五）、二月一日、「ポストン美術館の中国日本部の仕事に協力する婦人たちへの談話」（以下、「婦人たちへの談話」と呼ぶ）から始める。

この談話は、「第二回目のポストン滞在中（一九〇五年十月二十五日～翌年三月まで）に、漆工芸品や金工品を保存するための絹袋を縫いに来ていた婦人たちに、日本美術についての講演の一つと思われる。」と『岡倉天心全集』（二巻 平凡社 一九八〇年）の解題に載っている。⁽⁸¹⁾

この論文では、「婦人たちへの談話」にでてくる「共感」が、『茶の本』の第五章「芸術の鑑賞」⁽⁸²⁾ “Art Appreciation”に重なる⁽⁸³⁾ことを検証する。

『茶の本』は、一九〇六年五月にニューヨークのフォックス・ダフィールド社から出版⁽⁸³⁾されている。それはポストン美術部での「婦人たちへの談話」から約6ヶ月後である。

堀岡弥寿子著の『天心考』⁽⁸⁴⁾によれば、『茶の本』の7つのエッセイのうち、四つは『インターナショナルクォーターリー（ロンドン）』の雑誌で発表され、「芸術鑑賞」はクリテック誌（ニューヨーク）の一九〇六年の五月号に載り、天心の第二回ポストン滞在中（一九〇五年十月二十五日～一九〇六年三月一二日）後のことである。

「婦人たちへの談話」は非常に丁寧で紳士的な協力依頼と感謝、そしてその意義が語られている。

天心の言葉を借りると、ここポストン美術館には世界最大の東洋美術コレクションを所蔵しており、なおかつ、最高の名品の数々であると語っている。これらの名品を六角紫水⁽⁸⁵⁾（八六七～一九五〇）、岡部覚弥⁽⁸⁶⁾（一八七三～一九一八）の二人が調査し、目録を作っていると述べ、名品の修理・手入ができることを歓迎であると前置きをして、以下を語っている。

大変残念なことに、ひとつだけ「しかし」があります。このコレクションには、「共感」に満ちた評価だけが与えることのできる細やかな配慮が欠けているのです。美術品にとって必要なのは、管理ではなく賛美なのです。

今日の私共の願いはまさにそのことです。⁽⁸⁷⁾

この中で、天心は、ボストン美術館には、すぐれた作品が集まっていると述べ、これらの作品がボストン美術館に到着するまでも多くの苦難があったと語り、たとえば、大陸横断の長旅、税関吏たちは、荷物をほどこいても、荷造りはしない、そして、中国と日本の氣候風土・温度も違い、破損や劣化し、当初の入れ物、包装を失ってしまった。すばらしい作品があるだけでは、価値を持たず、「共感」(sympathy)という心を入れることが必要であると述べている。

一七世紀初頭の偉大な美術鑑賞家であり、自ら大名でもあった小堀遠州(68)(一五七九〜一六四七)は「名品に接する時は、強大な力を持つ君主の前に出るごとくせよ」と説きました。厳格な礼法によつてどのような人に対しても、時にはある種の神々に対してさえ、頭を下げることを禁じられているこの世の最高位の方も、茶の湯の儀式においては一幅の絵に礼をいたします。皇女たちは、花器や掛物のために、絹の被いを競つて手ずから作ります。大事な作品は、まずそのの中に安置され、しかる後、少なくとも二重の箱に収められます。時には、聖なるものうち最も聖なる美術品そのものに達するために、五重の箱に収めます。(69)

その作品への接し方を小堀遠州にたとえている。封建制度の中に生きる大名であり、茶人でもある小堀遠州を引き合いにだして、名品は強力な君主に値するので、君主であっても茶の湯においても、頭を下げ、大事な作品は何重もの布や箱に収めると言っている。皇女たちが、絹を縫い、その袋に安置するという言葉は、まさに仏を収めるがごとくである。天心は述べているようである。天心の考えは美を宗教といつてもよいという考えが見受けられる。

長いこと鄭重に保護されて来たこれらの作品が、乱暴に扱われ、壊され、その衣裳と家を、そして、以前には当然のこととして与えられていた愛情深い配慮とを奪われてしまっているのを見て、われわれが悲しい思いをしたとしても、皆様は驚きにはならないでしょう。われわれにとってはそれは、繊細な異邦人たちが難破して荒れ果てた岸に打ち上げられ、嵐と寒さにさらされているのを見るような気がいたします。

これまで皆様のいつも変わらぬ暖かいもてなしに浴してきた私としては、我が国の古い名匠たちがこのように悲惨な状況にあるのに自分だけが安逸を享受し続けるのは、まさに慚死に値する(70)と考えます。

美術館当局に頼めば、材料と裁縫婦を提供してくれるだろうが、「あえて皆様の高貴な指の奉仕をお願いしたいのは芸術の礼拝にともに加わっていただきたいと思っ(71)ているからです。」と述べている。また、なんども、「美術品を皆様の共感で包んで頂きたい」と重ねて伝えている。

丁寧に依頼している姿に心打たれる人たちが、ボストンの上流階層の婦人たちであったのであろう。なおかつ、天心のたとえのうまさも婦人たちの心を掴んだのではなからうか。

われわれにとつては、糸は愛情のシンボル―心と心をつなぐものです。縫うという漢字は、糸が逢うという意味を持っています。人間性という衣服を完成させるために愛情が出会うのです。美しいものを理解するのは、ただ共感を通じてのみです。藝術は心と心の結びつきです。偉大な芸術作品は、性急な、共感を知らない耳には物語を語ろうとはしません。⁽⁹²⁾

ここでは「縫う」という漢字を説明して、芸術作品そのものも、美しいものを理解する「共感」がなければ、語りかけてくれないと伝えている。

芸術鑑賞に必要な「共感」による心の交流は、互いに譲り合う精神にもとづかなければならない。(中略) 茶人の小堀遠州は自身が大名であつたが、次のような忘れがたい言葉を遺している。

偉大な絵画に接するには、偉大な君主に接するがごとくせよ。⁽⁹³⁾

「共感」ということばが、キーワードである。ボストン美術館での奉志する婦人方にはよりわかりやすく、具体的に説明して、感謝の言葉を忘れてはいない。

ボストンの婦人方に伝えて、賛同を求めて、作品の入れ物も作る布地に針をいれることをお願いしている。週に一度か、月に二度ほどであるので、二度目の滞在は、三月一二日までなので、六回〱一回は行なわれていることになる。天心はわれわれの風習に従って、部屋に花を分け、お茶をだしましょうと日本の雰囲気をだそうとしている。婦人たちが奉仕にきている時は、何度か談話をしていたと思われるので、もっと多くのたとえ話もあると思われる。

2 「夫人たちへの談話」と「芸術鑑賞」との共通点

『茶の本』の第五章は、以下の一行から始まる。

「みなさんは「琴馴らし」という道教徒の物語を聞いたことがありますか？」

むかし、竜門（中国の河南省省洛陽県）の山峡にあった桐の木（老樹）で琴を作ったが、どんな琴の名手でも、思うように弾けないこの琴を琴弾きの王者の伯牙がみごとにこの琴を弾き、心が心に語りかける（Mind speaks to mind）からだと伯牙も時の王に話したこととは、このたとえを絵画にも通じることであると天心は付け加えている。すべての「芸術鑑賞」は、伯牙に通ずると説明している。

この章では、「共感」についての話を中心である。

芸術鑑賞に必要な、共感による心の交流は、互いに譲り合う精神にもとづかなければならない。

伯牙の次に小堀遠州について、天心は語っていく。

小堀遠州は、自分が大名であったが、次のような忘れがたい言葉を遺している。「偉大な絵画に接するのには、偉大な君主に接するがごとくせよ」傑作を理解するのは、その前に身を低くして、その一言一句を聞き漏すまいと、息を殺して待つていなければならぬ。

小堀遠州は、頭を下げる必要がない大名である。しかし、最高位の方でも、もつとも聖なる美術品に頭を下げるのであると語り、「今日においても、我が国の真の美術愛好者のあいだでは、それらほとんど崇拜に近い畏敬の念とともに取り扱われてきました。」と語っている。

「芸術鑑賞」には、もう一つ、同じような題材の譬え話がある。やはり、ボストン美術館に來ている婦人たちにお願した御神体を包む柔らかい布の重要性である。またその箱である。

往古、日本人が偉大な芸術家の作品に抱いた崇拜の念は厚かった。茶人たちは、その秘蔵の品をまもるに、宗教的秘密をもってしたので、御神龕(97)―絹の包みで、その中に御神体がやわらかに包まれている。――に達するには幾重もの箱を次から次へと開かねばならないことがしばしばであった。(98)

天心の一貫している考えは、作品と人との触れ合いも「心と心のふれあい」であり、芸術のすぐれた作品の美が最高であるので、最高位の人に出会った態度と心で、接することを訴えている。

「婦人たちへの談話」では、自らの手で、価値ある作品を包むための手縫いをする喜びを味わってほしいと願いを伝えている。「共感」できる心を育てようとしている天心の姿があり、美の崇拜を意識している。

『茶の本』の「芸術の鑑賞」では、語り手と聴き手、芸術家と鑑賞者の「共感」の重要性を書き綴っている。人と人、作品と人、芸術においては、特に、「共感」は同じように持つことができることを伝えているが、現代の問題点にも嘆いている姿がある。

しかし、芸術とは、いかに「共感」が重要で、芸術は「共感」あつての芸術であると、天心は伝えているのではないだろうか。

第二節 天心名の使用について

1 生前は「覚三」名を使用

生前の署名は「覚三」名を主に使用している。しかし、没後の天心研究本の題名には「覚三」名は見当たらない。

「天心」名の使用は何時ごろから、どのような理由で使用することになったかを確認する。

1 天心の本名「角蔵」から「覚三」、そして「天心」へ

父・勘右衛門は、越前福井藩に仕える下級武士であったことは、第一章で述べた。最初の妻みせ女は福井の地で死没したので、継室として越前の野畑氏のこの女を迎えた。

野畑この女は四人の子（港一郎・角蔵・由三郎・ちよう子）を儲け、天心（角蔵）は、文久二年一八六二年二月二六日生れの次男である。後に一七、一八歳ごろに覚三と名乗る。英文書簡・著書などは、「Okakura Kakuzou」の名が用いられた。息子・一雄氏によれば、幾棟もの土蔵があり、その角の蔵で生まれたので、角蔵と名づけられたと語っており、天心はこの角蔵の名は好きではなかったとも語っている。⁽⁹⁵⁾

『東洋の理想』の著名は KAKASU OKAKURA 『日本の目覚め』は、OKAKURA KAKUZOU 『茶の本』は、OKAKURA KAKUZOU である。

一九一三年、天心が亡くなった年の十二月の『ボストン美術館紀要』（第十一卷六十七号）へのビゲロウとロッジの連名での追悼文⁽¹⁰²⁾でも岡倉覚三とある。

書簡には「岡倉覚三」名を主に使用している。筆者が平成二五年の九月二日の天心の命日に染井墓地に焼香してきたが、長方形の立体型石碑には「釈天心」と彫られてある。『父岡倉天心』によれば、「通夜が二日間も行われ、みな木綿の白袴で、本郷の橋本家から谷中の斎場まで徒歩で棺を送った」⁽¹⁰³⁾と述べている。「染井の」墳墓は早崎梗吉⁽¹⁰⁴⁾の考案で、方形の石の表面に釈天心と刻み、その上に芝を植え、土饅頭を築いた支那風の形式を採っている⁽¹⁰⁵⁾と述べている。

『岡倉天心全集』の第八巻の解説に「岡倉天心と道教」がある。この中で「覚三」の説明を以下のようにしている。

岡倉覚三の「覚」は、彼の主著の一つである『東洋の覚醒』もしくは『日本の覚醒』の「覚」であり、この覚という語は、もともと道教の鉄人莊周の著書（『莊子』齊物論篇）に見える「大覚」の語基く。そしてインドの仏教が中国に渡来すると、いはやく梵語の仏陀 Buddha の意識語に採用されたのも大覚という語であった。

また覚三の三は、上文に引用した彼の論文「東アジアにおける宗教」に、「天は上、地は下、人はその間」——天地人の三元——とある。「三元」の「三」に基く。「天は

無限なもの、霊的なものを表わし、地は有限なもの、感覺的なものを表わし、人はこれらの二元要素、即ち精神と感覺をそなえ、なかに立って二つのものを和合せねばならない。⁽¹⁰⁶⁾」と解説している。

「天地人の三元」の「三」であり、この三元の語はまた、もともと儒教の古典である『易経』に見える天地人「三才」の語を道教風に言い換えたものであるが、中国で後漢の時代、二世紀以後に成立する道教の教理学においても、この三元の三は重要な宗教哲学的意味を持つ。⁽¹⁰⁷⁾

この解説から見えてくることは、天心は、あくまで道教を信じて生き、死んだことになるのではないか。非常に一環した考えであり、天心の思想の根幹であろうか。天心の思想が服装にも現れている。

2 「天心」名の定着

「翌大正三年（一九一四）三月、赤倉に天心岡倉先生終焉の地の碑が建てられた。岡倉覚三が亡くなってから新たに「岡倉天心」が誕生した。その年の九月二日、一周忌を記念して、下村観山、横山大観らの発起人になり、日本美術院が再興された。天心零社が美術院の敷地内に建てられたいる。⁽¹⁰⁸⁾」

この日から、天心は神と祭られたことになる。また、

「没後一〇周年を記念して、大正十一年（一九二二）、再興日本美術院は『天心全集』を（和綴三巻）を刊行した。『天心先生欧文年書抄訳』（日本美術院）、『日本美術院之二十五年』（大塚巧社）も同時に刊行された。⁽¹⁰⁹⁾」

岡倉覚三よりも岡倉天心が主流の呼び名になったということである。

没後二〇周年、昭和七年には東京美術学校校庭に天心像が設置され、背後には“Asia is One”の文字も刻まれている。（平櫛田中作品）

『岡倉天心全集』別巻の年譜には、「最初に天心名を使用したのは、明治十九年（一八八六）四月十四日、「東洋絵画共進会批評」を『東京朝日新聞』（十四日、十五日）」に掲載である。「天心生」の号を用いる。⁽¹¹⁰⁾」『岡倉天心全集』の六巻・七巻には天心の書簡が収められているが、「天心」名はその後、継続的に使われているのではなく、いくつかの号で著名している。例に挙げると、天心、天心生、常陸五浦、五浦釣徒、⁽¹¹¹⁾五浦生、五浦老人、五浦老魚、⁽¹¹²⁾鶴塹道人碧、⁽¹¹³⁾渾沌子⁽¹¹⁴⁾などを用い、息子一雄・娘こま夫妻宛には「父」と書き、弟由三郎には「兄」と書いてある。

明治三二年ごろまでは、圧倒的に「覚三」が多く、その後は「岡倉覚三」と著名している。

明治三六年六月ごろに五浦に広大な土地を購入する。明治三八年ごろからは、五浦の文

字が多くなる。親しい外国人には略語でO・Kともサインしている。

「天心」と署名している書簡は特に親しい新納忠之介⁽¹¹¹⁾、下村観山、早崎稔吉宛などである。一周忌には、日本美術院内に天心零社が建てられ、東京美術学校を連袂辞職し日本美術院を創設した会員（下村観山、横山大観、木村武山⁽¹¹²⁾、新納忠之介等）からいかに敬愛されていたかが伺われ、このことも含めて、天心像が作られていく元になったのであろう。

昭和四年（一九二九）には、初めて“The Book Of Tea”が『茶の本』として和訳を村岡博氏が出版したが、その時は岡倉覚三著である。その後、最初の岡倉研究の本をだしたが、清見陸郎⁽¹¹³⁾氏で、『岡倉天心傳』（平凡社一九三四年）である。清見氏は学術的に公平な視点で執筆している。文章構成もほぼ今の研究者と同じで、最初の天心像を作り上げた著者といえるのではないだろうか。

清見氏は天心の弟由三郎と親しく、多くの資料を手にいれたのではないだろうか。

その後、天心に関する多くの研究本が世にでるが、本の題名には覚三の名は見当たらない。「天心」または「岡倉天心」が冠として表題が付けられるか、岡倉天心著と書かれている。「岡倉天心」、「天心」像を後世の人たちが作っている。

ボストンの敬愛するガードナー夫人⁽¹¹⁴⁾に対しての書簡もすべて「岡倉覚三」で締めくくっている。その書簡に同封して、「親愛なるコーちゃん」宛ての手紙がある。

天心は冗談が好きで、ガードナー夫人からプレゼントされた猫にも別れてから手紙を書いている。子供に話かけるように、

最初のねずみは捕まえたかい。おいしかったかな。きつと栗鼠を楽しく追い回しているんだらうね。——」君の友なる覚三

君に日本のまたたびを少々送る。気に入ってくれるといいがね。

東京 一九一一年一〇月四日⁽¹¹⁵⁾

親しい心を許した人には、天心名を書いている。そこには、手紙の内容にもよるのだから。使い分けている。

再興美術院の横山大観らが、天心零社を作り、没後一〇周年に出版された『天心全集』など、非売品とは云え、世の中への影響はおおきかったのではないだろうか。天心名が定着してきている。

第二三節 天心と服装

天心の服装から、天心像を浮かび上がらせる。

天心は生涯に渡り、服装に拘り、その時の訴えたい思想と思われる服装をしている。思想と服装が合致しているのが天心である。服装が精神面の重要な表現方法であることを検証する。

1 東京美術学校の制服

天心案の制服が採用された理由については、次の①と②が上げられる。

①世の中が欧化一辺倒に動いた明治一〇年代の反省も見られるようになった時が、明治二〇年代であり、東京美術学校の開校は明治二二年である。その伝統を見直すタイミングもあり、天心案の制服が採用されたのであろう。

明治二二年、大日本帝国憲法発布の日（二月一日）に着用した東京美術学校の制服は、奈良時代の養老律令（七一八年）に定められた衣服令（えぶくりよう）の朝服（ちようふく）である武官の勤務服に似たものである。

万世一系の天皇が統治すると謳った明治憲法により、伝統主義が台頭した時代であったこともこのような奇抜な制服が採用された理由であらう。

②二つ目の理由は、天心は奈良朝の美術を高く評価している。明治二三年から二六年まで、東京美術学校で講義した「日本美術史」の中でも、

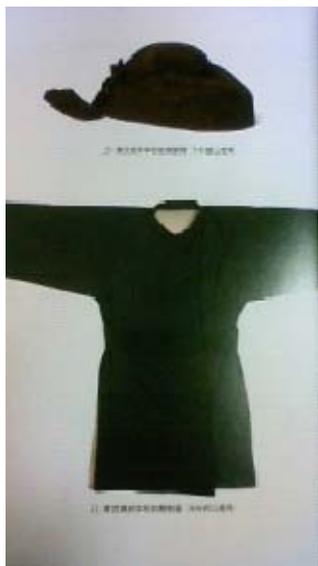
「奈良は理想的なり」⁽¹¹⁵⁾ 「わが邦彫刻上の發達は奈良朝にいたりてその極に達せり」⁽¹¹⁶⁾ 「奈良朝の壯麗なる時代は、これを文学にて譬^{たと}えれば、『万葉』のごとく後世に比して大いに異なるなり」⁽¹¹⁷⁾

奈良朝の美術をたたえていることから、天心は奈良朝の服にこだわったのであろう。

武官が着る腋を縫わない闕腋（けつてき）の袍（ほう）であるが、腰紐から下が縫われず、筒袖で伝統と機能性を備えている。制帽は黒漆で四菱文が散らされている。二本の纓（えい）が後ろについている。

「闕腋（けつてき）の袍（ほう）に藤原時代の官帽をいだけせるといふ天心の案で、今日の司法官や弁護士⁽¹¹⁸⁾の制服は二〜三年遅れて天心の友藤田隆三郎氏の献言で司法部に採用された」。

頭に被る部分と、巾子（こじ）と言って鬚を納める部分、纓（えい）と言う背中に垂れる紐のようなものをつけている。



茨城大学所蔵 制帽（下村観山着用） 制服（木村武山着用）

靴は、あざらしの皮で作った長靴である。ここから見えるくる天心は、目立つことが好きなようである。むしろ楽しんでる。この制服は学生と教授からは人気がなかったようである。そのひとりである高村光雲は「とんでもないことになったと少なからず閉口した。それ以来この闕腋（けつてき）を着るのが一苦勞で、なるべく羽織袴ででかけることにした⁽¹¹⁹⁾」と述べている。

横山大観は「私どももあれを着て、二重橋前の憲法発布の式典に参加したのですが、大学の人や世間の者が、何か異様の感をもって見ておりました。私はただ校則に従って着ておりましたものの、往来なんか歩いていると、人が奇異な目でじろじろと見廻すので、気の小さい者にはできる芸当ではありません⁽¹²⁰⁾」と状況を伝えている。

奈良（平城京）時代は、中国では唐の時代であり、律令制が確立して、中央集権体制が出来上がり、文化が大いに興隆したことに倣って、明治時代も同じように文化の華が咲くことを願う考えが伺われる。

シカゴ国際博覧会（明治二六年）で、東京美術学校に任された鳳凰殿も平等院風というように、イメージで表現することにすぐれた能力があり、制服も奈良の武官風である。

2 海外での服装

①海外にいる時は、紋付・袴姿で通すという日本人を意識した衣装で過したり、明治三八年にはボストンからサンフランシスコにいる留学中の長男一雄に会いに来た時の姿は、「道服で竹の杖をたずさえ、風帽を頂き、飄々乎として、列車から下りた彼の異様な姿を認めて、少なからず驚かされたものであった⁽¹²¹⁾」

②インド旅行でのスレンドラータゴール⁽¹²²⁾の追憶では、「インドのどんな寺へ入って行くにも、インドの慣習にならってドーティを着し、かつ裸足であった。」「道教僧の服装のかれを見ようとして集る群集の有様は、古代支那旅行者が体験したであろうことをわれわれに体験させた⁽¹²³⁾」

③羽織・袴姿でニューヨークを闊歩していると、通りすがりの若者が、「「アー ユー チヤイニーズ オア ジャパニーズ？」」「アー ユー ヤンキー オア マンキー？」⁽¹²⁴⁾」ときり返して、堂々としている。天心は西洋人には劣等感はないのである。

④一九〇四年のセントルイス博覧会で天心の講演「絵画における近代的諸問題」が喝采を浴びたこの博覧会のために、伏見の宮一行が米国入りして、金子賢太郎が宮の名でレセプションを開いたが「かならず燕尾服着用」⁽¹²⁵⁾と書かれていて、天心は出席できなかった。日本人の正装はあくまで紋付袴であると信じていたので、くやしい思いをしていた。この話をガードナー夫人にも話をしていて、「後日に金子賢太郎伯爵がガードナー夫人の美術館に訪れたいと申し込みがあったが、婦人は、「ご来邸は歓迎申し上げます。日本の服装を召しておいでくださいませ。お待ち申し上げます。」「きもの」の用意のなかった伯はシャツアウトしてしまった。⁽¹²⁶⁾」金子は着物を持参しておらず、欠席することになったのだろう。

天心の自国の服装を大切にする気持ちだが、ガードナー夫人にも伝わり、たわいなく気持ちに通じた時であった。

⑤「(明治二六年)七月十一日、帝国博物館(宮内省)より中国美術視察のため、清国出張を命ぜられる。⁽¹²⁷⁾」 「美術学校絵画一年級の早崎稔吉に支那語と写真術を速成的に学ばせ、七月から約五ヶ月間の視察にでかける。日清との間が円満にいつておらず、北京公使館より、さまざまな注意を受け、支那人に変装して行くのにかぎる。(中略)弁髪(128)の鬘を一つつけ」⁽¹²⁸⁾「ての旅になり、この旅は苦勞であったようだ。中国には多くの言葉があり、話さなくてもいいが、旅館でも暗くなるまでのこの旅装は、非常にづらいものであったと想像できる。

天心は服装に拘った人である。それも非常に精神の奥深いところからの自分の声を聞いて、行動している。世間体とか、だれから頼まれたわけでもなく、あくまでも自分に忠実である。しかも常に東洋と西洋を意識している。インドの旅では、そこに溶け込むような服装をし、過去に遡って、その時点に自分を置いているかのように行動している。

しかし、ヨーロッパ、アメリカ大陸では、日本人であることを主張する服装をしている。少しでも東洋を、日本を、理解してほしいとの思いのようである。

弟子が外国に行く時に、和服がいいか洋服がいいか訪ねているが、天心は和服でも洋服でもどちらでもいいと言っている。もし、英語が自由に話せるなら和服のほうがいいでしょうと言っている。他人には押し付けることはない。

天心は実に発想が柔軟である。外見にはこだわりがあり、常に日本、東洋を意識していた伝統主義者である。また当時、壊れそうな伝統を必死に守りぬき、西洋の文明に流されようとする人たちへの主張であり、西洋に対しては、東洋の自然と共に暮らす生き方を、

西洋文明に劣らない東洋の文明があると訴えている。

天心は苦境を乗り越えようとする強い力と使命感があり、それを実行力で押し通している。それは、東洋と日本を意識して、決して西洋に劣っていないことを主張して、服装でも表現している。重要な表現方法である。

最後に、東京美術学校の制服がなぜ奈良朝である理由は、国家確立期の奈良朝時代と明治時代を重ね合わせて、今こそ再び文化の華を咲かせたいとの思いがあつての奈良朝の武官朝服風であつたのである。

晩年には、道教に身を置くことのような生活を実践している。

まとめ

第四章では、天心の若き日の思想から晩年までの思想を中心に取り上げたが、東京美術学校創設までは、「美術の真理」について、思想を固めた時期である。第一節の小山正太郎の「書ハ美術ナラス」への反論は、天心の思想を構築する一歩である。それを毛筆採用へと導き、第二節では、フェノロサの講演「美術真説」の思想に傾倒して、人生の歩む道が確定する。その後、天心の思想を実現して行く道へと突進していく。それは、文部官僚という地位に立ち、実現可能な立場になったことと、天心の優れた才能を認めた人たち（浜尾新、九鬼隆一）がいた理由も大きい。

龍池会の佐野常民会頭に堂々と一筆を書き、自分の意見と「美術の真理」を説いている。第三節での鑑画会においては、美術に関して、「自然発達論者」を提言して、「日本の美術諸君よ、美術は天地の共有なり、豈東西洋の区別あるべけんや」（本論七八頁）、最後には、「勉めて其精神を存養し他日の大成を期せられんことを乞ふ。自ら信じ亦疑ふこと勿れ。」というように、この思想は、生涯、変わることはなかった。

第四節の『国華』発刊の辞では、現在（明治）の美術の状況を率直に向き合い、三つの提言をしている。その一つに将来の人たちに向けて、「誰力能ク精緻縝密ノ出版ヲ以ッテ、本邦美術ノ粹ヲ抜キ精ヲ萃メテ衆庶ノ鑑賞ニ供シ外邦ノ展覧ニ資スルモノソ」（本論八一頁）と述べ、『国華』を発刊したのが、明治三二年である。ここでも国民と共に、美術を共有することも説いている。

第五節では、近世で生きた「丸山応挙」を讃える。流派という中で、美術の成長が止まった近世の中で、応挙の突出した個性を讃えている。美術の個性の必要性を国華でも讃えているが、応挙には最大の賛辞を贈っている。

第六節の内国勸業博覧会での審査報告では、開発の時期として、六つの注意の要点を述べている。「自主の心」、「古法を失わないこと」、「必要するところは精神であること」、「技術」、「品位」、「重要なものは、歴史画および浮世絵なり」と、日本画の画家の心構えが中

心であろう。

第七節では、今まで無かった「日本美術史」を作成し、学生たちに自ら授業することになる。手探りの「日本美術史」である。ここでも天心は疑問がでてくる。その後、印度、中国に調査の目的で行くことになる。この美術史は学生たちが遺した筆記ノートである。

第八節では、学生たちが、天心の思想を具体化していく。特に菱田春草は個性的である。教授たちの間でも議論がでて、意見が分かれる絵画であった。この天心の決定が、後の騒動の初めといってもいいであろう。

第九節は、明治三七年（一九〇四）に、ニューヨークのセンチュリー・アソシエーションでの横山大観、菱田春草たちの展覧会のカタログである。「美術院または日本美術の新しき古派」として紹介している。美術院が創設して、六年後である。

第一〇節の「絵画における近代の問題」の講演は、ここで、天心の思想が固まったと言われる講演である。「画家たちの個性を尊重してしかるべきであり」、「絵画と社会それ自体の関係」、「製作者と観衆との間の暗黒の理解の中にこそ、双方の喜びがある」「呼びかけが人間的であればあるほど、それだけ、応答は普遍的なものとなります。」天心は、製作者と観衆との間の理解の中にこそ、喜びがあると言い、人間的であれば、応答は普遍的と結論つけている。

第一一節での「ポストン美術館中国日本部の仕事に協力する婦人たちへの談話」では、「絵画における近代の問題」の講演を具体化したものである。袋（絹の袱紗）を婦人たちが縫う意義も貴重な古美術と自分が向き合い、心込めて「共感」を持って縫い上げてほしいと天心は講話をする。

第一二節では、天心名を取り上げた。いくつかの号を持っている天心だが、以下の天心、天心生、常陸五浦、五浦釣徒、五浦生、五浦老人、五浦老魚、鶴髯道人碧、渾沌子などがある。書簡で使っているが、覚三と書く場合が多い。

号についての研究は、今後の課題である。
第一三節は、天心の服装を取り上げた。天心の思想と服装は一致すると言って過言ではない。晩年には、道教の服装である。つまり、天心にとっては、大自然のなかで小船に揺られて、天地一体となる気分であろう。

注

第一節

(1) 小山正太郎氏（一八五七—一九一六）

明治十二年（一八七九）年工部美術学校でフォンタネージュに学ぶ。洋画家。越後長岡生れ。一八八七年同舎を起し、八九年に明治美術会創設に参加。

(2) 『岡倉天心全集』三巻 平凡社 一九八〇年 五頁

- (3) 前掲書 三卷 一頁
- (4) 前掲書 別巻 三八二頁
- (5) アーネスト F. フェノロサ(Ernest F. Fenollosa 一八五三〜一九〇八)
 アメリカ人の日本美術研究者。明治十一年、東京大学の哲学・政治学の講師として来日、学生だった天心と出会う。以後共に日本美術を研究、また東京美術学の創設に貢献する。のちボストン美術館日本部のキュレーターとなり、晩年は東亜美術史網等の日本美術に関する著書をあらわした。
 『岡倉 天心をめぐる人びと』岡倉一雄著
- (6) 浜尾新(一八四九〜一九二五) 兵庫生まれ。初代東京美術学校校長、東京帝国大学総長、文部大臣などを歴任、子爵。天心の才能をそだてた庇護者。欧米美術調査のおりは、美術取調委員長。
- (7) 今泉雄作(一八五〇〜一九三二) 江戸生まれ フランス留学、ギメ博物館の東洋美術品鑑定員となる。天心と親しく、東京美術学校創設から運営に至るまで、岡倉と苦勞を共にした。美術学校教授、校長代理、帝国博物館美術部長。
- (8) 狩野友信(一八四三〜一九一二) 江戸浜松狩野家八代薰川中信の長男として生まれる。芳崖、雅邦と同門で学ぶ。芳崖没後、東京美術学校助教授となる。
- (9) 狩野芳崖(一八二八〜一八八八) 長府藩御用絵師の家に生まれる。日本画家。天心らと東京美術学校創設に尽力した。開校目前に病没。代表作に《悲母観音》がある。
- (10) 『岡倉天心全集』六巻 平凡社 一九八〇年 一一頁
- (11) 書簡 前掲書 六巻 一頁〜一五頁
- (12) 前掲書 六巻 一三頁〜一四頁
- (13) 前掲書 六巻 一四頁
- (14) 工部美術学校 日本最初の官立美術学校。工部省工学寮付属として、明治九(一八七六)年東京丸の内に開設。イタリアより、画家フォンタネージュ・彫刻家ラギーザらを招き、ヨーロッパ美術の技法などを教授。浅井忠・小山正太郎らが学ぶ。一八八三年に廃校。
- (15) 黒田清輝(一八六六〜一九二四) 洋画家。鹿児島の人。明治十七年(一八八四)、法学の研究のため、渡仏、絵画に転じてコランらに学び、九三年に帰朝。九六年白馬会を創立。東京美術学校に西洋画科が設置されると、主任教授となる。
- (16) 絵画共進会 内国絵画共進会のこと。産業政策一環として伝統藝術の振興を奨励した官催の日本画展。各流派の相互交流によって起動力になった。
- (17) 龍池会 明治一二年(一八七九) 佐野常民を会頭として発足した古美術鑑賞の同好会。
- (18) 日本美術協会 明治二〇年一二月四日、龍池会が日本美術協会と改称。

- (19) 明治会 小山正太郎（工部美術学校出身）らが一八八七年（明治二〇）不同舎を起こし、八九年に明治美術会創設。岡裏がいう古派の美術団体。
- (20) 白馬会 明治時代の美術（洋画・彫刻）団体。明治二九年（一八九六）、黒田清輝らが創立。旧派の明治美術会と対立、新派と称された。一九一一年に解散。

第二節

- (21) 『岡倉天心全集』別巻 平凡社 一九八〇年 三八一頁
- (22) 大森惟中（一八四四〜一九〇八）
- (23) 『フェノロサ』上 一七六 山口静一 三省堂 一九八二
山口静一氏（一九三二〜）『フェノロサ』上・下の著者。
一九五四年、東京大学文学部英文学卒。埼玉大学教養部教授。フェノロサ学会会長。フェノロサ資料収集に十数年を費やす。
- (24) 『岡倉天心』木下長宏 ミネルバ書房 二〇〇五 四四頁
- (25) 『フェノロサ』上 山口静一 三省堂 一九八二年 一七六頁
- (26) 『岡倉天心全集』別巻 平凡社 一九八〇年 三八〇頁〜三八二頁の抜粋
- (27) 佐野常民（一八二二〜一九〇二）政治家。佐賀藩士。工部大丞・元老院議長・農商務相・枢密顧問官。博愛社（現、日本赤十字社）の創立者。伯爵。
- (28) 『岡倉天心全集』六巻 平凡社 一九八〇年一〇頁
- (29) 同右書 一〇頁

第三節

- (30) モース (Edward Syvester Morse 一八二八〜一九二五)
- (31) 『フェノロサ』上 二四五頁
- (32) 河瀬秀治（一八三〇〜一九〇七）龍池会の副会頭。第一回勸業博覧会事務官長（龍池会とは、明治十二年結成。殖産興業にそった伝統美術の保護・奨励の団体）
- (33) 『全集』三 四七五頁
- (34) 『全集』三 一七三頁
- (35) 『全集』三 一七八頁

第四節

- (36) 『岡倉天心全集』三巻 平凡社 一九八〇年 四二頁
- (37) 前掲書 二巻 五八頁
- (38) 高橋健三（一八五五〜一九八）内閣官報局長をへて松方正義内閣の書記官長などを歴任する。天心と美術雑誌『国華』を創刊する。
- (39) 前掲書 三巻 四六九頁

- (40) 前掲書 三卷 『国華』「発刊の辞」 四二頁
- (41) 前掲書 三卷 右注同 四二頁
- (42) 前掲書 三卷 右注同 四七頁
- (43) 呉道子 呉道玄 中国。唐代の画家。字(あざな)または初名は道子。
- (44) 夏珪中国、南宋の画家。馬遠とともに南宋後半期の院体山水画を代表し、元、明をはじめ、わが国の室町中期以降の水墨画にも大きな影響を与えた。
- (45) 馬遠 南宋中期の画家。夏珪と共に南宋院体山水画の代表作家として、室町時代の画家に大きな影響を与えた
- (46) 前掲書 三卷 『国華』「発刊の辞」 四七頁

第五節

- (47) 円山応挙 享保十八年(一七三三)／寛政七年(一七九五)

【出生地】 丹波国桑田郡穴谷村(京都府亀岡市)

農家に生まれる。十五歳で上洛し、はじめは玩具商・尾張で人形の彩色に従事。のちに、狩野派の石田幽汀に画を学ぶ。また覗きからくり用の眼鏡絵を描くうちに西洋画の遠近画法や陰影法を知り、親しみやすく写真的な画風を編み出した。安永9年(一七八〇) 光格天皇即位の調度品として「牡丹孔雀図」を制作した。天明年間には妙法院真仁法親王のもとで画用をこなすようになり、寛政二年(一七九六)の晩年には眼病を患いながらも大作を描き続けた。その後援者には京都の三井家がいたほか、与謝蕪村、小沢蘆庵ら文人、学者とも親しかった。

作品

- 国宝 「雪松図屏風」
- 重文 「雲龍図屏風」 「藤花図屏風」 「雨林風竹図屏風」 「保津川図屏風」
- (48) 狩野探幽(一六〇二～一六七四) 江戸初期の画家。幕府の御用絵師として、一門の繁栄を招いた。作、二条城・名古屋城の障壁画など。
- (49) 狩野典信(一七三〇～一七九〇) 江戸中・後期の絵師。木挽町狩野家六代。幕府に仕えた。
- (50) 住吉広行(一七五五～一八一二) 江戸後期の絵師。住吉家5代目
- (51) 土佐光芳(～一七七二) 江戸中期の土佐派の絵師
- (52) 光貞↓土佐光貞(一七三八～一八〇六) 江戸中期～後期の絵師
- (53) 石田↓石田幽汀 丸山応挙は、狩野派の石田幽汀に学ぶ
- (54) 『岡倉天心全集』二巻 五〇頁
- (55) 前掲書 二巻 五〇頁
- (56) 前掲書 二巻 五一頁

- (57) 前掲書 二卷 五一頁
- (58) 前掲書 二卷 五六頁

第六節

- (59) 『岡倉天心全集』 三卷 八三頁
- (60) 前掲書 三卷 八三頁
- (61) 前掲書 三卷 八六頁〜八七頁

第七節

- (62) 前掲書 三卷 四七頁
- (63) 『日本美術史』岡倉天心著「解題・解説——アジアに内臓される「日本」美術史」木下長宏著 平凡社 二〇〇一年 三九五頁
- (64) 『岡倉天心全集』四卷 平凡社 一九八〇年 五一四頁
- (65) 「泰東工藝史」 東京帝国大学文科大学の講師に招かれ、講義をした。明治四三年（一九〇一年四月〜六月）『岡倉天心全集』別巻 四三三頁
「学外からの聴講生も多く、その中には和辻哲郎、高木一之助、児島喜久雄、黒田鵬心、新海竹太郎もいた」（『岡倉天心日本美術史』平凡社 四〇六頁）講義録である。

第八節

- (66) 『大観画談』横山大観著 日本図書センター 一九九九年 三六頁
- (67) 前掲書 同期 内海輝邦 倉田徳松 関保之助 高屋徳次郎（肖哲） 本田佑輔（天城）横山秀麿（大観） 岡本勝元（秋石）、以上七人は本科生
他に四人の別科生 二七頁
- (68) 前掲書 二六頁
- (69) 《下村観山展》生誕一四〇年記念 横浜美術館 二〇一三年
- (70) 《特別展 菱田春草》 明治神宮 平成二二年 八二頁
- (71) 『日本美術史』岡倉天心著 平凡社 二〇〇二年初版 一六六頁〜一六七頁
- (72) 『明治天皇さま』 明治神宮 平成一四年 二〇七頁
- (73) 『日本画と西洋画のはざままで』執筆 古田亮 山科美術館 二〇一〇年 七頁
- (74) 『岡倉天心全集』別巻 岡倉天心著 平凡社 四二七頁

第九節

- (75) 『岡倉天心全集』岡倉天心著 二巻 「美術院」または日本美術の新しい古派）高階秀爾訳 平凡社 一九八〇年 六〇頁

第一〇節

- (76) 『岡倉天心全集』二巻 岡倉天心著二巻 平凡社 一九八〇年 六九頁〜七〇頁
- (77) 前掲書 二巻 七〇頁〜七一頁
- (78) 前掲同二巻 七一頁
- (79) 前掲同二巻 七一頁
- (80) 前掲書二巻 八三頁

第一一節

- (81) 『岡倉天心全集』二巻 平凡社 一九八〇年・一九九三年 九四頁〜九七頁
(原文は天心の助手をしていたマックリーン (McLean) のタイプ稿で、表紙に“Talk given to Ladies who assisted in the work of the Chinese and Japanese Department on December 18, 1905.”である (茨城大学文化研究所蔵))

- (82) 『岡倉天心全集』(二巻 平凡社 一九八〇年) の解題 五〇五頁
- (83) 『岡倉天心全集 別巻』平凡社 一九八一年 四二五頁
- (84) 『天心孝』堀岡弥寿子著 吉川弘文館 昭和五七年 一三七頁
二つの説(『茶の本』の成り立ち)を紹介している。

1、天心はガードナー夫人邸に集まった芸術家達に『茶の本』の原稿を講演した。

- 2、天心がポストン美術館中国日本部に奉仕に集まった婦人達に『茶の本』を1章ずつ話しては原稿を屑籠に捨てた。

(85) 六角紫水(一八六七〜一九五〇)

美校漆芸科の助教授。のち天心とともにポストン美術館東洋部で働く。近代日本漆工芸の先駆者 『岡倉天心をめぐる人々』岡倉一雄著 平成一〇年 二一六頁

(86) 岡部覚弥(一八七三〜一九一八)

福岡県生。美校金科卒 日本美術院正員 明治三七年(一九〇五)天心に呼ばれて六角紫水らとポストン美術館で収蔵品修理にあたった。『前掲書』注 一一六頁

(87) 「ポストン美術部の中国日本部における美術館での奉仕活動する婦人たちへの談話」 『岡倉天心全集』二巻 平凡社一九八〇年 九四頁

I am sorry to say there is a but, the collections have lacked the delicate care which only sympathetic appreciation can give. Art wants not administration but adoration. Hence our appeal to-day.

“OKAKURA KAKUZOU:;collected English writings” Heibonsha, 1984 88p.

(88) 小堀遠州(一五七九〜一六四七)

江戸前期の茶人・造園家。名は政一。宗補・孤篷庵と号。近江の国の人。豊臣氏および徳川氏に仕え、作事奉行・伏見奉行を勤仕。遠江守(とおとうみ 静岡県

西部)であったので遠州と称。茶道を古田織部に学び、遠州流を創め、徳川家光の茶道師範。和歌・生花・建築・造園・茶具の選択と鑑定に秀でた。

- (89) 『岡倉天心全集』二卷「ポストン美術部の中国日本部における美術館での奉仕活動する婦人たちへの談話」平凡社 九四頁

(90) 前掲書 九四頁

(91) 前掲書 九五頁

(92) 前掲書 九五頁

(93) 『岡倉天心全集』一卷「茶の本」桶谷秀昭著 平凡社 三〇二頁

Approach a masterpiece as you would enter into the presence of a powerful Prince.

“OKAKURA KAKUZOU: collected English writings” Heibonsha, 1984 89p.

(94) 前掲書 三〇〇頁

“The sympathetic communion of minds necessary for art appreciation must be based on mutual concession.”

(95) 前掲書 三〇一頁

(96) 前掲書 三〇二頁

(97) 御神龕ごしんがん 神様や仏像を納めるための厨子

(98) 『岡倉天心全集』一卷 平凡社一九八〇年 三〇三頁

第二二節

(99) 『父岡倉天心』岡倉一雄著 六頁〜七頁より抜粋

(100) W.S. Bigelow (William. Sturgis. Bigelow 一八五〇〜一九二六) ポストンの外科医。富豪。明治一四年から七年余り日本に滞在してフェノロサやモースとともに美術品を蒐集(のち二一〇〇点をポストン美術館に寄贈) 桜井敬徳阿闍梨に帰依し諸寺に修繕費を寄付している。三井寺法明院に分骨埋葬された。日本美術院の創立に拠金をしている。

(101) ロッジ (ジョン・エラート・ロッジ John Ellerton Lodge) 東京藝術大学 二〇〇七年 二三五頁
ポストン美術館の中国日本部長の天心の後任者。

天心没後の一五年には部長となる。のちフリア美術館の初代館長。

『岡倉天心全集』第七卷 書簡解題より 四四七頁

(102) 追悼文 ビゲロウとロッジの連名の追悼文である。

『岡倉天心全集』別 山口静一訳 三五九頁

(103) 『父岡倉天心』岡倉一雄著 昭和四六年 一六一頁より抜粋

(104) 早崎稗吉(一八七四〜一九五六) 天心の清国旅行に従い、ポ

ストン美術館の囑託として天心の下で活躍した。ま

た、天心の異母姉の娘、貞をめぐった

- (105) 『父岡倉天心』岡倉一雄著 昭和四六年 二六一頁
- (106) 『岡倉天心全集』二卷 平凡社 一九八〇年 一五一頁
- (107) 『岡倉天心全集』八巻 四八〇頁
- (108) 『岡倉天心』木下長宏著 ミネルブア書房 三五二頁
- (109) 前掲書 三五二頁
- (110) 『岡倉天心全集』別巻 平凡社 一九八〇年 三八四頁
- (111) 新納忠之介(一八六八〜一九五四)美校彫刻科を卒業。のちの日
本美術院第二部の主任となり、国宝彫刻修理をする。

- (112) 木村武山(一八七八〜一九四二)
- (113) 清見陸郎(一八九六年〜没年不明)『岡倉天心』(平凡社 昭和九年)の著者である。東京美術学校中退 劇作家

- (114) ガードナー夫人(Stewart Gardner, 一八四〇〜一九二四)
ボストン社交界の中心人物、美術のパトロン、美術コレクター、イザベラ・スチュワート・ガードナー美術館の創設者。ニューヨークの裕福な商人の家庭に生まれ、ボストンの著名な銀行家、ジョン・L・ガードナーと結婚。一九〇四年、ジョン・ラファージを介して天心と知り合い、親交を結ぶ。

ボストン時代の天心におおきな庇護を与えた。また晩年も深い交友関係があった『藝術教育の歩み 岡倉天心』東京藝術大学 二〇〇七年 二二六頁

第一三節

- (115) 「奈良は理想的なり」「日本美術史」岡倉天心 平凡社 二〇〇一年 八一頁
- (116) 前掲書 八二頁
- (117) 前掲書 八二頁
- (118) 『岡倉天心をめぐる人々』 中央公論美術出版社 平成一〇年 五三頁
- (119) 前掲書 五四頁
- (120) 『大観画談』講談社 二二二頁
- (121) 『父岡倉天心』岡倉一雄著 昭和四六年 二一三〜二二四頁
- (122) タゴール (Rabindranath Tagore 一八六一〜一九四二) 印度の詩人・思想家。ベンガル固有の宗教・文学に精通。ノーベル賞受賞者。印度で天心と交流があり、日本にも訪れる。
- (123) 『岡倉天心をめぐる人々』 中央公論美術出版社 平成一〇年 一八四頁
- (124) 『大観画談』講談社 一九九九年 六三頁
- (125) 『父岡倉天心』岡倉一雄著 昭和四六年 一九八頁
- (126) 前掲書 一九九頁
- (127) 『岡倉天心全集』別巻 三九五頁
- (128) 『岡倉天心をめぐる人々』岡倉一雄著 中央公論美術出版社 平成一〇年 八〇頁〜八一頁

第五章 天心とシカゴ・第五回パリ万国博覧会

はじめに

明治二十六年（一八九三）の閣龍世界大博覧会（シカゴ万国博覧会）^{コロンブス}での天心の活躍と明治三三年（一九〇〇）のパリ万国博覧会での境遇の違いは、意思に添うものではなかった。その後の日本の美術史の枠組みが決まっていく重大な出来事である。それは天心の日本美術史論からは、かけ離れていく結果になったからである。そこに至る経緯と両博覧会での立場の違いを検証する。

天心が研究した美術史の中から、二つの博覧会を通して、天心像を浮き彫りにすることが、目的である。

【参考】

「博覧会」

種々の産物を蒐集展示して公衆の観覧及び購買に供し、産業・文化の振興を期するために開催される会。

【万国博覧会】

(International Exhibition) 世界各国が参加する博覧会。世界最初のものは一八五一年にロンドンで開催。のち一九二八年国際博覧会条約がパリで締結され、日本は六五年に加盟。七〇年に大坂で、二〇〇五に愛知県で開催。

『広辞苑』岩波書店 二〇〇八年

第一節 博覧会

1 明治の美術と美術史

古田亮氏^①が以下のごとく、「明治新政府になってはじめて参加した万国博覧会は、明治六（一八七三）年のウイーン万国博覧会である。この時、訳語として使われた「美術」という用語がその後一般化して今日に至っていることを思えば、博覧会と美術の関係は根が深いといえる。美術という用語の普及は、当然のことながら欧米で美術と認められているものを受容を意味していたが、それは、それまでの日本になかった技術や概念を受け入れるということと、それまでの日本にあったものを改めて美術として捕らえ直すという両面をもつものであった。」^②と述べている。

天心もこのような意味で「美術」を使っているが、明治一五年に龍池会でのアーネスト・E・フェノロサの講演で、「美術真説」と訳されたことは、世間に広く行き渡り、美術が定

着したのである。

明治二十年台は、まだ「日本美術史」の創世期で、定まらない状態で天心が、試行錯誤をしながら、明治二三年から東京美術学校で「日本美術史」を始めて講じている。

日本美術史論を仕上げるのに大いに疑問があることを語っているのが、『国華』の「発刊の辞」(第四章の四節を参照)である。明治二二年に高橋健三⁽³⁾と美術雑誌『国華』を創刊し、研究の意義を唱えている。その中で、「美術ハ秀麗ノ美玉ナリ、玉磨カサレハ光ナシ。美術ハ文化ノ芳花ナリ。将来ノ美術ハ国民ノ美術ナリ」と述べている。⁽⁴⁾

天心は、美術は国民の美術であることを主張する。まだ定まっていない「日本美術史」を大陸まで見据えて、研究しようとする姿が見える。それを未来の人たちに特に学生に訴えている。

2 万国博覧会について

十九世紀に開催された国際博覧会は、一九〇〇年のパリ博まで含めると全部で三九回あり、開催地も欧米を中心に行われていた。第二回パリ万国博覧会(一八六七年)は、かつてない出品数と入場者を集めている。また、出品物の分類を整理し組織化し、産業技術博ではなく、文化イベントへと転換し、系統的に展覧している。国別と出品物の性格と目的別という二つの大原則を一貫としたシステムに統合された。以下のように分類され、その後の国際博覧会にも影響をあたえ、最近までの博覧会の一般分類表の原型ともいえるものである。以下のような分類である。

国際博覧会

- グループ I .. 美術品 (さらに五クラスに分類)
- グループ II .. 学術用具・応用 (八クラスに分割)
- グループ III .. 家具とその他の住宅用品 (十三クラスに分割)
- グループ IV .. 人間が身につける細工品や物品を含めた衣類 (十三クラス分割)
- グループ V .. 工業製品、鉱業、林業等々の原料・加工品 (七クラスに分類)
- グループ VI .. 凡用製品用機械及び工法 (二十クラスに分割)
- グループ VII .. 各調理段階の生鮮または保存食品 (七クラスに分類)
- グループ VIII .. 家畜・農業用建物模型 (九クラスに分割)
- グループ IX .. 園芸実演・標本 (六クラスに分割)
- グループ X .. 特に人類の物質的・精神的生活を充足するための品目)

『国際博覧会歴史事典』 平野繁臣 内山工房 一九九九年

このような分類は西洋の分類であり、日本の美術・美術品をあてはめるには無理がある。天心は「日本品は従来黙認の姿にて西洋美術品の班に加へられ居たりと雖も、斯くては甚だ本邦美術品のために遺憾なるのみならず、発達の事情を異にして、一種独特のものなり

たる本邦の美術品が其特色あるが為に公けに西洋の美術品に容れられざることありとして
は寧ろ不都合の仕義たるべし。」⁽⁵⁾と、出品物の分類の方法には、不満がある。
日本の美術品（工藝を含む）は、西洋の美術品とは発達の事情が違うし、西洋の分類に
は、当てはまらない。天心はどのようにすれば、日本のよさがだせるかを思考錯誤してい
る様子が伺える。

シカゴ万国博覧会（シカゴ博とする）と第五回パリ万国博覧会（パリ博とする）の概要
は以下の内容で、パリ博はシカゴ博の約二倍の観客数を集めている。

(一) シカゴ万国博覧会（コロンブス閣龍世界大博覧会）概要

名称 World's Columbian Exposition

開催期間 一八九三（明治二六）年 五月一日～十月三〇日

場所 シカゴ（ミシガン湖畔のジャクソン公園、ミッドウェイ、
プレザンス）

入場者数 二七五二万九〇〇〇人

特記事項 コロンブスによる新大陸発見四〇〇年を記念して、開かれた

万博。当時のアメリカ国民の人口の約半数にのぼった。

「国際会議支援機関」を設置し、何よりも精神：物ではなく人間
（No Matter, But Mind : No Thing, But Men）をモットーと
する支援機関の活躍。

(二) 第五回パリ万国博覧会概要

名称 パリ万国博覧会（Exposition Universelle）

開催期間 一九〇〇年 四月一五日～十一月十二日

場所 パリ（シャン・ド・マルス、トロカデロ、アンヴァリッド、
、シャンゼリゼ、セーヌ川兩岸）

入場者数 五〇八六万一〇〇〇人

特記事項 パリ万博至上最大の規模の博覧会とクジ付き入場券を発売、

地下鉄、動く歩道、電気館、レントゲン撮影機、自動車などを
展示する。

「芸術の都パリ」「流行の都パリ」の評価を高め、世界の都パリ
を示すことに成功した。製品部門別に十八に分類して、各部門
を一二クラスに細分化し、公式展示の外側に外国政府館、娯
楽施設を配置した。

日本の貞奴の演劇等のアトラクションなどがあつた。

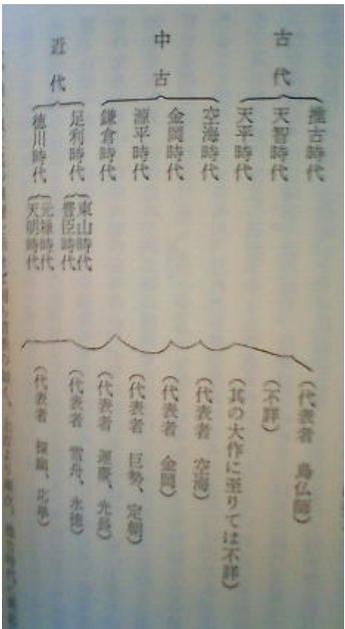
(一)、(二) は、『国際博覧会歴史事典』（平野繁臣 内山工房 一九九九年）の抜粋

3 天心の美術史観

東京美術学校時代の講義（明治二十三年～二十五年）「日本美術史」は、筆記録を筆写したものである。講義メモとノートが六種発見されていて、編集時に、筆記録は「原安民筆記ノ」トを定本にしている。⁶⁾「日本美術史」は、資料がない創世期なので、なかなか固まらな
い天心の姿が見える。

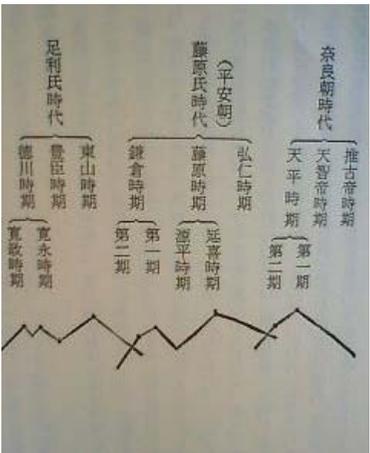
この講義は、一年かけての講述であろうから、講義の途中で、構想が変わったと考えられる。常に外国（中国・インド・朝鮮）を意識しながら、日本に軸足を置いている天心の姿である。

① 「推古以前」の講義時の美術史の組み立て方



『日本美術史』岡倉天心著 平凡社
一四頁 二〇〇一年

② 「総叙」として最後の項での組み立て



『日本美術史』岡倉天心著 平凡社 二四〇頁
二〇〇一年

このように天心は揺れていて、「日本美術史」を読む側も彼の考えを、捉えられないが当時の学生は初めて受ける講義であるので、真剣であったであろうと思われる。

明治三十六年（一九〇三）に英語で出版した『東洋の理想』には、明治時代が加わり、明治四三年（一九一〇）の東京大学での講義「泰東巧藝史」の筆記録が残っているが、最後の項に現代を書き入れている。そこには日本美術史を学ぶということは、過去から現代そして未来まで見つめようとする天心の姿がある。また、「日本美術の偉大なる一面は、藝術

即人生なるに在り。百千の文化を朝宗せしめて自家葉籠中の物と化すとともに、藝術その物と社会生活との間には完全なる融合をなし、田舎に行くも床あり、座するにも礼あり、生活すべてが藝術なり。⁽⁷⁾」と語る。「日本美術史」、「東洋の理想」、「泰東巧藝史」と読んでいくと、明治二三年から明治四三年までの二十年間の年月があるが、方法論として時代区分に迷いがあるが、天心の美術史観の基本は変わらぬものがあることが、この文面からかいま見られる。万世一系では纏めていない。

シカゴ博には、大いに関わったが、パリ博の時には、東京帝国博物館依頼免官、東京美術学校辞職になった後だけに、監査官には任命されず、それまでに準備してきた天心の結果がだせなかった。そのパリ博（一九〇〇年）の時、出来上がった『稿本帝国日本美術史』は、整然としていて、ここに帝室を意識した万世一系の国家としての美術史が出来上がり、その後の美術史の基礎となる。

「パリ博開催中の六月二六日には、東京帝国博物館が東京帝室博物館、京都帝国博物館が京都帝室博物館、奈良帝国博物館が奈良帝室博物館と改称される。」

この名称は昭和二二年まで使われることになる。⁽⁸⁾（パリ博 四月一日〜十一月十二日）

『稿本帝国日本美術史』は、推古以前に三分の一頁をさき、徳川時代で終わっている。これが、その後の日本の美術史の基礎になる。これに対して、天心は、常に未来を見つめ、国民（一般大衆）にまで拡げようとする考えが、随所に見られる。また、いつも研究の必要性を多くの人に語りかけている。目次で比較する。

「日本美術史」明治二三年から明治二五年まで行われた講義内容

序論

推古以前

推古時代

天智時代

天平時代

鎌倉時代

足利時代

豊臣時代

徳川時代

総叙⁽⁹⁾

（これらの名は便利のため述ぶるものにて、いかなる名称にても可なり）

序文

理想の領域

日本の原始美術

儒教——中国北部

老荘思想と道教——中国南部

仏教とインド美術

飛鳥時代（五五〇年——七〇〇年）

奈良時代（七〇〇年——八〇〇年）

平安時代（八〇〇年——九〇〇年）

藤原時代（九〇〇年——一二〇〇年）

足利時代（一四〇〇年——一六〇〇年）

豊臣および初期徳川時代（一六〇〇年——一七〇〇年）

徳川時代後期（一七〇〇年——一八五〇年）

明治時代（一八五〇年——現在）

展望¹⁰

「泰東巧藝史」の目次（明治四三年（一九一〇）四月～七月までの間に
東京帝国大学文科大学講師としての講述）

結論

古代藝術

六朝・三韓・飛鳥朝

唐・奈良朝（仏教的巧藝前期）

晩唐・五代・北宋（仏教的巧藝後期その一）

平安朝（仏教的巧藝後期その二）

世間的巧藝 唐・奈良朝以後¹¹

現代

『東洋の理想』での「明治時代」と「東巧藝術史」の現代という言葉で、天心にとっての現代（明治）時代を語っている。

これに対して『稿本日本帝国美術略史』は以下のように徳川氏幕政時代で終わっていて、天心が関連を探る外国（インド・中国・朝鮮）には触れていない。

序論

第一編 國初より聖武天皇時代に至るまでの美術の変遷

- 第一章 初期の美術
- 第二章 推古天皇時代
- 第三章 天智天皇時代
- 第四章 聖武天皇時代
- 第二編 桓武天皇時代より鎌倉幕政時代に至るまでの美術の変遷
 - 第一章 桓武天皇時代
 - 第二章 藤原氏撰閣時代
 - 第三章 鎌倉幕政時代
- 第三編 足利氏幕政時代より徳川氏幕政時代に至るまでの美術の変遷
 - 第一章 足利氏幕政時代
 - 第二章 豊臣氏関白時代
 - 第三章 徳川氏幕政時代^{（一七〇）}

日本美術史を語る上で、常に外国（インド・中国・朝鮮）を念頭においているが、福地福一が主任になって作成された日本美術史は、万世一系の日本民族を中心に歴史が語られ、現在には触れず、その中身も絵画・彫刻・建築・美術的工藝と整然と組み立てられている。また、国民の美術を目指した天心の考え方は、跳ね除けられ、日本国を意識した、この美術史論が戦後まで続き、現代も影響を受けている。

4 美術品の性質

美術品の性質に関する評議員の決議」(明治二五年)と題して、以下のように語る。

本来西洋美術品と言へるは唯油画^{あぶらえ}及び大理石の彫刻類に止まりて、本邦の美術とする水画^{みずえ}なり七宝なり又金銀象牙の細工物等は総て之れを正式の美術品として公認し居らざるがごとし。勿論是等の日本品は従来黙認の姿にて西洋美術品の班に加へられ居たりと雖も、斯くては甚だ本邦美術品の為に遺憾なるのみならず、發達の事情を異にして一種特色のものとなりたる本邦の美術品が其特色あるが為に公に西洋の美術品の班に容れられざることありとしては、寧ろ不都合の仕業たるべし或いは日本^{（一三）}の絵画は絵画に非ずして模様なりとの説もあらん歟なれども其絵画が西洋の絵画に似ざる所即ち本邦美術の特色たる所以にしても、之を西洋の絵画に擬するなどは更に美術の真味を知らざるの説なり。——悉く之を美術品として公認あらんことを請求すべし

本来、西洋美術品といえるのは油絵と彫刻類に止まり、わが国が美術としている水彩とか七宝とか金銀象牙の細工などすべて美術品として公認されないようだ。もともと黙認されて西洋の班にいれられたとしてもわが国の美術品のためには遺憾であるのみならず、発

達の事情を異にして特色のある我が国の美術品はその特色のために公に西洋の美術品にいれられないことがあるとは不都合の行いであり、あるいは、日本の絵画は絵画でないとして模様であるという説あるけれども日本の絵画は、西洋の絵画に似ない日本の特色である理由にしても、これを西洋の絵画にあてはめるなどは、さらに美術のまことの味わいをしない説である。——悉くこれを美術品として公認することを請求すべきであると言っている。この危機感には、欧州視察で得た確信と、実際に古社寺の名宝を調査し、保存にも力をいれていた天心の意見であろう。

第二節 シカゴ万国博覧会と第五回パリ万国博覧会の比較

1 シカゴ万国博覧会（コロンビア閣龍世界大博覧会）

日本からの出品内容について、「シカゴ博覧会出品画に望む」の解題によれば一八九一（明治二四年）年六月に総裁農商務大臣陸奥宗光（14）副総裁九鬼隆一、事務局長手島精一（15）（一八四九—一九一八）を任命して準備を開始、天心は同年十二月に評議員に任命された。この博覧会のため大いに働き、「鳳凰殿模型の建築を東京美術学校で請負い、その英文解説を執筆した。」（16）その内容は「岡倉覚三氏の演説」と題して、「日本美術の名譽を世界に輝されんこと希望する者なり。さて該会に於いて日本絵画が果して認めらるや否やは実に大問題なり。余輩は日本絵画は本より立派なりと思ひ居りしに、なげなや是迄欧米の博覧会にては日本絵画は決して美術館内に陳列せられたることなし。全体絵画なるものは諸工藝物の首に位するものなるが故に、若し絵画なるものをして美術品にあらず裝飾品なりとせば、他の工藝品は美術品中に齒せむべきものならざるべし。日本絵画が常に之を裝飾品視せられて美術館内に陳列せられざるをみれば、日本画家は豈に痛歎せざるを得ん。」（17）

鳳凰殿の建物は、宇治にある平等院風である。中にある宗教関係のものを排除して、美術の観点から、時代を追って、いわゆる西洋の額縁の中に入れる展示方法ではなく、日本の代表の最高の住まい空間を作り出して、展示している。

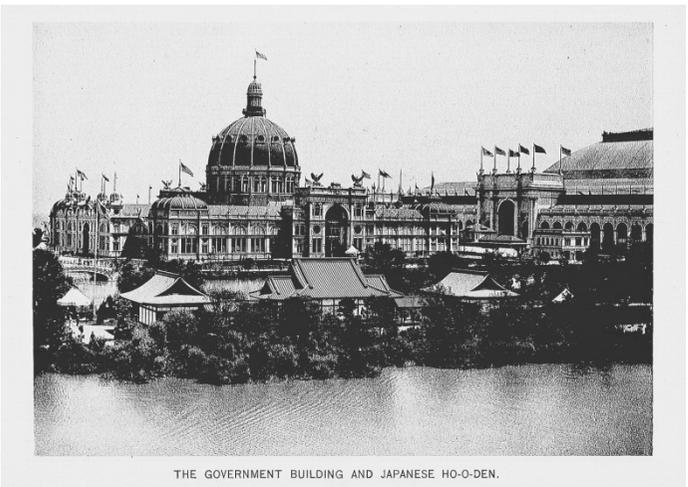
鳳凰殿の説明を以下のごとく語っている。

「日出ずる国日本は、古代から鳳凰（フェニックス）の生誕の地と考えられてきた。日本の隣人であり心暖かき友であるアメリカ合衆国は、このたび一大展覧会を開催することとなったが、その規模と雄大さは、見たいかなるものを凌ぎ、また鳳凰誕生の際にあらわれる瑞祥にも似たあらゆる成功の前兆を伴っている。日本はこの壮大にして栄光ある企画に同意し、翼を張り歌声を天に響かす鳳凰の喜びをもって、主催者の希望に呼応した。すな

わち日本国民の過去一千年の遺産たる美術宝物をもたらして、展覧会に望んだのである⁽¹⁸⁾。『鳳凰殿』は、「一八九三（明治二六）年に岡倉覚三名で出版された。

THE HO-O-DEN (Phoenix Hall), An Illustrated Description of the Buildings Erected by the Japanese Government at the World's Columbian Exposition, Jackson Park, Chicago. By Okakura Kakuzo, Director of the Tokyo Fine Art School. ⁽¹⁸⁾

鳳凰殿と呼ばれた建物は、当時、アメリカが日本を友好国としていて、米政府の建物近くに建てられた。



博覧会一覽（年表）——国立国会図書館 より転載

展示方法は、部屋のしつらいに倣って、工藝品を置き、掛軸をかけ、建物自体もまた、日本建築の美を表現している。それを三つの時代区分をして繋げている。以下のように説明解説している。

「日本の装飾美術を理解するには、ある程度の歴史の知識が必要である。この歴史は西暦六二九年から一五五〇年にわたり、三期に分けられよう。第一期は天平時代とよばれ、八〇五年まで続いた。（中略）次の藤原時代は西暦八八〇年から一一五〇年までで、洗練された美術が高度に発達した時代である。（中略）第三は足利將軍下の「一三五〇年〜一五五〇年」で、歴代將軍も藤原氏と同じくすぐれた教養と庇護によって美術の育成、発展に大きく貢献した。」⁽²⁰⁾

鳳凰殿の一部を例に挙げる。左翼廊は藤原時代の建築を模し、京都御所のように見立ててある。

- 一、置き畳
 - 二、几帳（きちょう）
 - 三、茵（しとね）
 - 四、脇息
 - 五、文台（ぶんだい）
 - 六、硯箱（すずりばこ）硯、水注、筆、墨、刀子
 - 七、二階棚
 - 八、唐櫛笥（からくしげ）
 - 九、鏡台
 - 一〇、管弦棚
 - 一一、釣香炉（つりこうろ）
- （側画は、以下である。）
- 一、春の海図 東京美術学校絵画科、巨勢こせ小石筆
 - 二、春日祭図 同上筆
 - 三、那智滝図 同上筆 先祖巨勢金剛（八五九年〜八七六年）の画を写す
 - 四、虫選び図 同上筆
 - 五、秋の山図 同上筆（20）

* 抜粋と括弧内は加筆

右翼廊は足利時代の様式である。銀閣寺の一室を再現している。

二つの部屋は書院と茶室である。

茶室

- 十二、絵画 軸物装
- 十三、置物 飾り物
- 十四、酒盃（さかずき）
- 十五、湯瓶（とうびん）
- 十六、沈箱（じんばこ）
- 十七、食籠（じきろう）
- 十八、香合（こうごう）
- 十九、香箸立（こうばしたて）
- 二〇、台子（だいす）

二一、 風炉先屏風⁽²⁾ (ふろさきびょうぶ)
全部で、三七項目ある。抜粋と説明は省略した。

中央は徳川時代の様式である。

評議員として大いに影響力があったであろう。東京美術学校に鳳凰殿を委託されたということは、学校関係者が多くを担当し係っていることによって明らかである。

2 第五回パリ万国博覧会

パリ博覧会での日本の建物は法隆寺の金堂風である。臨時博覧会評議員に任命され、また一八九七(明治三十)年に臨時博覧会事務局から帝国博物館へ、パリ万国博覧会の仏文の『日本美術史』の出品の要請がある。しかし、一八九八(明治三十一年三月に帝国博物館理事兼部長辞職願いを提出したため、編集主任を降りることになる。当然に副主任の福地復一が主任になる。

福地復一とは、「築地警醒会」名で怪文書をその界の人びとに郵送したと言われている当人である。

『日本美術史』仏文版“Histoire de L'art du Japon”が出品され、関係者に配布された。翌一九〇一(明治三十四)年には日本語版『稿本日本帝国美術略史』も刊行された。

表紙



『東京国立博物館資料史』 六五五頁 明治三四年

序に帝国博物館総長の九鬼隆一が書いている二一〇〇字の中に我日本帝国国民または我日本帝国と一〇回も書いている。明治二十年台後半から三〇年代にかけて急速に国家意識が強まってきたが、天心の考えと九鬼隆一の考えはかなりかけ離れてきている。翌年には九鬼も博物館の総長を辞し、名称も帝室博物館に変更される。翌年の明治三三(一九〇〇)年の三月一六日には総長に股野琢が任命される。

木下長宏氏は、『日本美術史』の解題・解説で、「天心の時代区分と比べてほしい。稿本が示す時代区分は整然として、一貫して各時代に天皇・支配者の名を冠し、日本の美術が一本の固有の文化の道筋を辿ってきたことを明示しようとしている。まさに日本帝国の美術史である。」と述べている。天心の美術史区分は、模索している状態が見え、定まらないゆれるきもちが、表れている。東京大学での講義『泰東巧藝史』の特色をまとめると、一、国民の美術をめざし、藝術がそく人生であると語っている。二、時代を過去―現在―未来まで見据えて研究することを期待している。

昭和初期にも、源豊宗^{とよむね}（二八九五―二〇〇一）氏の『日本美術史図録』の「例言」中で、美術史を純粹に捉えて区分している。氏は以下のように語っている。

「編者は従来一般に行われてゐる時代区分が、むしろ政治的なそれに據れるものであって、美術史的には必ずしもに當を得たるものとは信じ難きが故に、本書に於いては新たな時代区分を以つてした。いふまでもなく美術史の時代は限定的な日附を以つて劃する事はできない。⁽²³⁾」また、明治を加えていないが、紙面上の限りがあることと、書くことによつて、他が深く掘り下げる為の余白の問題で、書かなかつたと述べている。日本帝国主義を重く受け止めるこの時代でも、純粹に美術区分を成し遂げているということは、けして天心の意見が排除されていない事実がある。源豊宗氏の日本美術史論は戦後も多くの美術史家に影響を与えている。

3 帝国博物館から帝室博物館へ

帝国国立博物館は天心と九鬼が去り、変貌する。

明治四年（一八七二）は文部省に属した博物院として設置され、明治八年（一八七五）には内務省の所管となり博物館と改称している。明治十四年（一八八二）には農商務省所管となるり、明治十九年（一八八六）に宮内省の所管となる。明治二十二年（一八八九）には、帝国博物館となり、九鬼隆一が博物館総長となり、岡倉天心が美術部長となる。

当時は、宮内庁所管となり、歴史資料収集は容易くなつたであろう。九鬼と天心が去つた明治三十三年（一九〇〇）には、東京帝室博物館となり、「帝室」という冠がついたことにより国民とは距離が出てくる。

この帝室博物館の名称は、このさき昭和二十二年まで使われることになり、国家の文化活動の広告塔として、皇室と同じ道を、ゆつくりと歩んでいくことになる。

（中略）

今後は、「帝室所蔵ノ博物館ニ有リテハ、宜ク帝室ノ二字ヲ冠シ、以テ其所蔵ヲ明瞭ナラシメ」たのだという。博物館は「国家のものではなく、天皇家の個人資産である。」⁽²⁴⁾

このことは天心にとっては、どのような思いであったのであろう。特にその後の博物館に対する発言は見当たらないが、日本美術院は各地で展覧会を開き、多くの国民に美術に接してほしいと願う天心の理想とは、程遠くなった帝室博物館であったであろう。

博物館から帝国博物館、そして帝室博物館になり、天心が望む国民に開かれた美術が、皇室の所有物になったことは、後退であったことも事実である。関氏は、なお帝室となつたことにより、そこに働く職員たちが帝室の意識を持つてしまったと書いている。

明治二十二年十月二十八日に『国華』を発刊した時の理念である「国民ト共ニ邦国ノ精華ヲ發揮セント欲スルナリ」という願いからは、帝国博物館は遠ざかったのである。

まとめ

天心は、明治二六（一八九三）年でのシカゴ博は政府出品物の鳳凰殿の室内装飾と出品物制作を受託して、尽力を尽くしている。生活空間の中に美術、工芸が存在するという日本美術のあり方を平安、足利、江戸時代という二つの時代の美術空間を再現した鳳凰殿は、日本的な空間を体験させることに日本の美術概念を認めさせる手段と考えていたようだ。

シカゴ博では日本の工芸も初めて展示され、成功を収めた。

パリ博では、日本工芸は展示されることはなかった。美術館に展示するのは、絵画、彫刻、建築のみで、日本工芸は展示を拒否され、結果は失敗に終わっている。法隆寺の金堂を模した建物にのみ、絵画、彫刻、工芸も展示している。

天心は出品物として刊行する日本美術史の編纂主任となり、準備も進めていたが、東京博物館理事兼美術部長を依願免官して東京美術学校を非職したため、これ以上パリ博に係ることはなかった。

明治三〇年代は国家の形も固まり、帝国博物館も帝室博物館に名前を改め、国民のための美術を主張する天心にとっては逆行であった。日本帝国としての力が強くなり、天心の考えは世の中の向う方向と相反することになる。

シカゴ博と第五回パリ博を最後に比較すると、シカゴ博での米政府との交渉も成功して、鳳凰殿のしつらいと美術館、工芸館での展示物も日本に任されて出品が可能であったが、パリ博では、フランスの壁は厚く、日本美術を理解されず、特に日本工芸が美術と評価がされなかった。

シカゴとパリ、これはアメリカとヨーロッパの違いでもあるが、シカゴ博での天心は、副総裁の九鬼隆一をよく補佐し、すぐれた交渉力と日本美術をいかに世界に認めさせようとする情熱をもって、事に当たったと言える。

最後に、第五回パリ万国博覧会での『稿本日本帝国美術略史』の日本語訳の「日本美術

史」は、木下長広氏が指摘しているように、「一貫して各時代に天皇・支配者の名を冠」がついた。天心の時代区分は、排除されたが、源豊宗氏も昭和初期という時代において、「政治的なそれ（時代区分）に據れるものであって、美術史的には必ずしも當を得たるものは信じ難き」と当時の時代区分に賛成でないことを述べている。

注

- (1) 古田亮（ふるたりよう）東京藝術大学美術館准教授
- (2) 『特別展観 海を渡った明治の美術』東京国立博物館 一九九七年 九〇頁
- (3) 高橋健三（一八五五―一八九八）
官僚・ジャーナリスト内閣官報局長をへて松方正義内閣の書記官長を歴任。岡倉と美術雑誌『国華』を創刊した。
- (4) 『岡倉天心全集』三卷 岡倉天心著 平凡社 一九八〇年 四七頁
- (5) 前掲書 三卷「シカゴ出品画に望む」四七六頁
- (6) 前掲書 四卷 解題に、斉藤隆三が述べている。 五二七頁
- (7) 前掲書 四卷 三一六頁
- (8) 『博物館の誕生』 関 秀雄 岩波書店 二〇〇五年 二〇五頁
- (9) 『岡倉天心全集』四卷「日本美術史」岡倉天心著 平凡社 一九八〇年 五頁〜一六七頁
- (10) 前掲書一巻 「東洋の理想」佐伯彰一訳 七〜一三二頁
- (11) 前掲書四巻 「泰東工藝史」二五九〜三一六頁
- (12) 『稿本日本帝国美術略史』農商務省 国華社 明治三十四年 一頁〜一一頁
- (13) 『岡倉天心全集』三卷「シカゴ博覧会出品画に望む」平凡社一九八〇年 四七六頁
- (14) 陸奥宗光（一八四四―一八九七）
政治家。紀州藩家老伊達千広の六男。伊藤博文内閣の外相として条約改正を実現。
- (15) 手島精一（一八四九―一九一八）
教育家。沼津藩出身。長年、東京高等工業学校校長を務め、実業教育関係の法律・規則制定に努力。シカゴ博覧会の日本側の事務局長を務める。
- (16) 『岡倉天心全集』三卷 岡倉天心著 平凡社 一九八〇年 四七六頁
- (17) 『岡倉天心全集』三卷 岡倉天心著 平凡社 一九八〇年 一八七頁
- (18) 前掲書二巻 「鳳凰殿」 五頁
- (19) 前掲書二巻「解題 鳳凰殿」 平凡社 一九八〇年 四九九頁
- (20) 前掲書二巻 八頁
- (21) 前掲書 二巻 九頁〜一〇頁
- (22) 前掲書二巻 一三頁
- (23) 『日本美術史』木下長宏著 平凡社 二〇〇一・二〇〇八年 四〇二頁

- (24) 『日本美術史図録』源豊宗（みなもととよむね）著 星野書店 一九四二年
美術史家 関西学院大学教授・帝塚学院大教授 京都文学部講師 文化財保護
審議会専門委員雑誌『仏教美術』を編集。
- (25) 『博物館の誕生』 関 秀雄 岩波書店 二〇〇五年 二〇五頁～二〇七頁

第六章 —— 天心にとっての「東洋」と「西洋」 ——

はじめに

明治三十一年に東京美術学校を辞職し、その年に日本美術院を立ち上げ、日本で始めての日本画研究の機関が誕生した。日本美術院の経営は苦難の道であったが、日本の美術史を知るために中国、インドと視察して、ようやく日本美術史が固まっていくな。それは東洋という一体感の中に日本があると確信していく。

天心はボストン美術館の講話でも、東洋のことを西洋人が理解できるように、系統をたてて説明している。

また、東洋の理解の為に、論理的に具体的に、美術館にある仏像も例に出しながら説明している。

東京美術学校在職時代の明治二三年〜明治二五年までの間に、「泰西美術史」⁽¹⁾の講義を行っている。その講義を聴いていた学生たちの講義メモがまとめられた。以下は東洋と西洋の区別についての天心の定義である。

今西洋美術を説くに当たり、予め東洋、西洋の区別如何を知らざるべからず。即ち地勢を以つて考ふるに、ヒマラヤ高嶺の以西には西藏、パミルの高原及び広茫たる砂漠あり。しかのみならず加之、ウラル、アルタイ等の大山脈は大陸の中央を走り、自ら地勢を東西に二割し、随つて其の地に生育する所の人種を異にす。是東洋、西洋の分るゝ所以ならん。然りと雖も明かなる分界を以て是を論ずること能はず。何となれば西洋の内にも亦種々の分子を含有するを以てなり。⁽²⁾

天心は、その区別をまだ確実には断定できないことも付け加えている。明治三六年に刊行した『東洋の理想』の「理想の範囲」では、以下のごとく述べている。

アジアは一つである。ヒマラヤ山脈は、二つの強大な文明、すなわち、孔子の共同社会主義をもつ中国文明と、ヴェータの個人主義を持つインド文明とを、ただ強調するためにのみ分つている。⁽³⁾

天心の思想を解明するために、「東洋」と「西洋」を以下のごとく、定義するが、『東洋の理想』での東洋も、基準は地理に重点をおいている。それは、人種（民族）が違うが、現在（明治時代）では、それを明らかにできないことも述べている。

『広辞苑』での定義とほぼ一致するので、以下のように定義して、論を進める。

① 「東洋」の定義

トルコ以東のアジア諸国の総称。特に、アジアの東部及び南部、すなわち日本・中国・インド・ミャンマー（ビルマ）・タイ・インドシナ・インドネシアなどの称

② 「西洋」の定義

ヨーロッパ・アメリカの諸国を指している称。欧米。

『広辞苑』 第六版 岩波書店 二〇〇一年

第一節、第二節、第三節は、「西洋」を視野に入れて、「東洋」のことを語ろうとしている天心の思想を検証する。

第一節 洋画に対する書評

「現今の油絵界」と称して『早稲田文学』第二期第一号（明治二十九年一月五日）掲載の彙報「美術界」より抄録⁽⁴⁾によれば、「評家某秋季展覧会を評して曰はく、新旧二派おしなべて技術の進歩せるは事実なり。殊に自然⁽⁵⁾に対する観察の進歩、熱愛の真摯なるは見過すべからざる新現象なり。この当否はしらねど、兎に角も油絵の活気近時に至れりてや、高まれるは明なり。岡倉⁽⁶⁾覚三も此のころ」と、以下の天心の意見を掲載している。

従来の旧洋画家は毫も西洋の思想感情を醗⁽⁷⁾醸するところなくして唯漫に丹青を塗抹して得たりとなす、其の観るべきの作なき宣なり。この点においては新派⁽⁸⁾は一層進歩せりともいひ得べし。何となれば黒田、久米の諸氏は多少西洋の感想⁽⁹⁾を現せんとすれば也。要するに洋画家は西洋の思想を有せざるべからず。即ち単に洋画の方法を借り来たるのみならず、其の思想觀念の表現に注意せざるべからず云々と語り⁽⁹⁾たり。

この抄録の著者は不明だが、天心を評として、「自然⁽⁸⁾に対する観察の進歩、熱愛の真摯なるは見過すべからざる新現象なり」と言い、「この伝統主義の天心によれば、新派の洋画家が旧洋画家よりは進歩しているが、西洋の思想を取り入れることに注意を要すると批評している」と述べ、「このころの天心も西洋画のことも話すようになったと書評している。しかし、その画には「西洋」の思想を理解しているとは思えず、技法は、旧派の洋画よりは進んできた⁽⁹⁾と述べるに留まっている。またその書評者は伝統主義の天心が西洋画に対してコメントをしたことに対して驚きを感じていたのであるう。

天心は、西洋画を書くには、その精神をもち合わせなければならぬと強調している。ただ技法が「西洋」であるだけでは、意味をなさず、求めているのは思想觀念である。

第二節 「東アジア美術における宗教」

以下は、明治四四年（一九一一年）にボストン美術館で講演したものを抜粋する。

原題は“Religions in East Asiatic Art”¹³⁾、平凡社版の『岡倉天心全集』（一九八〇年）に掲載された新訳（橋川文三）である。ボストンで『茶の本』が刊行されてから、5年後の講話である。天心が亡くなる二年前である。冒頭において、以下のように語る。

藝術はつねに宗教と結びついている。藝術の最大の達成は宗教思想の装いの中にあつた。この事実は時として、宗教活動のおとろえは同時に藝術的努力のおとろえを示すという考えに導く。しかし、実際は、藝術は宗教の圏外にある別の独立した存在である。（中略）人生と藝術はいつも互いに関係があつた。藝術は人生の幹をとりまく葡萄であり、宗教は、森の中のみごとな大樹のように、藝術をしてもっとも有効な方向により高く、その栄光を輝かせることを可能とする。¹⁴⁾

天心は藝術に関係の深いものとして、儒教、仏教、道教（老子教）を説明する。

① 儒教

その起源は古代中国の共産主義的理想で、過去四千年にわたり中国を支配したあらゆる思想と理想を含んでいる。孔子とならぶ様々な著作者たちが、この大系にその思想を付加したが、恐らく「孔子教」という呼名の代わりにもう一つの呼称、「儒教」すなわち「学者の教義」の方がより適当かもしれない。

儒教の根本概念は秩序と調和である。それは宇宙に一定の秩序を認め、相異なる部分に調和を発見しようと試みる。彼らの言葉によると天地人の三元については、天は上、地は下、人はその間、ということになる。天は無限的なもの、霊的なものを表わし、地は有限なもの、感覚的なものを表わし、人はこれらの二元要素、即ち、精神と感覚をそなえ、なかに立つて二つものを和合せねばならない。¹⁵⁾

天心はボストン美術館の美術品にもふれ、「調和」を重んじる儀式の組み立てによくかかっていると付け加えている。天心の興味ある発言の中に、「虚栄を制するために鏡は用いられた。それは友達に不快を与えないために、顔の表情を良くするためのものであつた。こういうのが孔子の全体の基調であつた」¹⁶⁾

人と人の関係がいかに重要で、互いの印象までも重視していると孔子の理論である「調和」の重要性に注目している。

② 仏教

仏教については、初期仏教として、藝術との関係は少なく、仏陀崇拜も始まらず、遺骨

を収める墓の崇拜だけであった。東アジアでは「傘は権力或いは名誉の象徴であって、その人が偉大で高貴なほど、より多くの傘がとりまいている。¹⁴」古代の傘の名残がパゴダで、円盤を一つ一つ重ねて表現しているという。

仏教が中国に達した時に、天心は以下の如く話す。

人智が西洋と東洋においてよく似た働きをするのは、奇妙なことである。仏陀はいが、人々は救世主を求めた。そこで彼らは来るべき仏陀として弥勒を作りあげた。
(中略)

弥勒にはのちに阿弥陀が加わったが、それは慈悲を通して人間を救い、西方の金色の王国に住むものと想像された。人々は東天の仏陀である「薬師」を創ったが、それは病気を治し、弱き者の魂を慰藉するものであった。そしてこれら四人を結合して釈迦仏陀、弥勒、薬師、阿弥陀の四つの仏陀として、それぞれ羅針盤の四つの点に当てた。¹⁵

天心は、藝術に対して仏教の影響が大きくあるとは、考えていないことが伺われた。仏教が形骸化していることを伝えている。

③老子教

儒教は社会のために規則をさだめたが、老子教は独立と個性を目的とし、宇宙と共に遊ばんことを願い、それに頭を下げようとはしなかった。こうして偉大な理念が生じた。自然は人間以上のものであり、人は自然の小さな一部分にすぎない。人はいかに哀れであるか、いかに束縛され、いかに笑うべき存在であるかを見よ！その自由とその広大な目的を持つ自然を見よ！老子派は自然の中に生きんとし、そこで美術においては肖像画を棄て、山水と花鳥とに身を捧げた。¹⁶

天心は、老子派を讃えている。『茶の本』の「第三章 道教と禅道」では、

老子とその徒および揚子江畔自然詩人の先駆者屈現の思想は、同時代の北方作家の無趣味な道德思想とは全く相容れない一種の理想主義である。老子は西暦紀元前四世紀の人である。¹⁷

天心は、晩年に五浦での生活は道教の服装に似た出で立ちで、つり三昧に耽る。平櫛田中作の岡倉天心像は、道教の徒がかぶるような八卦の模様の帽子、アザラシのマントを身につけている。服装は、その時の天心の思想に思える。

六祖慧能⁽¹⁸⁾かつて二僧が風に翻る幡^{ばん}を見て対論するのを見た。「一はいわく幡動くと。一はいわく風動くと。しかし、慧能は彼らの説明した、これ風の動くにあらざただ彼らみずからの心中のある物の動くなり」と。また百丈⁽¹⁹⁾が一人の弟子と森の中を歩いていると「一匹の兎が彼らの近寄ったのを知って疾走し去った。「なぜ兎はおまえから逃げ去ったのか。」と百丈が尋ねると、「私を恐れてでしょう。」と答えた。祖師はいった、「そうではない、おまえに残忍性があるからだ。」とこの会話は、道教の徒莊子の話を思い起させる。ある日莊子⁽²⁰⁾ 友と濠梁⁽¹⁹⁾のほとりに遊んだ。莊子いわく「儻^{じょうぎよ} 魚いで遊びて 従容^{しやうよう}たり。これ魚の楽しむなり。」とその友彼に答えていわく「子は魚にあらず。いづくんぞ魚の楽しきを知らん。」と。「子は我にあらず、いづくんぞわが魚の楽しきをしらざるを知らん。」と莊子は答えた。⁽²¹⁾

ここでは、正反對的なものを理解して、真理に近づく禅と道教は似通っていることで、莊子の話を例にだしている。

事物の大相対称から見れば大と小との区別はなく、一原子の中にも大宇宙と等しい可能性がある。極致を求めんとする者はおのれみずからの生活の中に靈光の反映を發見しなければならぬ。

(中略) 茶道いつさいの理想は、人生の些事^{さじ}の中にも偉大を考えるとこの禅の考えから出たものである。道教は審美的理想の基礎を与え禅はこれを実践的なものとした。⁽²²⁾ 『茶の本』 村岡博訳 岩波書店 昭和四年 四九〜五〇頁)

『茶の本』は一九〇六年に刊行され、凝縮した内容で書かれている。ボストン美術館での「東アジア美術における宗教」の談話は、その5年後であり、噛み砕いて話をしている。

天心はわかりやすく丁寧に説明するのは、東洋には、多様な宗教があり、それらが共存していることを理解してほしかったのであろう。

第三節 「東アジアの絵画における自然」

ボストン美術館での講演 明治四十四年（一九一二）

天心は初めに東洋と西洋の藝術の差異の定義から書き始めているが、この講演は『茶の本』刊行五年後、亡くなる二年前のことである。

① 「極東の絵画は、純粋な構想に高い敬意をばらうと同時に自然にたいする深い尊重の念

を持つている。(中略) 自然に対するこの情熱はいつ頃起こったのか、東洋の芸術家達は西洋芸術家のするように自然を描写しながら同一の結論に達したのではない。しかし自然はどこも同じである。何故こうした異なった表現が生じたのか？その理由は恐らく東西の自然に対する精神的態度、その藝術の概念、その方法と慣習およびそれぞれの社会がその藝術に課したものの相違にある。東洋と西洋の自然に対する精神態度はおなじではない。東洋の精神には、自然は現実をかくす仮面である。外形はその内部の精神を明らかにする限りにおいて重要となる。⁽²³⁾

東洋人が書く自然の画には外部も内部の精神を表現することに重要であるが、西洋とは、精神態度は同じではないと語っている。

②「我々に栄光を与え、或いは神のイメージとして特別な尊敬を与えたいとは望まない。その裸体はまったく我々の興味を惹かない。それ故、人間の美の理想型を考えることもなかった。われわれにはベルベデーレのアポロもミロのヴィーナスもない。」⁽²⁴⁾

この文章から、天心は、西洋が人間中心であり、人間を神の似姿として、捉えている。『東洋と西洋』の中にある「人間中心主義」と「自然本位主義」という基本思想を持っていることがわかる。

③「もう一つの東洋藝術の異なる点は、それが美そのものに何ら関心を払わないということである。東洋批評精神の全領域において、画が美しい故に賞賛されることは稀で、いつもそれが美学的に興味をよぶためである。日本語の藝術的に面白いという言葉は“interesting”と同意語ではなく、白、面、したという語から出ている。その起源は非常に特殊である。その物語は次のように語られている。太陽の女神がこの世に嫌悪を感じられた。彼女を煩わすものが多かったので、全世界を暗黒にして洞穴に引きこもられた。神々は集まって彼女を隠道所から誘って出させようと試みた。彼らは踊り歌い、女神があらわれるまでつづけたが、暗黒を破って最初の光があらわれるや、それまで何も見えなかった神々は、自分たちの顔が白いのを認識した。再認識の言葉が藝術的喜びを表現するのに用いられているのは興味深いことである。なぜなら藝術から我々から引き出す喜びは再認識であり、我々が感じているものの再発見にあるからである。」⁽²⁵⁾

西洋と東洋の美の捉え方が違うと説明して、「日本語の藝術的に面白い」は「再認識の言葉」であり、芸術的喜びを表現していると、「再発見と再認識」と締めくくる。

④「東洋藝術家の技法は自然に接近する様式を決めるのに役立つ。もし一般化が許されるなら、東洋藝術は絵画的で、西洋藝術は彫刻的な性質があり、東洋藝術は彫刻的な性質があり、東洋藝術は線で、西洋藝術はモデル表現に興味をいだし、東洋藝術は二次元で、西

洋芸術は三次元をあらわしている、といえる。⁽⁶⁾」⁽⁷⁾ここでは、東洋芸術と西洋芸術を比較して、技法について話を進め、二次元と三次元という言葉を使っているので、西洋人にとっては理解しやすい説明であろう。

⑤「東洋のもうひとつの方法のちがいも、また我々の自然に近づく態度に由来する。我々はモデルによるものではなく、記憶で描く。⁽⁷⁾」⁽⁸⁾
西洋の技法としての写生を意味している。

⑥「東洋の風景画は多分西洋におけるよりも非常に高い理想に達している。風景画についての文献は人物画におけるより多いと思われる。⁽⁸⁾」

ここでは東洋藝術の自然に対する態度とか畏敬の念を言わんとしているのであるが、天心は西洋の人々に、東洋のものの考えと、自然との向き合い方を細かく説明してる。

⑦「最近日本において、その古代理想を再生しようと目指す力強い運動が起こっており、すでに初期の巨匠とも比肩しうる二、三の藝術家を出している。この美術館に集められたコレクションの影響によって、アメリカもまた古代東洋の藝術精神をいかしつづけることが可能であろう。⁽⁹⁾」
二、三の藝術家とは、おそらく下村観山、横山大観、菱田春草のことであろう。

ここに①～⑦の天心の意見と思想を「東アジアの絵画における自然」から取り上げたが、天心は西洋と比較しながら、東洋の歴史を遡り、自然への向き合い方を説明している。

西洋では、人は神の形で作られた似姿とするキリスト教による西洋美術は、人間像が対象になる。描くのは人体である。天心は内面からでてくる美が重要だと唱えている。

当時（明治）、この根本的な問題を論じるにはいたらず、歴史画論争、裸体画論争での道徳論が主であった。

第四節 『東洋と西洋』

初版が一九九二年の倉澤氏の『東洋と西洋』（第一章 世界観の東西——ナチュラリズムとヒューマニズム）は、八六年前には、東洋と西洋を論理的に明らかにする時期に来ておらず、天心は、第三節の②のように成り立ちなどに言及しているのみである。

倉澤氏は、西洋の世界観の問題を、取り上げ、ヒューマニズム・人間中心主義は、今日の西洋の世界の核心をなしていると述べ、東洋的世界観・ナチュラリズムと比較している。東洋的世界観では、人間も人間以外のものも皆一つで、根本において無差別であり、天地自然のいっさいをすべて仏であるという立場をとっている。

東洋と西洋の世界観を、以下のように捉えられる。

ヒューマニズム・人間中心主義――

神によってつくられた人間が、人間以外の一切万物を自分の意のままに用い、使うことができる。加えて、ギリシャの見地からは、人間の知のすばらしさと人間の美を讃えている。

ナチュラリズム・自然本位主義――

人間、物も分け隔てなく、すべて仏であるという立場

『東洋と西洋』倉澤行洋著 東方出版(株) 一九九二年 一四頁・四八頁から抜粋と授業から)

天心は漢学にもすぐれている。晩年まで、漢詩を多く書いている。また明治十八(一八八五)年には桜井敬徳(一八三四～一八八五)より菩薩十善戒牒(31)を受けるほど熱心であった。晩年には道教的な生き方を実践している。

「万物と一体」という項目で「仏教においては人間と万物を隔てなく、ともに仏として、根本同じものとしてみてゆく――」(32)

明治というまだ東洋も西洋も明らかでない時代であるので、天心も手探りで真理を求めていたであろう。また美術という絵画を通して、美術にも美術史があると研究し、それを中国視察、インド視察を行い、明らかにしていく途上にいたのが天心である。

『海外の茶道』『世界における茶道』の中に、「二つの登山」がある。

植有恒さんという登山家が昭和三〇年にはじめてヒマラヤのマナスル(八一五六m)の山に登った。登山隊の隊長の植さんは、記者のインタビューに答えた内容が東洋的である。

「未登の高い山を征服なさって、おめでとうございます。」

植さんは「山を征服したなどとは少しも思っていない。長いことマナスルという神々しい山に憧れてきましたが、今度その山に登っていつそう親近感がましりました。」と。その会合に出席していたヨーロッパのジャーナリストたち、また登山家たちには、たいへん不思議に聞こえました。山を征服したのではなく、登って親近感が増したという、その挨拶がたいへん不思議に聞こえ、征服したのではなく、登っていつそう山に親近感があったという挨拶が欧米のジャーナリズムの世界でも話題になったこと(33)です。

登山においても西洋では、「山を征服する」という考えがある。植さんのように「自然の中で息づいて」登山する。という東洋的な考えが、自然に対しての意見と思想が表われている。

まとめ

明治の初期は官、民を含め、西欧化が急速的に一般化されていくが、日本を見つめ直す気運がでた明治二〇年代に、東京美術学校での伝統主義の美術教育に乗り出し、自らが「日本美術史」を試行錯誤しながら、作り上げていく。しかし、明治三〇年代に世の中の流れが変わり、天心は自ら美術院を立ち上げ、日本美術をさらに進歩させていく。

天心の晩年の生活は、短い五浦生活であったが、釣小船を海に浮かべての生活であったようだ。以前より、なおいっそう自然の中に身を置き、過していたようだが、穏やかな時間は短かったようだ。自然とともに暮らすことは、天心の思想と一致するものである。

倉澤氏の「東洋」と「西洋」の比較は、明治時代の中でも、天心も同様の知識は持ち合わせている。ただ、当時の時代背景は、藝術においても、日本、東洋が劣勢な状況に置かれていたので、東洋を西洋の人々に丁寧の説明すること、美の捉え方と思想が違うことを論理的に説明するのが、限界であろう。

注

- (1) 「泰西美術史」〔岡倉天心全集〕四巻 五二八頁
天心の「泰西美術史」講義は、東京美術学校で「日本美術史」の講義に引きつづいて行われた。日本で最初の西洋美術史の講義である。二三年度、二四年度、二五年度に開講されたことは確かであるが、その前後の年度については不明である。
- (2) 『岡倉天心全集』二巻 平凡社 一九八〇年 一七二―一七二頁
- (3) 『東洋の理想』岡倉天心著 講談社 二〇〇七年 一七頁
- (4) 彙報(いほう) 分類して集めた報告
- (5) 『岡倉天心全集』別巻 平凡社 一九八〇年 一三〇頁
- (6) 前掲書 一三〇頁
- (7) 醗釀(うんじょう) 酒類を作ること。醸造すること
- (8) 新派 白馬会の黒田清輝、久米桂一郎らの西洋画派
- (9) 『岡倉天心全集』別巻 平凡社 一九八〇年 一三〇頁
- (10) 前掲書 別巻 一二九頁
- (11) 前掲書 二巻 二五〇頁
- (12) 前掲書 二巻 一五一頁
- (13) 前掲書 二巻 一五三頁
- (14) 前掲書 二巻 一五四頁

(15) 前掲書 二卷 一五五頁

(16) 前掲書 二卷 一五八〜一五九頁

(17) 『茶の本』村岡博著 一九八四年 第一刷 四二頁

「改版にあたって、多少改訳を施し、漏洩を補い、さらに一般の読者のために増補した。」同書二三頁

(18) 慧能(六三八〜七二三) 唐代の僧。中国禪宗の第六祖。禪宗の大成者。

門人きわめて多く、以後主流は南地に隆盛したので、その法系を南う。

(19) 百丈(七一九〜八一四) 中国唐代の禪僧。馬祖道一に師事。教壇規則「百丈清規」を制定し、教団の自給自足体制を図った。

(20) 莊子 中国、戦国時代の思想家。道家思想の中心人物。名は周。宋の河南省商邱の人。孟子と同じ紀元前四世紀後半の人で、儒教の人為的な礼教を否定し、自然に帰ることを主張した。世に老子と合わせて老荘という。

(21) 『茶の本』村岡博著 一九八四年 第一刷 四八〜四九頁

(22) 前掲書 五〇頁

(23) 『岡倉天心全集』二卷 平凡社 一九八〇年 一六三頁

(24) 前掲書 一六四頁

(25) 前掲書 一六五頁

(26) 前掲書 一六六頁

(27) 前掲書 一六七頁

(28) 前掲書 一六九頁

(29) 前掲書 一七〇頁

(30) 桜井敬徳(一八三四〜一八八五) 愛知県生。御城寺に入り、のち法明院住職。

明治十八年(一八八五)、フェノロサ、ビゲロー、らとともに、天心も菩薩十善戒牒を受けた。天心は翌年にも受戒している。

(31) 菩薩十善戒牒

菩薩 [仏] さとりを求めて修行する人。

十善 [仏] 十種の善行。不殺生・不偷盗(ふちゅうとう)・不邪淫・不妄語・

不綺語・不悪語・不両舌・不貧欲・不瞋恚(ふしんい)・不邪見

戒牒 [仏] 僧尼が戒を受けたのち、その事実の証明として公布される公文書。

(32) 『東洋と西洋』倉澤行洋著 東方出版 一九九二年 五二頁から抜粋

(33) 『海外の茶道』茶道学大系——別 淡交社 平成十二年

*老子

中国古代の思想家。道家の祖。名は耳(じ)、字(あざな)はたん。周末の混

乱を避けて隠遁を決意し、西方の某関所を通過しようとしたところ、関所役人に請われて、「老子教」二巻を著した。しかし、老子という人物は実在せず、

おそらく道家学派の形成後に、その祖として虚構されたものと考えられる。

第七章 弟子たちの絵画より

はじめに

この章では、東京美術学校の日本画科の学生である横山大観、下村観山、菱田春草に焦点をあてて論を進めるが、天心の考えは「新画世界ヲ発見スルニ在ルノミ」と述べ、ただし「将来注意ノ要点⁽¹⁾」として六項目を指摘している。特に自主の心、精神、品位と心に主を重視しているのであろう。この六項目は、あくまで芸術としてであり、日本画を推奨しているが、特に政治的な意識もない。横山大観、菱田春草、下村観山らは、海外に行き、見聞を広め、国を超えた画を書き始めている。西洋画も大いに研究している。それは天心が、西洋画の研究を勧め、新しい絵画を目指していたからであろう。

彼らは歴史画を描き、西洋画も研究し、それを実践して、日本の思想を基にし作品を描いている。

海外に出ることを実行し、天心の思想も視野に入れていることを検証する。

第一節 横山大観の絵画

1 屈原（中国）

《屈原》は明治三十一年、天心が、東京美術学校を非職され、日本美術院を立ち上げて、第5回日本絵画協会第一回日本美術院展での作品である。



《屈原》 明治三十一年 巖島神社蔵

『横山大観の世界』監修 横山大観記念館 美術年鑑社 二〇〇六年

横山大観は、「日本美術院の誕生のころの岡倉先生がちょうど屈原と同じ境遇であったのではないかと思ひ、この画題を選んだ」当時、島村抱月②さんのお宅に屈原の辞腑を集めた「離騷」③という本を持って講釈を聞いて描き、当時はこの画「屈原」は歴史画という論題で激しい論争があつた④と述べている。

天心は「大観は、彼の奔放な心象と嵐のごとき意相とを、この分野にもたらしており、それは、たとえ、おのれの霊に集う荒れ狂う嵐を感じながら、風に吹かれる水仙⑤―沈黙する純潔の花―を分けて不毛の丘をさまよう屈原の作に示されている。」と述べ、「暗雲が立ち込める後方、ごつごつとした岩のようなもの、つるのような植物がからみ、なびくように横倒しになっている草木や、ちりいく葉、怪しげな二羽の鳥など、屈原を囲む背景描写はすべてが屈原の悲運の立場や心情をとらえ、説明的でドラマチックである。」と作品解説では語っている。

おだやかな大観が天心の立場に立ち、心情を表わしている画で、第五回日本絵画会・第一回日本美術院連合絵画共進会で第一席の作品である。この画も中国の戦国時代の楚の国の悲劇の屈原が主人公であるが、日本の題材ではない。歴史画であるが、越境している題材である。

2 流燈（インド）

天心は、明治三十五年（一九〇二）に、ラムナット国王⑦の招待をうけてインドに向う。英国の植民地時代であるが、壁面の依頼があり、大観と春草をインドに差し向けるが、政治不安定と英国の憲兵により、行動を制限された。そのような環境でも、インドで見た様子を描いている。衣装の柄とアクセサリーなども細かく描いている。著者が実際に印度の地で見た光景を思ひおこす時、実際の女性の民族衣装姿よりも、その場を再構成して、その雰囲気伝わってくる。足元に土器かわらけがあり、見つめている先はその先である。大観は暗示的に描いている。観賞者は、画の中の人たちの行動が気になる。次の瞬間と連続性があり、「共感」が持てる一枚である。

明治四十二年（一九〇九）



茨城県立近代美術館蔵『横山大観展 良き師・良き友』横浜美術館 朝日新聞社

五二頁転載

3 《遊刃有余地》(中国)
ゆうじんよちあり

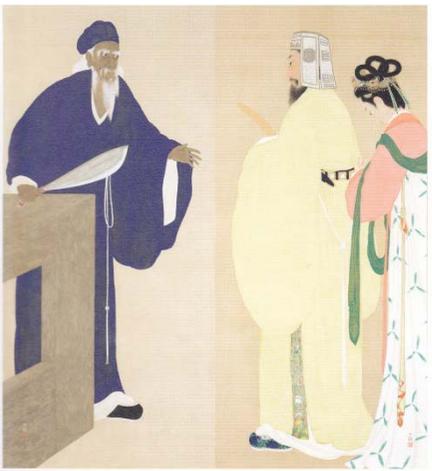
大観の《遊刃有余地》をとりあげたが、この作品は天心亡き後の作品であり、天心の思想を語る代表できる画であると確信できる。天心が画家に望む要点に「必要トスル所ハ精神是ナリ。」と述べている。調理人の包丁がみごとに牛をさばき、文恵君がその技をほめたが、「私の好むところは道であり、技以上のものである」と答えた場面を大観が描いている。日本の歴史人物ではなく、中国の題材の画である。思想を重視している点は天心の影響が窺える。思想が引き継がれた代表作であろう。

再興日本美術院の第一回の展覧会（日本橋三越）に「莊子養生篇」にある《遊刃有余地》を掲げている。

「文恵君が包丁の牛を解く巧みなるを見て、ああ実に巧いものだなあ、技というもこれほどまで上手になるものかと歎美されると、包丁が答えて言うには、私の好む所は道であつて技以上のものである・・・今では精神で牛を見て、目で視ていない・・・刃が骨と骨の隙間が見えて、そこに刃をいれるだけだ」ということを多に抱負を語っている。

〔第八回文展（文部省美術展覧会）も同日に同じ日本橋三越で開催している。〕
天心が歴史画に拘っていることを知る大観は、この画を明るく単純に表現している中国の梁時代の題材である。ここから大観は今まで以上に天心を神格化していくことになる。「大正三年九月二日の岡倉天心の一周期に研修所に天心零社といわれる御霊を祭った」と語っている。また、大観がよく中国の歴史を題材にしている。

この度の再興日本美術院の第一回の展覧会は大観にとつては、特別な意味と自身の画家としての立つ位置も明確にしている。まさに天心の思想をそのまま描いたような作品である。



大正三年（一九一四）《遊刃有余地》

東京国立博物館蔵『横山大観の世界』監修 横山大観記念館 二〇〇六年
三四頁転載

《遊刃有余地》（『莊子』養生篇から）「其於遊刃、必有余地」の一節である。

包丁為¹³文惠君解¹⁴牛 手之所¹⁵觸 肩所¹⁶倚 足之所¹⁷履 膝之所¹⁸踣

作品の物語の中にも天心の精神が感じられる。包丁が、言う「私の好むところは道であり、技以上のものである」という言葉は、まさに天心の言葉のようである。

大観は、《老君出関》¹⁴ 《老子》《虎溪三笑》¹⁵ 《焚火》¹⁶ など、古典に基づき、新しい手法で描き、鑑賞者に一体感を持たせ、明るい気持ちにさせてくれる。このことも、画家と鑑賞者の間に「共感」が持てる空間と時間を作ってくれる作品である。天心がもつとも望む画であろう。大観であるから、描くことができる画ではないだろうか。ボストン美術館でも「共感」を願って、美術品の袋を縫いにくる婦人たちに講話した内容は、「共感」である。

また、もつとも多く、老子を描いたのは大観である。

第二節 下村観山

1 《闍維》（インド）

《闍維》¹⁷は天心と観山共々が東京美術学校を去り、日本美術院を創立した時の初めての展覧会出品作品である。写実的であり、観山がすべて想像の世界を再現し、インドの地を舞台に描いている。この画も日本画であるが、題材は日本の外へと出て、越境している。

天心が没したのが大正二年で、横山大観、下村観山らは、それぞれが師岡倉天心の死を悼み、結束力が増していく。

また作品解説には、来日中だったフェノロサは、『ジャパン・デイリー・メール』に、「外国と日本の古格を離れ、無限の力と創意をもつていまだ抵触されたるなき画題を捉えた傑作はただ二つをみるのみ」と、大観の《屈原》と観山の《闍維》をあげて絶賛している。

題材が歴史画であり、しかも日本を越えて、中国、インドへと広がっている。天心の思想が具現化したのだろう。

広い世界に目をやることを指導していることが伺える。国を超えての作品である。『日本美術史』の「総叙」で、「余は諸君に勸むるに、左の教言をもってせんと欲す。

これを歴史に徴するに、いたずらに古人に模倣すれば必ず亡ぶ。系統を守りて進み、従来ものを研究して、一步を進めんことを勉めるべし。西洋画、よろしく参考すべし。しかれども、自ら主となり、進歩せんことを」¹⁸



《閻魔》 明治三一年（一八九八）

横浜美術館蔵 『下村観山展』 横浜美術館 二〇一三年 三四頁〜三五頁転載

「本図は香木をつみ、香油を注いで火をつけようとしたがつかなくなったところに仏弟子筆頭の大迦葉が冥福を祈ると煙を発してあたりに芳香が満ちた、其の瞬間を描いている。⁽¹⁹⁾」

主要作品解説より、第五回日本絵画会・第一回日本美術院連合絵画共進会において、銀牌第二席を得た。右から二番目が下村観山である。

天心は、「仏陀を焼く薪」「閻魔」のことは、宋代初期の力強く強調されていた輪郭と、イタリアの画家たちに匹敵する立体感描出とによって豊かにされている作品で、平安時代の雄大な構図をわれわれに想起させる。（中略）あの神秘的な棺の上に砕ける靈妙な焰を、ゆえ知らぬ畏怖の念をもって見つめる、阿羅漢⁽²⁰⁾や菩薩⁽²¹⁾たちを描いている。」

洋画の技法を用いての日本画、近寄りが見たい崇高な祈りを感じる。天心の意志に添う、新しいものを目指した画家であろう。

2 《ダイオゼニス》（ギリシヤ）

樽の中で生活したと言われ、手には厚い本を持って、眉、顎鬚、口髭は伸び放題で、明かに思索している姿は、存在感がある。

「明治三六年に文部省の留学生として約二か年英国に滞在した折に描かれた作品で、明治三十六年秋に開催された第一五回日本絵画協会・第十回日本美術院連合絵画共進会へ出品するため、はるばるロンドンから送った数点のうちの一点。同展で銀牌第二席となった

。⁽²³⁾「禁欲的な生活をした紀元前四世紀のギリシヤ哲学者である。観山も自由な発想で写実的な日本画を描き、洋画でもあるように見える。この画も天心は、評価している。



明治三十六年（一九〇三）

東京国立近代美術館蔵『下村観山展』横浜美術館 二〇一三年 五四頁転載

第三節 菱田春草の絵画

1 《羅浮仙》（中国）

画を作り出そうと苦心していた時期であった。《羅浮仙》もその延長に位置するテーマであったといえる。⁽²³⁾「明治三四は、日本美術院を立ち上げて、三年目の画である。日本美術院に陰りが見えはじめた時期である。

羅浮仙は、中国の広東省惠州にあり、梅の名所とされ、奥深い静かな地で、晋、隋、唐の時代に隠遁する者も多くいたと云われている所である。

「隋の趙師雄^{ちやうしゆう}は、羅浮仙に遊んだ際、薄絹を身にまとい芳しい香りを放つ美女出会う。酒を酌み交わすうちに趙師雄は眠りにつくが、目ざめると美女の姿はなく、傍に梅の樹があったことで、その女性が梅の精であったことに気づいた。⁽²⁴⁾」

《羅浮仙》（中国 唐時代）



明治三十四年（一九〇二）

長野県信濃美術館蔵『菱田春草』明治神宮 平成二十一年 三六頁転載

2 《弁財天》(インド)

春草が大観とインドに派遣されたのは、明治三六年(一九〇三)の一月一〇日(七月一日)新しい手法を探り出している。羅浮仙と同じく、これらの画を見ると、透き通るような美があると同時に、鑑賞する者にとっては、想像力を掻き立てられる。また、異国の魅力をふんだんに表現している。筆使いの技法には触れないが、新鮮なエキゾチックな印象を受ける。



明治三六年(一九〇三)

シービ化成株式会社蔵『菱田春草』明治神宮 平成二十一年 四三頁転載

まとめ

大観、観山、春草の作品を取り上げた。日本美術院時代から再興日本美術院の作品である。ここでは技法、技術ではなく、三人の画家の画に対する姿勢と思想に注目した。

新しい画に挑戦して、インド、中国、欧州の歴史画を描いている。これは、天心の考えであろう。どの作品も、個性的で、開放感がある。画に惹き付けられる。惹き付けられるということは、すでに、これらの画に、鑑賞者は「共感」を持つことができたということであろう。画を鑑賞して、感動しているその瞬間は、鑑賞者が絵画と一体となり、感動を「共有」している気持になる。このような心が大事であり、天心が求めていることであろう。

ここに二枚の老子像の絵画を載せる。



横山大観《老子》大正一〇年(一九二一)

熊本県立美術館『横山大観展 良き師・良き友』横浜美術館 朝日新聞社

二〇〇三年 一三〇頁転載

「経巻を片手に眼光鋭くこちらを振り返る人物が、中国春秋時代の思想家、老子である。大観は岡倉天心の東洋思想に強く影響を受けたが、なかでも道教は大観の藝術を貫くものであり、画題においてもしばしば老子や寒山拾得などをとりあげてきた。・・・」⁽²⁾⁽⁴⁾
横山大観、下村寒山、菱田春草などは、天心の思想が、なんであるかよく理解をしている。彼らは、画で表現するが、語りは少ないので、天心の思想を言葉で表している書物少ない。

観山もまた、老子の他に道釈画の《寒山拾得》⁽²⁾⁽⁶⁾、陶淵明の《帰去来》⁽²⁾⁽⁷⁾の画を描いている。



下村観山《老子》大正四年（一九一五）

東京国立博物館『下村観山』横浜美術館 二〇一三年 九八頁転載

大観も観山も、天心が注目している儒教、仏教、道教に関する画を多く描いている。特に老子は、「無為自然」⁽²⁾⁽⁸⁾を説いた、教えの祖である。菱田春草も美術学校時代に、老子を描いている。明治二六年という早い時期に描いている。老子が牛に乗っている基本的な画である。しかし、天心よりも二年前に亡くなるので、そのほかの作品は少ない。

三人の画家は、天心の教えを守り、世界を広く見て、作品の研究に余念がなかった。天心が目指す道教も把握している。大観、観山は、その思想を具体化している画家であり、天心が、めざす思想を理解して、その意志を継いでいる。

天心の思想は老子の考えに近いが、儒教、仏教とトータルに交じり合ったものであろう。

注

(1) 「将来注意ノ要点」⁽¹⁾ 第四章六節

鑑画会での演説で説いた言葉

第一、最モ必要ナルハ自主ノ心是ナリ。

第二、最モ注意スベキハ古法ヲ失ハザルコト是ナリ。

第三、必要トスル所ハ精神是ナリ。

第四、最モ必要スベキモノハ技術是ナリ。

第五、今日ノ画体上殊ニ欠点トスル所ノモノハ品位是ナリ。

第六、将来ニ発達スベキモノ極メテ多シト雖モ、先ツ其重要ナルモノ

ハ歴史画及び浮世画はレナリ。

『岡倉天心全集』三巻 平凡社 一九八〇年 八六〜八七頁

- (2) 島村抱月(一八七一〜一九一八) 文学者 島根県生まれ。早稲田教授。雑誌「早稲田文学」を主幹、自然主義文学運動に尽力、文芸協会のために貢献。一九一三年、(大正二年) 松井須磨子と芸術座を興して西洋近代劇を紹介。『新美辞学』『近代之研究』など。

- (3) 離騷 楚の屈原作といわれる自伝的長編叙事詩。楚辞の代表作。生い立ちから始まり、讒(ざん)によって楚の朝廷から逐われ、失意の果て、汨羅(べきら)に投水する決心をするまでの無限の憂愁を述べる。

- (4) 『大観画談』横山大観著 日本図書センター 一九九九年 四三頁

- (5) 『東洋の理想』岡倉天心著 講談社 一八九六年 二〇一頁

- (6) 『横山大観展 良き師、よき友』横浜美術館 朝日新聞 二〇一三年 一二五三頁

- (7) ラムナット国王 英国植民地時代のインドの小国の王

- (8) (1) の第三 必要トスル所ハ精神是ナリ。

- (9) 『大観画談』横山大観著 日本図書センター 一九九九年 一二五頁

- (10) 前掲書 一二五頁

- (11) 前掲書 一二一頁

- (12) 前掲書 一二四頁

- (13) 前掲書 一二五頁

- (14) 『老君出関』周の役人であった老子は、国の衰退を機に同地を離れる。

この際、国境の関所にて関守に請われて記したのが、『老子道德教』二編であったという。この関所を通る場所は古来、画題として採用され、老子は馬に背にまたがった姿で描かれるケースが多い。『横山大観展 良き師、よき友』横浜美術館 朝日新聞 二〇一三年 執筆 佐藤志乃 三五六頁

- (15) 『虎溪三笑』廬山の東林寺に隠居していた慧遠(えおん 東晋の僧)は、三〇年間、虎溪(こけい)を越えて俗界に出ることはなかった。しかし、ある日、友人の陸修静(道教)と陶淵明(儒教)を見送る時に、話がはずむうちに虎溪の石橋を渡ってしまった。これに気づき三人とも大いに笑ったという。仏・道・儒の三教一体をしめす説話。『横山大観展 良き師、よき友』横浜美術館 朝日新聞 二〇一三年 執筆 佐藤志乃 三五七頁

- (16) 『焚火』寒山拾得は古来より描かれた道釈画の代表的な画題である。

- (17) 『横山大観展 良き師、よき友』横浜美術館 朝日新聞 二〇一三年 一七八頁

- (18) 『岡倉天心全集』四巻 岡倉天心著 平凡社 一九八〇年一六六〜一六七頁

- (19) 『生誕一四〇年記念下村観山展』横浜美術館 二〇一三年 一七八頁

- (20) 阿羅漢 「仏」尊敬・供養を受けるのに値するという意味で応供(おうぐ)と訳

す。仏教の修業の最高段階、また、その段階に達した人。

- (21) 『東洋の理想』岡倉天心著 講談社 一八九六年 二〇一頁
- (22) 『生誕一四〇年記念下村観山展』横浜美術館 二〇一三年 一七九頁
- (23) 『特別展菱田春草』明治神宮 平成二二年 八四頁
- (24) 前掲書 八四頁
- (25) 『横山大観展 良き師、よき友』執筆 太田雅子横浜美術館 朝日新聞 二〇一三年 二六四頁
- (26) 寒山拾得 唐時代末期、拾得は中国天台山国清寺の豊干（ぶかん）禪師に拾われて寺の賄い役をしており、寒山は天台山の岩窟に暮らし、空腹になると拾得のもとを訪ねていった。両者とも詩を得意とし、また超俗的な振る舞いをする事で知られ、古くから絵画の中では、寒山は教巻、拾得は箒を持ち、二人とも破れ衣をまとい、蓬髪で呵々大笑いする姿で描かれた。『横山大観展 良き師、よき友』横浜美術館 朝日新聞 二〇一三年 執筆 太田雅子 二六二頁
- (27) 帰去来 故郷に帰るために、ある地を去ること。帰去来の辞 晋の陶淵明の文。彭沢の県令を最後に宮仕えをやめ、故郷の田園に帰った折の心境を述べたもの。
- (28) 「無為自然」^{むいじねん} 無為 自然のままで作為のないこと。老子で、道のあり方をいう。自然（じねん） 呉音。本来そうであること。おのずからそうであること。

第八章 書簡から見る天心の人間像

はじめに

この章では、『岡倉天心全集』にある書簡から、天心の人間像を検証するのが、目的である。

そのためには、省略した手紙文では、内容が正確に伝わるように可能な限り、全文を載せる。

第一節では、天心が亡くなる一〇ヶ月前のプリヤンバダ・デヴィー・バネルジー夫人（二八七―一九三五）との手紙を取り上げる。

プリヤンバダ夫人との書簡のやり取りは、天心がボンベイ港を出航する直前から始まる。

第二節では、米国マサチューセツ州ボストンにおいて、同志となり、スポンサーとなったイザベラ・スチュアート・ガードナー (Isabella S. Gardner 一八四〇―一九二四) 夫人を取り挙げる。

書簡から読み取る限り、二人の間には、親しい信頼関係ができ、天心はユーモアのある手紙も送っている。また茶道具も贈答している。天心の私的な日常の姿が浮かぶ書簡である。

第三節では、和田三郎（以後、三郎と省略する。第二章第二節3を参照）を取り上げる。三郎への書簡は三通あり、天心が亡くなる一年間に、父と子（三郎）の短い手紙のやり取り

である。天心は、家族の縁少ない子へ惜しみない愛情を父として手紙を書いている。三郎もそれに答えている。しかし、その手紙は、周りの人たちへの配慮も窺わせている。

第四節はその他の書簡を抜粋した。

一節から四節までの書簡を通して、天心の人柄と内面を検証する。

第一節 プリヤンバダ・デヴィー・バネルジー夫人

心の中の声が聞こえるような、飾らない、静かな心で書いている書簡から始まる。詩人のプリヤンバダ夫人の美しい詩と呼応し、天心の人間性が、あふれる書簡である。日本語訳の大岡信の訳が、印象的である。⁽¹⁾

(一九二二年)

一〇月二日 プリヤンバダ・デヴィー・バネルジー夫人あて

封書(封筒なし)

奥様

強い喜びをもってあなたの詩を読ませていただきました——どれも
みな魅力的で、胸にしみこみます。ベンガル語が読めないのが残念
です。原語でしたら素晴らしいに違いありませんのに。いずれ、私
も後日習うかもしれませんが。

あなたのご親切は、私をインドに結びつけるきづなをもう一本ふや
してくれました。写真をおとりの節、送って下さると嬉しいのですが。
お手紙はもういただけないでしょうか。私の住所は——米国マサチュ
ーセツ州ボストン美術館です。
かさねてお礼申しあげます。

敬具

岡倉覚三

ボンベイ

一九二二年十月十二日

私は今日ヨーロッパへ出発します。

母上どうぞよろしく。⁽²⁾

発見された書簡一九通の天心からの最初の手紙である。ボストンに戻るために、ボン
ベイを出発する日に書いている。

次の書簡から、天心が夫人に「The Book of Tea」を送っていることが確認できる。それを
読んでのプリヤンバダの率直な感想を詩に書いている。

天心がカルカッタに到着したのは、大正二年(一九一二年)九月中旬である。プリヤン
バダ夫人との初対面は、タゴール邸である。

スレンドラナード・タゴール⁽³⁾ (Surentranath Tagore)に迎えられ、ラビンドナ

ート・タゴール⁽⁴⁾ (一八六一—一九三二)家の客となる。

プリヤンバダ・デーヴィー・バネルジー (Priyambada Devi Banerjee) と
相知る。(中略)

一〇月十二日、ボンベイを出発し、ヨーロッパへ向かう。プリヤンバダに最初の
書簡を送り、以後、天心が死ぬ直前まで手紙の交換があった。⁽⁵⁾

岡倉（天心）が亡くなる一〇ヶ月まえである。



プリヤンバダデーヴィー夫人 『岡倉天心全集』七巻から転載

十月一日 プリヤンバダより 封書

【表】 To Okakura San From Priyamada Devi

『茶の本』をたたえて

乾いたしわしわの茶の葉よ、いったい誰が夢みただろう、こんな乾いた葉の中に、かくも緑なす春の潮の歌と詩と美が保たれていたなど。こおかれやすく、もろい、貝のような陶器の茶わんよ。いったい誰が信じえただろう。一滴の純金の滴の中に、人の一生のよろこび、空間、そして聖なる夢を、このこわれやすい茶わんが示してくれるなどと。日本の子よ。あなたは美わしくも描いたのだ、あなたの茶の水彩の中に、永遠の生の微笑と涙、光と影を。

一九一二年十月一日

プリヤンバダ・デーヴィー⁽⁶⁾

“The Book Of Tea”は、すでに明治三九（一九〇六）年にニューヨークで刊行されている。天心がプリヤンバダ夫人に『茶の本』、茶葉、茶碗を贈呈したのだろう。茶葉は、「乾いたしわしわの茶の葉」と「一滴の純金の滴」からして、抹茶ではなく、煎茶であろう。茶わんは、「貝のような陶器の茶わん」、「もろい、貝のような陶器」とか、「こわれやすい茶わん」のヒントから、一番近いものは、白磁であろう。

当時、インドはイギリスの植民地にされ、多くの紅茶が栽培され、本国イギリスへ輸出していた時代である。プリヤンバダ夫人も、赤いお茶（紅茶）を常に飲んでいたのであろう。それゆえに新鮮そのものに感じたであろう。

漢詩を書く天心としては、この見事な詩に、胸を打たれ、心から慰められたのではないか。プリヤンバダ夫人の「いったい誰が夢みただろう、こんな乾いた葉の中に、かくも緑なす春の潮の歌と詩と美が保たれていたなど」⁽⁷⁾、「人の一生のよろこび、空間、そして聖なる夢を、」⁽⁸⁾は、癒しに満ちた詩である。天心は十二日の書簡で、「強い飲みをもって

あなたの詩を読ませていただきました⁽⁹⁾、「みな魅力的で、胸にしみこみます⁽¹⁹⁾」、「写真をおとりの節、送って下さると嬉しいのですが」⁽¹¹⁾など、天心はプリヤンバダ夫人に魅了されていることがわかる。また、写真を送ってくれとお願いしていることは、プリヤンバダ夫人の天心に対する感情をすでに理解している。写真の送付のお願いをしても、送ってくれるだろうと、確信が見受けられる。

プリヤンバダ夫人からの二通目は、天心がボンベイを出国する六日前である。

一〇月六日

封書（封筒ナシ）

親愛なる岡倉さま

ブリからもどっていらして、またすぐにマトラにお出かけになるそうです。すね。あなたとスレンが五時においで下さり、インドのお菓子やシャーベットを少々召し上がって下さるなら、母も私もとても嬉しく存じます。お茶までご一緒にとはともお願いできません。

心からあなたの忠実なプリヤンバダ・デーヴィー⁽¹²⁾

次の書簡は、紋章の話で締めくくり、最後には末尾の署名には、「あなたのプリヤンバダ」と素直に書き、プリヤンバダの詩（夢の落とし子・降服）を付け加えている。また、プリヤンバダ夫人の素直な書簡である。天心にとっては、慰められた書簡であろう。

紋章について、六月四日付の手紙は、以下である。

六月四日 プリヤンバダより 封書

【表】 Okakura Kakuzo Esq Idzura Otsmachi Hitachi Japan

From G. N. Tagore st. Calcutta India Registered

【裏】

私の家の紋についてお尋ねがありました——父方の人々は「クリン・ブラーミン」で、考えに考えて、人生の余分な物を全て振りすてしまった人々です。私の夫の家系の人々は地主階級に属していますが、彼らも「クリン・ブラーミン」です。みな家紋など持っていないと思います。ベンガルの武士階級がもしそういったものをもっているとしたら、それは新式のもので西洋の真似を取り入れただけと考えてまがいがないでしょう。この国の王族とクシャトリアの支配たちだけが、真正正銘の由緒ある紋章を持っているのだと思います。

私は深い香りをもった白い花ならなんでも好きです。ハスの花はわが国の象徴

ですし、菊はあなたの国のそれではないですかどちらかの花の中から選んで下さい。あなたが選んで下さる方が私自身で選ぶより、私はうれしうございます。長くてまとまりのない手紙も終わりにしなければなりませんわね。すっかり退屈させてしまったのではないかと心配です。私は心のままに書き、つつしみやしきたりは無視しました。でも、私のこんな打ち明け話をも黙って胸に秘めて下さるあなたの自愛と信義をご信頼申しあげます。私の夢の落とし子に二編の詩を送ります。どうか、いじわるにならずに、子供の目で読んでください。他のものは、ちようど先月の四日にあなたが私にお書きになっただけの書かれたものです。テレパシーを証明していますわね。

思いをこめて プリヤンバダ¹³

その後、六月二四日には、プリヤンバダ夫人から、六月二八日、七月七日に天心からの書簡があるが、七月の前半にはプリヤンバダ夫人から、連続四回の書簡を送っている。

天心は七月二二日付の手紙では「蓮の寶石なる人に」と書いて「手紙なんて、じつにむなしく、無意味に思えました。自分を言い表すたった一つの方法は、インド行きの次の船にとび乗ることしかありませんでした。私の脳裏の中で、船の運航表を調べさせました。なんとという気狂い沙汰か！」¹⁴

七月には「(息子)一雄と水科孝子の結婚を正式に認め、親族縁者だけの披露宴を鶯谷の伊香保で開く」¹⁵その後、五浦に戻っている。

一方、プリヤンバダ夫人は、届かない手紙に不安な気持ちを、素直に書き綴っている。

七月二七日 プリヤンバダより 封書

【表】 Okakura Kakuzo Esq. IdzuraOtsmachi Hitachi Japan Japan

(via Tucticorin)

【裏】 封蠟

インド、カルカッタ、バリガンジユ、ジャンターラ通り四十六

【十九】 一三年七月二十七日

親しい友に

何故、私が書かない限り、お手紙を下さらないのですか。

気遅れなさっているのですか。忘れていらっしやるのですか。

—— (中略) ——

目覚め

浜辺で洗われる貝のように、私は死んだように黙って生きている。

歌の大海の中から私はやってきた。

私の心臓は、漕ぎつけない音楽の旋律が脈うっている。

おいで、私の戦士よ、私をそなたの両腕にだいて、私の魂にそなたの
トランペットの呼び声をふきこんでくれ。

かくて目ざめれば、私は多くの歌を呼びだし、無言の砂の一粒一粒
を目ざめさせ、声をそろえて、この計り知れぬ人生の永遠の躍動を
震える歌をうたわせようものを。

一九一三年四月二十三日作⁽¹⁶⁾

この長文の書簡は天心が亡くなる一ヶ月少し前の七月二七日付で、プリヤンバダ夫人か
らの手紙である。四月に作った詩を付け加えている。

プリヤンバダの精神も一定していないようである。返信がないあせりと心配、天心の健
康を気遣う思いと心配を掛けまいとする思いが交互し、中国への旅が安全であるか等（カ
ルカッタも）今年は雨が多く災害の心配をしたり、しかし、雨もやみ自然が気持ちよくな
ったことなど、とりとめもないことを書いている。

八月一日付けの天心の封書は、下谷の消印⁽¹⁷⁾が押されているので、その後、赤倉へ静養
のため移動している。プリヤンバダ夫人からの七月二七日付の手紙は、三週間ほど天心の
手元に届いていないようで、プリヤンバダ夫人は、返信がないので、「地下牢の中で息をし
ているような気分で、この恐ろしい気分からのがれるためにあらゆる努力をしましたが、
いたるところに傷を負っただけでした。⁽¹⁸⁾」とまさに恋愛をしている状態であろう。

プリヤンバダ夫人は七月になってから、四日、五日、九日、一五日、二二日と続けて
五通を投函している。

八月二日 プリヤンバダ・デーヴィー・バネルジーあて 封筒

【表】 英領印度カルカッタ府行

Madame Pryambada Devi Bannerjee 46 Jhautala Road Balligunge
Calcutte India Registered

【裏】〔封印〕 上部、中部、下部に封蠟

五浦

一九一三年八月二日

奥様

何度も何度もペンをとりましたが、驚いたことに何ひとつ書くことがありません。
すべては言い尽くされ、なし尽くされました。——安じて死を待つほか、何もあり
ません。広大な空虚です。——暗黒ではなく、驚異的な光に満ちた空虚です。炸裂

する雷鳴の、耳も聾せんばかりの轟音によって生みだされた、無辺際の静寂なし
です。私はまるで、巨大な劇場にたった一人で坐り、みずから一人だけで演じて
いる絢爛たる演技をみつめる王侯のような気持ちです。おわかりでしょうか？
いいえ——何も書くことはありません。
お元気でいらっしやることを念じます。
ほんとうによくおなりですか。私は元気で幸せです。

敬具

覚三

戒告

私が死んだら、
悲しみの鐘を鳴らすな、旗をたてるな。
人里遠い岸辺、つもる松葉の下ふかく、
ひっそりと埋めてくれ——あのひとの詩を私の胸に置いて。
私の挽歌は鷗らにうたわせよ。
もし碑をたてねばならぬとなら、
いざさかの水仙と、たぐいまれな芳香を放つ一本の梅を。
さいわいにして、はるか遠い日、海もほのかに白む一夜、
甘美な月の光をふむ、あのひとの足音の聞こえることも
あるだろう。

一九一三年八月一日 (1913)

An Injunction

When I am dead

Beat no cymbals display, no banners display.

Deep in the pine-leaves on a lonely shore,

Bury me quietly-her poems on my breast.

Let the sea-mews chant my dirge.

If a monument they must raise,

Plant me some narcissus,a pluntree of fragrance rare;

Perchance,one distant mist-white night

I may her footsteps on the moonlight sweet.

Aug. 1st 1913 (1913)

八月二二日付のプリヤンバダデーヴィー夫人への手紙が絶筆である。

天心は自分に正直で、相手を思いやる精神も大いに持ち合わせている。死がまじかであるにもかかわらず、はるかかなたのインドの地にいる女性に思いを告白して、精神は自

由である。プリヤンバダ デーヴィー夫人の手紙も自然と一体となるような、自由な思いと感情が文面から伝わってくる。

一九二二年一〇月一二日から一九一三年八月二二日までの約一〇ヶ月間のできごとである。天心の逝去が一九一三年九月二日であるので、天心の最晩年の心の中が明らかにされている。一九一三年八月十一日にプリヤンバダ・デーヴィー・バネルジー夫人に書いた手紙は天心が亡くなる約二〇日前である。その内容はまさに心を許した大切な女性であり、気遣いがある手紙である。最後の書簡は遺品の目録であり、荷物の税金まで送っている、細やかな配慮のある天心像が浮かび上がる。

八月十一日 プリヤンバダ・デーヴィー・バネルジーあて 封書

【表】英領インド行 カキトメ

Madame Pryambada Devi Bannerjee 46 Jhautala Road
Balligunge Calcunge India Registered

【裏】K.Okakura Idzura Hitachi Japan [封印] 上部、中部、下部に封蠟

東京

一九一三年八月十一日

奥様

日本の衣装類をひとまとめにして小包便で今日送りました。そのうち一部はどうぞご受納ねがいたく、また残りはご家族の他の方々にお受け取りいただきたく存じます。それぞれの品物に、差し上げる方の名前を書いてあります。

あなたには、

羽織一枚（菊花の紋をつけたガウン）。

帯一本（日本の婦人がウエストに巻く厚い飾り帯。別の使い途も

ありますように。） 菊花模様。

しごき一本（飾帯） 菊花模様。

母上に、

帯一本。

スレンの母堂に、

帯一本。

あなたがビビと呼んでる人に、

帯一本。

赤いしごき一本。

スレンの奥さんに、

帯一本。

赤いしごき一本。

スレンの子供たちに、

しごき四本。

同便で浴衣六着も送りました。家の中でのふだん着として着られます。

二着をあなたが取り、残りを母上、スレンのお母さん、ビビ、スレン夫人に

分けて下さるよう願います。

気に入っていただけるといいのですが。

敬具

覚三⁽²⁾

追伸があり、関税用の小切手も同封する細やかさである。余ったら、子供たちに玩具を、足りない場合の請求など、細やかな配慮をしている。また、回復に向って、五浦に帰るところまで書いている。

天心の家の家紋は「藤の花」⁽²⁾と書いている。八月一日付の天心の遺品の目録の手紙には、羽織一枚（菊花の紋をつけたガウン）、帯一本菊花文様、しごき一本菊花文様などを送っている。

郵便局の時間に間に合うように急いで書いていると説明している。しかし、八月二日付で投函している手紙には、何も書くことはないが、「光にみちた空虚です」⁽²⁾と短い文章で以下の詩を書いている。

大正二年（一九一三）の八月二日のプリヤンバダ・デーヴィー夫人への書簡が絶筆と
言われている。まだ、生の気力がある。次のように書いている。抜粋する。

八月二日 プリヤンバダ・デーヴィー・バネルジーあて 封書〔封筒なし〕

越後 赤倉温泉

一九一三年八月二十一日

宝石の声の人に

包みかくさず申しましよう。私は寝込んでしまいました。微熱と心臓障害のためです。医師は完全な休養と山への転地を命じました。それで私は先週から娘とお気に入りの妹と共にここにきています。たいしたことはないのですがどうか心配なさらないでください。もう治療の効果もでてきているように感じていますから。

あまり長く病気になるっているわけにはいきません。来年度のアメリカへの交換教授に選ばれ、十一月には出発しなければなりません。（中略）けれども、私は完全に宇宙と仲良くやっております、それがこのごろになって私に与えてくれたものに対して、感謝、ええそうです、たいへん感謝しています。私は完全に満足しています。

あばれだしたいくらい幸福です。私はここまでもぐりこんで来て、枕のまわりでうずをまく雲に笑いかけます。(中略)やはり病人の私を見られたくはありませ⁽²⁴⁾ん。

一九一三年の七月以降の流れから、七月ごろには、妻元子(一八六七〜一九二四)、息子一雄は天心の命の長さを知らされていたのではないだろうか。それ故に、急いで身内だけの披露宴をあげたのではないかと考えられる。

八月一日にはプリヤンバダ夫人に遺品を送っているが、プリヤンバダ夫人への最後の書簡(八月二一日付け)からは、まだ元気になり、米国での交換教授の仕事をやろうとする意志が見受けられる。

第二節 イザベラ・S・ガードナー夫人

息子・一雄は、ガードナー夫人について以下のように説明している。明治三七(一九〇四)年三月二七日に、「(画伯)ジョン・ラファージの紹介状をたずさえ、はじめて、ガードナー夫人をフェンウェー・コートの邸宅に訪問している。名をイザベラと称し、その八〇歳に近い長生涯の半ばを、美術品の蒐集と芸術家の愛護とに始終したミリオネアの寡婦で、その居住するフェンウェー・コートの邸宅が、そのまま宏壮きわまる芸術の殿堂であった⁽²⁵⁾」。「⁽²⁶⁾覚三は歓待されたようで、『岡倉天心全集』には、招待の書簡が、すべて収められていないが、他の書簡からわかることは、かなりの頻度で、招待されているようである。」「常に在米の日は、彼女から愛護され、一方ならぬ庇護を蒙っていた」と述べている。

〔明治三十七年(一九〇四)五月二十四日 ガードナー夫人あて〕

親愛なるガードナー夫人

お持ちの愈達作の興味深い絵の署名は次の通りです。

巳卯小春?? (???)は不明 加筆)

黄華精舎

史溪愈達 (落款あり/加筆)

巳卯の年小春(十一月)、黄華精舎にて描く。

作、史溪の愈達(落款)

一、愈達の落款

二、水を観想する者

愈達は中国明代中期の画家として知られていますが、彼に関する正確な年代は不明です。巳卯の年(六十年ごと)に廻ってくる)天順二年に当たる一四五九年か、正徳十四年に当たる一五一九年のどちらかと思われれます。私見では古い方の年のように思われれます。 敬具

一九〇四年五月二十四日⁽²⁷⁾

ガードナー夫人から、所持品の絵画が読めないのので、天心に解説してくれるように頼んでいる。夫人も由緒がわかれば、さぞ嬉しかったろうと想像できる。

ガードナー夫人からは、その後、フェンウェー・コート（Fenwick Court）の邸宅に招待されている書簡がある。十一月には、天心から弟子達が展来会をするので、お茶をたてる役をしてくれるように、お願いをしている。以下の書簡二種である。

〔明治三七年（一九〇四）十一月七日 ガードナー夫人あて 封書〔封筒なし〕〕

美術館にて

一九〇四年十一月七日

親愛なるガードナー夫人

この前の日曜日はじつに愉快な時を過ぎて頂き、有難うございました。

弟子たちは双六を大いに楽しませて、ご親切にくれぐれもお礼申しあげてくれと申しております。

弟子たちは十七日の木曜日から十二日間、ケンブリッジで展覧会を開きます。

いずれの日かの午後、ご光来の上彼らのためにお茶をたてる役をしていただけましょうか。

展覧会は大いにひき立てられることでしょう。これは最初の日本人展ですので、ぜひとも成功させたいです。もし、ご同意頂けますならば、その時のために茶、梅ぼし、海苔など、すさまじいものを万端整えましょう。こういうことをお願いするとは、不届きではございませんでしょうか。

敬具

岡倉覚三⁽²⁸⁾

〔明治三七年（一九〇四）十一月十一日 ガードナー夫人あて 封書〔封筒なし〕〕

ブラットル街一六八 ケンブリッジ

十一月十一日

十七日、私どものためにお茶をたてに来ていただけますでしょうか。展覧会の初日です。もしその日をご都合悪ければ、二十日、二十三日、あるいは二十八日はいかがでしょうか。でももし展覧会の初日にご光来頂ければ、この上ない光栄に存じます。

敬具

岡倉覚三

お茶の時間は午後四時からです。どなたか手助けのご婦人が必要でしたら、

どうぞ、ご一緒にご連絡ください。⁽²⁾

二つの書簡では、弟子たちが、展示会をするということ、そこで、お茶を提供したいので、手伝ってほしいと丁寧をお願いしている。ガードナー夫人からの書簡は全集にはないが、よい返事で、おそらく、希望の日にちを尋ねてきているのであろう。その結果、初日のオーブニングの日にお願したいということと、お茶の手伝いの人が足りない場合は、お知り合いの方をお願いしたいというの書簡である。ガードナー夫人とも、頼みごとができる間柄になっている。

書簡の内容の目的は、理解できたが、「お茶をたてる」は、抹茶であるか、煎茶であるかが気になるのである。

この書簡では、お茶を皆様にし上げてくれませんかとお願している。しかし、英文を確認すると、以下の一文である。

"Will you pour tea for them some afternoon?" 「pour」とあるので、煎茶であろうか。『茶の本』の第二章の「茶の流派」の中では、以下が原文である。

煮る団茶 —— "The Cake -Tea which was boiled"

かき廻す粉茶 —— "the Powdered-tea which was whipped"

淹^だす葉茶 —— "the Leaf tea which was steeped"

点てるは whip であるが、pour out a cup of tea であれば、茶をつぐになる。いずれにしろ、この日の茶会は煎茶であろう。

以下に、二通の書簡を載せる、ガードナー夫人への茶道具の贈答品である。

〔明治三八年（一九〇五）九月十一日 ガードナー夫人あて 封書〔封筒なし〕〕

東京谷中 美術院

一九〇五年九月十一日

親愛なるガードナー夫人

「茶の湯」の道具一式、小包でお送りします。私の思い出のためにお納めください。いくつかは長年私とともにあったものです。道具類の内容は次の通りです。

- 一、 鉄瓶
- 二、 鉄製風炉
- 三、 古い灰と灰をととのえる敗さじ
- 四、 炭斗および炭少し
- 五、 漆器製風炉釜敷
- 六、 青と白の角型水差し
- 七、 乾山作茶碗（夏用）
- 八、 楽山作茶碗（冬用）

- 九、香合および香
十、象牙製茶杓
十一、竹製茶杓
十二、漆器棗
十三、陶製なつめ
十四、竹製茶柄杓および銅製五徳蓋置き
十五、茶巾および銅製茶巾だらひ
十六、羽ほうき
十七、ふくさ
十八、新鮮な抹茶一袋
その他

ご健勝を祈りつつ

敬具

岡倉覚三

右品物は数個の包みに分けてお送りします。税金をあまりたくさん払わないで下さい。
来月初め出航します。⁽³⁰⁾

〔明治三八年（一九〇五）九月二十七日 ガードナー夫人あて 封書〔封筒なし〕⁽³⁰⁾〕

東京谷中

一九〇五年九月二十七日

親愛なるガードナー夫人

茶道具のうち、銅製風炉と鉄瓶は小包では送れませんので、二つの箱に入れ直して船にのせました。業者の荷受証を同封します。

これが御地につくころは、私もたぶんポストンでしょう。十月六日出航のミネソタ号にのりますから。

敬具

岡倉覚三⁽³¹⁾

天心の細部までいき届いた書簡である。この度の茶道具は、抹茶道具で、天心も意識していることが、次の英文の書簡から読み取れる。

I am sending you by parcel post a complete set of the "Stirring Tea" service.

OKAKURA KAKUZO collected english writing 3 p62

天心が表記している "Stirring Tea" は、かき回す茶と煎茶と区別して、書いている。ガードナー夫人は、天心を度々招待している。他の書簡からも、天心は今日が行けないとか、丁寧で断っている。茶の話もしているであろうし、この時点で、ガードナー夫人、煎茶と抹茶の違いを理解していることがわかる。この度の道具は抹茶道具である。

【参考】

《白狐》 大正二年二月十八日、オペラの台本“The White Fox”（「白狐」）を書き上げ、プリヤンバダ、ガードナー夫人などに献呈している。ボストンで作曲依頼までは漕ぎ着けるが、実際は上映されることはなかった。その戯曲は信田の森の狐（コルハ）の伝説を天心流にアレンジした戯曲である。人間の姿をかりて夫（保名）と幸福にくらすが本物の伴侶が現れ、二人の間にできた子どもを置いて、信田の森深くに消えていく。しかし、保名は、かつて助けた狐だと知ることになる。―概訳あるが、日本の昔の伝説をボストンの地で書き上げている。

第三節 息子・和田三郎

天心は一九一三年九月二日に没しているので、この書簡は約一年前である。短い間と息子の交流の書簡である。父天心からは三通が全集に掲載されている。三郎からは一通の英文の書簡がある。彼はまだ一七歳である。（三郎については第二章を参照）

〔大正二年（一九一三）六月六日 和田三郎あて 封書〔書留便〕〕

【表】東京牛込下戸塚町三十二 和田三郎殿 カキトメ

【裏】常陸大津町五浦 岡倉 〔封印〕

入学費用として金壹百円送付申候 京都入学の後ハ劍持夫人ニ別に手当差出度
如何様の費用入用ニや能く御相談被下度 何れ面会の上取極可申候
当地へ御文通は英文にて差出被下度

〔大正二年（一九一三）六月六日

父より

三郎殿

切手は業と三郎名義ニ致置候[△] 銀行へは自身にて御出可然候

父モ七月上旬出京 中旬ニハ奈良京都ニ参り度 京都宿所定

マリ候ハ同じ一報被下度[△]

書簡解題・注*1 『岡倉天心全集』別巻四三九頁）によれば、以下の説明がある。

京都入学 三郎は京都第三高等学校を受験する。しかし失敗し、翌年

名古屋第八高等学校に入学。この一行は書信冒頭の余白に書かれている。

〔大正一年（一九一二）七月十三日 和田三郎あて 封書

【表】京都府下田中村龍田町九番地 清水清二郎方 和田三郎殿 親展

手紙拝見 此程用事出来京都へ参り兼残念ニ存候 試験成績如何にや 御通知被下候 来月六七日頃ニハ亦々上京可致考ニ候

無事御安心被下度

七月十三日

父

三郎殿⁽³³⁾

短い書簡であるが、天心が、父親らしい心配をしている。気負いを感じない身内者同士としての平凡な父親であることが窺える。一九一二年七月のことである。『全集』七の解題には三郎のその後が書かれてある。

名古屋第八高等学校から東京帝国医学部に入学、卒業後、都立松沢病院に勤務、のち熊本医科大学助教授をへて、精神神経科広島県立代用精神病院長となる。⁽³⁴⁾

次の書簡はポストン美術館帰任するための日本を旅立った直後に書かれてたものである。ここにも父親らしく、三郎を按じている。

埼玉県熊谷町の劍持忠四郎⁽³⁵⁾（一八六四〜一九〇九）夫妻に三郎を預けている。お世話になっていている劍持夫人へ「よろしく」の伝言も加えている。劍持忠四郎は、もと東京美術学校で体育を教授し、日本美術院の評議員で、天心をささえていた。その劍持は妻より、先立っている。当時は、劍持夫人は未亡人である。

〔大正一年（一九一二）〕八月一七日 和田三郎あて 封書

【表】埼玉県熊谷町筑波町 大久保万五郎殿方 和田三郎殿 親展

八月一七日

此度印度欧州を経て渡米可致す都合ニ有之去十四日横浜ヲ出発致候 凡一カ年不在ニ付心身撰養勉学被致へ候劍持夫人へ宣敷御伝言被下候 米国着ハ例の如く

Museum of Fine Arts Boston Mass. U.S.A. ニ有候

八月一七日

瀬戸内海にて

父より

三郎殿⁽³⁶⁾

八月十四日、三島丸にて横浜を出港、インドに向う。「米国着ハ例の如く」と言っているのです、もうすでに、書簡のやり取りはしているようである。

和田三郎からの一通の書簡がある。六月六日 和田三郎あての書簡で、天心が三郎に英文での手紙を要求している。三郎は、父が望むように英文で書いている。

〔大正二年（一九一三）八月二十五日 和田三郎より 封書〕

【表】 Mr. Kakuz Okakura Istura Otsu Hitachi-no-Kuni, Japan
常陸国大津町五浦 岡倉寛三殿

Kumagaya August 24

Dear father—

I have been glad to saw you the other day. I came here the 20th inst.

And have taken rest. I asked books for you that day.

Will you kindly send the books which I can understand?

My lodge is Mangoro Okubo's as before.

Miss Chiyō said "Yoroshiku" to you!

Yours dearly

Saburou (21)

この三郎の書簡は、天心の手元には届いていないであろう。三郎は、以前に尋ねた本を自分は理解できるだろうか。その本を送ってくれと頼んでいる。『東洋の理想』『日本の覚醒』『茶の本』であろう。

父に甘えた言葉は、天心には届かなかったのではないだろうか。

以下の二通の書簡は、剣持忠四郎が、和田三郎（天心の息子）を預かっているので、そのお世話料と何がしを現金書留で送っている。

〔明治四〇年（一九〇七）三月二十二 剣持忠四郎あて 封書 書留〕

別紙九拾円也 三四五月分封入仕候

小生明日出京凡老週間滞在の見込 仮寓は日暮里浄光寺（諏訪神社の隣）ニ
御座候

三月廿二

天心生

剣持君 (28)

〔明治四〇年（一九〇七）十月二十日 剣持忠四郎あて 封書〕

【表】 埼玉県熊谷町 剣持忠四郎あて

【裏】 東京根岸御行の松 山田方 岡倉 〔封印〕 固

拝啓 別紙小切手三月分封入致候

十月二十日

岡倉

一 鑄 兄⁽³⁶⁾

この書簡の「三月分」は三ヶ月分であろう。七月二十八日にも劍持忠四郎あてに「別紙封入仕候」とある。天心の几帳面さが垣間見られる。

第四節 その他の書簡

〔明治三八年（一九〇五）五月二十九日 岡倉由三郎あて 封書〕

【表】 東京都御茶ノ水高等師範学校教授 岡倉由三郎 親展

【裏】 奈良対山楼 天心 五月二十九日 〔封印〕メ

夜半燈を剔て「大和心」静かに読了 行文の快く詩に富み論旨の公平穩実なる敬服の外なく兄なぞなまじの物たるが愧かしき迄ニ候

家門の誉不過之 父上御存命なれば何故ニ喜しからんと是のみニ候

五月廿九日夜二時

由三郎 殿⁽⁴⁰⁾

「大和心」とは、由三郎著 "The Japanese Spirit", London, Archibald Constable and Company, Ltd, 1905 を⁽⁴¹⁾す

一九〇五年、『茶の本』の刊行の一年前に、弟の由三郎が、「The Japanese Spirit」を London から刊行している。天心は弟の本の出版に、非常に喜んでゐる。父親も喜んでゐるだろうと思うだけであると、弟由三郎の活躍を心から応援していることがわかる。

明治四二年）十二月三日 岡倉由三郎あて 封書（封筒なし）

近々出発被致候由万事都合如何候や 先方到着の上ハワーナル一家カーチス其他新納氏モ罷在候儀ニ付何も心配なき事と在候 別に添書の必要もなく存候

ポストンにて小生の為メニ友人として親切ニ被致候人にては

Mrs. Garder

是ハ有名なる人なり 宣敷御伝言被下度

Mr. and Mrs. Samuel Warner

Mr. and Mrs. Edward

Dr. Denman Ross

Mr. and Mrs. Potter Mrs. P. ハビゲロウ氏の niece なり

等必ス候面会被下度候、 猶用事事候ハ、御申聞被下度

十二月三日

由三郎殿⁽⁴³⁾

解題『岡倉天心全集』別巻四三二頁)によれば、明治四十二年十二月十一日、「弟由三郎がロウエル・インステテュートの招待で渡米する。」弟を心配して、よく面倒を見ていることがわかる。

天心は妹蝶子を入っている。その妹に以下の書簡である。

〔明治三十九年(一九〇六)〕5月十四日 山田蝶子あて はがき

【表】東京本郷区丸山新町十六 岡倉方 山田蝶子様 五浦

薄茶二十五銭の分御送り被下度候⁽⁴³⁾

妹には気兼ねなく、頼みごとをしている。また、書簡も用件のみである。

明治三十九年(一九〇六)八月七日に天心からクーリッジ宛の書簡の内容で、茶室の購入について、決めかねていると言って、「もし茶室か蔵書のいずれかを確保しましたのち、その目的の為に特に留保している資金の送付をお願いすべく、電報いたします。」『岡倉天心全集』六巻二五五頁〜二五六頁)と書いて、茶室の購入も一つの目的にしておるが、中国での仕事に傾いているようである。

しかし、明治四〇年(一九〇七)三月一五日での天心から、ギルマンあての書簡では、「日本部の参考図書を形作るすべての蔵書を含む昨年の購入品の残りを整理し、発送しなければなりません。(中略)われわれが茶室を購入しなければ中国基金にまだまだ約三千ドルの残額があり」⁽⁴⁴⁾と茶室ではなく、中国美術を買い付けようとしている。

その他の書簡の中で、天心もボストンの生活が慣れてきたところに多くの日本文化についての質問を受けているのだろう。

天心は丁寧な返信を送っている。一九〇六年に『茶の本』を書く理由の一つも、求められた質問が、一つのきっかけになった可能性がある。アイナ・サーズビーからの依頼は、「君が代を教えてください」とある。エンマ・サーズビーと姉妹で、声楽家である。日本にも訪問している。

二通目は、ガードナー夫人からの依頼で、本人が持っている画の作家名と、何が書いてあるのかを尋ねているのであろう。ガードナー夫人の胸躍る感じが伝わってくる。天心は、丁寧な返信を送っている。

〔明治三十七年(一九〇四)〕八月二十日 アイナ・サーズビーあて

チェスナット・ヒル

八月二十日

アイナさま

あなたがケンブリッジに滞在していた折、夕食へのご招待を知らずにおり、まことに失礼いたしました。あの時横山は大変重い病気で、何よりいけないのは、彼がその病気のことを私に言わなかったことです。今ではよくなり、友人連と遠足に出かけようとしています。

私は今日ニューポートに出かけ、一週間——あるいはもっと——そこに滞在します。私の予定はまったくあやふやですから、グリーン・エイカーに参る約束はできません。

「君が代」はこうです。

Kimiga Yowa

Chiyoni

Yachiyoni

Sazare Ishino

Iwaoto Narite

Kokeno

Musumade

セント・ルイスでの藝術科学会議で講演するように依頼されましたので、来月でかけます。おそらくその帰り途にニューヨークにちよつと立ち寄り、お会いしてご親切の対するお礼を申し述べようと思います。

敬具

岡倉覚三⁽⁴⁾

次の書簡はジョンソン〔センチュリー社の編集者である〕⁽⁶⁴⁾

〔明治三十七年（一九〇四）七月二十一日〕であるが、「生け花」についての論文を書くことについて、「遺憾ながら筆者はその題目を扱うのに必要な資格を持ち合わせていないと言わざるを得ません。なぜなら、生け花は日本人の全藝術生活の一部を形成しており、全体の構造の洞察や把握なくしては理解できにくいものなのですから」⁽⁴⁷⁾

一〇月十六日のジョンソンあての書簡には、追伸として、「もしどうしてもその論文が今必要でありましたら、全力尽くし書くよう努力いたします。しかしそうでないなら、そうするのはのぞまないのです」⁽⁴⁸⁾。このように、花については、書くことに抵抗している。望まないままで、述べている。

天心は、花についての論文を書くことになりに抵抗している。興味あることである。『茶の本』では一章をもうけて花について書いている。

まとめ

プリヤンバダ・デーヴィー・パネルジー夫人との書簡のやりとりは、天心の心がなごんだものである。亡くなる前の一年たらずであるが、体調が悪く、苦しい中でも、細やかに、形見分けをしている。

母親が天心の幼少時に早世し、母親の愛情不足が、心の陰になっていると言わざるを得ない部分がある。そのことがプリヤンバダ夫人の優しさに引き寄せられたところがある。死の間際に、心のこもった形見分けをしようと見ると、これも天心の一面であろうと考察する。

また、二三歳もの違いがあるガードナー夫人は、母親の年齢であろう。富豪ではあるが、やはり、未亡人である寂しさを持っていると思われる。東洋の美術を好む老夫人との関係は、天心にとっては、居心地のよい関係であったと推察できる。ボストンでの生活に大きな力を与えてくれるはずである。交友関係が広がった一因にもなったであろう。女性には、暖く包み込むようなものを求めて、天心も相手の望みを叶えている。

弟の由三郎は、天心を常に支えている。天心が亡くなってからも、天心の業績を世に出す努力をしている。由三郎の存在が、天心にとっては心強かつたであろう。

ボストンでは、日本文化の質問が多くあったであろう。書簡の中で、花についての論文の依頼の書簡がある。その中で「筆者はその題目を扱うのに必要な資格を持ち合わせていない」と言い切っている。花についての本を書きたくないと言っている。このことから、天心の考えは、『茶の本』が、『花の本』にはならないということである。ボストンに行く時は『茶教』に加えて、数冊を携えて行くということは、茶に対しての関心が、以前からあったということと、ボストンで、日本文化をどのように説明するのがよいのかも考えていたのである。

これらの書簡から、天心の人間像が見えてきた。書簡は丁寧で紳士的である。相手をよく理解して、相手に好感が持てるように気負いのない書簡をだしている。それは、天心の人間性と思想からくる表現もある。書簡においても、常に「共感」が持てるような、自然体の内容であることが伺われる。依頼をする場合は、丁寧になおかつ、その事の意義を述べ、依頼される時は、相手の望みに添うように、資料を調べて答えているが、その依頼に答えられない場合でも、理由を述べ、あくまでも相手が納得と理解できるように対応している丁寧さがある。このことは、天心の重要な一面であろう。

息子の三郎との交流は、短い期間である。限られた時間ではあったが、心の交流もあり、最後には親としての責任も果たしている。しかし、天心の暗い部分であることには間違いない。

注

- (1) 大岡信(まこと) 一九三二年生。一九七一年『紀貫之』(筑摩書房) 読売文学賞
一九八〇年菊池寛賞 『大岡信詩集』(思潮社) など
- (2) 『岡倉天心全集』七卷 平凡社 一九八〇年 一八二〜一八三頁
- (3) スレンドラナード・タゴール (Surentranath Tagore) 詩人タゴールの甥で、滞印中の天心について回想記“KAKUZO OKAKURA”を残している。
- (4) ラビンドラナート・タゴール (Rabindranath Tagore) 印度の詩人、思想家。印度の近代化を促すとともに、東西文化の融合にとめた。日本にも四回来訪。
抒情詩集「ギーターンジャリ」でノーベル文学賞を受賞した。
- (5) 『岡倉天心全集』別巻 四三七頁
- (6) 前掲書 別巻 二三八頁
- (7) 前掲書 別巻 二三八頁
- (8) 前掲書 別巻 二三八頁
- (9) 前掲書 七卷 一八二頁
- (10) 前掲書 七卷 一八二頁
- (11) 前掲書 七卷 一八二頁
- (12) 前掲書 別巻 二二九頁
- (13) 前掲書 別巻 二六四頁
- (14) 前掲書 別巻 二六九頁
- (15) 前掲書 別巻 四三七頁 (息子) は加筆
- (16) 前掲書 別巻 二九六頁
- (17) 前掲書 七卷 四五六頁
- (18) 前掲書 別巻 二九七頁
- (19) 前掲書 七卷 二八三〜二八五頁からの抜粋
- (20) 前掲書 七卷 三八九頁
- (21) 前掲書 七卷 二八七〜二八九頁
- (22) 前掲書 七卷 二二六頁
- (23) 前掲書 七卷 二八四頁
- (24) 前掲書 七卷 二九〇〜二九一頁
- (25) 『父岡倉天心』 一八九頁 (画伯) 加筆
- (26) 『父岡倉天心』 一八九頁
- (27) 『岡倉天心全集』 六卷 一六四〜一六五頁
- (28) 前掲書 六卷 一八五頁
- (29) 前掲書 六卷 一八六頁
- (30) 前掲書 六卷 二一〇〜二二二頁

- (31) 前掲書 六卷 二一九頁
- (32) 前掲書 七卷 二六二〜二六三頁
- (33) 前掲書 七卷 一七六頁
- (34) 前掲書 七卷 四四〇頁

(35) 劍持忠四郎(一八六四〜一九〇九)もと軍人。東京美術学校で体育を教授。のち、

美術院の評議員。公私にわたり腹心の役をはたした。天心は三郎が中学生に

なつた頃に、劍持忠四郎に預ける。

- (36) 『岡倉天心全集』七卷 一七六頁
- (37) 『岡倉天心全集』別巻 三〇〇頁
- (38) 『岡倉天心全集』六卷 二八一頁
- (39) 前掲書 六卷 三〇三頁
- (40) 前掲書 六卷 一九七頁
- (41) 前掲書 六卷 四五五〜四五六頁
- (42) 前掲書 六卷 三七七〜三七八頁
- (43) 前掲書 七卷 二四一頁
- (44) 前掲書 六卷二七九〜二八〇頁
- (45) 前掲書 六卷 一七六〜一七七頁
- (46) ジョンソン センチュリー社の編集者と思われる。『全集』『岡倉天心』岡倉天心
著 六卷 一九八〇年 四四八頁
- (47) 前掲書 六卷 一七三頁
- (48) 前掲書 六卷 一八三頁
- (49) 前掲書 六卷一七三頁

第二部 茶道を中心にして

第九章 岡倉天心と茶道

はじめに

第八章からは、多面的に活動してきた天心と茶道という一面に焦点を合わせ、茶道への影響を捉えていく。

東京美術学校時代も日本美術院時代も多くの人々と交流を持っていた天心は、美術に留まらず、その時代の情報を把握していたと考えられる。明治時代になると、新聞・雑誌が創刊され、文部官僚である天心は、学校の創立とその学校での教科にも目を通していただろう。たとえば、伝統文化である点茶の授業などが行われている学校がでてきたことも知っていたであろう。

版籍奉還（明治二年）後、国のシステムが大きく替ったことは、茶道界にも大きな波が押し寄せてきている。

「三千家家元を含めて多くの茶家も、茶道方として仕えていた大名家からの扶持を失った。その結果、江戸時代には將軍家や多くの大名家に支持され、最大の流儀だった石州流は力を失い、再び往年の勢力を取り戻すことはなかった⁽¹⁾」。このように、庇護者を失い、その存在が問われた、厳しい時代であった。

また、『茶道の歴史』では、「京都のお茶のある家元の宗匠が明治の始めに、貧乏のどん底に陥りまして、豆腐を買う銭がない。豆腐屋はこれを知っていて、その屋敷の前を通りすぎたとたんに、トウ・トウといって売り歩いていたのが、急に、だまってしまい、屋敷を通りすぎたとたんに、フイーといったということです。文明開化、欧化主義という社会上の変革で、お茶など習う人がいなくなつたのです⁽²⁾」。このように、伝統文化を繋ぐきびさが、見えてくる。

美術界と同様に茶道界にも新たな動きがでてくる。新設された女学校で科目として点茶を取り入れたことなどである。今日の茶道が栄えた要因はここにある。また、財界人の茶人の登場である。

京都府は、明治三年から五年にかけて、芸能関係・興行関係に鑑札制度⁽³⁾で課税し、「遊芸稼人」とみなしている。

三千家連名で京都府知事長谷信篤宛に「口上書」を提出した。明治五年（一八七二）のことである。「茶道の源意」と題し、同年七月に提出したのが、最長老であった玄々齋（十一代裏千家家元）である。

茶道ノ原意ハ忠孝五常ヲ精勵シ節

儉質素ヲ専ラニ守リ分限相応タル家
務ニ怠ラス治世安穩ノ

朝恩ヲ奉載シ貴賤衆人親疎ノ隔テ無
交会シ子孫長久無病延寿ノ

天恵ヲ仰ク斯業ヲ教諭ノ道故ニ茶会ノ規
矩厳重礼節正敷五体ヲ崩サズ誠心ヲ以執

行成ス事業也依而纒力薄茶一点中ニモ比意
趣悉皆顕然ト表示畢

衣食住道具モ露地モ奢リナク
誠意ヲ励ム茶味ノ明クレ

精中六十三ヶ年七ヶ月誌

〔裏千家今日案歴代第十一卷々々齋精中〕 千宗室 淡交 平成二〇年 六〇頁

茶の湯は単なる遊芸にあらず、道として茶道を説いた。これにより、それぞれの茶家は、新たな活動をすることになる。

教育現場でも茶道を教える学校が現れたり、数奇者と呼ばれる茶人たちが活躍する。「廃仏毀釈」により、暴落した掛軸、仏具類、茶道具類は、没落した武士、公家たちが、二束三文で手放している。そこには、国宝級のものもある。それらを蒐集したのが、数奇者や道具商も加わる。

この章では、学校教育での茶道、天心と接点のある、益田 孝⁽⁴⁾（一八四八〜一九三八 鈍能）、原富太郎⁽⁵⁾（一八六八〜一九三九 三溪）、東京美術学校の設立と教育に携わった今泉雄作⁽⁶⁾（一八五〇〜一九三一 常真）、東京美術学校五代目校長正木直彦（一八六二〜一九四〇 十三松堂）に焦点をあてる。

天心が、ニューヨークのフォックスダフィールド社から刊行した“The Book of Tea”（一九〇六年）を書き上げるまでに、日本国内での茶道の動向は重要であり、天心は国内の状況も把握していたものと考えられる。それは、“The Book of Tea”で茶道を日本文化の第一に位置づけたということは、明治の始めには、茶道も取り残されていく様子を目の当たりにしているであろうし、それが、復活しつつある様子も、知っていて不思議ではない。

近代の茶道の状況と天心の関わりを検証する。

第一節 学校教育での茶道

1 跡見学園

近代化の中で、もっとも変化があったのは、女子教育の為の学校が各地にできたことである。そのことにより、女性が自立できる道が出来上がったことである。職業が持てることにつながる。茶道の師範としての師匠が登場し、茶道が女性化することにもなる。近世

の江戸時代とは違う新たな動きである。

また、華族の子女たちも、学校で茶道を習っている事実がある。上流階級の子女たちも花嫁修業の行儀見習いという意味合いで、茶道を習う女子が登場した。

ここでは跡見花蹊^{あとしみ かけい} (8) (一八四〇〜一九二六)に注目する。「跡見学園」の歩みによると、明治八年(一八七五)に「跡見学校」を開校する。子女八〇名余が入学し、国語、漢籍、算術、習字、絵画、裁縫、琴曲、点茶、插花の九科目で実質的な科目に重きを置かれていたようである。

茶の湯または茶道ではなく、点茶⁹という科目であることは、煎茶と区別していたのではないだろうか。江戸中期から明治時代にかけて、一般庶民には煎茶が、盛んに飲まれている。

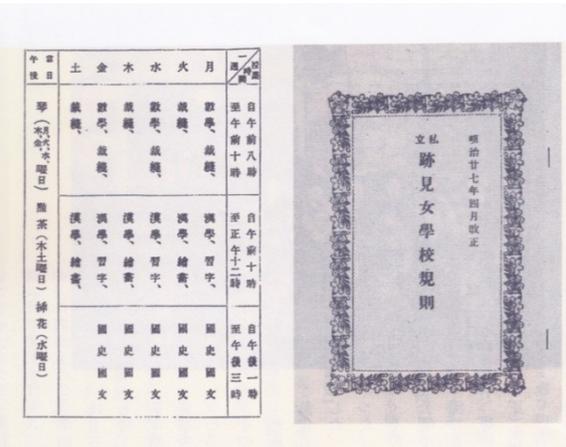
上流家庭の子女、特に華族などの子女を意識した科目と見て取れる。心の修練が必要な抹茶である点茶を採用している。近世では、公家や徳川家を含めた大名家で盛んに稽古や茶会が開かれたこともあり、点茶を授業科目に入れたのではないだろうか。

花蹊は江戸時代生まれで、二十代後半まで大阪市西成区(撰津国木津村)で生活し、幕末に塾を京都に移して、女子教育者としての名声もあった。多くの皇族・華族の移転に合わせたかのように東京に移転して、私塾を開いている。

『跡見学園 一三〇年の伝統と創造¹⁰』には北白川宮満子女王、閑院宮妃のご息女などが学んでいることが載せられている。また、当時の跡見学校規則と授業時間割(三七頁)がある。

跡見女子校規則と授業時間(明治二七年)は以下である。

この授業時間表には、点茶(木土曜日)の科目がある。



曜日	午前八時	午前十時	午後一時
月	教養、裁縫	漢學、習字	國史、國文
火	裁縫	漢學、繪畫	國史、國文
水	裁縫	漢學、習字	國史、國文
木	裁縫	漢學、繪畫	國史、國文
金	裁縫	漢學、習字	國史、國文
土	裁縫	漢學、繪畫	國史、國文
日	茶(木土曜日)	茶(木土曜日)	插花(水曜日)

『跡見学園 一三〇年の伝統と創造』より転載(三七頁)

2 東京美術学校

大正一四年（一九二五）、「東京美術学校で茶道部が発足する。⁽¹¹⁾」火付け役が、考古学担当の今泉雄作（一八五〇～一九三二常真）であった。宗偏流である。現在は裏千家が担当している。それ以前（明治二二年）に「校友会という集まりが発足、その一環として今泉が茶の会を担当した。」⁽¹²⁾今泉は東京美術学校（以後、美校と呼ぶ）の教授で、「美術学校創設から、天心と苦勞を共にしてきた人物である」

3 京都での学校教育

⁽¹³⁾筒井氏は、「子女の教育施設である女紅場（現在の鴨沂^{おひぎ}高等学校）に、又妙斎の妻・千猶鹿（？～一九一六）が茶道師範として迎えられているのである。⁽¹⁴⁾」
「他にも「和洋裁縫伝習所」は、明治二七年に和洋裁縫・礼法・点茶・生花・造花・刺繡の六科を置いている。⁽¹⁵⁾」

4 神戸での学校教育

京都に近い神戸では、港が開港とともに大きな役目を果たす様になり、政府の高官の往来、領事館、異人館、貿易会社が設立される。いわゆる外国人居留地ができることにより、海外との交流、中央政府との交流が盛んに行われた土地柄である。

キリスト教の教育が女子にも向けられている。

「神戸女学院でも女子教育の一環として学校茶道（茶儀科）がもつとも早く導入されています。明治二四年の入学案内書には本科の課程に家政、保育、衛生課と共に生け花、茶の湯などがすでに取り入れられており、（中略）兵庫県立第一女学校の茶道は明治三十七年から始まっています。⁽¹⁸⁾」

明治時代には、学校教育が始まり、茶道が教育現場でも行われようになる。

女子に関して云えば、谷晃氏は「富国強兵の国策を支える基盤として家庭の重要性が説かれ、その家庭の管理は女性の役割とし、良妻賢母に仕立てあげるための教育」であったと位置づけている。

それと同時に女性の職業としての茶道の師匠という選択肢が広がった。このような状況を文部省出身の天心は知っていたであろう。

第二節 茶人たちの活動

1 近代の茶会の始まり

明治時代の新しい政治体制下で、数寄者の登場となる。版籍奉還（明治二年）、廃仏毀釈などで、古美術・仏画などが二束三文になる。その価値のわかる財界人が蒐集することから始まる。その第一に挙げられるのは井上馨⁽¹⁹⁾（世外一八三六～一九一五）であろう。

井上馨（世外）に見込まれたのが益田孝（鈍翁）であり、事業も起こすことになる。二人の関係には、ここでは触れない。

茶の湯という場で、富を背景に価値があると思うものに高額な金銭での獲得競争が起こる。それを獲得して、披露し合う茶会が開かれたのである。

『近代数寄者のネットワーク』⁽²⁰⁾では、主に残っていた『松翁茶会記』⁽²¹⁾（安田善次郎著）の中から茶会の回数のデータを集めている。

（鈍翁主催の茶会は含まれていない。）

明治一三年～一九年 茶会の第一回目の山

明治三二年～三九年 茶会の第二回目の山

（著者の斉藤康彦氏はグラフで表示）

斉藤氏の先行研究のグラフからわかることは、日露戦争（明治三七年）前後に茶会が多く行われている。天心は日露戦争開戦（明治三七年二月）時に、ボストンに向っている。

2 益田孝（鈍翁 一八四八～一九三八）

天心と鈍翁は、明治二十七年（一八九四）七月二十日に出会っている。それは、美術育英会設立相談会である。美術のことであるので、もともと以前に天心が交渉などを含めてのやり取りをしている可能性がある。以下の二つの記述がある。

「才能ある青年美術家を援助し、併せて日本美術の伝統の維持、発展を目的とした美術育英会の設立相談会を有楽町の三井集会所で開く。益田孝、鈴木利亨とともに幹事となり、設立・運営に尽力する。（中略）九月二十九日に三井家別宅において、美術育英会の発会式を挙行する。」⁽²²⁾

明治三一年の第三回「大師会」に招待されている。しかし、「名簿の名前は縦線で消されているため、欠席している。」⁽²⁴⁾

欠席の理由は二つ考えられる。一つの理由は、明治三一年は帝国博物館理事兼美術部長を依頼免職となり、東京美術学校を非職を命ぜられた年で、身辺は人生の一大事であり、七月には日本美術院を設立したり、仮事務所から移転したりと多忙であったことが考えられる。

二つ目の理由は、「大師会」の茶会に関心があったかどうかである。数寄者が使う茶道具にどのような価値を持っていたかが興味深い。

益田鈍翁が大師会を開催したのが、明治二九年である。茶会の話題は国内では、新聞・雑誌に取り上げられている。

それ以後、鈍翁は亡くなるまで三三回の茶会を行う。そればかりか、他の茶会にも出席している。

東京美術学校校長である五代目の正木直彦（一八六二〜一九四〇）との交流では、太郎庵に正木を二回（大正九年一月十九日・三月二十七日）に客として招いている。⁽²⁶⁾

大正十年三月廿五日には、藤原銀次郎（暁雲 一八六九〜一九六〇）が暁雲庵に、客として益田鈍翁、正木直彦、原三溪（一八六八〜一九三九）を招いている。どんな会話があったのであろうか。

3 原富太郎（三溪 一八六八〜一九三九）

天心との接点は意外にはやい時期である。日本美術院が明治三十一年に創設されたのが、「原は翌年に名誉賛助会員兼評議員になっている」⁽²⁶⁾。

天心が原家の故善三郎の序幕式に出席して、演説をしていることが記述されている。

「明治三十三年四月二十八日、東京美術学校が依頼されていた故原善三郎の銅像が完成。横浜老松町の八幡祠境内に建設され、序幕式に出席して演説する」⁽²⁷⁾

義理の父親の銅像の序幕式なので、原富太郎（三溪）が演説を天心に依頼したのだろう。

『院展作家の一系譜』には、「横浜の商人・原善三郎と幕末の横浜で福井藩の手代として商売をし、のち東京に移った岡倉天心の父とは旧知の仲であった」⁽²⁸⁾と述べている。

父親同士が知り合いであることは、天心にとっては力強いものであったろう。縁を繋いでもう一つの理由は、橋本雅邦の娘婿・橋本静水が原商店時代からの店員であったことも、好都合であった。

横浜の豪商で美術愛好家として知られ、日本美術院のパトロンの存在であり、天心にとっては、願っても無いことである。

三溪は下村観山の画が気に入っていた。「観山は大正二年に原氏の所有地（横浜市本牧和田山に転居している。以後、観山の主だった作品は原氏の所蔵に帰することになった。三溪と観山はもともと強力なパトロン関係になった」⁽²⁹⁾

「[明治四四年]十一月四日、(天心が)原富太郎に、安田鞞彦と今村紫紅の研究費をだすように斡旋する」⁽³⁰⁾

「(下村)観山が明治四十一年、国画玉成会に出品した大原御幸絵巻は、結末の最終段の構想がまとまらず未完のままであったが、原はそれを買取った。その四年後を経ても完成せず、そこへ原から多額の揮毫料が届けられた」⁽³¹⁾ そのことで、観山が困って、天心に相談をし、天心は観山の代わりに代筆の手紙を書き、その手紙を三溪へ出すように、観山に伝えている。内容は来春には、できあげますので、ご覧頂いた後に、来年度分として、いただきますので、それまで切手はお預かりくださいという内容である。天心は、弟子の面倒をよく見ている様子がわかる。

4 正木直彦（十三松堂 一八六二〜一九四〇）

正木直彦は東京美術学校（現・東京藝術大学美術学部）の第五代校長である。しかも三二年間（明治三四年八月九日〜昭和七年）の長い間、校長職についている。天心が校長を非職（明治三十一年三月）されてから、3代目、4代目と、美術学校の諸問題の解決が難しく短期で職を去っている。正木直彦の手腕の交渉力で、美術学校の諸問題が解決されていく。その一つが、日本美術院との和解である。九月二〇日に、「下村観山、寺崎広業、六角紫水を正会員のまま美術学校教授として送りこみ、高村光雲、竹内久一、石川光明ら美術教授を九月二日付で正員として迎える。」⁽³²⁾ また、正木直彦自身も日本美術院の名誉賛助会員になっている。

正木直彦の七九年の人生の中で、少なくとも一二〇回の茶会の主（亭主）・客を行っている。

『正木直彦茶会記』が八巻、存在し「平成一九年（二〇〇七）の東京藝術大学創立一二〇周年企画の一環として、公開された」⁽³³⁾ 正木家所蔵茶道具の一覧⁽³⁴⁾ を見ても、お教奇者としての座を得ていることがわかる。おそらく、天心も正木直彦が、茶道に没頭していることを、知っていたであろう。

『岡倉天心全集』の書簡には、正木直彦へは五通納められている。その一通（明治三〇年九月九日付）に美術学校に西洋画科が置かれた年に起きた裸体研究や死体解剖授業などについての天心の意見が述べられている。「良家の女子ニシテ之ニ応スル者無之大抵貧民の女子ニ御座候 是迄の処ニては醜業婦ハ一人モ無之候」⁽³⁵⁾ という内容である。最後に、「新聞記事ニ対して一々弁解正誤候儀何分ニモ煩雜ニ付右等の場合は打捨置候積リ有之 猶高見の次第モ御座候ハ、御開示願度 先は御注意の段御札申述 勞」⁽³⁶⁾ という文面である。おそらく、この問題が、新聞記事になったものと思われる。正木からは、無視するようにとの忠告であろう。天心は、最後に感謝の意を述べている。

天心と正木とは、良好な関係である。正木が茶を嗜んでいることも、多くの道具を集めていることも、知っていておかしくないであろう。『茶の本』が刊行される前から、天心は茶道に関心があったであろう。

5 今泉雄作（常真 一八五〇〜一九三一）

「今泉は積極的に「美術」に茶の湯や芸能文化を取り込もうとした人物である。」⁽³⁷⁾

東京美術学校を創設、運営を共にしてきた今泉雄作が、学内に茶道部を作ったり、在職中に一休墨蹟を購入したりしたことは、天心の耳にも入っていたと言っているであろう。

今泉の日記から、明治二六年に四円五十銭（約7万円）で、購入したことが判明している。「高なれとも語よし」というので、文句を気に入ったのだろう。「釈迦や

達磨も逼すれば鉄圀山に陥ちる。⁽³⁸⁾」

天心が美校を非職した後も、茶道具に詳しい今泉の動向は知っていたであろう。

今泉は「明治二十七年から明治三二年まで、京都市美術工芸学校（現・京都市道駈美術工芸高等学校）の校長、さらに大正四年（一八八七）までは帝室博物館（現・東京国立博物館）の美術部長をつとめた。この後、退官して隠居生活にはいるが、同六年には知己であった大倉喜八郎（一八三七〜一九二八）の要請により、大倉集古館の初代館長に就くことになる。⁽³⁹⁾」美術に茶道具を積極的に取り入れている。

「『美術』と茶の湯との結びつきを考える上では、重要な人物となるだろう。⁽⁴⁰⁾」

第三節 茶道誌の刊行と茶道人口

近代の特徴は、刊行物が意味をもったことである。近世までの稽古⁽⁴¹⁾とは、口伝であったが、近代化した明治以降は、学校教育も始まり、文字を読んで、習う手段が、でてくる。また、茶道に関する本が刊行されることになる。

特にめざましい進歩をしたのが、大正時代である。「高橋箒庵⁽⁴²⁾は、時事新報に茶会記を連載する。『東都茶会記』は十三冊、『大正茶道記』は大正十年から昭和三年までの茶会記を書いている。名物道具集『大正名器鑑』も編纂している。⁽⁴³⁾」

「明治三十六年（一九〇三）には『浜の真砂』⁽⁴⁴⁾『茶の湯道しるべ』⁽⁴⁵⁾『茶道 浦のとまや』など、三冊もの書が刊行されている。⁽⁴⁶⁾」

明治四一年（一九〇八）には、『今日庵月報』（裏千家月刊誌）が発刊され、大正一一年（一九二二）には『茶道月報』にかわるが、茶道のニュースも世の中に出回ることになったであろう。それに伴い、茶道の人口が、増加することにも繋がったのではないだろうか。刊行物の力も大きいと推察できる。

大正一一年（一九二二）に『天心全集』が日本美術院から非売品で刊行される。昭和四年（一九二九）に村岡博訳の『茶の本』（岩波書店）も刊行される。茶道では、決定版として、昭和一〇年（一九三五）に、創元社より、『茶道全集』が一五巻、刊行されるのである。明治維新から約七〇年足らずで、茶道に関する本が、次から次へと刊行され、読者層も広がったことであろう。

天心に関する本がでる時期と茶道に関する本が刊行される時期と、ほぼ一致する。

では、女性が茶道の主流になるのは何時ごろだろうか。著者の神津朝夫氏は「茶道人口のなかに占める女性の比率が男性を上回るようになったのはいつ頃か、はっきりした統計があるわけではない。大正九年（一九二〇）の裏千家夏期講習会の写真で女性が約半分になっているため、大正期から昭和初期のことだったのではないかと推測されている。⁽⁴⁷⁾」

ここに、昭和一三年（一九三八）の一つの社中の全員集合写真がある。献茶式の添釜を

終えて、師匠を囲んでの一枚である。(師匠が奉書を持っている。)女性の茶道人口が増えたころの一枚の写真である。



朝鮮神宮献茶式での添釜を終えて

奉賛殿前にて(倉田宗斤社中) 個人蔵

昭和一五年には利休三五〇年忌を迎える。

女性が圧倒的に増えていくのは大正期から昭和初期であろう。「お茶とお花」の稽古が、花嫁修業の履歴書の役割として、大正、昭和の初期まで続く。

現在の女性は、自立型が主流になり、書物から茶道に入る人もでてくる。茶道文化検定が、そのいい例になる。この制度により、新たに男性も茶道の道に入る人も出てきている。

さて、『茶の本』(村岡博著 岩波書店)の発行刷であるが、岩波書店の提供資料では、以下のようになる。

昭和四年 (一九二九)	初版発行
昭和一〇年 (一九三五)	一〇刷
昭和三六年 (一九六一)	三八刷
昭和四五年 (一九七一)	五〇刷
平成一五年 (二〇〇三)	一〇〇刷
平成一九年 (二〇〇七)	一〇五刷

平成二七年（二〇一五） 一一六刷

他にも多くの書店から『茶の本』の訳本が発行され、継続的に読まれ、なおかつ研究発表が行われている本である。

まとめ

天心は、世の中の動向を理解し、情報の収集も非常によかつたのではなからうか。情報を正確に入手しているからこそ、『The Book of Tea』を書くことができたと推察できる。弟の由三郎や日本美術院の人たちなど多くの知人がいる。それ故に、日本と米国を往復している中でも、日本の情報もよく把握していたであろうと思われる。

国内で、茶道が再び盛んになるのを、新聞・雑誌からの情報から得ていたと考えられる。日本が日露戦争に勝利して、アメリカの世論も好日的な雰囲気であった時期である。日本文化を正確に説明するために選んだ本の名前が、『The Book of Tea』であろう。

明治三九年五月（一九〇六年）に、『The Book of Tea』がニューヨークのフォックス・ダフイールド社から刊行される。日本語訳では、昭和四年（一九二九）『茶の本』として、村岡博訳で刊行される。その時期に、茶道の人口が大幅に増えたのではないか。

天心の専門は「美術」である。しかし、書簡にもあるように、ボストンでは日本の文化の質問も多くあったのだろう。もちろん、日露戦争の勝利での日本のイメージが、正しく伝わっていないことに天心の危機意識があったと考えられる。

文化論を当時の欧米人に書く必要から生まれた『The Book of Tea』である。加えて、その翻訳本が刊行されることにより、国内での茶道の活動にも、多いに影響したのである。

日本語訳の『茶の本』は、新たな茶道の魅力を人々に知らせた。『茶の本』からも茶道の学問、思想を、学ぶことのできる選択肢が増えた。

注

- (1) 『茶の湯の歴史』 神津朝夫（一九五三） 角川書店 平成二二年 二五二頁
- (2) 『茶道の歴史』 講談社 一九八七年第一刷、二〇二二年第三八刷 二二六頁
- (3) 鑑札制度 ある営業またはある行為を許可した証として公安委員会・警察署などから交付する証票。
- (4) 益田孝（鈍翁一八四八〜一九三八）
明治三一年、数奇者としての第一人者である。三井物産を創業して財界の頂点に立ち不白流川上不白に就いて茶を学び、大師会・光悦会などの大茶会を催すなど茶道復興に大きく寄与した人物である。

(筒井紘一・柴田佳作・鈴木皓詞『益田鈍翁 風流記事』淡交社 平成四年五六頁)
「大師会」 明治二十九年(一八九六)、益田鈍翁によってひらかれた歴史ある茶会。
弘法大師筆『崔子玉座右銘』を披露するために大師の縁日にあたる三月二一日に
催され、各界の名士たちが集いました。三溪園、畠山美術館、護国寺と会場を移し
ながら、昭和四九年(一八七四)より根津美術館に引き継がれ、毎年春に行って
います。(美術人名事典の解説から)

(5) 原富太郎(三溪一八六八〜一九三九)

青木富太郎は、婿入りするわけであるが、大学卒業(東京専門学校・現早稲田大学)
後、跡見女学校で教鞭をとる。新橋ステーションを歩いていた時に、鼻緒が切れて
途方にくれている女学生が、生糸商人・原善三郎の孫娘・原屋寿子であった。

この出会いで、原富太郎(三溪)が生まれる。明治二二年である。青木富太郎は
二二歳、原屋寿は一六歳であった。跡見花蹊あとしみ かけいの仲人で、明治二四年に結婚する。

青木富太郎は岐阜県左波村の庄屋。青木家の長男が、原家に入る形であった。
原商店の二代目になり、厳しい修行にはいるが、楽しみは仕事が終わると、横浜
から汽車に飛び乗り、道具屋を見て回ることであった。結婚二年後から蒐集を始
めているようだ。

下村観山のパトロンでもあり、明治三二年の横浜での院の展覧会に力ぞえをする。
『岡倉天心をめぐる人々』一六六頁 岡倉一雄 中央公論 平成一〇年)

「橋本雅邦の次男永邦は原の奨学金で京都に留学して古社寺の秘宝にふれる機会
を得る。」(『父岡倉天心』二二六頁 岡倉一雄 中央公論 昭和四六年)

(6) 今泉雄作(一八五〇〜一九三二) 東京生。フランスに留学ギメ博物館の東洋美術品
鑑定員」となる。帰国後、文部省に勤務。天心と親しくなり、美術学校創設から
運営にいたるまで、天心と苦労を共にした。美術学校教授、校長代理、帝室博物
館美術部長。『岡倉天心をめぐる人々』二二二頁 岡倉一雄 中央公論 平成一〇)

(7) 正木直彦 第五代東京美術学校校長

(8) 跡見花蹊あとしみ かけい (一八四〇〜一九二六)

「跡見学園のあゆみ 学祖・跡見花蹊」から「学祖・跡見花蹊」によると、摂津国木津
村で寺子屋を営む父跡見重敬、母・幾野の二女として生まれ瀧野と命名され、跡見
家は庄屋を勤める名家であったが、花蹊出生時には暮らし向きは貧しいものであつ
た。少女時は丸山派の画家に師事し、詩文・書をならった。その後、父の私塾を受
け継ぎ、独力で女子教育に着手した。一八六八年、(明治元年)、江戸が東京に改め
られて江戸城が皇居に定められ、東京が日本の首都として新たなスタートを切り、
皇族・華族の東京への移転が相次ぐ中で、花蹊も一八七〇年、(明治三)に京都の家
塾を閉じて、東京に移住し、私塾を設けた。また、赤坂御所において女官の教育に
もあたった。一八七四年(明治七年)に神田中猿樂町に校舎を新築し、一八七五年

明治八年に跡見学校を開校。

学校法人跡見学園公式サイト www.atomi.ac.jp/

- (9) 点茶 抹茶をたてること。茶をたてること。また、その茶。煎茶に対していう。
精選版 日本国語大辞典 小学館 二〇〇六年
- (10) 『跡見学園 一三〇年の伝統と創造』跡見学園 編集 一三〇年史編集委員会
学校法人 跡見学園 理事長・跡見純弘発行 平成一七年 非売品
- (11) 『近代茶人の肖像』依田徹 淡交社 平成二七年 四三頁
- (12) 前掲書 四二頁
- (13) 『岡倉天心をめぐる人々』岡倉一雄 中央公論美術出版社 平成一〇年 二二二頁
- (14) 筒井紘一 文学博士 今日庵文庫長、茶道資料館副館長、『南方録(覚書・滅後)』
『茶書の研究』『茶の湯名言集』
- (15) 『新島八重の茶時記』筒井紘一 小学館 二〇一三年 九二頁
- (16) 『文明開化の日本改造 明治・大正時代』淡交社 平成一九年 七七頁抜粋
- (17) 森川春乃 茶道教授
- (18) 『神戸と茶の湯』森川春乃 株式会社からふね屋 二〇〇八年 一八〜一九頁
- (19) 井上馨(一八三五〜一九一五)
号は世外。長州藩士。討幕運動に参加。維新後、政府の中心人物となり、要職を歴任。伊藤博文の盟友。侯爵。茶人としては第一に、井上馨(一八三五年〜一九一五 世外)が上げられる。「茶道具収集に見せた貪欲さを示す多くの逸話を残すが、茶道史でしられるのは奈良東大寺四聖坊ししやうぼうの茶室(八窓庵)移築疲労茶会である。一八八七年四月二六日に行幸を得たのである——重要なのは明治天皇の行幸を得た点である。」(『茶道の歴史』二四三頁谷端昭雄 二〇〇七年)
- (20) 『近代数寄者のネットワーク』斉藤康彦著 思文閣 二〇一二年 二〇頁
- (21) 『松翁茶会記』安田善次郎の茶会記 号が松翁である。
- (22) 安田善次郎 実業家 越中富山生れ。江戸で両替屋を営んで成功。維新後政商となり、安田銀行・安田共済生命保険会社などを経営、安田財閥の基礎を築く。
日比谷公会堂・東大安田講堂を寄付。刺殺。(一八三八〜一九二二)
- (23) 『岡倉天心全集』別巻 平凡社 一九八〇年 三九八頁
- (24) 『益田鈍翁 風流記事』筒井紘一・柴田佳作・鈴木皓詩 淡交社 平成四年 五六頁
- (25) 『十三松堂茶会記』三四・三六頁
- (26) 『岡倉天心全集』別巻 平凡社 一九八〇年 四一二頁
- (27) 前掲書 二四六頁
- (28) 前掲書 二四七頁
- (29) 『院展作家の一系譜』三溪園 二〇〇三年 六頁
- (30) 『岡倉天心全集』別巻 四〇一頁

- (31) 前掲書 七卷 四三八頁
- (32) 前掲書 別卷 四一五頁
- (33) 『十三松堂茶会記』 一二五七頁
- (34) 前掲書 二六七〜二七五頁
- (35) 『岡倉天心全集』六卷 九五頁
- (36) 前掲書 六卷 九六頁
- (37) 『近代の「美術」と茶の湯』依田徹 一一七頁
- (38) 『近代茶人の肖像』依田徹 四六頁
- (39) 前掲書 一一九頁
- (40) 前掲書 一一七頁
- (41) 高橋箒庵 (一八六一〜一九三七) 『東都茶会記』、『太正茶道記』、『昭和茶道記』
等がある。
- (42) 『茶道の歴史』谷端昭夫 二四六頁抜粋
- (43) 『円能斎鉄中』千宗室著 淡交社 平成二二年 一二七頁
- (44) 『茶の湯の歴史』谷端昭夫著 二六三頁

第一〇章 戦後の『茶の本』と茶道

はじめに

戦後、茶道を海外に普及した一人として、千玄室氏に注目する。裏千家の十五代であり、多くの書物を出版し、裏千家茶道月間誌『淡交』への寄稿、新聞・雑誌などへの投稿等、枚挙にいとまがない。

「一盃からピースフルネス（平和）を」を理念として茶道の普及活動を行ってきた千玄室氏の海外への茶道普及と、「道・学・実」（精神・知識・実践）を提唱したことにより、国内での「天心研究」と相乗効果の側面があったことを検証する。

千玄室氏の多くの出版物を見ると、特攻隊（特別攻撃隊）としての経験が、平和を熱望し、日本の茶道が世界の平和に貢献できると確信する姿がある。

また、父である淡々斎（一八九三〜一九六四 裏千家家元十四代）の影響がある。父の意志を引き継いでいることが、千玄室氏（裏千家家元一五代）の言動から推察できる。淡々斎（裏千家一四代家元）は圓能斎（裏千家家元十三代 一八七二〜一九二四）の仕事（高等学校での茶道の普及・各地での献茶式の奉仕・外国人への稽古など）を引き継いだ。戦後、戦争から復員してきた千玄室氏は、茶道の体験に由来する進駐軍の米兵にも厳しく茶道を指導している淡々斎の姿を見て、「米国に勝つには日本の茶道文化であると確信した」と多くの書物に書き、講演でも語っている。

二〇一四年に出版した『茶の心を世界に』（PHP 研究所）の本の帯に以下の言葉が書いている。

平和への祈り

戦争には負けたが、文化では

負けない——戦後まもなく、

父から茶道を学ぶCHQを見て、

伝統文化の継承に目覚める。

「一盃からピースフルネス（平和）を」の

願いをこめて、世界六〇か国以上を訪ねた

裏千家大宗匠の半生と思い

一九五一年に千玄室氏（当時は千宗興）が海外に普及活動を行うのであるが、茶道が何であるか、わからない人々に、説明していくうちに、海外の人々は、「すでに、茶道の素養があったことに気づいた」と、『茶の本』で述べている。

一九五〇年代、始めてアメリカを訪れた時、私は天心の著書がいかに広く浸透しているかを思い知ったが、実際には私が訪れたほとんどの場所で、茶の湯そのものを知っている人は少なく、デモンストレーションに必要な基本的な品々、たとえば畳などを見つけることはできなかった。しかし妻と共にマットに黒いテープで止めて畳の縁にみたて、即座の畳を作った時、ある意味で、私たちの道はすでに用意されていたのだということに気づいた。日本のことはほとんど知らず、茶の湯のことなどまったく知らない人々が天心の本を読んでいたのだから。⁽¹⁾

「THE BOOK OF TEA」が、茶道を普及することに、大いに役にたっている。

国際化という流れの中で、千宗興（千玄室氏）は、海外の人々に日本文化を説明しようとした時、「THE BOOK OF TEA」が海外で出版されていたことは、茶道の説明に大いに役にたっていたと語っている。

茶道が活発化したことで、「天心研究」も活発化し、「天心研究」が活発化すると茶道も注目される側面がある。それは、千宗興（千玄室氏）の「道・学・実」の提唱が、「実」と共に「道」「学」を学ぶ必要性を語ることになる。そのことにより、茶道の研究もさらに活発化し、『茶の本』の研究も盛んになったのではなからうか。

第一節 戦後の海外活動

昭和二六年『淡交 一〇月号』に「講和会議に得た歓び」⁽²⁾と題して、⁽³⁾九月一日発宗興としての滞在記が寄稿されている。二八歳の次期裏千家家元の記事である。

第二次世界大戦を終結して、世界平和に向おうとするこの歴史的な講和会議に茶道を紹介する機会を得たのである。ロスアンゼルス友人の力添いがあったと、以下のように千宗興は綴っている。

平和のシンボルとも、日本のデモクラシーの根源ともなるべき茶道の心を、静かな日本人の真の姿を知って貰い度いという気持ちで一杯であった。⁽⁴⁾

敗戦後、アメリカの地で、茶道を広めようとしていた千玄室氏の姿がある。この時が「道」を普及する原点になったのであろう。また以下のように述べている。

私にとって最も良いニュースは講和条約調印式に九月五日から十月四日迄サンフランシスコデイ・ヤング・ミュージアムに於て国賓や重要美術品が日本より運ばれて日本美術展として開催され、こうして優れた日本伝統美術を広く紹介するという事であった。このニュースを知ってどうかしてこの有意義な催しの会期中に茶道文化

を紹介出来たらと、この機会到来を前に色々考えた。⁽⁵⁾

茶道の普及に積極的な行動が、茶道を広く世界に広めた一歩になる気構えが窺える。続けて、さらに茶会を開くまでに多くの協力者を得て、実現していく様子が書かれている。

デイヤングミュージアムと日本美術展の主催者ヘイル博士と原田次郎博士の心を動かし、正式に講和条約記念日本美術展の「特別参加行事」として茶道紹介をしてほしいと連絡があった。⁽⁶⁾

この特別参加は、今後の茶道の海外進出の大きな一歩になる。九月八日には、歴史的な対日講和条約調印式が行われたのである。日本を発する時にはない企画を千宗興（千玄室氏）が、実行に移した事実は茶道を紹介する上で、大きな出来事である。その時の茶道紹介に二世の方々への協力を得ていることを述べている。舞台は寄稿文から抜粋すると、以下の取り合わせである。

八畳のござ・光琳の時代屏風・長板総荘り・醍醐の花見の皆具で、デモンストレーションを行い、出席者一〇〇〇名以上の観衆が押し寄せ、好評であったと記述している。また、これを契機に、「ますます国際茶道への開拓普及に大いに努力さる覚悟である」⁽⁷⁾とも述べている。



『淡交』昭和二十六年十月号 転載（表紙）

『淡交』昭和二十六年十一月号の千宗興（千玄室氏）の寄稿文はボストンからである。そこには、以下の記述がある。

リトルイングランドといわれるボストンの人達の顔付はさすが英国的なノーブルなものを持っている。殊に岡倉天心がこのボストンで茶道精神を世界に発表したあの有名な『ブック オブ テイ』を書かれた事を考えてしみじみ胸に来るものがある。⁽⁸⁾

昭和二十六年（一九五二）の『淡交』に現地ボストンでの寄稿文に、「ブック オブ テイ」の文字が登場する。

その後、六〇年以上の間も岡倉天心の『茶の本』のことを題材にし、講演会の話の中で、話題の一つにしている。以下のように述べている。

茶の湯は私の人生の核として常に存在してきたが、もし岡倉天心の『茶の本』がなかったら、人生における仕事は違ったものになっていただろう。

『茶の本』(千宗室)序と跋文 浅野晃訳二〇二頁 一九九八初版・二〇〇八

千玄室氏の海外への茶道の進出活動の源に『茶の本』が意識され、また茶道普及の活動の助けとなり、目標にしている。

第二節 海外の支部と協会の設立

昭和二七年新年には『淡交』新年特大号として出版している。記事は「カメラに拾う」である。「若宗匠アメリカ紀行」として、六頁に渡り、写真を見開きで四方に囲み、アメリカでの千宗興をカメラが捕らえている。これらの写真から、戦後六年が経つが、アメリカの地ですでに茶道の活動が行われていることが、明らかにわかる。着飾った日本人、ならびに二世の方々が写真に納まっている。

一月から一月までの日程と千宗興(千玄室氏)の旅の成果が書かれている。そこにはハワイ支部発会式挙行(三月四日)、海外で始めての支部であることを告げている。他に、ニューヨーク支部発会式(五月二五日)、ロスアンゼルス支部発会式(六月一〇日)、シヤトル支部発会式(七月七日)というように次から次へと支部を米国の地に開いている。千宗興は米国に、戦後六年目にして、支部を創立させたのである。

「帰国のご挨拶にかえて――今の課題」として、以下のごとく語っている。

アメリカは現在、精神文明を求めております。忙しければ忙しい程、人間が求めようとする自然への心の動き、即ち落ち着いた一刻を得ようとする傾向が強く、それが、こうした茶道精神への研究、仏教、特に禅に対する究明へと働いて来ているので、唯興味的なもの珍し興味からこうした事を求めようとするのではなく、物が人間を機械化する、換言すれば機械が人間を支配していこうとする慌しい社会の動きの中に、どうしても必要な心の動きとしてこの問題を真剣な態度で求めて来ているのであります。⁹⁾

このように、現実のアメリカを伝えながら、日本人に対しても、「日本人よ真の日本人の心の動きを知れ、そしていたずらに日本の伝統美の精神をこわす事のない様に」と、¹⁰⁾伝ながら、「茶道精神が世界の人々に、一人でも多く、そして一日も早く、理解される迄、努力したいと思います」と決意をしている。

「年頭の辞 茶道の国際性」と題して、千宗室(裏千家十四代淡々斎)も、次のように語っている。

近く宗興がアメリカの各地をまわりまして、日本の茶道の普及と茶を通じて、我が国の伝統文化の紹介をして帰って参りまして、いろいろと彼地の人達の、茶道を如何に高く認識し、真面目にしかも熱心にこれを欲し求めて居るかと言うことがわかりまして、心強く思っております。⁽¹²⁾

千宗室も茶道を海外へ発信しようとしており、息子（宗興）のアメリカでの活動報告の成果に自信をうかがわせている。天心が『THE BOOK OF TEA』を刊行してから、四五年後である。アメリカに四箇所の支部が発会されたことは、茶道の普及に弾みがついたと言えよう。

『淡交』（昭和二十七年二月号）には、「旅を終えて」と題して、アメリカの印象として以下のように語っている。

一般に日本の伝統文化としての茶道と云ふものが普及されているのはと云ふより知られているのは岡倉天心先生の『ブックオブテイ』の影響が多い様に思われました。此のことはニューヨークの支部長をさせていただき上出氏が十数年前ミュージシャンとしてニューヨークでスタートされた時に黒人の有名な歌手（オペラ）が上出氏に『ブックオブテイ』を読んで日本伝統文化を良く理解することができたという話を語ったので早速上出氏も此のあと『ブックオブテイ』を読まれ中学時代同級生だった家元淡々斎（一四世）宗匠の事を判然と思ひ出し伝統文化に対する認識をなお一層強められた。⁽¹³⁾

このようなエピソードを交えて、『ブックオブテイ』の影響の強さを認識している。

宗興（千玄室氏）はこの旅の成果として、ハワイ大学において、来年（昭和二十七年）夏季に大学よりの公式招請状を貰うことができたのは大きな一歩である。それから現在も成人教育学部に茶道課が設けられているということは継続して取り組んだ成果であろう。

第三節 茶道の国際化

1 「一盃からピースフルネスを」

『茶の本』の跋文に「一盃からピースフルネスを」を二人の人間が共にお茶を飲むことから世界平和は生まれると確信してきた」（『茶の本』「訳」二四二頁 千宗室「序と跋」浅野晃「訳」と述べている。

『一盃からピースフルネス（平和）を』（千玄室 淡交社 二〇〇三）の「はじめに」の中で、以下のごとく『茶の本』を紹介している。

日本が国際社会に参加した後、日本に茶道があることを世界の人々に知らせたのは

岡倉天心でした。一九〇六年、天心がニューヨークで刊行した「THE BOOK OF TEA」——『茶の本』がそれです。⁽¹⁶⁾

日本語に訳される前にすでに、ドイツ語やフランス語に訳されていた。現在はどのくらいの言語に訳されているかは、不明である。

ピースフルネスという言葉はいわば私の造語です。

Peace という言葉には文字通りの平和という意味に加えて、平穩、平静、安心、静寂、といった意味があります。peaceful はその状態を表わす形容詞で、peacefulness とは、その状態を名詞化したものです。つまり、ピースフルネスとは平和な、あるいは、安心を得ている、静寂である状態を意味する言葉です。⁽¹⁷⁾

「一九七三年の裏千家淡交会の青年部の大会で「一盃からピースフルネスを」(Peacefulness through a Bowl of Tea)を発表された」と森明子⁽¹⁸⁾氏は伝えている。

2 点茶盤(立礼の式)

裏千家玄々斎精中(一一代家元 一八二〇〜一八七七)が茶道を国際化の方向へ最初に取り組み、考案されたのが、点茶盤一式である。明治五年、「第一回内国博覧会において、他国の方々を和室に招き入れる際、正座を強要することなく、楽しんでもらおうべく、考案されたものである」と「玄々斎の好みもの」⁽¹⁹⁾として点茶盤⁽²⁰⁾を紹介している。

明治時代という近代になり、茶道を海外の人々にも体験できるようにと工夫したのが、玄々斎(裏千家一一代家元)である。

3 外国籍の弟子たち

円能斎(裏千家一三代家元 一八七二〜一九二四)は、茶道の普及を外国人にも行っている。アメリカ人の女性に茶道を指導している一枚の写真がある。

明治三十八年(一九〇五)当時、こうした稽古風景はまさに前代未聞であった。

三夫人はヘレン、グレス、フロレンスというスコットフィールド姓を持つ

アメリカ人姉妹であり、茶道を真剣に学ぼうとして志して訪れた最初の外国人であった。⁽²¹⁾

圓能斎(一八七二〜一九二四)関連年譜には、「明治四四年(一九一一)米国夫人ミス・ホーエツト入門」⁽²²⁾と記載されている。このようにすでに国際化を意識した活動が明治時代からも窺われる。

一九七三年に裏千家内に「茶道留学制度」が設立され、京都の今日庵に外国籍の茶人が

集まり、現在も「みどり会」所属の外国籍の茶人達の修練は継続している。また、多くの英文書の出版は「みどり会」の会員の力は大きい。

「みどり会」とは外国籍の茶を学ぶを茶人の会である。裏千家は大坂万博（一九七〇）で、茶室を建て茶道紹介を行なっている。そこには、茶道に感動した青年達が多かった。米国、イギリス、カナダ、ドイツ、エチオピア各パピリオン勤務の青年達は、これを契機に茶道の道へ進むことになる。

以下は『茶の湯』の一〇〇年』の一文である。

「世界にはばたく「CHADO」（茶道）元裏千家国際局長 現・国際茶道文化協会理事 森明子」

一服のお茶をこの茶室で味わったことから終了後に家元の門を叩くや、「真の茶の心を体得して、世界平和に寄与する人材の育成」を希い、外国人茶道奨学生制度「みどり会」を発足させる。英文書の出版と各国青年に茶道を研修・体得させること、

この二つが家元の海外発信に大きな力となることを予見してのことである。⁽²²⁾

4 裏千家インターナショナルアソシエーション（UIA）の設立

昭和六〇年（一九八五）に、国際セミナー⁽²³⁾（昭和五六年開講）修了者を中心に組織され、創立された団体である。UIAの総則に、「第四条 目的 本会は茶道の国際化を推進し、「一盤からピースフルネス」の理念に基づき、世界平和に寄与することを目的とする。」と書かれている。

二〇〇七年には外国の茶を志す人のためと、英語で説明する日本人のために、「A CHANOYU VOCABULARY Practical Terms for the Way of Tea」（淡交社二〇〇七）を共同作成し、二〇一一年には、2冊目の“Urasenke Chadou Textbook”（英文）裏千家茶道文化入門」（淡交社二〇〇七）を作成している。

千玄室氏は『茶の本』（朝野晃訳）の跋文で、以下のように述べて、跋を締めくくっている。

かつて天心が説いたような広い視野を持って、国境を越境した人間文化としての
お茶に⁽²⁴⁾

5 茶道の人口の増加

淡々斎（裏千家一四代）も、先代の家元の意向を十分に踏まえて、活動している。『裏千家今日庵歴代 無限斎碩叟 第十四巻』淡々斎を語る」の項で、千玄室（裏千家十五代家元）は、「裏千家の開拓精神」として全国を統一した「淡交会」を（昭和）一六年三月の利休忌において、発会を宣言して⁽²⁵⁾いる。全国での茶道普及活動が活発になると同時に、海外の支部を広げている。

朝鮮では京城、全州、清津三支部、中国では上海、天津、奉天、（現瀋陽）、新京、（現長春）、など六支部、台湾では台北、台南、など四支部が発会しています。

（中略）戦争前には、アメリカの宣教師の影響でアメリカ人が随分お茶のお稽古にきていました。（中略）私が戦後アメリカへ行くときに先代からのそうした人たちの名前を書いたリストをいただきました。それは随分私も助かりました。そういうことで裏千家はもう戦前から海外にはどんどんお茶を広めていきました。⁽²⁶⁾

淡々斎は、海外を意識して、茶道を普及し、皇太子殿下（昭和天皇）の立太子礼の式に茶道人として御園柵⁽²⁷⁾（テーブルと椅子スタイルの柵）を考案され、現在は国内外で、広く使用されている。

6 宗偏流

明治二十三年（一八九〇）に、熊野灘でトルコ軍艦エルトゥールル号が暴風のため、和歌山県沖で遭難し、艦員六五〇名中五八七名が死亡し、生存者が六三名であった。

船員の送還などのための義捐金募集を『時事新報』や『東京日日新聞』が行い、莫大な金銭が集まったが、民間人の一人、山田寅次朗らも各地で演説会や演芸会などを続けて、一年以上も行い、各社の新聞社が集めた金額をはるかに越え、トルコまで、直接届けることになった。到着後、日本語を教えるようにトルコ政府の依頼があり、一七年もの間、トルコに滞在し、実業家としての力も発揮した。その後、日本にもどり、大正一二年に、宗偏流の八代家元（山田宗有）を襲名した。宗偏流を継いでも、エネルギー⁽²⁸⁾シユで、『知音』⁽²⁹⁾を発行することになる。宗偏流の事務局に問い合わせたが、トルコでの茶道の活動は現在行なっていないとの返答であった。

7 小堀遠州流

小堀遠州流では、小堀宗慶（遠州茶道一二代家元）氏が、昭和五五年（一九八〇）に遠州「茶道・オランダ文化交流展」を九月一二日から約一カ月間、普及活動を行なっている。そのきっかけは、遠州は多くのデルフト焼きを所蔵していることから始まる。

『もう一輪の花』の中に、「茶の心を世界に」の項で、「デルフト焼きの里帰り」と銘打った活動が書かれている。遠州が將軍家光の指南役で、あったことから始まる。

舶来の主なものは、遠州の目利きを介して將軍家および幕閣重臣の買い上げるところとなったものと想像される。さらに遠州は、たんに入手するにとどまらず、のちにはむしろオランダ本国へオーダーを発したほどであった。それも茶の湯で用いることを前提として、みずからデザインして現地の陶磁器会社に発注して焼かせたらしい。⁽³⁰⁾

デルフト焼きの所蔵が数多くあるとこの理由が主な理由であるが、名品を運び込んでいる。以下の文章がある。

遠州ゆかりの第一級の茶道具を始め、一休や定家らの書、宗達や光琳、雪舟らの絵などの国宝級、重要文化財の一品をふくむ茶道美術文化の粋一三〇点余を出品、あわせて遠州の仙洞御所、二条城、金地院ほかの名園のパネルを展示する。さらに博物館の中庭に茶室「慶来庵」を設け、来場者一般に遠州流点法を披露し、一服を呈する。⁽³¹⁾

「慶来庵」の茶室をライデン民俗学博物館に寄贈したことも書かれている。プレハブ設計施工した茶室第一号であると伝えている。レセプションの席上では、以下の俳句を披露している。

一碗の茶にとけこむや和の世界⁽³¹⁾

Upon drinking tea, I discover my mind's true harmoniousness.

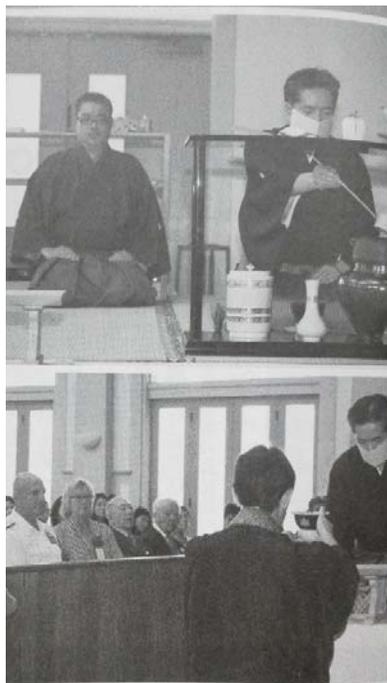
俳句を披露することは、優雅な遠州流の姿と教養の高さを感じる。会場には、学生から、多くの市民の来場があったと伝えている。その後もインド、イギリスへの旅の話が出てくる。最後には以下の文で締めくくっている。

今後も私は自分なりの綺麗さびを、日本ばかりでなく、グローバルに広げてゆきたいと考えている。⁽³²⁾

8 表千家

表千家の海外普及を確認するために、事務局に問合せをしたところ、現在はアメリカに四箇所（米国北加支部・米国南加支部・米国東加支部・ハワイ支部）の支部があり、それぞれが活動をしているとの回答を得た。

表千家の月間誌『茶道雑誌』三月号（平成二十七年）に今年の初釜の様子を、写真と共に掲載しており、サンフランシスコ北加支部の茶会の様子であった。また、平成二十七年は、ハワイ支部の六〇周年記念にあたる。昭和三〇年の設立である。また、『茶道雑誌』七月号には、二月二〇日と二一日にハワイ支部設立六〇周年式典・茶会の様子が掲載されている。約二〇〇名が参加した（一四一頁）とあるので、盛大であったであろう。戦没者慰霊・世界平和祈念献茶式と茶席（二席）を設けている。



『茶道雑誌』七月号（平成二七年）一四二頁 転載

9 武者小路千家

次期家元の宗屋氏は、二〇〇八年から二〇〇九年の一年間、文化庁の文化交流使として、ニューヨークで茶道の普及活動をしている。活動は、講演（茶に関すること）、デモンストラーション、茶会などである。新聞、雑誌にも取り上げられ、注目されていた。

宗屋氏は、茶の湯の英語表記を数ある中で、「チャノユ」をそのまま使うのが本来の意味に近いのではという論を展開している。

以下はニューヨークでの体験から得た考えを述べている。

日本人に向って話すのと外国人に向って話すのと、私自身の意識はほとんど変わっていません。

変えないのではなく、変える必要がない、と思っているからです。なぜなら、

海外のほとんどの方と同様に、現代の日本人にとっても、もはや茶の湯とい

うのは異文化だと私は思っているからです。⁽³³⁾

宗屋氏は、この本の中では、ニューヨークでの活動を、海外に茶道を普及をすることに重点を置くのではなく、茶の湯を見つめなおす機会に捉えているのではないだろうか。「外側から日本を見る」⁽³⁴⁾の題のごとく、茶道そのものを考察している。しかし、ニューヨークでのユニークな活動は、米国人にとっても、日本文化の茶道を新鮮なものとして受け止めたであろう。

第四節 「道・学・実」⁽³⁵⁾（精神・知識・実践）の提唱

『茶の本』（岡倉天心著 浅野晃訳 講談社一九九八年三四頁）の「人間性の茶碗」の始めに、「茶の哲学」について、「衛生学」、「経済学」、「精神幾何学」であるというように、学問と精神

(道) についての言葉がでてくる。

千玄室氏が昭和二六年にアメリカでの点前をする時の様子を書いているように、この『THE BOOK OF TEA』を読んでいる外国人は実際の茶室での点前を見たり、体験したりしている人はまだいなかったと述べている。外国人、特にアメリカ人にとっては「実」を最後に見るという学ぶ順序になっていた。千玄室氏は、点前を披露しながら、「道」と「学」を説明している。

国内では、「実」が始めにあつて、「教外別伝不立文字」の精神から入り、文字で覚えるのではなく、体で体得することが、求められる。日本人と外国人でのお茶への入門と関心の入り口が別である。海外の人々が「道・学」を知っていた事実は、天心の『THE BOOK OF TEA』の影響であろう。また、国内では、特に戦後、翻訳された『茶の本』が多く出版されると、解説書がでることにより、学問としての関心も高まってきたのであろう。

茶道の「道・学」を理解することは、体験することの「実」と同時に、重要であると千玄室氏が提唱をしている。

以下は『世界でお茶を』の「一九八〇年代前半・昭和」の中での一文がある。

森明子氏（裏千家名誉教授）は、外国籍茶人に以下のように、茶道を教える方法論を説いている。

実というのは、「実技」"practice" 「学」"knowledge"の暗記して頭で覚えたことは忘れやすい。実技と学がうまく組み合わせられた時に、考えなくとも体が自然に動いて点前ができるようになり、それと同時に心が自由となつて精神的な境地"spiritual"まで高められ、道The way of Tea"に到達するこの説明は外国籍茶人たちにもわかりやすく、納得することができたのだと思う。⁽¹⁶⁾

「道・学・実」の提唱が、一九八〇年代であるので、それ以降、茶道を学問として意識することになるのであろう。

また、多くの茶道に関する出版物の刊行と研究がなされてきた。その源流は昭和四年の『茶の本』の訳本であろう。多くの研究者と茶道家が『茶の本』に関心を持ったことから始まった側面がある。戦後に限定すれば、「道・学・実」の提唱が、「天心研究」と相乗効果を起こしてきたことも考えられる。平凡社から出版された『岡倉天心全集』も一九八〇年である。

『裏千家今日庵歴代特別巻 鵬雲斎汎叟宗室』 「海外への茶道行脚Ⅱ 学術としての茶道と海外五〇周年」として、

鵬雲斎大宗匠は、茶道の修習に対して「道・学・実」の三学大系を示された。「実」は、亭主と客の所作の稽古を含む茶道の実践、「道」精神・心であり、茶人の深まりゆく境涯である。「学」は単に茶道の諸知識のみではなく総合文化である茶道の学術研究をも意味する。（途中略）この学術研究が茶道の国際化のための重要な

要素とみなされているからである。⁽³⁶⁾

千玄室氏は、海外での茶道の説明に「道」「学」から講話をし、デモンストレーションを通して「実」を説明している。「型」を見せることを一步として、外国人に茶道を紹介している。すでに『茶の本』を読んでいる人々もいる。そこから、「実」の茶道を見て、茶道を学ぶ外国人が現れている。現在は、みどり会（外国籍茶人の組織）が受け皿になっている。明治三十九年（一九〇六）に書かれた英文の『茶の本』の影響は大きい。

まとめ

千玄室氏は、茶道の海外普及をする際、『茶の本』によって、助けられたと語っている。『茶の本』は海外普及に大いに役にたったのである。この意味からも、現在は、天心と茶道は、切り離せない関係にあり、『茶の本』の現代の評価は、千玄室氏の影響が大きい。

日本が敗戦国となった一九四五年、淡々斎の元に米兵が茶道を習いに来ていたという事実が千玄室氏を開眼させている。

昭和二六年（一九五一）にアメリカに普及活動に行くきっかけも『茶の本』であろう。日本に駐留していた第六軍司令官ダイク代将の早稲田大学での講演だった。

日本人は、戦後、民主主義と騒いでいるが、日本にはすばらしい民主主義があるのではないか。私のいう民主主義とは茶道のことである。岡倉天心も書いているが、茶道では武士といえども帯刀を許さず、扇子一本の丸腰でにじり口から茶室に入り、身分の上下なく一盃を秩序正しく飲んでいる。日本人はそういう茶道の精神をわきまえているはずなのに、戦争に負けたからといって、アメリカの民主主義を、⁽³⁷⁾というのはおかしい。

その後、ダイク代将への賛意と感謝の手紙をだして、以下の返事を得ている。

代将から、「そういう気持ちを持つ日本人がいてうれしい。お茶人であるあなたは、それを日本人はもちろんアメリカ人にも伝えてほしい」と丁寧な返事が⁽³⁸⁾あった。

ダイク代将の講演の『茶の本』の影響は大きい。逆に、ダイク代将は、日本人を励ましている。

一九〇六年に出版された“THE BOOK OF TEA”は、多くの外国人に影響している。茶道が、“THE BOOK OF TEA”⁽³⁹⁾近づいていくことがわかる。

「実」に加え、「道」「学」を推し進め、『茶の本』の影響を語ることにより、『茶の本』を読む日本人が増えた一因であろう。『茶の本』を読むことにより、茶道の歴史を知る。それと同時に、『茶の本』に書いてあること、たとえば、『茶経』⁽⁴⁰⁾、「蘆全の七椀」⁽⁴¹⁾、『喫茶養生記』⁽⁴²⁾、「老子」⁽⁴³⁾、「屈現」⁽⁴⁴⁾の『離騷』⁽⁴⁵⁾、「竹林七賢」⁽⁴⁶⁾、「酢吸の三聖」⁽⁴⁷⁾、「茶器」⁽⁴⁸⁾のこと、「蘇東坡」⁽⁴⁸⁾、「莊子」⁽⁴⁹⁾、「第六祖慧能」⁽⁵⁰⁾、「馬祖」⁽⁵¹⁾、「百丈」⁽⁵²⁾、「維摩經」⁽⁵³⁾等、「学」を必要とし、思想が盛り込まれている本である。『茶の本』は茶の源泉をたどる研究の動機にもなる。戦後七〇年の間に、かつてないほどの茶道の本が出版されている。利休（一五二二〜九一）没後、四二五年間の中で、この七〇年間は、多くの茶道の研究が進んできた。

第一〇章では天心の『茶の本』と、茶道との関わりが、多くあることを論じた。

注

- (1) 『岡倉天心』 千宗室 「序と跋」 浅野晃 「訳」 一九九八初版二〇〇〇二〇六頁
- (2) 講和会議 戦争を終結し、平和を回復するための交戦国間の合意をするための会議
- (3) 「講和会議に得た歓び」の寄稿文より『淡交』一九五一年 十月号 一〇〇頁
- (4) 『淡交』十月号 昭和五年 裏千家月間誌 一〇〇頁
- (5) 前掲書 一〇〇頁
- (6) 前掲書 一〇一頁
- (7) 前掲書 一〇四頁
- (8) 『淡交』一二月号 昭和二六年 七頁
- (9) 淡交』新年号 昭和二七年 四頁
- (10) 前掲書 四頁
- (11) 前掲書 五頁
- (12) 前掲書 二頁
- (13) 『淡交』昭和二七年二月号 九頁
- (14) 『ローマでお茶を』「お茶の縁」^{ゆかり} 千宗室（野尻命子 主婦の友社平成七年 3頁
- (15) 『淡交』平成二七年一月号 乙未歳首
- (16) 『一皿からピースフルネス（平和）を』千玄室 淡交社二〇〇三二〇〇五頁
- (17) 前掲書 〇〇五頁
- (18) 森明子 一九七九から財団法人裏千家外事部部长、一九九三〜九九まで国際局長
- (19) 『裏千家今日庵歴代玄々斎精中第十一巻』千宗室監修 淡交社平成二〇年一二二頁
- (20) 点茶盤 裏千家玄々斎が明治五年、第一回内国博覧会において、他国の方々を和室に招き入れる際、畳に座らず、椅子式のテーブルと椅子を使用。玄々斎の好みもの長板総荘 *長板に水指、杓立、柄杓、建水、蓋置をすべてのせて点前する。点前の種類

- (21) 『裏千家今日庵歴代圓能斎鉄中第十三卷』千宗室監修 淡交社平成二十二年 四三頁
- (22) 『茶の湯この一〇〇年』茶道誌淡交増刊号二〇〇一年 一二四頁
- (23) 国際セミナー 裏千家国際部主催の講習会 茶道愛好者にたいして、英語での茶道紹介などの講習で、現在も年に一回〜二回、開催している。
- (24) 『茶の本』岡倉天心著千宗室「序と跋」浅野晃「訳」二四四頁
- (25) 『裏千家今日庵歴代 無限斎碩叟 第十四卷』千宗室監修 淡交社
平成二十一年 一二頁
- (26) 前掲書 一五頁
- (27) 御園棚 (裏千家一四代) 淡々斎好みの棚。今上天皇(昭和天皇)の立太子式の記念に好まれたもの。野点用で室内で用いても差し支えない。
『茶道用語集』淡交社 平成五年 平成十四年
- (28) 『知音』^{ちいん} 宗偏流の機関紙で、意味は心を知り合った友。昭和三年初版。
- (29) 『もう一輪の花』小堀宗慶 文芸社二〇〇四年 一八三頁
- (30) 前掲書 一八六頁
- (31) 前掲書 一八八頁
- (32) 前掲書 一九九頁
- (33) 『もしも利休があなたを招いたら』千宗屋角川新書
初版二〇一一年 二〇一五年 五版 一二七頁
- (34) 前掲書 一二四頁
- (35) 『世界でお茶を』森明子 淡交社二〇〇八年 九二頁
- (36) 『裏千家今日庵歴代特別巻 鵬雲斎汎叟宗室』「海外への茶道行脚II」関根秀治著 淡交社 平成二十二年 一四九頁
- (37) 『お茶をどうぞ 私の履歴書』千宗室 一一八〜一一九日本経済新聞社昭和六十二年
- (38) 代将^{だいしょう} アメリカの軍人の階級のうち、将官の最下位。大佐。
- (39) 前掲書 一一〇頁
- (40) 『茶経』茶書。唐の陸羽の著。七六〇年頃の成立。三巻。茶の歴史・製法・器具について記述した最古の書。
- (41) 蘆全 中唐の詩人。(〜八三五)
- 「月蝕」詩と、茶の効用を詠じた詩は有名。
- (42) 『喫茶養生記』鎌倉初期僧。日本臨在宗の開祖。備中の人。字は明庵。通称千光国師。比叡山で台密を修め、二度宋に渡り、天台山で禅を学ぶ。博多に聖福寺、鎌倉に寿福寺、京都に建仁寺を開き、禅宗の布教につとめた。
- (43) 老子 中国、春秋戦国時代にいたとされる思想家
- (44) 屈原 (前三四三頃〜前二七七頃) 中国、戦国時代の楚の人。名は平、字は原。官にちなみ三閭大夫とも呼ぶ。楚の王族に生まれ、王の側近として活躍したが、妬まれて失脚、湘江のほとりをさまよい、ついに汨羅の投身したという。

(45) 『離騷』 屈原が歌う自伝的叙事詩

(46) 竹林七賢

中国の魏・晋の交替期に、世塵を避けて竹林に会し清談を事としたと

いわれる七人の文人の称

(47) 酔吸の三聖

三聖吸酸に同じ。孔子、老子、釈迦牟尼が、桃花酸を共になめて眉をひそめる三者。

(48) 蘇東坡 (一〇三六～一一〇二) 蘇軾の別名。北宋の詩人・文章家。

(49) 莊子 老子と併称される道家

中国、戦国時代の思想家。道家思想の中心人物。名は周。字は子休。孟子と同じ紀元前後半の人で、儒教の人為的礼教を否定し、自然に帰ることを主張した。世に老子と合わせて老荘という。著に『莊子』がある。生没年未詳。

(50) 第六祖慧能 (六三八～七二三) 唐代の僧。中国禅宗の第六祖 広東新興の人。

五祖弘忍の付法を受け、六祖大師・曹溪大師など称せられ、禅宗の大成者。門人きわめて多く、以後主流は南地に隆盛したので、その法系を南宗禅という。

(51) 馬祖 (七〇九～七八八)

馬祖道一 (まそ だいいち) 四川州に生まれる。俗姓は馬氏。唐の開眼年間 (七一三～四二二) に南嶽の伝法院に入り、六祖慧能の法嗣の南嶽懷讓に参じ、契悟した。その後建陽のの仏迹嶺、臨川の西裏山、南康の龔公山に移り大暦年間 (七六六～八〇〇) の洪州 (江西省) 開元治寺住し大いに禅風を挙揚した。貞元四年 (七八八) 二月四日遷化。八〇歳。諡号は大寂禅師は大寂禅師。その宗風は

平常心是道や即心即仏を掲げ、日常生活の全てを仏性の働きと見るもので中国禅宗の本格的発展は馬祖に始まるといわれ、始祖または鼻祖と称される。弟子に百丈懐海等があり、『馬祖道一禅師語録』一卷がある。

『禅語百科』

(52) 百丈 (七四九～八一四)

福州長楽 (福建省) に生まれる。俗姓は王氏。二〇歳で西山慧

照のもとで出家。南嶽の法朝建師に就いて具足戒を受け、廬江に大蔵経を閲して戒定慧の三字を学び、ついで馬祖道一に参じて印可を受けた。のち洪州 (江西省) の大雄山 (百丈山) に大智寿聖禅師寺を建立して開祖となり、禅風を鼓吹した。唐の元和九年 (八一四) 正月一七日遷化。六六歳。

『禅語百科』

(53) 維摩経 大乘經典の一つ。鳩摩羅什 (くまらじゅう) 訳 (三卷)。

* 出典無記名は『広辞苑』第六版 (岩波書店 二〇〇八・二〇一一) である。

第一章 『茶の本』と茶道の相乗効果

はじめに

『茶の本』の問題の一つが、実際の茶会の知識を書いているか否かという、実践書という視点からの評論である。その結果、「『茶の本』は茶の本ではない」と結論付けられる場合がある。しかし、このような見解は、妥当だろうか。拙論は、この疑問から始まっている。

天心は、『茶の本』を執筆しているが、茶道を習い続けたわけではない。結婚前後に家族で、お茶の稽古を楽しんでいたのではないだろうか。

二〇一三年は岡倉天心の生誕一五〇年であり、また没後一〇〇年であった。近代以降、茶道の歴史の本を刊行する場合、『茶の本』を欠かすことはできなくなっている。英文で読む外国人は、『茶の本』から、茶道についての思想を学び取っている人も多い。

このような視点から、本章では天心の思想が茶の思想との一致点があるかを探る。また、『茶の本』が互いに影響し合う、その相乗効果について論じたい。『茶の本』に限定せず、岡倉天心のポストン美術館での講話、講演も含めて、論を進める。その理由は、『茶の本』が突然に刊行されたのではなく、天心の蓄積した思想であったためである。第一節では茶道史における『茶の本』の位置付けについて、第二節では岡倉天心の茶道観について考察する。

第一節 茶道史における『茶の本』の位置

現在、発行されている茶道の歴史の本は多い。これらの著作が、どのように『茶の本』を取り上げているかを比較してみたい。

最初に取り上げるのは、昭和五五年刊行の、村井康彦氏（一九三〇〜）の『茶道史』（千宗室監修 淡交社）である。同書では、①「『THE BOOK OF TEA』」、②「生活文化としての茶の湯」と項目を立て、二頁半にわたり、岡倉天心を紹介している。

①の「『THE BOOK OF TEA』」では、「茶の湯を西洋思想と東洋思想との対比の中で位置付けたところに、最大の特徴がある。」¹⁾とする。

②の「生活文化としての茶の湯」の中では、次の一文が注目される。

「天心は茶の湯を定義して、「茶道は日常生活の俗事の中で存する美しきものを崇拜することに基づく一種の儀式」である。としたが、これは生活文化としての茶の湯の本質を的確に表現している。

じじつ、日本人は、人と物、人と人、人と自然や季節の関係を追及し、そこに独特の美意識を育ててきた。茶の湯はこうした意味の生活文化としての特質を持ち続けることが必要であり、またそのために、われわれはそこにたえず思いを致すことがたいせつであろう。⁽²⁾」

村井氏が強調しているのは、天心が常に美意識を追求しているという点である。特に『茶の本』の「日常生活の俗事の中で存する美しきもの崇拜することに基づく一種の儀式」という一文を取り上げ、生活文化としての茶の湯の本質を的確に表現していると断言している。それはまた、禅寺に例えるなら日常の雑事、作務（僧が行う肉体労働）のことでもある。

次に、昭和六二年（一九八七）に刊行された、桑田忠親（一九〇二～一九八七）の『茶道の歴史』（講談社）について紹介する。同書で『茶の本』を取り上げているのは、わずか七行のみである。桑田は『茶の本』について、「茶道の近代を説いた」「画期的な茶の本の啓蒙書」と位置付け、茶道を海外に広めたことを評価している。さらに「茶室は聖堂である。工夫することによって、日常茶飯事の中も偉大なるものを発見することができる」と説きまして、茶道を広く海外諸国にまで紹介したのであります」と述べ、「日常茶飯事の中も偉大なるものを発見」したという点を強調する。

続いて平成一九年（二〇〇七）に刊行された、谷端昭夫氏（一九四八～）の『茶道の歴史』（淡交社）を取り上げる。同書では、「近代茶書出版の特色」として、以下のように述べている。

「一九〇三年（明治三十六）、裏千家の十三代円能斎千宗室によって出版された『浦のとまや』は、従来のもとは違い、稽古の内容に即した実践的な書であった。以来、茶書出版による茶法の伝授は、現代にいたるまで各流派に及んでいる。一方、茶の湯を伝統文化と位置づける知識人によって、多くの茶道誌が出版されたのもこの時期からで、一九〇六年（明治三九）岡倉天心がニューヨークで出版した『茶の本』はその嚆矢⁽⁴⁾である。」

明治の終わりのころになると、茶道を学ぶ人も多くなり、実践的な書が必要になり、『浦のとまや』が出版されたことを語るが、『茶の本』をその嚆矢⁽⁴⁾であると位置づけている。

四番目に取り上げるのは、美濃部仁氏（一九六三～）の論文「茶の思想」である。これは平成二五年に茶の湯文化学会が編纂した『講座 日本茶の湯全史 第三卷 近代』（思文閣出版）に掲載されており、最新の研究動向を示す論文といえる。美濃部氏はこの論文にお

いて、「茶の湯における自然と自由」という節を設け、久松真一（一八八九〜一九八〇）、柳宗悦（一八八九〜一九六一）と共に天心も取り上げ、「不完全の賛美」を主題において、論を展開している。

「この著作（『茶の本』）は、茶の湯について全く予備知識のない読者に向けて英語で書かれたものであり、そこでは茶の湯とは何かが正面から問われている。その点で、茶の湯とは何かを考えるさいに特別な意義を持つ著作である。（中略）茶席においては複数の個性が相和し、相敬って、全体とし一つの美を追求するということがおこなわれており、各人が自分の主観的な美のなかに閉じこもって満足しているのではないと思われるが、そのことが天心の視野にも入っていると考えられる。（中略）茶の湯における「不完全の美」は、茶の湯の宗教性の現れであるということが出来る。天心は茶の湯の宗教性についてくわしくは記していない。（中略）「不完全の賛美」という『茶の本』における茶の湯の性格づけのなかに、不完全のものが自然であるということへの着目と、茶の湯をおこなう者の心の問題が含まれているということは重要であると思う。」

以上取り上げた著作では、それぞれの著者が『茶の本』を通じて、天心が茶道をどのように位置づけしているかを論じている。村井氏と桑田は、天心が茶の湯を生活文化として捉えている点を強調した。谷端氏は、茶道図書の出版の嚆矢であると述べ、その後、茶道図書が出版されるようになったと位置づけている。そして美濃部氏は、「不完全の美」を取り上げ、その意味と意義を探っている。四者が注目している部分に差異はあるが、それぞれが『茶の本』を茶道の中に組み込んでいるといえる。

もう一点、茶道と藝術の関係について、田中秀隆氏の言説を取り上げたい。田中氏は、著作『近代茶道の歴史社会学』の中で、『茶の本』を高橋龍雄『茶道』に関連付けて、次のように述べる。

「昭和四年に出版された高橋龍雄の『茶道』において、「茶は茶道具の総合藝術である」という主張に出発点を見つけることができよう。高橋は、「美術的作品」と茶道具を位置づけた」

昭和四年は、『茶の本』の訳本が出版された年でもある。『茶の本』の第七章の「茶の宗匠たちの芸術にたいする貢献」という一節も、茶人を芸術家として捉えようという態度を見せている。高橋龍雄の「茶は道具の総合藝術である」という発言に注目して『茶の本』に関連付ける田中氏も、茶道が芸術であるというスタンスに立っている。

つまり茶道を藝術と捉える立場は、『茶の本』が準備したと見ることができるとは、これにより、茶道に携わる人たちも、茶道を藝術として意識するようになったのである。

第二節 岡倉天心の茶道観

天心はボストン美術館に勤務し、古美術を日本・中国から蒐集し、分類、保管する仕事をしてきた。その中で、日本文化を欧米人に説明する必要があるが出てきたものと考えられる。明治三十年代は、米国でもジャポニズムが流行した時期であるが、そうした一時的なブームの中での表面的な日本趣味に、天心は危機感を抱いていた。このため、内面的な日本人の思想を欧米の人々に啓蒙しようとしたのが、『茶の本』と位置付けられる。

日露戦争に勝利したことで、日本が近代国家仲間入りと評価されるようになったことに対し、天心は危機感を抱いていたものと思われる。同時に、近代化の道を進む日本に、欧米の価値観が浸透することに対しても、天心は危機感を抱いていた。ボストンと日本を往復していた天心には、日本人のものの考え方、暮らし方などの思想を、欧米人に理解できるように説明したいという欲求があった。その意志の下に、「茶道」という日本文化を題材にして論じたのが『茶の本』であろう。『茶の本』は、中国の古典的茶書である陸羽『茶経』の解説からはじまり、仏教、儒教、道教、禅道へと展開し、禅宗での清浄と日常生活の行いを重視する。

天心は官僚であり、教育者であり、美術史家であり、古美術保存運動家である。日本美術院を立ち上げ、画家たちの教育にもあたった。さらに重要な仕事は、古美術の発掘、保存、修理などを監督することである。特に、晩年は、国宝の選択、取り扱いは、力を入れている。古美術を通して日本人の精神を常に見つめ直していたのが、天心である。そのような天心が、茶道を主題にした理由として、以下の三点が考えられる。

第一には、天心が『茶の本』を執筆するまでの間に、一度衰退していた茶道が、再び復活していることである。

明治維新によって零落した茶道が、明治の日本人の手により、再び勢いついたことは、天心の周りにいる人々の動向から、天心も理解していたであろう。たとえば、今泉雄作（帝國博物館日本美術部長）、正木正彦（五代目東京美術学校校長）などが茶道を楽しんでいること、古美術が茶道具として扱われていることなども無視できない事実である。古美術保存委員の職を最期まで全うしている天心は、古美術の価値と古美術がどのように扱われているかという動向を、視野に入れていたであろう。

また、面識のある益田孝（鈍翁）や原富太郎（三溪）たちが、最上級の古美術を茶会に使っていた点も無視できない。益田と原は日本美術院の特別賛助員であり、明確な接点があった。その益田が主催する茶会「大師会」の様子は、公に新聞、雑誌においても紹介さ

れている。現に、第三回目の「大師会」には、天心も招待されている。毎年、その会が催されていることも知っていたであろう。

二つ目は、ボストン美術館での夫人たちへの講話を通じて、日本文化を説明する上で、茶の湯という題材が有効であることに、天心自身が気づいたのではないかと一点である。『茶の本』は、喫茶を説明しているだけではなく、日本人の思想を茶という歴史をたどっている点に特徴がある。これはボストン美術館での夫人たちへの講話をしているうちに、日本人の思想を語る上で、茶道が最も適していると、天心自身が気付いた結果ではないだろうか。

このように考えると、『茶の本』の思想の基礎になる陸羽の『茶経』を、天心がいつボストンへ持っていったのが問題となる。これについて、『茶経』を持って行ったのは、二度目（一九〇五年十月一九〇六年四月）以降と考える。その論拠となるのは、堀岡弥寿子の次の指摘である。

「七つのエッセイのうち、四つはロンドンとニューヨークの雑誌に発表された。すなわち「人情の茶碗」と「茶の流派」の初めの二つのエッセイは「人情の茶碗」と題されて『インターナショナルクォーターリー』誌（ロンドン）の一九〇五年四月号に、「藝術鑑賞」は『クリティック』誌（ニューヨーク）の一九〇六年の五月号に載った。（中略）二つの参考書が明記されている。いずれもたいていの百科事典に言及されている資料であるし、茶に関する歴史は百科事典から得たものでないかと思われる。」⁸⁾

先の三章（人情の茶碗・茶の流派・藝術鑑賞）は堀岡氏によれば、百科事典説を述べている。「『道教と禅』のエッセイは、ニューヨークの宗教雑誌『ホミレティック・レビュー』に載った。」⁹⁾（一九〇六年）に「茶室」「花」「茶人たち」は、いつ書かれたか不明であるが、出版は一九〇六年五月である。

第三節 和敬清寂

茶道の根本精神は、和敬清寂の四文字で表現されている。角川茶道大事典（角川書店 平成二年）には、以下のように書いてある。

和敬清寂

茶道の実現しようとする四つの目標ないし根本精神を四字に要約したもの。この四つが茶道の目標として、いつごろから唱えられたかは明らかでない。が、おそらく茶道としての自覚の高まった江戸中期からであろうと推定されている。

〔芳賀幸四郎〕

江戸中期とは、元禄時代である。現在、使われている「和敬清寂」という四字では定義されていず、利休一〇〇回忌が一つの転機である。『茶書の研究』（筒井紘一著 淡交社 平成一五年）に、巨妙の『茶祖珠光伝』についての記事がある。「元禄三年（一六九〇）の利休一〇〇回忌を期に一つの転機を迫られていた。（中略）そこで唱えられていたのが利休へ帰れということであり、利休復活であった。それと同時に珠光の名も浮かび上がったものらしく『茶祖伝』は珠光から利休にいたる茶の系統を説いている。（10）」元禄時代は、茶道を志す人口が町衆の中に増えた時期である。

さらに、筒井氏は、『茶祖珠光伝』には、

將軍善政が珠光に茶は何たるかを尋ねたところ、（中略）茶は礼を本義としており、「謹兮清兮寂兮」にあるといっている¹²。

さらに、筒井氏は、以下のごとく、続ける。

珠光の茶を踏まえて、利休の言として、

「今茶之道四焉、能和能敬能清能寂、是利休因茶祖珠光答東山源公文所云」

とあるように、珠光が善政に答えた「謹精寂」を土台として利休が茶の四諦とは

「和敬清寂」に尽きると考えたことがわかる¹³。

このように、和敬清寂が確立していく。その「和敬」は、人対人の交わりでの成立であり、「和」は、やわらぐこと、調和がとれていること、敬は、尊敬することである。

茶道では、四規として、根本精神を表す重要な言葉である「和敬」も含む。天心は美術において、作品と鑑賞者は、共感での結ぶつきが重要であると述べるが、その共感が、茶道にも結びつくと考えて、『茶の本』を書いた可能性もある。

まとめ

天心は、日本国内の情報を常に把握しており、日本文化が見直され、茶道が活気ついたことなども理解している。

またポストンでは、夫人たちに談話する中で、日本文化論を説明する上で、茶道の重要性を自覚したのだと思われる。その根本にあるのは、「日本美術史」を構築する中で獲得した天心の日本文化論であり、日本を大系的に掴んでいた成果である。天心の独自の理論が、主軸として茶道を置いたことではないか。

天心は茶道を「茶の湯の中には、美が存在していること」、「生活文化としての茶道」であると位置づけている。天心にとっては、「日常生活の中に茶道」があることが重要であったことになる。茶道という、思想と学問の二面に触れているのが、『茶の本』である。

- (1) 『茶道史』 村井康彦著 淡交社、昭和五五年、一九八頁
- (2) 『茶道史』 村井康彦著 淡交社、昭和五五年、一九九頁
- (3) 『茶道の歴史』 桑田忠親著 講談社、昭和六二年、二四一～二四二頁
二四七頁
- (4) 『講座 日本茶の湯全史 第三卷 近代』 思文閣出版 平成二五年
一九八頁～二〇三頁の抜粋
- (5) 『近代茶道の歴史社会学』 田中秀隆著 三四七頁
- (6) 『茶の本』 村岡博訳 岩波書店 一九八四年 八四頁
- (7) 『岡倉天心孝』 堀岡弥寿子著 昭和五七年 吉川弘文社 一三七頁
- (8) 前掲書 一三六頁
- (9) 『茶書の研究』 筒井紘一著 淡交社 平成一五年 二八一頁
- (10) 『前掲書』 二八一頁 資料9 第一章『茶祖珠光伝』写本(『茶道叢書』
国会図書館蔵 電子資料 請求番号八三二―三九)
- (11) 『前掲書』 二八一頁
- (12) 『前掲書』 二八一頁
- (13) 『前掲書』 二八一頁～二八二頁

結論

以上の十一章をふまえ、本論の結論を述べたい。

第一部の天心の思想では、公の天心、私的な天心を考察した。

岡倉古志郎は、『父岡倉天心』の中で、「祖父天心と父一雄のこども」と題して解説して

以下のように語っている。

自らの身体で、詩を書きつらねた詩人であり（中略）

色川大吉教授のいう「矛盾の塊り」であり、竹内好氏のいう「やたらと放射能をばらまく危険な思想家」である。^③

当時の家人でさえにも、理解し難い天心だったのであろう。しかし、拙論で顕彰するかぎり、思想と行動は一貫している。明治時代という時代背景で、天心の思想を理解するには、当時の人たちの「共感」を得られなかっただけではいだろうか。

近世から明治時代に換わった時、多くの武士は途方にくれたはずである。時代に遅れた武士もいたであろう。天心は勘右衛門という良き父に恵まれた。母は早世するが、勘右衛門の先見の明があり、天心に十分な教育を施している。

第一章では、福井藩を中心に藩主の松平春嶽や橋本左内の生き方、藩政への関与、海外貿易という新たな視点などを取り上げた。勘右衛門は時代の影響を受け、安政六年には、石川屋の経営を始めている。波瀾であることには、間違いない。そこでの息子の教育には力が入ったであろう。

第二章では、天心の功績を伝播した人たちを取り上げた。息子の一雄、孫の古志郎、弟の由三郎の力なしには、天心研究ができないほど、広範囲に活動した。また、多面的である。特に、由三郎の力は大きい。『茶の本』の訳本は、村岡博、福原麟太郎を含めた洋々塾の勉強会の結果であろう。また、再興美術院を立ち上げた横山大観、彫刻家の平櫛田中たちの、長命であったことが、天心への貢献ができた賜物である。

第三章では、美術院を取り上げた。天心の官僚としての能力を発揮した、美術院の創設である。組織作りにも、その能力を発揮している。

古美術保存は生涯のライフワークになった。病で床に臥せていても、保存会の会議には出席している。古美術への思いが見てとれる。

第四章では、二十代に日本の美術・古美術の重要性に気づき、「美術の真理」を追求する。それは、生涯、変わることはなかった。

第四章の一〇節の「絵画における近代の問題」の講演が、天心の思想が固まったと言われている講演である。

画家の個性と製作者と観衆の暗黙の理解の中に双方の歎びがあると結び、「共感」という言葉を何度も使い、「共感」が重要であることを述べている。「皆様方の寛大なご好意を信じ、わが国に関するあらゆることに皆様方が格別の「共感」を寄せて下さっているからに他なりません。」⁴とか、「藝術の鑑賞は常に心の通い合いです。」⁵「真の「美的共感」がいかにか大きく失われているかを見て、残念に思うのです。」⁶「藝術ばかりではなく、すべてに「共感」は通じることを話しかけている。

一一節の「ボストン美術館中国日本部の仕事に協力する婦人たちへの談話」では、婦人たちに、古美術のための袋（仕服）を高貴なあなた方の手で縫って、ともに、「共感」を持てるようにとお願ひする。心を込めて縫ってくれと天心は講話している。「共感」することが、藝術には必要であると話をする。

西欧人が、日本を理解するには、喫茶という西洋にある文化に、さらに思想があることを説き、その思想をボストンの夫人たちに、判りやすく説明している。天心の講和が終わった後に、お茶の時間があつたのであろうか。実際に、古美術を包む、袋（仕服）を縫うことは、人を雇って仕立てることができが、それでは足りないものがある。その足りないものは、過去の人たちが作った貴重な古美術を高貴な夫人たちの手で、この古美術に思いを寄せながら、「共感」という気持ちでプラスして、仕立ててほしいと天心は語る。

一一節では、天心の服装がその時の思想と一致している。
東京美術学校時代での美術への情熱、日本美術史を作る目標、美術に対する一貫した態度、個性を重要視して、多くの国民へ向けて、発信している姿勢がある。あくまでも「日本画」に拘り、美術の普遍性に辿り着いた。

ここでは、公人、私人としての、天心の思想を浮き彫りにした。その結果、思想は一貫していた。天心が使う号（第四章一二節）も、老荘思想が漂っている。服装（四章一二節）もわかりである。

一雄が「サンフランシスコの中央駅に彼の来着を迎うべくホームに立っていると、道服に竹の杖をたずさえ、風帽を頂き、飄々乎として列車から下りた彼の異様な姿を認めて、少なからず驚かされたものであつた。」⁷「印度でも、道服で旅にでたということから、自己に忠実に実践する思想家である。

「美術の真理」を追求している。ここでいう「美」は、美しいだけの意味ではない。

第五章では、シカゴ万国博覧会（以後、シカゴ博と省略する）と第五回パリ万国博覧会（以後、パリ博と省略する）を取り上げた。

この二つの博覧会は、大きく異なる。シカゴ博は、生活の工芸品を時代ごとに、住空間に歴史ごとに配置し、米国政府にも米国民にも好評であつた。しかし、パリ博は、きびしかった。博覧会の分類が西洋式であり、日本には当てはまらないと述べ、このような分類は、西洋の分類であり、日本の美術・美術品をあてはめるには無理があると唱え、たとえ当てはめたとしても作品のよさは発揮できないと天心は言っている。

二つ目は、パリ博より、日本美術史の分類が、大きく変わることになる。日本語版『稿本日本帝国美術略史』には、整然とした時代区分に変わった。これ以降、日本の美術史が、今日まで、続くことになる。

第六章、第七章は、天心の思想である、東洋観である。当時の状況では、西洋を批判するのではなく、東洋の美術、生き方、生活を西洋にわかってほしいと訴えることが、精一杯であったこと、また、弟子達に勧めた絵画は、自由と個性で、西洋を学ぶことを制限しなかった。しかし、東洋にある思想を重視していたことが、絵画から、見てとれる。

当時の状況では、海外に東洋・日本の暮らし方と考え方を述べるのが、限界であり、欧米化の中の機械や、戦争を批判することはなかった。特に日本美術院を創設してからは、冷静に訴えることが、天心に与えられた機会であった。

東洋と西洋の美に関していえば、ただ写実的な美ではないことを話している。第六章の第三節で「東洋藝術の異なる点は、それが美そのものに何ら関心を払わないことである。東洋批評精神の全領域において、画が美しい故に賞賛されることは稀で、いつもそれが美的に興味をよぶためである。日本語の藝術的に面白いという言葉は“interesting”と同意語ではなく、白い面したという語から出ている。その起源は非常に特殊である」と天心は語っている。

八章は書簡であるが、人間的な天心が、表れている。人を大切にする姿が見える。中でも弟の由三郎を褒める書簡は、兄としての寛大さが見受けられる。暖かいことばである。

このように、第一部では天心の思想と人間像を中心に考察し、天心が藝術には「共感」が必要であり、それは、日常の生活にも必要なものであり、茶道にも通じると訴える。そして第二部では、『茶の本』と茶道との相乗効果を取り上げた。

結論としては、“THE BOOK OF TEA”は、思想家として、西洋人に日本文化論を語った。ボストン美術館での講話を含めて、日本文化の代表として「茶道」を取り上げ、西洋人に理解されやすいように書いている。そして『茶の本』は日本語に翻訳され、日本人に茶道のよさを教える役割を果たすことになる。昭和四年に岩波書店より初版刊行された村岡博訳の『茶の本』が、平成二七年（二〇一五）の八月現在で、一一六刷になる事実は大きい。

米国で“THE BOOK OF TEA”が刊行されるころ、同じように国内でも、茶道の教本が刊行される。それ以降、茶道に関する本が国内でも刊行される。『茶の本』が刊行された昭和四年以降も、茶道に関する本が刊行される。かつてないほど、茶道の本が刊行され、茶道の人口も増加する時期である。学校の茶道教育も広まり、女性の割合が圧倒的に多く占めるようになる。一般国民の茶道になる。

天心が、「国華発刊の辞」（『国華』明治二二年）で述べた「國民ト共ニ邦国ノ精華ヲ發揮セント欲スルナリ」と述べているように、近代の茶道にも天心が望むような、一部の

人のものではなく、国民に広く門戸を開放していることは、似通っている。特に『茶の本』の存在は大きな役割をはたし、相乗効果を上げている。

次に和敬清寂について、河波昌氏⁸⁾は、以下のように述べている。

「和敬清寂」は利休の茶道精神を要約した語句である。その最初に「和」がおかれているように、この「和」こそが茶道実践の眼目となる。そしてとりわけ茶室こそがこの和の実践にとって決定的に重要な場所となる。その茶室とは聖空間そのものであり、茶の実践を通して実そこに和が実現せられてゆくのである。」(9)

「敬」はあらゆる人間の文化的営みの根源をなすものといえる。」(10)

『茶の本』の第五章「藝術鑑賞」では、天心がもつとも語りたい章であると確信する。天心は、美術史家であり、古美術に関しては、鋭い鑑識がある。しかし、視覚的に見える美ではなく、心で見る美、創造の美、一体感のある「共感」できる美、などを求めているのではないだろうか。

狭い茶室の中では、お互いに譲り合うことが求められる。亭主(ホスト)と客(ゲスト)が、それぞれ相手に感謝しながら、亭主は客に来庵の礼、客は亭主に招待と準備の礼をする。その後の茶事進行の間も、客は亭主の進行に支障がないように心遣いをして、亭主は客のペースを測り、相手がやりやすいような、会話と間^{*}を持って進めていく。こうした「共感」を意識して会話を進行するところに、茶道の世界で「和」と呼ぶ意識がある。モノである道具に対しても、亭主が様々な配慮の下に準備したものであればこそ、尊敬の気持ちを持って感謝ができる。亭主も客も、互いに「共感」を持って、「和敬」へと重なることを確信する。

拙論は、独自の解釈で天心の思想の一面に迫ることができ、「共感」の思想を論じることができた。

又、天心が書いた『茶の本』と茶道は相乗効果があり、茶道史には必要な存在であり、互いに近づいて『茶の本』は茶道の一面となったと論じる。

今後の課題は、キリスト教徒の新渡戸稲造(一八六二～一九三三)、内村鑑三(一八六一～一九二九)と岡倉覚三(天心)との日本文化論の比較が必要であると考ええる。

以上

注

- (1) 色川大吉 「東洋の告知者―その生涯のドラマ」日本の名著 第三九巻 中央公論社 昭和四九年
- (2) 竹内好 「岡倉天心」(『朝日ジャーナル』昭和三七年、『日本の思想家1』昭和三七年に収録)
- (3) 『父岡倉天心』二六六頁
- (4) 『全集』二卷六二頁

- (5) 前掲書 六五頁
- (6) 前掲書 六六頁
- (7) 『父岡倉天心』岡倉一雄著 中央公論社 昭和四六年 二一三～二一四頁
- (8) 河波昌
- (9) 『真茶―茶道における人間形成―』河波昌著 明治印刷 平成二七年、三六頁
- (10) 前掲書 三八頁

謝 辞

本論文制作にあたっては、宝塚大学大学院（前宝塚造形芸術大学）の伝統芸術領域において、指導教官の倉澤行洋先生、同大学院教授のホルスト・S・ヘンネマン先生からは丁寧なご指導、ご教授を賜り、改めて御礼を申し上げます。

また、同大学院の筒井紘一先生（今日庵文庫長）、井尻益郎先生、河波昌先生、伝統芸術の本質をご指導くださり、感謝申し上げます。

岡倉天心研究会「鵬の会」の岡倉登志先生、山口静一先生、宮瀧交二先生には、ご指導のほかに、視野を広げてくださり、お礼を申し上げます。また、依田徹氏、塩出明彦氏、岡本佳子氏、木本真希子氏には、常日頃のご指導に感謝を申し上げますと共に、資料の提供に御礼を申し上げます。

宝塚大学大学院の本校・新宿キャンパスの先輩・後輩の諸氏と共に学ぶことで、向上心を常に保てたことに対し、感謝したい。鈴木恵子氏には、庶務やその他のアドバイスに対し、お礼を申し上げます。

最後に、兄家族に改めて感謝したい。

今後は、社会に貢献できるような研究と活動をめざす所存である。

二〇一五年十二月

平 美恵子

資料編

資料一 岡倉覚三（岡倉天心）略年譜

安政五年（一八五八） 日米修好通称条約締結

安政六年（一八五九） 神奈川（横浜）・長崎・函館の三港を開港

十月、J・C・ヘボン（James Curtis Hepburn 1815～1911）

神奈川宿に來日、十一月にはN・ブラウン（Nathan Brown

1807～1886）も來日。

文久二年（一八六一）

ヘボン夫妻もブラウン夫妻も神奈川宿の成仏寺に滞在し、なかば軟禁状態で、日本人への直接伝道ができずにいた。

ジェームズ・バラ（J・H・Ballash 1832～1920）も妻マーガ

レット（1840～1909）と共に來日して、成仏寺に滞在。（それぞれ

の所属教会は違うがプロテスタント系である。）

文久二年（一八六一～一八六三）

横浜居留地で岡倉覚右衛門の第二子として誕生

文久三年（一八六三）

生麦事件が起きる。（六月一日）

横浜村の一区域を外国人居留地と定め、外国人が神奈川宿から

転居。ヘボンは三九番館を建設する。ブラウン家とバラ家は

一六七番に移り済む（現在の横浜海岸教会）

元治二年（一八六四）

神奈川奉行所は幕府の認可のもと、運上所（税関）の役人の語学教育機関として、ヘボンの進言をいれて「横浜英学所」

（Yokohama Academy）を開設し、ブラウン、ジェームズ・バラ

などが担当した。宣教師側は無報酬で教えたが、これによって、

優秀な青年と出会う機会になった。

慶応二（一八六六）

覚三、四歳、兄浩一郎六歳の時に、横浜大火が起こり、関内の大半を消失。石川屋も火災の凶から確認すると、巻き込まれ、

被害がでる。（天心は生涯で三回の火災を経験している。）

明治元年（一八六八）

ジェームズ・バラの私塾に通う。

明治二年（一八六九）



ジェームズ・バラ 日本基督教文化教会蔵

『横浜開港と宣教師たち』

横浜プロテスタント史研究会編 有隣新書 平成二十二年 六三頁



ジェームズ・バラ夫人マーガレット 同蔵

前掲書 六三頁

明治三年（一八七〇） 母この急逝する。

明治四年（一八七一） 長延寺に預けられ、住職玄導和尚から漢籍を学ぶ。

高島学校でジョン・バラ (John Craing Ballabh 一八四二〜二〇)
ジェームズの弟に習う。

高島嘉右衛右門が洋風の高島学校（正式名 藍樹堂）を建設し、
翌年に神奈川県に寄付。

明治六年（一八七三）

石川屋の閉店を命ぜられ、勘右衛門一家は東京日本橋蠣殻町一丁
目二番地（現人形町）にあった福井藩下屋敷の一角に移転する。

柳原からでた大火で被災し、土蔵造りの二階家を新築するまで、
一時深川に住む。岡倉旅館を開業する。

明治八年（一八七五）

東京開成学校に入学する。

明治一〇年（一八七七）

東京大学文学部に転入する。

明治一一年（一八七八）

森春濤に師事し漢詩を学ぶ。加藤桜老に琴を習う。

大岡定雄の娘、元子（基子）と結婚し、このころ

茶道を正阿弥に習う。

明治一三年（一八八〇）

卒業論文「美術論」を書き東京大学を卒業し、
文学士となる。

明治一七年（一八八四）

法隆寺夢殿で秘仏救世観音開扉したといわれている。

明治一九年（一八八六）

「天心生」の号を用いる。

桜井敬徳より受戒し、雪信の戒号を与えられる。

（五月三〇日 近江国園城寺法明院道場三宝院前にて）

明治二〇年（一八八七）

ヨーロッパ美術視察をする。

明治二二年（一八八九）

帝国博物館理事兼部長となる。高橋健三と美術雑誌

『国華』を創刊する。

明治二三年（一八九〇）

東京美術学校で、「日本美術史」「泰西美術史」を

担当し、校長に就任する。

明治二五年（一八九二）

シカゴ世界博覧会の事務局監査官になる。

東京専門学校（現早稲田大学）で東洋美術史を

講義する。

明治二六年（一八九三） シカゴ国際博覧会が開催され、東京美術学校が

鳳凰殿を展覧する。

宮内省の命で中国調査旅行にでかける。七月から十二月

明治二七年（一八九四） 支那南北の区別を『国華』に掲載する。

明治二九年（一八九六） パリ万国博覧会のための臨時博覧会事務局評議員に

任命される。（内閣 十一月一四日）

パリ万博出品の事務勉励につき、百円を賞与される。

（十二月一四日）

明治三〇（一八九七）年 臨時博覧会事務局より、パリ万国博出品に関する事項

の調査を依頼される。（三月一六日）

パリ万博に出品する美術工藝品図案の募集を締め切る。

高村光雲、福地復一、濤川惣助、塩田真らと鑑査する。

（七月三一日）

帝国博物館はパリ万博に出品する日本美術史の編纂を

担当、その編纂主任となる。（九月二八日）

明治三一（一八九八）年 九鬼隆一、パリ万国副総裁を更迭される。

（三月一六日）

宮内大臣宛に、東京美術学校と兼務では成り立たずとの

理由で帝国博物館理事兼美術部長の辞職願を提出する。

（三月一七日）

「築地警醒会」の名で、天心を中傷した怪文書が斯会の人々に郵送される。（三月二二日）

帝国博物館理事兼美術部長を依願免官となる。

（宮内省 三月二二日）

東京美術学校校長職の辞表を提出する。（三月二五日）

美校職員に告別演説を行い、連袂辞職を止めるが、橋本

雅邦ら三一名は辞職の盟約書を作成する。（三月二六日）

東京美術学校校長非職を命ぜられる。

（文部省 三月二九日）

（文部省 三月二九日）

東京美術学校連袂辞職した画家、彫刻家、工芸家たちと

本郷湯島天神町に日本美術院創立事務所を設け、設立趣

意書を発表する。（七月一日）

明治三二（一八九九）年 パリ万博鑑査官任命の発表があり、天心は選からず

される。日本美術院代表として橋本雅邦が任命され

が辞退、人選をめぐる紛糾する。（八月二日）

明治三三（一九〇〇）年 パリ万博のためフランスに行く川北道助事務官らの

送別会が下谷伊予紋で開かれ、橋本雅邦、幸田露伴
高橋太華らと出席する。(二月五日)

日本美術史論第一章「六朝時代」を『日本美術』第十七
号に掲載する。本文は前年十一月から院内で講義してき
た日本美術史をまとめたもの(三月二五日)

パリ国際万国博覧会が開催される。

(四月一四から十一月三日まで)

かねて帝国博物館で準備していた日本美術史(仏文)は、
三年の美術学校騒動以後、編集主任が天心から福地復
に変わり、内容も当初とは異なったものが発行された。

明治三四年(一九〇二)十一月にインドに旅立つ。

明治三五年(一九〇二)インド、カルカッタでタゴール家の人びとと

親交がある。

明治三六年(一九〇三)一月に大観と春草をインドに送り出す。(七月帰国)

『東洋の理想』明治三六年(一九〇三)、ロンドンのジョン・

マレー社から出版冒頭は"Asia is One"からはじまる。

明治三七年(一九〇四)三月から翌年三月まで、ボストン美術館勤務する。

九月にセントルイスの万国博覧会の学術講演をする。

十一月、英文著書『日本の目覚め』をニューヨークの

センチュリー社より、出版する。

明治三八年(一九〇五)五浦に六角堂を建てる。

一〇月から翌年四月まで、ボストン美術館勤務する。

明治三九年(一九〇六)五月『茶の本』をニューヨークフォックスダフィールド

社で出版する。

日本美術院を絵画部と仏像修造部の二部制にする。

明治四〇年(一九〇七)一月から翌年四月まで、ボストン美術館勤務する。

明治四三年(一九一〇)東京帝国大学文科講師を嘱託された。東洋美術史を

講義する。「泰東巧藝史」

一〇月から翌年八月までボストン美術館勤務する。

明治四四年(一九一一)六月、ハーヴァード大学よりマスター・オブ・アーツを

授与される。

一月から翌年三月までボストン美術館勤務する。

大正元年(一九一二)インド經由アメリカに向う。

大正二年(一九一三)九月二日死去

大正十一年(一九二二)『岡倉天心全集』(甲ノ一・甲ノニ・乙)日本美術院(非売品)

昭和四年(一九二九)『茶の本』岡倉天心著。村岡博訳を岩波書店より刊行する。

昭和九年（一九三四）『岡倉天心』清見陸奥郎著、平凡社より刊行する。
昭和十三年（一九三八）『東洋の理想』の日本語版を浅野晃訳が創元社より刊行する。
昭和十五年（一九四〇）『日本の目覚め』は村岡博著で岩波書店から刊行する。
昭和五五年（一九八〇）（一九八一）『岡倉天心全集』一卷〜八巻・別巻を刊行する。

*略年譜は以下の抜粋転載である。

『岡倉天心全集』別巻 岡倉天心著 平凡社 一九八〇年

『曾祖父 覚三 岡倉天心の実像』岡倉登志著 宮帯出版社 二〇一三年

『岡倉天心アルバム』〔監修〕茨城大学五浦美術研究所 〔編〕中村愿 平成二五年

資料二 (第一章)

橋本左内の最期の母への手紙が以下である。左内が母へ送った書状であるが、左内の暖かい人柄が感じられる。天心は幼いころから「揺籃の唄は、つね（乳母）に彼女みずから見聞したから左内の逸事話に限られていた。」^{*}と息子一雄は語っている。つねの親戚方が橋本左内ということ、つねの話は、左内の話題が主であったのであろう。天心は、このうばの影響はないとは言えない。

(*)『父岡倉天心』岡倉一雄著 中央公論社 昭和四六年 九頁

母宛（安政六年九月朔日）

七月七日御したゝめ、たかたに御ことづけの御文、ならびに八月十二だち御ひきやくに御だしあそばし候御文、たしかにうけとり、ありがたくはいし奉り候。じぶんがらいちどきのれいきになりまし候ところ、ますます御きげんよく御くらしあそばし、かずかず御めでたくぞんじあげ奉り候。このおもて兩人ともぶじにくらしおりまし候まま、すこしもすこしも御あんじくだされまじく候。わけてもわたしこと、なにのさわりも御さなく候あいだ、かならず御しんばいくだされぬやう、ねがいたてまつり申候。御くにおもてもまた、ころりはやり候よし、いゝぬまなどわ、きのどくなること御ざ候。(中略) きさぶ郎より、するめ四わ、梅ぼしともうけとり申候。きさぶ郎よりまいどう御ちそうになりまし候。御礼ならびにてぬぐいなどくだされ、御礼よくよく申あげ候やう申いで候。するめはたきへ一わ、しんじへ一わつかわし申候。みぞぐちへ御ことづけのはんしたぎはたしかにうけとり申候。よほどさきだつて申あげ候やう、ぞんじおり候ところ、しつねんいたし候とみへ申候。(中略)

さくばんよりだいぶんあめふり候て、こん日わ、さむいくらいに御ざ候。こん月ぢうには、みながわへいへもんさま、よこはまより御かへりなされ候。まいどう御しんせつにおふせくだされそろあいだ、もしばあいなされ候はゞ、よくよく御申しくだされかし。たつご郎さまよりもよろしく申しあげ候やう御申しなされ候。まづはあらあらやうじのみ申しあげ候。かしく。

(中略)

左内

母上

やどやうじ

やどやうじ—— 家族間、とくに女性もしくは女性宛の手紙の脇付けに使われた。

『渡邊華山 高野長英 佐久間像山 横井小楠 橋本左内』 日本思想体系 五五

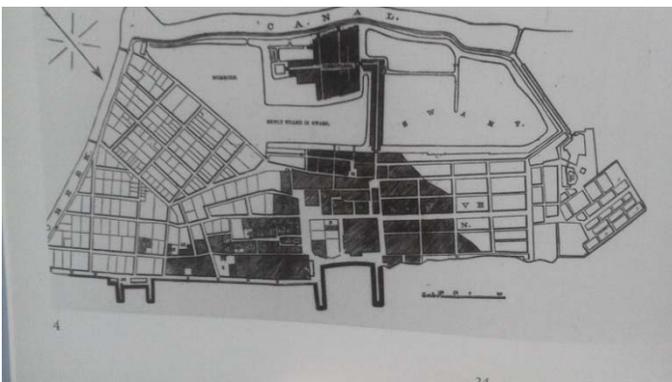
資料三 第一章 火災の図 岩波書店 一九七一年 五七七頁・五七八頁・五八〇頁

(図の正面下の波止場のすぐ上が運上所で、運上所の斜め右上が本町五丁目に石川屋がある。)

(運上所とは、

幕末、輸出入貨物の監督や関税の徴収などの事務を扱った開港場の役所。

明治五(一八七二) 税関と改称。)



大火焼失区域図 横浜開港資料館蔵

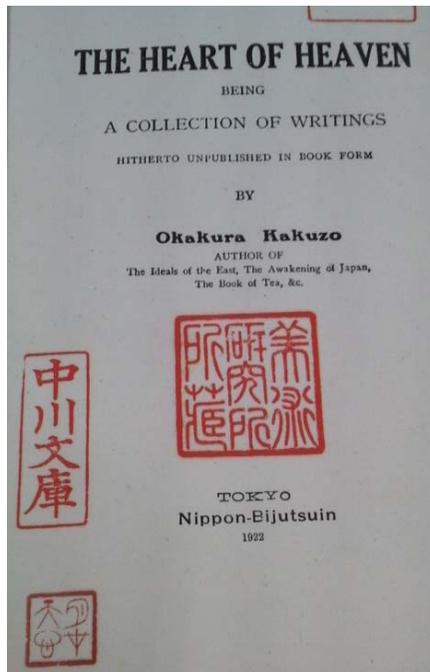
(慶応二年一〇月二〇日(一八六六年一月二六日)

横浜外国人居留地 横浜開港資料館編 有隣堂 二四頁

*石川屋を閉店後、東京の日本橋貝殻町の一角(無償同様に提供)に移り住む。そこでは数回の火災を免れている。明治三一年四月二〇日、東京美術学校非職された翌月にも中根岸4丁目の邸宅も火災より焼失している。散々な損害を被っている。人生の中で、火災で、少なくとも三箇所巻き込まれている。そんな経験が、晩年、国宝を守る重要な要素に、火災で焼失する危険性について強く主張している。



「乙」が英文である。



日本美術院蔵

明治二四年ごろ



東京美術学校校長服姿の天心

『岡倉天心全集』四巻 岡倉天心著 平凡社 一八九〇年 転載

奈良朝の武官の服装

奈良時代の武官の縫腋(ほうえき)の袍(ほう) 武官朝服姿(ぶかんちようふくすがた)



『図解日本の装束』四五頁典拠

【使用者】 朝廷に仕える武官

【構成】 頭 皂羅頭巾(くろうすはたのときん)

上半身 闕腋袍(けつてきほう) 下半身 白袴(しろのはかま)

持ち物 腰帶(ようたい) 笏横刀(たち)

履物 白の襪(しとうず) 烏皮履(くりかわのくつ)

【その他】 公務の際に着用した公服

奈良時代の養老律令における朝服で他に文官朝服(もんかんちようふく)がある。

『図解 日本の装束』池上良太 新紀天社 2008年

* 羅頭巾(うすはたのときん) うすもののかぶりもの

* 襪(しとうず) たびをひもで結んだもの。

資料六 (第四章)

明治三七〜三八年 四二〜四三歳ころ



ボストン美術館の中庭にて。

『岡倉天心全集』(二卷岡倉天心著 平凡社 一八九〇年)とり 転載

明治三十九年十一月十九日 四四歳ころ



驪山 離宮にて (中国)

『岡倉天心全集』(五卷 岡倉天心著 平凡社 一八九〇年)より 転載
この写真は「驪山温泉、本泉ハアーチノ下ニアリ 唐代蓮紋ヲ刻セシ柱の磁石二個正面ニ
アリ 本湯ナリ 壺験アリト見へて額ヲ上ケル者多し 左ニ離宮アリ 西太后の駐アリシ
処 此正面ニ撮影ス 聯アリ」

『岡倉天心全集』五卷岡倉天心著 平凡社 一八九〇年一九七頁)

驪山温泉は、西安近くである。一四日には、函谷関を通過し、翌日は、西安に入つて
いる。 (『岡倉天心全集』別巻 岡倉天心著 平凡社一八九〇年四二六頁参照)

聯(れん)——詩句または絵をかき、彫刻して、柱や壁などの左右に相對して掛けて飾りと
する細長い板。

天心が最後に道教の考えで、ゆったりと釣り船(龍王丸)に乗り、釣にでている。

五浦の生活を楽しんでいる姿の写真もこの一枚ある。その帽子には八卦の模様を入れている。

「帽子と着衣は道教の服装に想を得て、自ら考案したもの。四六歳〜四七歳のころ。」

『岡倉天心全集』（七卷 岡倉天心著 平凡社一八九〇年）より
道服の帽子とあざらしの外套 後漢の隠者巖光と重ね合わせたの服装と言われている。

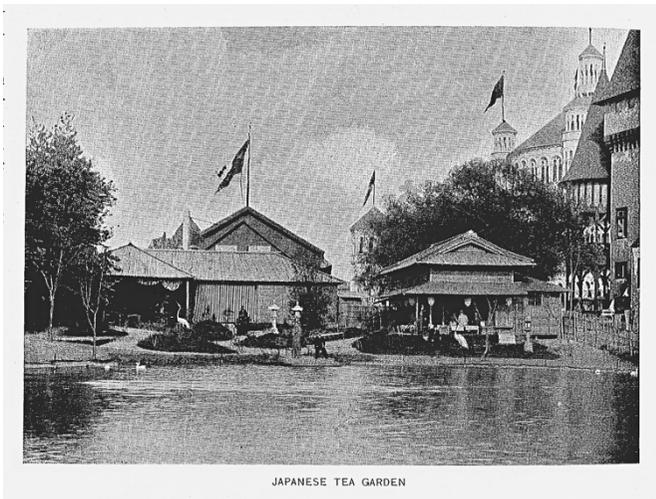


五浦での釣姿 四六〜四七歳のころ

『岡倉天心全集』（七卷 岡倉天心著 平凡社 一八九〇年）より 転載

資料七 第五章 シカゴ万国博覧会

シカゴ万国博覧会 明治二十六年（一八九三）



茶屋 『博覧会一覽（年表）』—国立国会図書館 転載

中堂 書斎

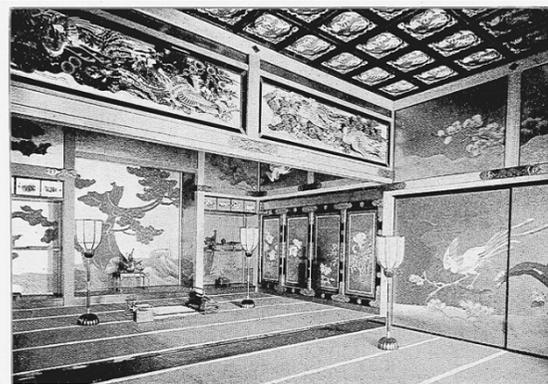
『岡倉天心全集』（二卷 岡倉天心著 平凡社 一八九〇年 一三三頁）
より 転載

鳳凰右翼廊の茶室 足利時代の様式



『岡倉天心全集』（二卷 平凡社 一九八〇年 一五頁）より転載
川端玉章（一八四二〜一九一三）筆

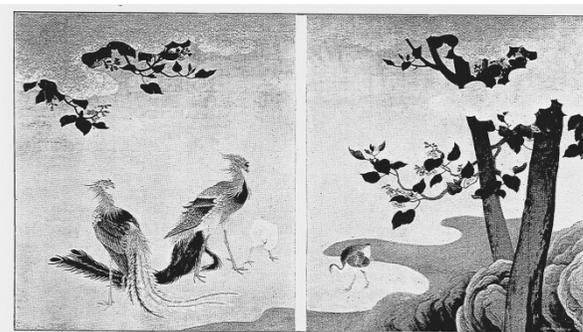
中堂
上段の間



Copyrighted by C. D. ARNOLD.
CENTRAL HALL: THE JODAN-NO-MA.

前掲書より
転載(一一頁)

鳳凰(フェニックス)図
橋本雅邦筆



Copyrighted by C. D. ARNOLD.
HO-O (PHOENIXES) AT PLAY, BY HASHIMOTO-GARU.

前掲書より
転載(一一頁)

資料八 第五回パリ万国博覧会

第五章 第五回パリ万国博覧会 明治三十三年（一九〇〇）

電気館と水宮噴水（1）



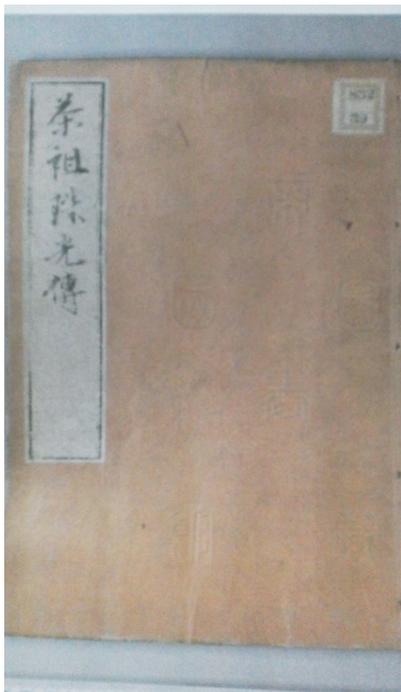
会場内電車（2）



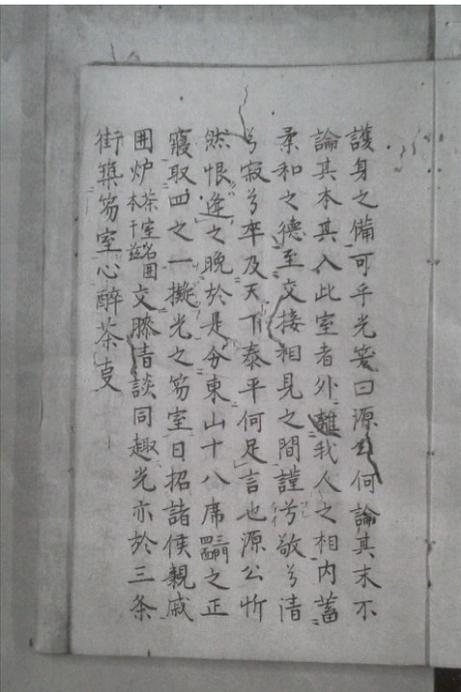
（1）・（2）は『博覧会一覽（年表）』—国立国会図書館 転載

資料九 第一章

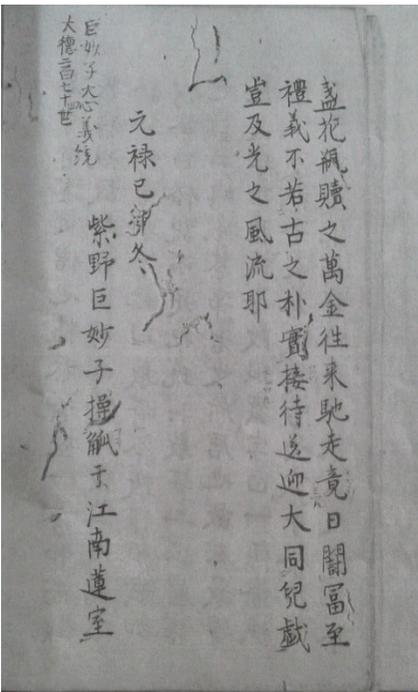
『茶祖珠光伝』写本 (『茶道叢書』 国会図書館蔵 電子資料 請求番号八三二―三九)



三行目 柔和之徳至交接想見之間謹兮敬兮清兮寂兮



元禄巳卯冬 紫野巨妙子 元禄一二年の冬に大徳寺の巨妙が江南の庵にて作文する。



参考資料

- 『岡倉天心全集』一〜八・別巻 岡倉天心著 平凡社 一九八一年・一九九三年
- 『父岡倉天心』 岡倉一雄 中央公論社 昭和四六年
- 『岡倉天心をめぐる人びと』岡倉一雄著 中央公論美術出版社 平成一〇年
- 『祖父岡倉天心』岡倉古志郎著 中央公論美術出版社 平成一一年
- 『曾祖父覚三 岡倉天心の実像』岡倉登志著 宮帯出版社二〇一三
- 『父天心』岡倉一雄著 聖文閣 昭和一四年
- 『日本の名著』三九巻 岡倉天心著 編集責任 色川大吉 中央公論社 昭和四五年
- 『東洋と西洋』倉澤行洋著 東方出版(株) 一九九二年 初版 二〇〇〇年三刷
- 『敵味方をこえて平和を織る』和田修二・倉澤行洋共著 燈影舎 二〇一〇年
- 『天心とその書簡』下村英時著 日研出版 昭和三九年
- 『大観画談』横山大観著 大日本雄弁会講談社 一九五一年
- 『天心孝』 堀岡弥寿子著 吉川弘文閣 昭和五七年
- 『天心全集』和綴(甲一、甲二、乙) 日本美術院 大正一一年
- 『天心岡倉覚三』清見睦郎著 中央公論美術出版 昭和五五年
- 『岡倉天心』木下長宏著 ミネルバ書房 二〇〇五年
- 『岡倉天心 思想と行動』岡倉登志・岡本佳子・宮瀧交二共著 吉川弘文館 二〇一三
- 『日本美術の発見』吉田千鶴子著 吉川弘文館 二〇一一年
- 『岡倉天心―伝統と革新』岡倉天心研究班 大東文化大学東洋研究所 二〇一六年
- 『いま天心を語る』 東京芸術大学出版社 平成二二年
- 『岡倉天心―芸術教育の歩み―』
東京芸術大学 岡倉天心展実行委員会 平成一九年
- 『岡倉天心』木下長宏著 ミネルバ書房 二〇〇五年
- 『岡倉天心集』 近代日本思想大系七 編集／梅原猛 筑摩書房 一九七六年
- 『鵬』一〜六号 岡倉天心研究会「鵬の会」二〇〇四年〜二〇一一年
- 『岡倉天心 日本美術史』平凡社 二〇〇一年初版 二〇〇八年 第三版
- 『岡倉天心アルバム』「監修」茨城大学五浦美術文化研究所 「編」中村愿
中央公論美術出版 平成二五年
- 『国華論攷精選』上巻 国華社 一九八九年
- 『東京国立博物館百年史』 東京国立博物館 一九七三年
- 「日本美術院のホームページ」 <http://nihonbijutsuin.or.jp/index.html>
- 文部科学省ホームページ www.nexi.go.jp/
- 『博物館の誕生』関秀夫 岩波書店 二〇〇五年
- 『日本美術史年表』監修辻惟雄著 美術出版社 二〇〇二年
- 『茶の本』岡倉天心「著」千宗室「序と跋」浅野晃「訳」

- 一九九八年第一刷 二〇〇八第一二刷
- 『茶の本』岡倉天心 岡倉覚三著 村岡博訳 岩波書店 昭和四年
- “OKAKURA KAKUZOU::collected English writings” Heibonsha, c1984
- 『天心・岡倉覚三とアメリカカーポストモダンをみすえて』池田久代著
皇學館大學出版部 平成二十七年
- 『日露戦争期英米ジャーナリズムに見る岡倉覚三一行』
「日本美術院米展新聞記事切抜帳」についてー岡本佳子著 アジア文化研究所
国際基督教大学 二〇〇五年
- 『フェノロサ』上・下 山口静一著 三省堂 一八九二年
- 『三井寺に眠るフェノロサとビゲロウの物語』山口静一著 宮帯出版社 二〇一二年
- 『国華の軌跡』水尾比呂志著 国華社 二〇〇三年
- 『東京国立博物館百年史』編集 東京国立博物館 昭和四八年
- 『東京国立博物館百年史 資料編』東京国立博物館 昭和四八年
- 『稿本日本帝国美術略史』農商務省 国華社 明治三四年
- 『岡倉天心』東京藝術大学 岡倉天心展実行委員会 平成十九年
- 『特別展観 海を渡った明治の美術』編集 東京博物館 平成九年
- 『明治国家と近代美術』佐藤道信著 吉川弘文社 一九九九年
- 『万国博覧会美術』編集 東京博物館・名古屋市博物館・大阪市美術館
- NHK 日本経済新聞社 二〇〇四年
- 『日本美術史』岡倉天心著 平凡社 二〇〇八年
- 『世界史の中の日本』岡倉登志著 明石書店 二〇〇六年
- 『日本美術史図録』源豊宗編 星野書店 昭和十五年
- 『その歴史は上野の山から始まった』関秀夫 岩波新書 二〇〇五年
- 『図解 日本の装束』池上良太著 新紀元社 二〇〇八年
- 『日本衣服史』吉川弘文館 二〇一〇年
- 『福井市史 通史編2 近世』福井市 平成二〇年
- 『神奈川県郷土資料集成』第二部 開港編 昭和三十三年
- 『神奈川県郷土資料集成』第三部 黒船渡来と沿岸警備 昭和五十三年
- 『福井藩』舟澤茂樹著 現代書館 二〇一〇年
- 『「公」の思想家 横井小楠』堤 克彦著 熊本出版文化会館 二〇〇九年
- 『横井小楠と松平春嶽』高木不二著 吉川弘文館 二〇〇五年
- 『丸山忠挙』星野鈴著 新潮社 平成八年
- 『夕才 老子』加島祥造著 筑摩書房 二〇〇〇年初版 二〇〇四年一七版
- 『老子・莊子』角川 平成一六年
- 『人と思想 老子』高橋進 清水書院 一九七〇年初版 二〇〇〇年二三刷
- 『国史大辞典』国史大辞典編集委員会 吉川弘文館 平成四年

- 『明治事物起源事典』湯本亮一著 柏書房 一九九六年
- 『茶道用語辞典』淡交社 平成五年初版 平成十四年五版
- 『広辞苑』 六版 二〇〇八年 二〇一一年
- 『ブリタニカ国語大百科事典』
- デジタル版『日本人名大辞典』講談社
- 『概論日本歴史』佐々木潤之介 佐藤信 中島三千男 藤田覚 外園豊基
渡辺降喜・・・【編】吉川弘文館 二〇〇四年
- 『日本の近代一〇〇年史』 近現代史編纂会編 水島吉隆著
河出書房社 二〇一一年
- 『西洋美術史』監修 高階秀樹 美術出版社 一九九〇年初版 一九九四年一九版
- 『文明開化の日本改造』監修 中村修也 淡交社 平成十九年
- 『日本美術史ハンドブック』 辻惟雄・泉武夫編 新書館 平成十九年
- 『日本彫刻の近代』執筆 古田亮（東京藝術大学美術館）毛利伊知郎（三重県立美術館）
その他（三上満良 松本透 大谷省悟吾 沓沢耕介）淡交社 二〇〇七年
- 『美術でたどる日本の歴史』 並木誠士著 ナツメ社 二〇〇二年
<http://www.ndl.go.jp/exposition/sl/1893.html>
<http://www.ndl.go.jp/exposition/sl/1900.html>

茶道関係

- 『裏千家今日庵歴代玄々斎精中』第十一巻 千宗室監修淡交社平成二十年
- 『裏千家今日庵歴代又妙斎直叟』第一二巻 千宗室監修淡交社平成二十一年
- 『裏千家今日庵歴代圓能斎鉄中』第一三巻 千宗室監修 淡交社平成二十二年
- 『裏千家今日庵歴代 無限斎碩叟』第十四巻 千宗室監修 淡交社平成二十二年
- 『裏千家今日庵歴代鵬雲斎汎叟室特別巻』（今日庵文庫編集 淡交社 平成二十二年
- 『茶の本』岡倉覚三著 岩波書店 一九二九年
- 『茶の本』岡倉天心著 浅野晃訳 一九九八年一刷・二〇〇八年十二刷
- 『まずは一服』千 宗室（裏千家一六代家元）主婦の友社 昭和六二年
- 『淡交』裏千家 月間誌 十月号 淡交社 昭和二六年
- 『淡交』裏千家 月間誌 十一月号 淡交社昭和二六年
- 『淡交』裏千家 月間誌 一月号 淡交社 昭和二七年
- 『淡交』裏千家 月間誌 新年号 淡交社 平成二七年
- 『裏千家茶道 特殊扱い篇』千宗室著 淡交新書 昭和四三年
- 『茶の湯この一〇〇年』茶道誌淡交増刊号 二〇〇一年
- 『茶の精神』千玄室 講談社学術文庫 二〇〇三年
- 『夏季展千家茶道の継承』 円能斎鉄中宗室著 茶道資料館 平成二十三年
- 『茶道史』村井康彦著 淡交社、昭和五五年

- 『茶道の歴史』桑田忠親著 講談社、昭和六二年
- 『近代茶道の歴史社会学』田中秀隆著 思文閣出版 平成二〇年（二〇〇八）
- 『近代の美術と茶の湯 言葉と人とモノ』依田 徹著 思文閣出版 二〇一三年
- 『近代の芸文と茶の湯』戸田勝久著 淡交社 昭和五八年（一九八三）
- 『近代茶道の研究』熊倉功著 日本放送出版社 昭和五五年（一九八〇）
- 『近現代における茶の湯家元の研究』廣田吉嵩慧文社 平成二四年
- 『近代 茶人の肖像』依田 徹 淡交社 平成二七年
- 『真茶―茶道における人間形成―』河波昌著 明治印刷 平成二十七年
- 『神戸と茶の湯』森川春乃 株式会社からふや 二〇〇七年
- 『講座日本の茶の湯全史』茶の湯文化学会編
- 第一卷中世・第二卷近世・第三卷近代 思文閣出版 二〇〇三年
- 『跡見学園 一三〇年の伝統と創造』跡見学園 編集 一三〇年史編集委員会
学校法人 跡見学園 理事長・跡見純弘発行 平成一七年 非売品
- 『講座 日本茶の湯全史 第三卷 近代』思文閣出版 平成二五年
- 『海外の茶道』茶道学大系―別巻 千宗室監修 淡交社 平成十二年
- 『十三松堂会記』依田 徹編 宮帯出版社 二〇一三年
- 『日本史のなかの茶道』谷端昭雄著 淡交社 二〇一〇年
- 『茶の湯の歴史』神津朝夫 角川選書 平成二一年
- 『茶人たちの日本文化史』谷 晃 講談社現代新書 二〇〇七年
- 『文明開化の日本改造 明治・大正時代』淡交社 平成一九年
- 『一盃からピースフルネス（平和）を』千玄室淡交社二〇〇三年
- 『茶の本』岡倉天心著 現代日本語訳夏川賀央 平成二六年
- 『横浜開港と宣教師たち―伝道とミッションスクール』横浜プロテスタント史研究会
有隣堂 平成二二年
- 『明治の快男児トルコへ跳ぶ―山田寅次朗伝』（山田邦紀・坂本俊夫 現代書館 二〇〇九年）
- 『世界でお茶を』森明子著 淡交社 二〇〇八年
- 『ローマでお茶を』野尻命子著 主婦の友社 平成七年
- 『もう一輪の花』小堀宗慶著 頁文芸社 二〇〇四年
- 『もしも利休があなたを招いたら』千宗屋著
角川新書 二〇一一年初版 二〇一五年五版
- 『茶道雑誌』茶道誌 表千家 月間誌三月号〜二月号 二〇一五年
- 『起風』茶道誌 武者小路千家 春季号 二〇一一年
- 『原 三溪 偉大な茶人の知られざる真相』すがた 齊藤清 淡交社 平成二六年
- 『新島八重の茶事記』筒井小学館 二〇一三年
- 『近代数奇者のネットワーク』齊藤康彦 思文閣 二〇一二年
- 『宗玲 続・つれづれの記』鈴木宗玲 ウーム綜合企画事務所 平成二六年

『人物茶の湯物語』 谷端昭雄 淡交社 二〇一二年
『なごみ』 6月号 淡交社 二〇一四年
『なごみ』 8月号 淡交社 二〇一四年

図録

- 《五浦と岡倉天心の遺産》執筆（池田幸雄 小泉晋弥 清水恵美子）
「五浦六角堂再建記念 五浦と岡倉天心の遺産展」実行委員会 平成二十四年
《丸山忠挙——空間の創造——》三井記念美術館 平成二十二年
《横山大観展 良き師、良き友》横浜美術館 二〇一三年
《横山大観の世界》監修 横山大観記念館 美術年鑑社 二〇〇六年
《横山大観》明治神宮 平成二十二年
《生誕一四〇年記念 下村観山展》横浜美術館 二〇一三年
《日本美術院再興一〇〇年特別展世紀の日本画》
NHK NHKプロモーション 朝日新聞社 二〇一四年
《再興第九八回 院展全作品集》日本美術院 二〇一三年
《三溪園 財団設立五〇周年記念特別展 院展作家の一系譜 三溪園に集った画家たち》三溪園二〇〇三年
《菱田春草》東京国立近代美術館 NHK NHKプロモーション 二〇一四年
《特別展 菱田春草》明治神宮 平成二十二年
《もっと知りたい菱田春草 生涯と作品》尾崎正明監修 鶴見香織 東京美術 二〇一三年
《ポストン美術館華麗なるジャポニズム展 印象派を魅了した日本の美》
NHK NHKプロモーション 二〇一四年
《岡倉天心と日本彫刻会 日本木彫の「伝統」と「革新」》
小平市平櫛田中彫刻美術館・井原市立田中美術館 二〇一〇年
《平櫛田中作品集》小平市平櫛田中館 一九九四年初版 二〇〇一年
《横浜港と生糸貿易》横浜みなと博物館 二〇一二年
『瓦版・絵巻に見る ペリー来航と横浜開港』横浜市歴史博物館 二〇〇九年
『横浜外国人居留地』 横浜開港資料館編 有隣堂 平成一〇年